

# 奇譚クラブ

珍談と艶笑読物集

愛撫の儀

好色愛染春雨草紙  
珍談狂艶浮寝草紙

昭和二十五年十月五日 昭和二十六年一月三十日印刷 (第五卷 第二號)  
第三種郵便物認可 昭和二十六年二月一日發行 (毎月一週一日發行)

奇譚クラブ

珍談と艶笑

第二十七號

奇譚クラブ

珍談と艶笑

定價 七拾圓

昭和二十五年十月五日 昭和二十六年一月三十日印刷  
第三種郵便物認可 昭和二十六年二月一日發行



珍談と奇の型破り雑誌  
奇譚クラブ 三月号豫告・毎號熱狂的賣行・

裸体の祭典 肉体市場 特選グラビヤ

肉を賣つて恋を得た女中 温泉宿の女……寺元 明……  
妖婦に魅せられた中年男 淫らな末路……田村 邦男……  
肉体を汚して玉の輿にのつた女 女店員の貞操……平井 京助……  
中篇讀物 哀艶情歌……直木龍之助……

産婦人科醫・重利先生行狀記……辻村 隆……  
(行きはよい／＼歸りは？の巻)

媚娼婦あい史・あたいは東京へ……京極貴子……  
濃艶時代小説 遊女葦水の最後……片矢 薫……  
情尖小説 地獄に行く男……早乙女 晃……

戀責め(こいぜめ)……松井籟子……

短篇 僕は末亡人が好き……佐々木 直……  
色魔の求愛術……岩田 信之……  
新婚珍談 若夫婦の涎……富田 信二……  
この病氣の名は言えない……大西三枝子……

アプレゲール 覆面の駈落男女行狀記 階堂三次郎

古今東西珍談奇聞の決定版











# 奇想天外 珍談と艶笑讀物

ストリップ物語 妾の名はセックスのクイン 早乙女 晃  
珍談小説

耳掃除異聞 吉丘 垣根 ..... 28

世の中に此んな強い女が いるとは知らなんだ 尾崎 文甫 ..... 80

肉体で愛する女と 心で愛する女  
好色奇譚 拾萬圓の接吻 神山 龍男 ..... 56

飛切特種 探訪實話

超戦后派お嬢さんを尾行する

椿 昭彦 ..... 66

水門妖魂記

澄村美津男 ..... 86

あたいを女にして呉れたのは

媚媚婦あい史

京極 鋭子 ..... 76

黄昏の慕情

愛山 久 ..... 90

艶種短話集

色街のお針子たち 鈴木 ミチ ..... 52

早春恋愛二題

純情の戀 爛熱の戀

憧れた裸像 清算の夜 新月 弦馬 ..... 40

キタン・ギャグ・トピックス 風 流太郎 ..... 85

香具師艶ばなし 赤野夢比古 ..... 32

諷刺小説 童貞は処女の如く

山本 榮 ..... 32



好色  
珍談

愛染春雨草紙  
狂艶浮寝草紙

緑猛比古  
原紅太郎

奇譚ちつくコント

風 流太郎 65

奇譚うそ

新聞 中村米藏 84

探偵實話

片眼の殺人鬼

志賀 登 36  
金子 忍 80

愛情の門

ジエームス・楨 74

盲

執

女闘美寫實小説  
女に跨がせる男

土俵四股平 100

変態小説

愛撫の様

松井籟子 104

昔の女と今の女

兵庫 一平 46

純潔だけでは恋は出来ない

藤本千恵子 70

艶笑コント 後家のツマミ喰い

文川 映二 93

処女と獣慾

枕と毛布を持ってゆく女

奇談・漏るバケツ

夢比古

わが好色の勘違い

根來芳太郎 18

河原夫妻の人工受精

虹山 眉根 16

奥様無斷借用

若草 夢子 20

日曜日の楽しき逢曳物語

花野美佐子 15









ストリッパー物語

立女の名は

性<sup>セックス</sup>の女王

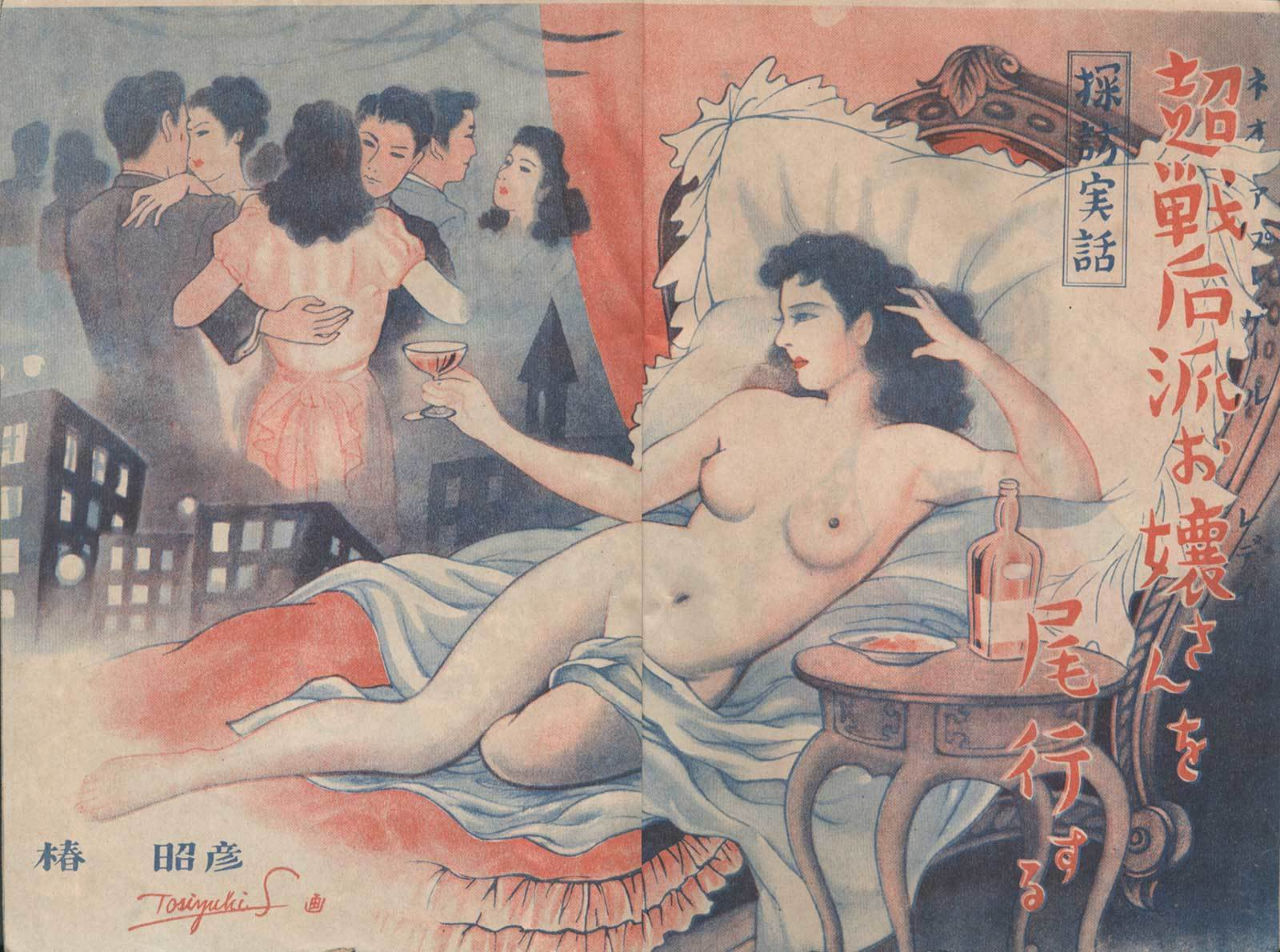
早乙女 晃





採訪実話

超戦后派お嬢さんを  
尾行する



椿 昭彦

Tosiya S. 画



あ  
い  
+  
+  
+  
愛  
撫  
の  
美  
牝  
に  
え

松井 頼子



松井 玲子



五口<sup>ゆ</sup>車<sup>が</sup>は<sup>は</sup>の<sup>い</sup>ぞき  
眼鏡<sup>で</sup>あ<sup>る</sup>

詩<sup>サトウ・ロクロ</sup>

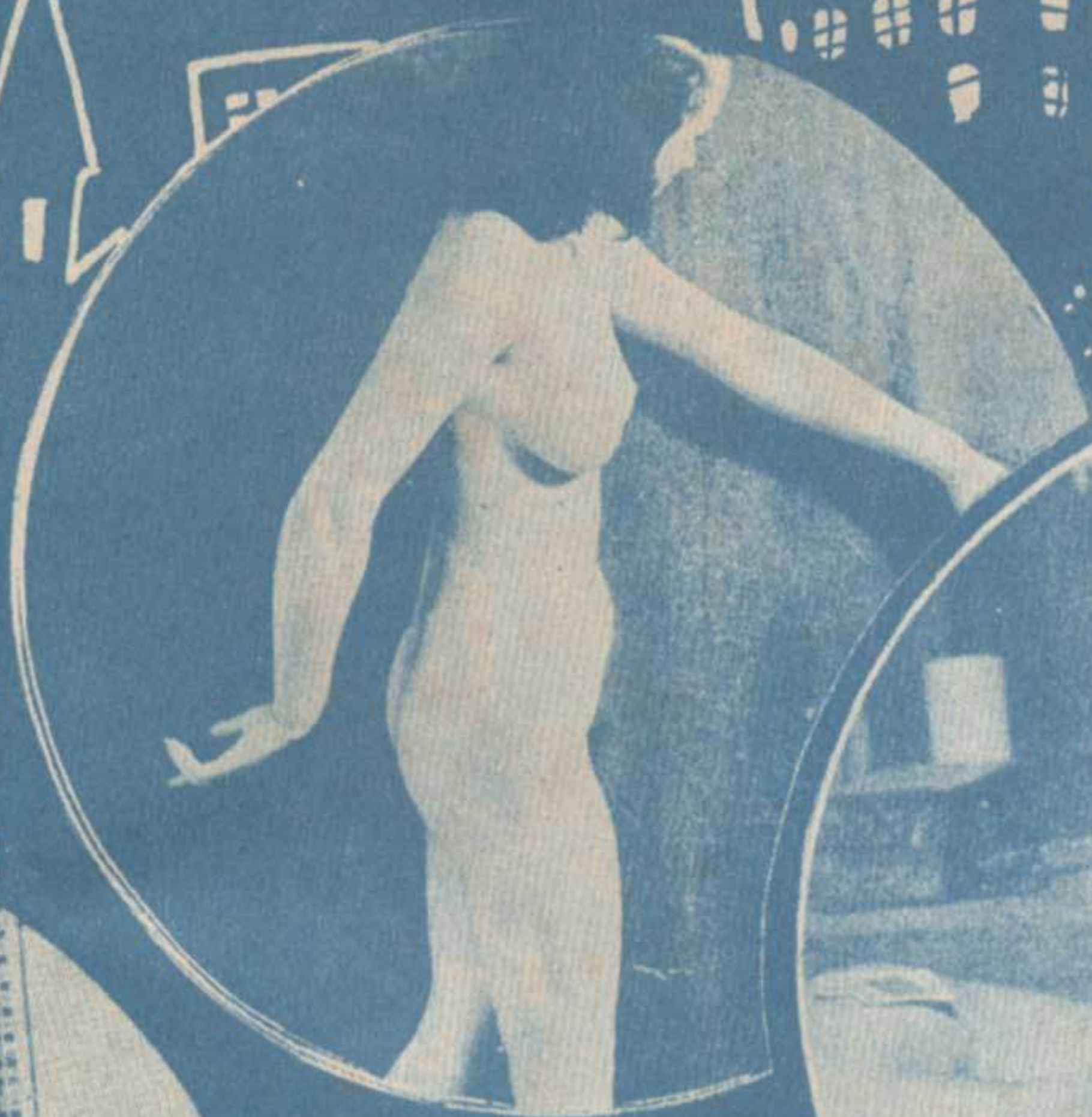
構成

曾根三太郎





い  
て  
手  
眼  
鏡  
へ  
し  
し  
ま  
す



のぞき眼鏡の 楽しさは  
夢のお国の 夢のまど  
いとしあめ娘の 予木肌を  
そつと ひそかにのぞく  
とき



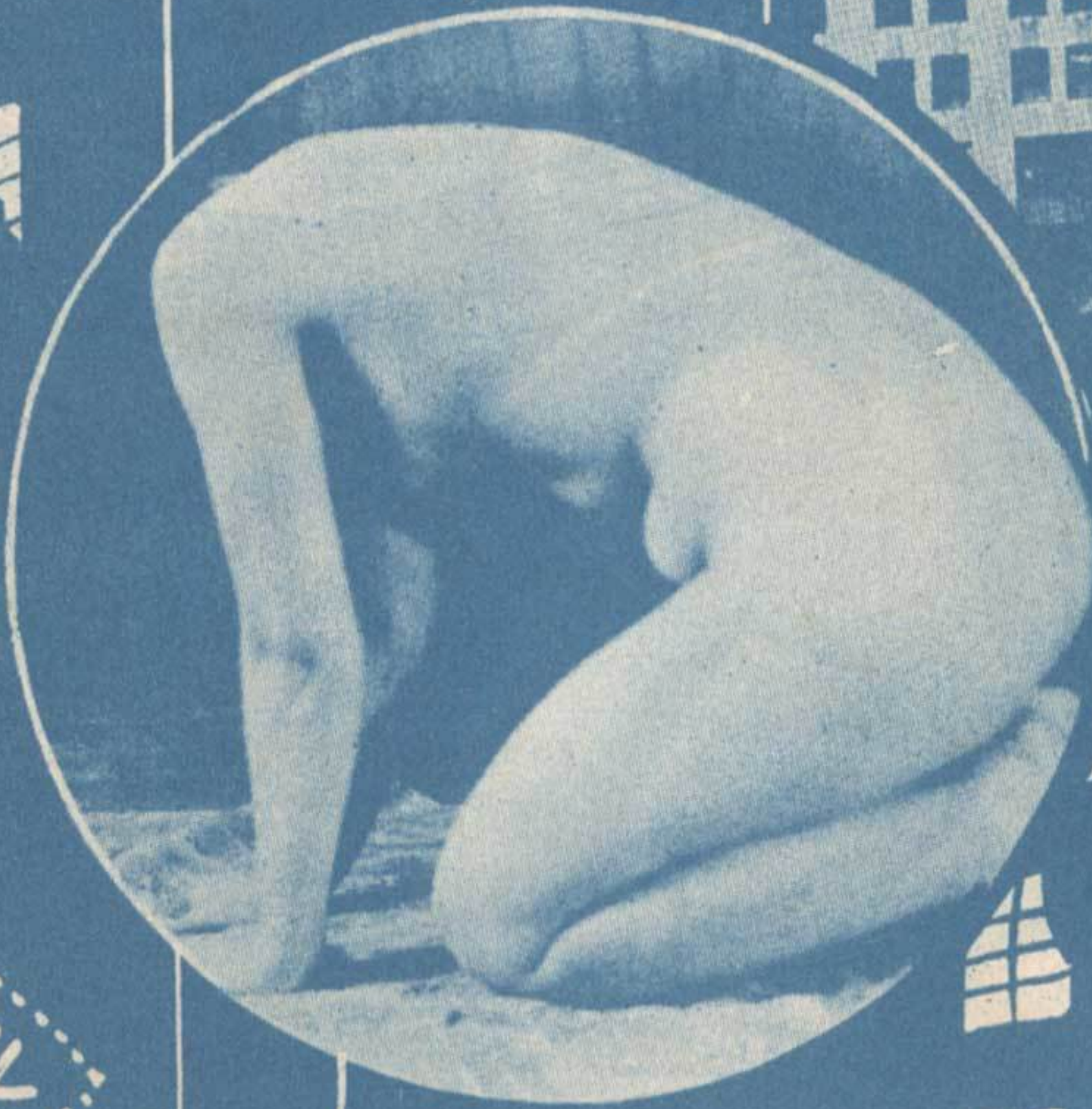
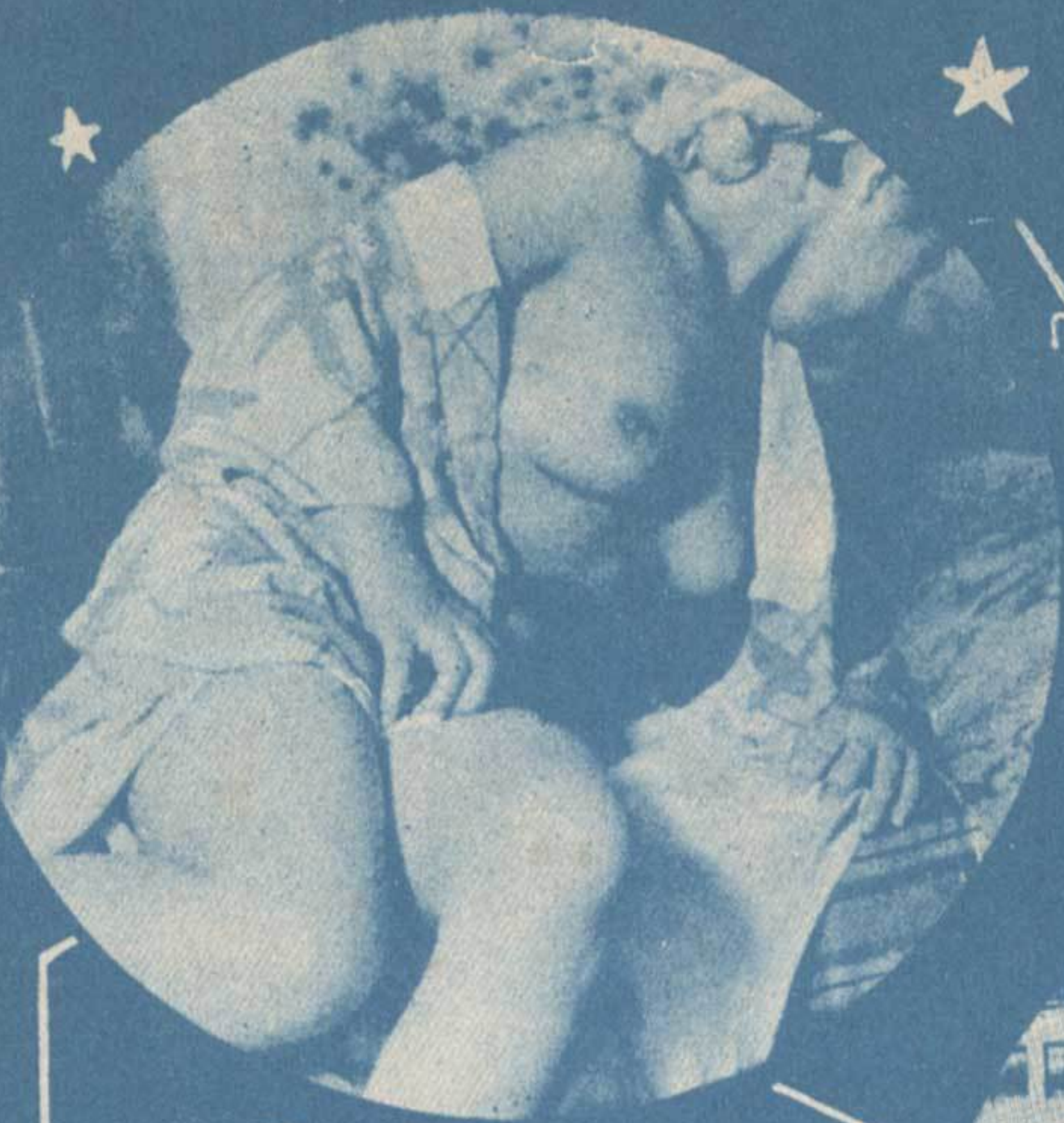
いざ、眼鏡のふれしは

遠い夜空の二つ星

好きなマダムの湯上りを

誰にも知られずのく

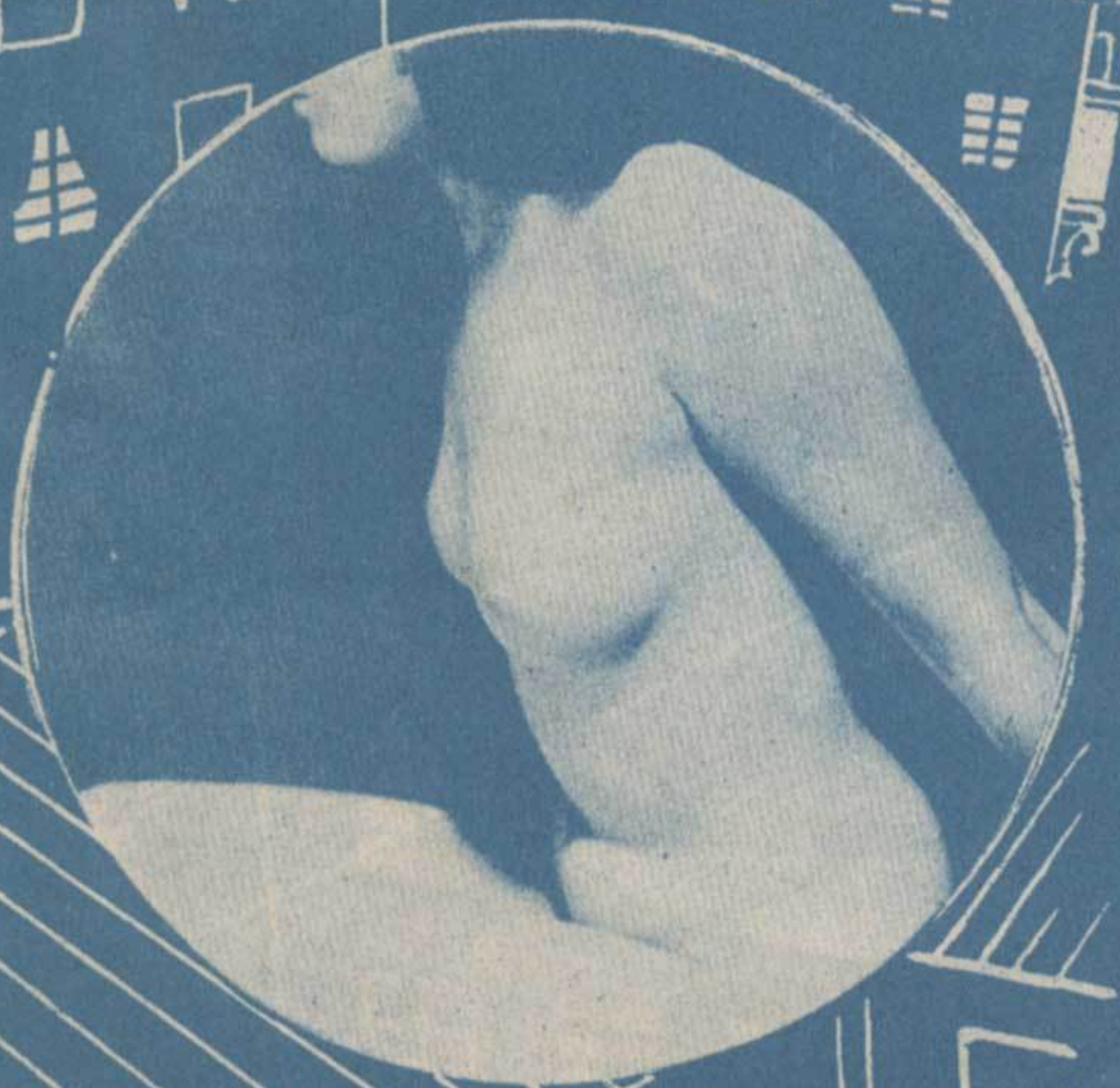
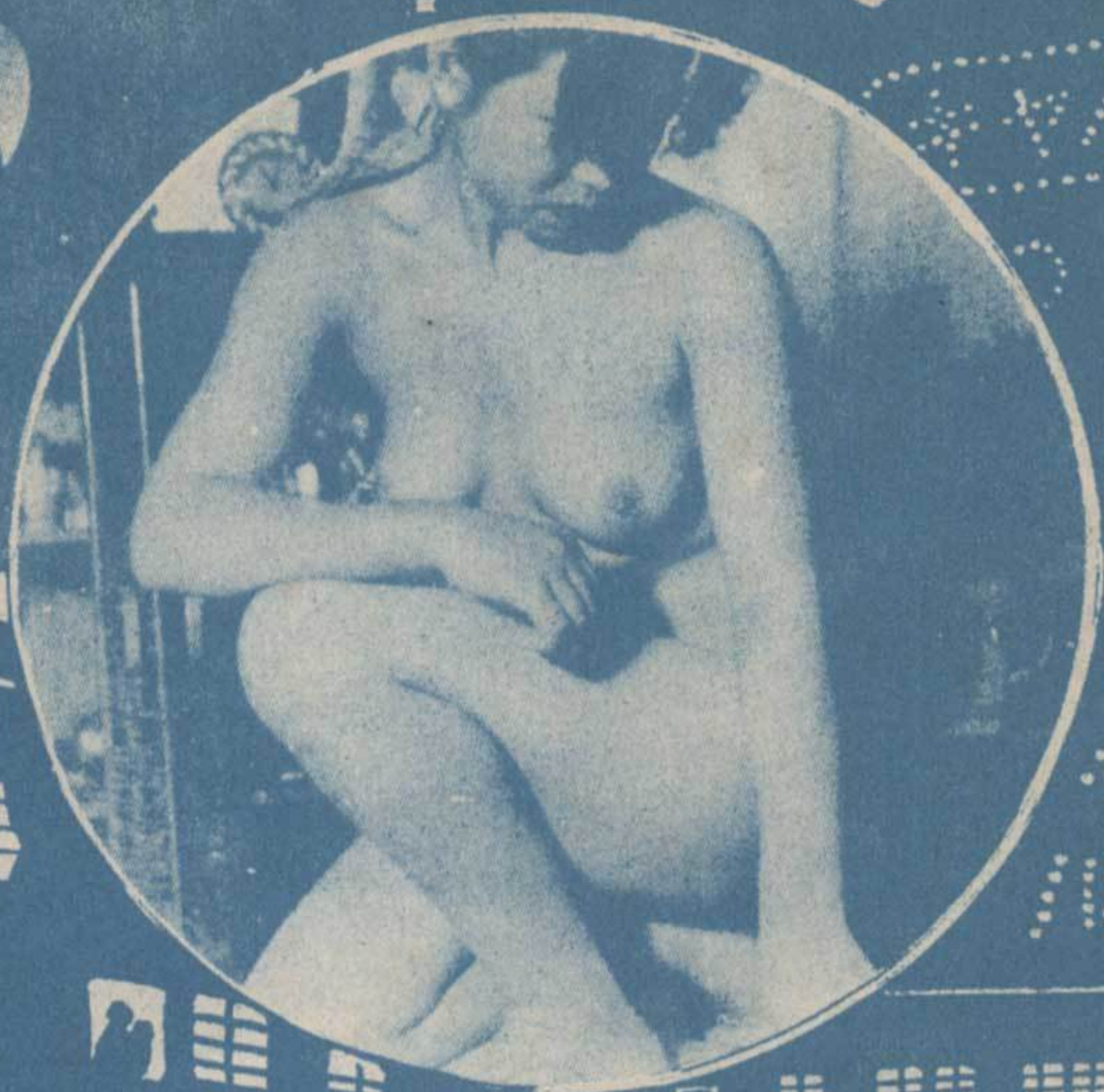
とま



HOTEL







のぞき眼鏡の妖しさは  
 Ⅲ 佳房の二つのむづことが  
 夜風を透し 空を越え  
 胸のレンズにうつるとき



# 日曜日の楽しき逢鬼物語 花野美佐子

私は、いがい、タイピスト。アパート、日曜日の朝、床の中。

目さまして猶起き出でぬ兒の癖はかなしき癖ぞ

母よ咎むな

私はガラス窓に映つる枯枝の影を見つめながら、啄木の歌を繰り返してゐた。此の歌は朝寝坊をして母に叱られた時、何時も私は口実に用いたものだ。

——まだ寝てるの？何時だと思ひます——  
——だつてお母さん、啄木はこう言つてるわよ。目さまして猶起き出でぬ兒の癖は、かなしき癖ぞ、母よ咎むなつて、知らないの、母よ咎むなつて。……

——バカにおしでないよ。

——といった具合である。あゝ、しかし、今はその起す人としてない。こうして悲しい癖の中に私は独り淋しく枯枝の揺れる影を見つめていた。

と、突然、誰かが、鼻をつまんだ。

——ネボスケのおバカさん！

友達の子である。あゝ私にはまだ一人起して呉れる人があつたわけ。波子は窓ガラスを開け乍ら、外はいゝお天気だと深呼吸をした。

——起きろ、起きろ、今日は素敵なニュース。ソーラ、外は青空つていう奴。

この話誰にも言つちやいけなわよ。……

私此の間の晩、一寸冒険をやつたのよ。毎日／＼速記で擦り減されてゆくの堪らなくなり出したから、一昨日の晩、一ツ自由に街の中を歩いてやれと思つたの——女と言つたつて、若い血の通つてゐる人間よ、ね、わかるでしよう此の氣持。そこで私は映画を見て、串カツで一杯ひつかけて、亀山を食べて、九時頃心斎橋へさしかゝつたの。するとね、私にすれ違つた一人の青年がニヤリと笑つたの、そうつと振り返つたらね、その人立ち止つて私を見ているのよ。私も胸がドキ／＼して來てね。こりやいかなと思つたわ、だけど、何処迄もついて來るのその男が……

此の野郎、しよつてやがると思つたけど、スマートな青年だし、それに私なんだから淋しかつたもんだから……彼が一寸上げて見せた肘に手をかけてしまつたの——

でも、彼のアパートの部屋へついた時、こりや大変なことになつたと思つたわ。耳はジンジン鳴り出すし……その人も確かに固くなつてゐるらしいの。

——お坐りになりませんか、  
——えゝ、有難う。

——もう直ぐ春ですね。

——えゝ、冬もすぐ終りですわ、なんて、情ない話ばかりポツポツしてゐる中に、彼がウイスキーを勧めるので私、困つてゐるうちに、ぽうと、氣が遠くなつてしまつたの。

ほんとりに、私、うぶなんですものね、氣がついたら今度こそ何か始まりそうで唯、もう怖くて怖くて、私、すつかり打ち明けちゃつたの、実は私、すみません、唯の平凡な女なんですつて、——

処がその人も、ほつとした様に、実はボクも都会生活の素敵な反面を雑誌で讀んだり友達に聞かされてばかりいたので今夜こそと決心して散歩に出て來たばかりなのだつて……然し先程からあんなの様子、女の扱いを知らぬボクを馬鹿にしているように見えて、後悔しだした所へ、とたんに卒倒などされたので、唯もう、うろ／＼してうかつに医者も呼べないし困つた、と言つて汗びつしよりなの。

そこでね、どうも御邪魔致しました。いや僕こそ、いえ私こそ、と鄭重な挨拶を交して帰りかけたら、彼はモジモジひきとめて、挙句の果、結婚を申込むのよ。もうわかつたからですつて——

それでね。とう／＼、あのウ、熱い抱擁とキッスして別れたという話どう？ 明日は彼の会社が休みなので、映画に誘われているの近頃痛快なニュースでしょう。で私、あんなのオレンジ色の一張羅を借りに來たの

そのかわり此の次の日曜日には、明日の樂しき逢鬼物語つてのを放送に來るわ。彼女は私の一張羅を持つていそ／＼と出て行つた。だが今の話は何となく、何処かできいたようだぞ、小さい書棚、あゝ、まあ、ひどい／＼エルカワアドの短篇じゃないか。あの一張羅、さては質草に……

口惜しさとも、うらめしさとも、あゝ一生の不覚でありしか。かつぎやがつて……だがあの話の続きだけは聞いてやろう樂しき逢鬼物語つていうのを。早く日曜が來るといいな。

——おしまい——





# 河原 夫妻の人王受精



晩酌をやつていた河原君は、大きなビ

ルがゆらりゆらり動くような気分になつてきて、晝から懸案の話題に耽れてみた「オイかあちゃん、まだ期待は持てるかい？」

お燭のお代りに立つていた細君は、河原君の明るいこえを聞いて、振向いて眉を曇らせた。

「それがねえ、ダメなのよ。あつたのよ」「うわあ、あつたのか！」

ボンと河原君は、高座へ上つたはなし家みだいに、平手でわが凸チンを打つて嘆いた。

これで久し振りの期待も、お流れになつてしまつた勘定だ。世には、無くてお困りの方々が引きも切らずにいます中に河原君夫妻の場合は、有つて困惑の態なのだ。

たまにそれが二日三日と遅れると、若しやという期待をかけるのである。今回の場合は、ちよつとした下腹の痛みを細君は訴え、今日で予定より一週間も遅れ

ていたのである。

結婚して五年、普通ならもう二、三人もあつて、そろそろコントロールに腐心というところであるべき筈なのに、細君は三毛ネコを抱いて寝る始末である。永らく、自分の体であつて自分の体でない御奉公という奴に取られていたもので、河原君は三十の坂も上りつめてから、鉄甲のお蔭でムせて薄くなつた頭にボマードをつけて式を挙げた次第で、いまだに第二世の影も形も見んとなると、いささか氣をもまずにいられないところである。善良で、飲むと殊の外浮き浮きしだす河原君であり、それをまた心楽しく眺めている細君ではあるが、この夫婦の底に流れているものは、わが血を引いたものを見られない人生の悲哀感であることは争われない。

だによつて、先達では思い切つて夫婦相談の末、細君がいまだ御亭主以外に覗かせた覚えのない箇所を、医学博士にまじめにさぐりを入れて貰つたのであるが

と赤い顔をして、(その時も飲んでいたので)河原君は大げさに手を振つたのだつた。

河原君は、実は細君に一度も云つたことではないのだが、独身時代に、石に小便しただけでも石の固さがひびいてきて痛むというあまり芳ばしからぬ病歴を持つていた。巷間こいつを思ふと、子種が絶えることもあるといわれている何とか丸炎にまで進みはしなかつたが、細君に異状が無いと聞くと、河原君はスネに傷を持つ弱身で、若しやと思わずにはいられない。そのほか、お多福風邪にも罹つた覚えはないのである。

うっかり細君と手に手を取つて赴いてもう絶対実子を持つ希望なしと診断せられては、毎月の宝クジに味わり憂目以上のものを、身に沁みて痛感するは必定である。夢はまだ夢を抱き得るかぎり、前途に明るい灯をともし。

ヤケクソで、河原君は、定量をとつくに過ぎている六本目を、細君に催促した

細君も、夫の氣持を分りすぎるくらい察しているの、いつものようにモウ止しなさいな、とは云わない。

「オイ、お前も呑め」杯を細君に差す。

「一杯だけよ」その一杯が二杯になつて

「ナブ、あきらめるか」

「でもねえ」

「もう俺は諦めてもいいよ。これも前世からの因縁という奴だろう」

「妙にシメツぽいことを云うわね。嫌

よ十年経つてから出来る人もあるわ」

「怪しいね、そんなの。亭主に内緒では

かからタネを仕込んだのかも知れんぞ」

「嫌、それじゃさきで、万一、あんた

があたしに疑いをかけることもあるわけ

ね」

「いや、左にあらず。そんなら俺は嬉

しいよ」

「諦めるなんて、早いわ」

「早いか。じゃ、ずっと続けるつもりな

んだな」

イ、イタツと河原君は、した、かつね

られて飛び上つた。

「無茶すな」それから眞顔に戻つて、

「だがな、十年さきなんて永い。酔つて

いう相談じゃないけど、俺の血を引かな

くつたつていい、せめてお前の血さえ引

いてれば」

「どういうこと、それは？」

「新聞讀まんのか。あれだよ。人工受精

つて奴。い、よ、なに、赤ン坊から養

つてりや、十分可愛めが出るよ」

「嫌よ。あんたのを貰うのなら別だけ

ど」



「大抵事主の方が不活潑で、それで人工でやるらしいんだよ。最も自然な植付法でダメなんだから、事主のは可能性なしと出ていたね。別なイキのいのを、医者の方で用意しておくと言いたつた」

「氣持わるう」  
と細君は云つたが、それは事主の手前で、若干内心では関心をそそつてゐる。そのイキのいのとは、どうして用意するのか知らん、と思つた。河原君は話があるので、酒量の割に今晚の酔を抑えてゐるのか、却つて目はトロリと臉がかぶさりかゝつてゐる。それを見て細君は、二杯のアルコールで存在を誇示している心臓のこえをきゝつちよつとふざけてみたくなつた。

「ねえ、そのイキのいのツて、どうして用意しとくの？」  
「そらSACRでもはめてやらすんやないかいな。まさか試験管の中で作り出すことも出来まいやろし」

「そり。(と心を抑えて) その相手になる人は誰か知ら？」  
「あー女かいな。看護婦ではないやろなア。なんぼ看護婦でも、こいつばかりはどんな医者でもいゝつけるわけにも行かない」

と河原君は、自分でも疑問につきあたつて、「ペンペンでも雇うんかな。しかしペンペンは警察で認めとらんし。そうすると女郎かいな。女郎を当てて、

若いのに、チョイト取つてきてえ……これあ、こいつは志願者が多いことやろ」「何云つてんのよ」とまたつめられて、「痛！」

「その人の奥さんと一緒やつたらいいやないの」  
「あかん」と大きく手を振つて、「独身者や。まだ二十代の元氣な独身者と書いたつた」  
「そり。……そんなら、さきで、やゝこしいことにならんへん。まあ仮りに、あたしが誰かの子ダネを貰うわね」

「うん」  
「それから先で、その提供者が結婚して子供を生むわね」  
「うんうん」

「そうすると、あたし達の子とそれらの子と、兄弟ということになるでしょう」  
「うーん、うん」  
「どつちも男同士とか女同士やつたらいいけど、どつちかが男で、どつちかが女ツてこともあるでしょう」

「うん、あるね、それは」  
「そうだつたら、男と女で、おまけに父親が同ンなじということを知らないんだから、愛し合うツてこともあるわけでしょう」  
「理屈の上ではね」

「そりよ。全然ありツこないとは、云えないわよ。百万円なんて、滅多に当らないけど、しかし誰かに当るんですものね」

「なるほど」  
「これ、どういうことになんのか知ら？」

いや、兄妹が夫婦になるとあつては、由々しい限りである。正に人工受精における盲点的ガンと云わなくてはなるまい。細君の筆法を拜借するまでもなく有りそうで無いしかし全然無いとは云えない或いは、いたずらの神様のことだから、將來、二十年ほどさきで

大慈劇小説の材料を、神様は提供なさらんとも限らないこれは大いに困つたことである。河原君は熱思黙考を重ねた。すると、さつきはビルが揺れていたやうであつたが、一方に確かな本心がある半面に、他の一方でさかんに虎の皮のフンドシをした雷が、雪の結晶を顕微鏡で眺めた模様のよ

うな道具の端を手を持つて、エンヤエラサと踊り狂つてゐる。それが遠いところからだん／＼大きく現れてきて、無慮三十七八匹の鬼とも雷ともつかぬもの共が一大ダンス・パーティーの無礼講を展開し

だした。

今流行の人工受精に於ける正に盲点的ガンと言わなくてはなるまい。父親が同じという夫婦が出現するわけである。



河原君は酔つ拂つていつまでもうつ向き、体を前後にゆすつてゐるだけなので細君はお膳を仕舞つてから、手を取つてさア起きなさい、お寝みなさい、と寢室へ連れこんだ。

「ちよ、ちよつと待て、小便だ」  
寢巻に着更えてから、どた／＼と間へ立つて、ふらつく足で帰つてきた。

いつもの調子の枕スタンドで雑誌を眺むことも、今晚細君はしなかつた。猫が鳴いて入つてきた。細君はちよつとその頭を撫でただけで、すぐ事主の方へ体を向けた。

## 若しも人工受精が普及したら？





思ひ返して、ボクは、寝ざめの悪い話  
が一つある。

ボクが、十九の年であつた。鏡を見て  
ニキビをつぶし、そろそろ女が恋しい時  
代である。ある日、悪友の紙岡が、おも  
ろい話を持ちこんだ。

「隣の小母アンがな、うちのオバアンに  
話じとるんや。隣の小母アンとこで下請  
けさせとる洋服屋の二階に住んどる夫婦  
者ンな、毎晩夜になるとシクシク泣き出  
すんやて。毎晩決つて十二時ごろになる  
とな、むせび泣く声が聞えてくるんやて」

「それは男の泣声か女の泣声か？」

ボクは云つた。紙岡の隣家というのは  
某デパートの洋服部の下請仕事をやつて  
いて、その仕事のはけ口を、またその下  
の裁縫師に流すのである。だから紙岡の  
云つた洋服屋とは、店頭に首吊りを掛け  
て客を呼ぶ店舗を構えたものではなく、  
大きな裁ち台と、ミシンと、鴉の口ばし  
のようなハサミとを具えた單なるテイラ  
ーであるわけだ。

「それがな、はじめシクシク女が泣きだ  
すんや。それにつられて、間もなく男も

泣きだしてくるんやて」

「貰い泣きをするのか？」

「そういうわけや」

「何でまたそないに悲しいことがあるの  
んや？」

ボクは、たしか小泉八雲の怪談の一つ  
で読んだ蒲團とかいう題の、兄弟が薄い  
センベイ蒲團の中で泣き合っている悲し  
い物語を思い出して訊いた。

紙岡は急に笑い顔になつて、

「いやア、そこでだ。余りに毎度のこと  
で氣味イわるがつてな、何をそないに泣  
かあるのンかと、階下の人がな、そつと  
足音を忍ばせて上つていかはつてんて」

「すると？」

「すると灯が消えてたんや」

「氣持わるいね」

「その闇の中から、切ない息づかいで泣  
いているんや」

「？……」

ボクは紙岡の顔を見つめた。

「まだわからんか、ハッハッハ……」

紙岡は、手品の種明しをした後のよう  
に、大声で磊落そうに笑つた。



初めてボクに察しがついた。その妄想  
の連想は、未だ経験しないとは云え、そ  
れ故にこそ猶更に、ボクをあやしい空想  
へと誘うのだつた。

何しろ血の氣の多い十代の終りである  
「でなあ」彼は云つた、「一つ僕らで探  
検してみようかと思ふんや」

「そこへか？」

「そうよ」

難色を示して、ボクは流した。

「それはどうかと思ふね。階下のテイラ  
ーに、到底渡りをつける手段が見つかる  
まい」

「いや、」打消して彼は云つた。

「そんなことは出来んよ。だから、二階  
へ直接だ」

「すると屋根からか？」

「そうよ、ハシゴを一つ用意する。今晚

九時に家へ来い。将棋を指そうというて  
来い。そこで将棋を指す。十一時半にな  
つたら家を出る。いゝか、音のせぬよう  
にゴムの運動靴をはいて来い——」

ボクは肯いた。こういう冒険は、前後  
を省みる邊がない。  
夕飯の時から、期待でボクの胸はふく  
らんだ。九時になるのを待ち兼ねた。や  
つと、九時が来た。

「紙岡いるか？」

「おゝ津川か」

「一丁将棋を指さんかと思つてやつてき  
た」

ボクは大きな声で云つた。

「まあ津川さん今時分から、いくら明日  
が日曜だというたとて、余り夜更かしは  
ドクですえ」と紙岡の母親はたしなめた。  
「いゝよ」紙岡は強く云つた。「やろう  
来い」彼は将棋盤を持ち出した。

事の成行上、いつもに似合わず凡戦を  
繰返して、時の経つのを待った。

「遅うなつた、送つていこう」

家族はもう引取つて眠りについていた  
が、紙岡はこゝろ聞えよがしに云つて、表  
へ出てから、彼だけ家の裏口へ廻つた。  
十一時十五分だつた。彼はすぐ、植木屋  
が使いそうなハシゴを肩にひっかけて  
きた。見ると、そのうしろから、うす暗  
い影が一人ついてくる。

「トツシヤンだ」

と紙岡はボクに云い、

「ハシゴのところで、待つてるようにな



# 人間は何故こうまで好色なのか？

つき耳打ちしといたんだ」と説明した。トッシヤンとは、本名を敏子と云つて更科のソバ屋の出前をやつてゐる、一寸頭の足らない、けれども五体満足でどこにも不足のない、子守をやらせとけば一日負ぶつていて草臥れそうにない頑丈な体つきの、今年十八になる女である。更科屋は、十時頃に店を閉めるのである。

どういふつもりで、紙岡が敏子を呼んだのか、はつきり紙岡はその意向を伝えなかつたけれども、ボクには、敏子が女であるということを通じて、何か分るところがある気がした。

ハシゴの両はしを二人で持ち歩く恰好では、まるで物盗りに入る様子に見え、もう人通りは絶えたとは云え、灯のともつてゐる大通りを避けて、廻り途をしてテイラーの住んでゐる路地へ来た。トッシヤンは、どの程度に紙岡から聞いてゐるのか知らなかつたが、ボクらが屋根へハシゴを立てかけるのを見て、にやにや笑ひした。

「こゝを持つとつて。いゝか、お前後からハダシで上つといでよ」紙岡は、トッシヤンにハシゴを押えさせといて、一番最初にボクを上げ、つづいて自分が上つてきた。そして屋根の上から、ハシゴの端を持ち、トッシヤンに手招きした。

ここは丁度棟つづきの裏路地に当り、片一方は夜間に人の居ない市場の屋根になつてゐる。犬のいないのが幸いだつた。尤もこれは、事前に紙岡が検分しておいたところである。われわれは一切、話し合ひの厳禁した。

眼がきしんでは困るので、なるべく一とところにかたまらないように注意した。そつと窓の近くへ耳を持つていつた。トッシヤンも頭は足らないとは云え、それは、足したり引いたりする算術や、いろはにほへと以外の文字を読むことが人並みに出来ないというだけで、色事の理解には、道に常人以上の制御されないものを具えてゐる。

耳を澄まして息を凝らしていると、果して女の泣きごえがきこえてきた。それは絶え入るような、綿々とつづく悲しみと、全く区別出来がたい、しかし、灯の消えてゐる間の中の息づかいを容易に連想させるので、思わずニヤリとせずにはゐられない。

つづいて男の貰ひ泣きがきこえてきた。それはちやうど、子供がシャツクリ泣く様を、大人がわざと息をこらして真

似てゐるようなあんばいである。気がつくくと、ボクも思わずその泣き方を小声でまねてゐるのであつた。

こうして三十分近くも、ボクらは屋根に身を潜めていたであらうか。声は一区切りついてこれでお終いかと思うと、又女から泣き始めて、男に移つていくのである。余り執念深すぎると思つた時、紙岡は降りようという合図を、手で示した。前後してボクらは、路地に降り立つた。その夜、濡りがけに、ボクと紙岡は、トッシヤンを半分強制で半分合意で納得させた。

紙岡の作つたクジで、ボクが後回しになり、何だかクジの不正を感じられたがボクは黙つて素直に後口に甘んじた。ボクが驚き、そして寝醒めのわるい思ひをしたのは、この翌日である。日曜の朝寝をしてゐるところへ、紙岡

が駆け込んできて云つた。

「津川、えらいこつちや、死んだよ」

「えッ！死んだ？！……」

「うん、死んでしまつたよ」

どかんと頭をぶたれた気がした。

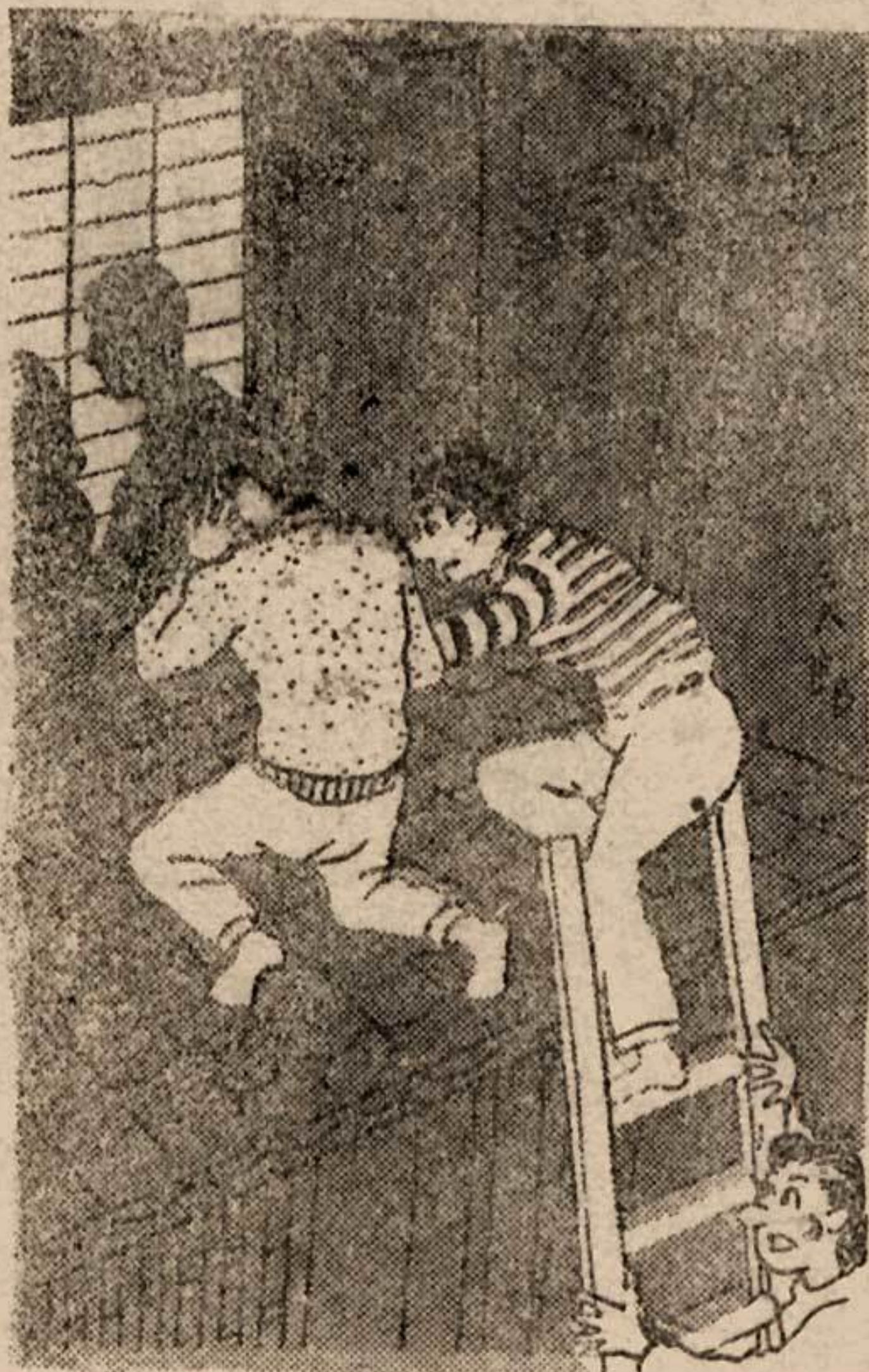
「心中だよ」

「え？ 心中？」

トッシヤンが誰と心中したのか、と疑ひボクに、次の紙岡の言葉で一切が呑み込めた。

「隣りの小母アンのな、今朝うちのオバアンの話しとるんや。それ、ゆんべの二階の夫婦者ンな、互に剃刀で首の血管斬り合つて死んだんやて。血が壘のアワイから下の天井へとおつて、ボクボク落ちてくるんやて」

「わあーッ」  
うなるなり、ボクは頭をかかえ込んだ。  
——おわり——





# 夢草若

# 用借断無さま奥

「死んでもいいわ」

——死んで呉れない

かと夫の信吉に言わ

れて、一度は其の氣

になつた花枝だつ

た。信吉がシベリヤ

から復員して來たの

は應召以來七歳の永

い歲月だつた。

顔を見合した時、

割合い元氣であつた

が、底を流れている

疲勞の色は秘くしき

れない。

休養を奨めても働く

んだと寸暇も惜しん

で、

「七年も永い間、君

に苦勞を掛つ放しで

済まないよ」と夫の

口癖の前に花枝は痺

れる様な幸福を感じ

ていた。優しく、親

切に勞つて呉れる信

吉の愛情は涙の出る

ほど有難いものであ

つた。

夫の復員と同時に

今迄勤めていたキャ

パレーもやめた。

いね。まるで結婚の初夜を再び見る

ようだ」

夫婦の愛撫の仕草を言うのであろう。

こうした花枝にとつて幸福な日も永く

続かなかつた。丁度半歳たつた秋の始め

ふとした風邪がもとで夫はどつと床につ

いた。

激しいあの疼くような情熱も、も早火

の消えた佻しい灰色のこの頃のような冬

空だつた。

花枝は再び元のキャパレーに勤め出

た。

「只今」

ハンドバックを投げ出すなり、花枝は

信吉の頸へ両手を廻し、覆いかぶさるよ

うに接吻をする。冷たい外氣がまだ彼女

のオーパーについたまま、彼は妻の接吻

を受け乍ら、彼女の軀に彼の知らない男

の体臭を嗅ぎつけようとする。ふと視線

がかち合つて花枝の美しい瞳にぶつかつ

て自分をひどく洩ましい下劣さを意識す

る。

毎夜十一時前後には、きまつて、この

薄汚いアパートの一室に毎日続いている

日課を繰返している。

「ねえ貴方がいいお話だと思ひんだけど」

花枝は信吉の言葉も待たず続けた。

「よくお店へ来る御客様なんだけど、僕

ん所へ來ないかつて奨めて下さるの。秘

書ですつて。幸、私が和歌のタイプがう

給料

も三万円」

「三万円」

信吉の眼が輝く

ように光つた。

「そうならば貴方に充分な養

生もして頂けると思ふのよ。今のま

まじや一万五千円もむづかしいんです

の……」

「それで君は承知して來たの」

「え、歸つて相談して來ますつて答えて

あるの。勿論、貴方のことも話してある

わ」

「フン、大方オフィススイフにでもしよ

つていうんだらう。今時女の君にそんな

に大金を出すなんて……」

「まあ、そんなんじゃないわ、とても人

格者よ。奥様だつてあるし立派な人よ」

「そんな事何の信用もできるもんか、僕

は君の軀を身賣りしてまで生きたいとは

思わないよ」

「なんて情ないこと仰有るの、私を信じ

て、世間知らずの娘じゃ、もうないわ。

七年もの永い間女一人でしつかり生活し

て來た私ですわ。貴方のいらつしやらな

い時にだつて露骨に誘惑して來た人もあ

つたわ。でも私は強く勝つて來ている

わ、それに今じゃ貴方つて人が私の傍に

何時もついて呉れてるんじゃないの」



何

うして

そんなこと

を言うのか、花枝は

悲しく情なかつた。

花枝は信吉に拜むようにし

て、この話を納得さした。

「うれしいわ、これで貴方に早く癒つて

頂いて」

幸福だつた半歳のことを夢見るように

追つていた。

「花枝、夫婦のこととしてやれなくて寂し

いんだらうね。僕がこんな病氣になつて

——」

「厭、厭、そんな事仰有つちや」

お店で淫らな話が弾む時がある。そん

な時、胸一つに夫のことを思い續けてい

た花枝の軀は化石のように重たく冷たか

つた。それが夫の復員から、きゅんと引

き緊つて生身の軀であつた。

その夫は——私を満足させて呉れない



人であつた。

「いけない、あの人の軀を早く丈夫にしなれば……」

花枝は信吉の顔を恨ましげに凝視めて涙が出るのであつた。

花枝は三日の後、東洋貿易株式会社に勤め出した或る日、会社の関係団体の総会が白浜温泉の紫羅莊で開かれるため社長同伴で其の夜は帰らなかつた。

その翌日、飛ぶようにして帰つて来た。

「すみません……」

「汚らわしい」

一言のもとに信吉は接吻を挑ね返して来た。

嫉妬……。そう言つた眼が鋭く刺すように突つかかつて来た。ありありと焦躁の色をふくんだ

悪魔のような眼であつた。でも、

花枝はちつとも後めくようなことをしていなかった。泣いて言い訳しても信吉は聞き入れて呉れない。とめどなく涙が溢れ落ちた。

「花枝、僕は堪らないんだ。君の軀を切り賣りにしてまで僕は生きたいと思わない。これからだつて昨夜のように帰らないことがあると思うと狂いそうさ。いっそ死んで呉れないか」

花枝はもう聞くにたえられなかつた。

誤解を解く何一つの証拠がない。夫の疑うのも無理なかつた。そう思いつめると

一層のこと死んでもいいと覚悟を決めていた。こんなにして盡している私の氣持

も知らないで、私だつてこんな氣持でいるのは堪らないと思つた。

コッ・コッ・コッ。

その時、ドアをノックする音が聞えた。

「ハイ、只今」

花枝はハンケチで涙をぬぐつてドアを開けた。そこに覗いた顔は……

「ああ、社長さん」

「昨日は突然で済みませんでした。藤倉君の容体は何う

なですか」

「ハイ……」

「おい、

藤倉

君、僕だよ、関係大だ」

その声に信吉はベットから起上つた。

「おう開か」言葉が顫えている。

「もつと早く来るべきだつたよ、いや、もつと早く君のことを知るべきだつたと

済まなく思つてゐる。今日奥様の履歴書を始めて見たんだ。そこに君の名前を発見して飛んで来たんだ。そればかりじゃない、昨夜奥様を無断借用した御詫びもあつてね。これは誠に御粗末だが御見舞

に持つて来た」

大きな籠に色んな季節の果実が盛つてあつた。

「有難う、色々心配かけて、それに花枝が随分御世話になつて……」

「馬鹿、何を言うんだ、学生時代僕は君に随分迷惑をかけた。君の友情を何れだけ感謝していたか知れないよ。きつと早苗の奴、君の事を知つたら逢いたがるよ」

早苗は奥の妻君になつてゐる筈だ。その結婚式にも信吉は故意に招待を退けたことがあつた。信吉も早苗が好きだつたのだ。

「早苗さんは元氣か、僕も逢いたいな」

「きつと来させるよ、来るつてきかないだろう君には女房も頭が上らない筈だ」

「そんな事はないよ」

「藤倉、本当に昨夜すまなかつた。貴様はいい奥様をみつめて幸福だよ。本当に立派な人だ。女房の奴も絶賛してるんだよ。今日はこれから行かな

くつちやならない所がある

んだが、君の事を知つて途中寄り道して来たんだ。近日ゆつくり来る。これは誠に失礼なんだが何かに使つて呉れ」

「関、貴様も随分出世したらいいじゃないか、御芽出度う」

「やあ、有難う。大学卒業の恩人は学校でも教授でもなく、藤倉信吉教授だつたんだからなあ、ハッハハ……」

関は大きな笑い声を部屋一杯に爆発させた。

「じゃ、これで失敬するよ。軀を大切にね」

関は帰つて行つた。

この間、花枝は狐につままれたように棒立ちになつたまゝ二人の会話を見守つていた。

「貴方」

「ウン、関係大だつたのか、彼奴はね、義侠心の強い男だつたんだよ。だが学生時代には随時成績の悪い奴だつた。いつも俺の答案のおかげで進級していったんだそれが、出世して遙かに僕なんかを引離してしまつたんだね愉快な奴だよ、関係六つてハッハハ……」

信吉は果実籠から紅い林檎を一つ取上げてガブリと噛んだ。

「ああ、美味しいよ。花枝、君もお上り」

花枝はうれしそりに彼を眺め乍ら、ユ一ヒ一の仕度にいそいそと取りかかつていた。

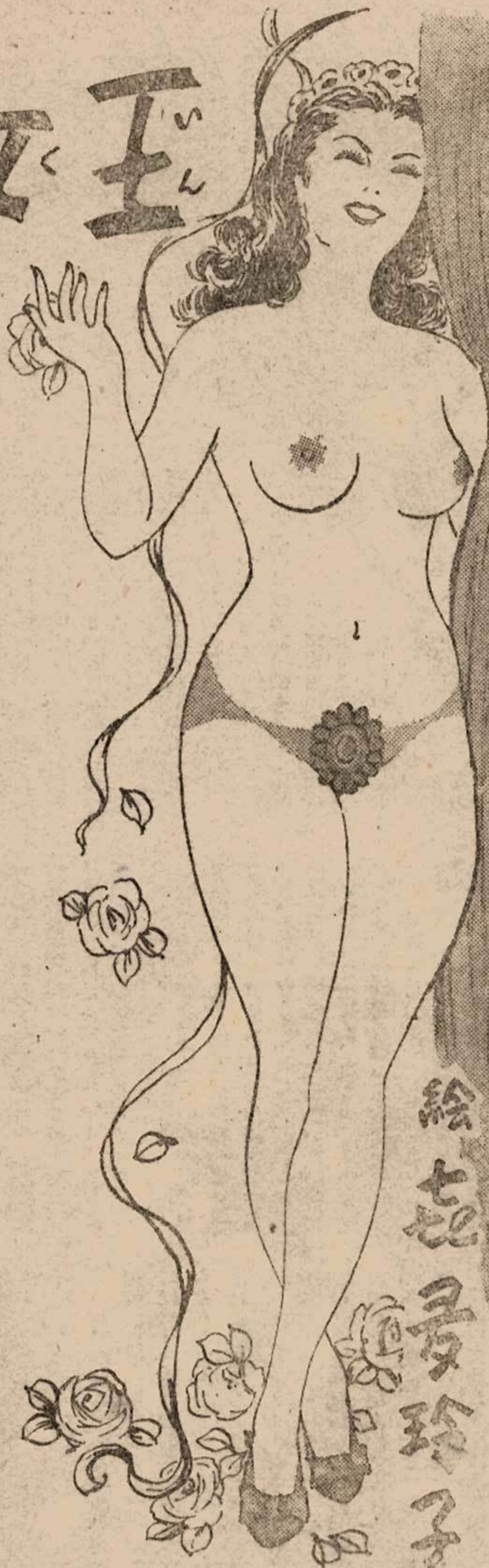
――終――



# ストリップバー物語

早乙女 晁

絵 志 尋 玲 子



## 一 處女散りぬ

江島ナミ子がストリップバーとして、道頓堀D劇場のステージに、一糸纏わぬ真っ白い腿を差らぬもなく観せるようになったのは、彼女が、命を賭けた恋に破れ、処女を奪われた女の意氣地の、身の振り方であつた。

きわどい絵看板に銘打つて、春情を煽り立てる題名の下に、女の秘密を大膽に観衆の前に曝らす迄になつた勇氣の裏には、敗戦国を彩つた悲恋の歴史が潜んでいた。

×

×

ナミ子の故郷は、中国山脈の屋根を記す、廣島縣T町の町はずれ、田舎町には珍らしい大規模なセメント会社が設立されて、従業員の大半が町の人口を占めている、謂わば工場町であつた。

縣の観光課から、風致地区として指定されている此の附近は、セメントの材料に採取される、山肌の切崩し工事は、風景の損傷を憂慮されて、発掘作業は懸崖の裏側のみに限られていたため、労働者達は道路を大きく迂迴して、丁度ナミ子の家の前を通り、朝夕、現場へ往復するのである。

ナミ子の家は、その労働者群の通勤を狙つた、小さな飲食店を営業していた。

他に競争相手が無いというのと、煤けた天井を我慢すれば、銘酒の上かんで一杯傾けられ、ば、甘党向にはぜんざい、大福餅、ライスカレーもあれば、コーヒ―もあり、山葵の利いた江戸前の鮓も食えるというので、店はいつても大繁盛だつた。

ナミ子は学校から帰ると、いつも店を手傳わされて、天麩羅や油揚げを乗せた、かやくうどんの出前を提げて、セメント会社の夜勤者達の室へ運ばされるのである。数十人の社員は美貌で界限でも評判の、姉の郁子にそっくりのナミ子を見ると、途端に事務から顔をあげて、淫らな質問を浴びせ掛けるのだつた。彼女は度毎に、顔を眞ッ赤に染めて、代金を貰うと事務室を飛び出した。姉の郁子に恋人があることは勘付いていたが、見て居たような姉達の逢曳の情景を暴露されると、おさな心にも胸が躍つて、自然に羞恥で俯向くのだつた。

ところが、それから十分と経たない帰り途の芒の野原で、意外にも噂の姉が、男と一



# 名の女

緒に崩れるように芒の莖の中に隠れたのを発見した。此の春薔かしい初潮が訪れて、一層、肉体的にも大人の世界を憶れていた彼女は、白い芒の穂の陰で、姉たちが何をしているか、すぐに想像できた。ナミ子はいきなり背後から生あたゝかい手が伸びて、アッと言う間に口を塞がれてしまった。抵抗する暇もなく仰向になつた彼女は、怪漢が新制中学の制服を着た、日頃から好きだつた医師の二男の勝雄だと分ると、彼女は俄かに敵愾心を緩めた。

## 二 愛の巢の破綻

それから三箇月も経つた頃、大阪の猪飼野の電車道を一寸這入つた、小綺麗なタバコ屋の入口に、小諸勝雄と眞新らしい名刺が、標札がわりに貼られてあつた。謂う迄もなく、名刺の主は、ナミ子と最後の縁を踏越

彼女は咄嗟には返事が出来なかつた。返事の代り殊勝にコツクリと頷いて見せた。  
「いくつ？ 然し、娘さんぢやあないね」  
「……ええ。三千円のお金がないと、どうしても困るんです。助けて戴ければ、私の軀をどうしてもかまいません」  
喉に石でも聞えたような気持で、やつと、それだけの事が言えた。絶切れがちな可憐な物腰は、その苦しい心情以上に確かに紳士にひびいた風だつた。  
「よし。行こう」酔つてはいたが、案外、しつかりとした足取りで、ナミ子の円い肩を押して歩きだした。

赤いネオンサインでUホテル。……南大阪の歡樂の灯影を映した、廻轉扉をギツと押して、白い制服のボーイに迎えられ、二階の瀟洒な一室に案内された。

二人つきりになると、シャンデリヤの灯の下に立つ、男の顔がけだものに見えた。  
高級食の煙を吐く、紳士の仮面をかなぐり捨てると、相手



えた、医師の二男の勝雄である。芒の野原で大人の世界を経験した二人は、それから手に手を取合つて、都会に墮落をした揚句夫婦氣取りの愛の巢なのだ。若い男女は世間体をはばかりて、表向は只妹にしていたが、皮肉にも妹の体に愛の同様の兆候が現れた。  
「あんだ。私、アレかもしれない」  
言憎そうに打明けた瞬間、勝雄はムツと膨れ面で、ナミ子の下腹部に注目した。  
「何んで処置しとかなんだ？」  
「処置とは……？」  
二三押問答をして二人とも黙つてしまつた。

避妊の予備智識のある男と、あつても操作の羞かしかつた女は、今、暗礁に乗り上げてみて、始めて若さの誤りを知り、同時に將來に暗い不安を感じるのだつた。  
勝雄が、勸告の新世界A劇場の文藝部から帰らずに外泊をし、ナミ子との間に深い溝が生じたしたのは、それから間もない頃だつた。  
ナミ子はその原因が、自分の妊娠したためだと思ひこみ、慙々、墮胎を覚悟して、勝雄に内緒で、掻爬手術の費用欲しさに、或る夜、千日前の裏通に貞操を賣ろうと現れた。  
羞かしさの余り、何度となく酔客の足を見送つたが、繁華街が更けるにしたがい、心の急かれる儘、一人の四十年輩の紳士の側に馳寄つて、夢中で一氣に取纏つた。  
「何、三千円？ 馬鹿に高いぢやないか」  
頭から値踏みをして掛かる相手は、薄暗い夜風の中におくれ手をなびかせた、一見素人臭い初心な風情に、一寸心を惹かれたのか、無遠慮に素顔を覗き込んで、  
「君。キミは今夜が初めてなんだな？」  
と、改めて姿を見直した。



は慾望の代償とした、三千円を掌の中に握らせた。

ナミ子は指先が戦いできた。急用の金のため切羽詰った轉落の姿とはいえ、愛情も何も感じない男に、勝雄が求めたその儘の構図を、これから純白のシーツの上に描くのかと思うと、哀しさで熱いものがこみ上げてきた。

それを殊更表情の裏に殺して、潔ぎよく貞操を穢そうと決心をして、手早くシユミーズ一枚になり、ダブル・ベットへ小さくなつて這入つた時、突然、彼は驚いて呼んだ。

「キミ！ 勘違いして貰つては困る。僕がそんな男に見えるかね？」

「え……？」  
ナミ子は自分の耳を疑つた。予期もしないけだものから、佛のような言葉を掛けられようとは。

怪訝そうに見守るナミ子が、彼の眼には可笑しいのか、だが、無理はないといった顔付で、

「僕が三千円出したのは、キミの貞操が欲しいからぢやない。その豊かな肉体の線が見たかつたんだ」

「……？」

「分るかね？ 僕の言う事が？ つまり、キミの裸体姿が眺めたいから、此処の場所を選んだのだが、……どうだろう、十分間でいい、シユミーズを脱いで、僕の言う通りのポーズをつくつてくれないかね」

「……？」

「厭かね？ 然し夜の女にまでなろうとしたキミに、滿更出来ない相談ぢやあないと思ふんだが……」

返答に詰つて、ベットの上に硬くなつて

練んでいる彼女は、クルリと背を向けて決断を促す、仔細あり氣な彼の態度に、悪趣味な連想は許されなかつた。

ナミ子は思い切つて立上つた。

柔かいカーベットの感触も忘れて、腰を二ツに折つてシユミーズを脱いだ。

すると、勝雄以外に見せたこともない肌、二人の愛慾の翳が宿して、小さな、胎動が看破られるような氣がした。シーンと全身に男を知つた、女の羞らいが漲つたかと思うと、ナミ子の香料の無い頬に、するくくと涙が白い糸を引いて落ちた。

### 三 裸もいとわず

勝雄はそれつきり、ナミ子の許に帰つては來なかつた。さんざん牀を弄んだ揚句、罪の子を孕ませて冷酷に投げ捨て、行く、男の愛慾はうらめしかつたが、愛していただけにその打撃は深かつた。

ナミ子は肌を露わに見せて得た、三千円の金を握ると、産婦人科医の門を叩き、母とならない処置を施して貰つた。

花柳街に近い産婦人科を蒼白い顔で出て來たものゝ、さて困るのは、その日からの生活である。

（どうしよう……？）迷つて唯、あても無く歩いてゐる中、服のポケットに、昨夜の紳士の名刺が触れた。

「そりだ！ いつその事、あたしストリッブ・シヨウに出よう」

道頓堀D劇場の支配人、柏木康輔のあの由吻では、屹度引立てくれるに違ひあるまい。いや、自分の勇氣と努力次第では、綺羅星のように登場した有名ストリッブ・グループに戦い挑んで、華やかなステージを踏む事が出来るかも知れない。……

——その夜、彼女は闊々として考えあぐんだ末、愈々、裸体の舞台生活を將來の仕事にしようと思ひ決した。

田舎から持つて來た一張羅の服に着換え道頓堀のD劇場に柏木支配人を訪れると、彼は氣持よく應接室に通してくれた。

給仕が飲物を運んで立去ると、一寸四男をばばかりながら、

「お腹の赤ん坊はどうしたの？」と訊いた。

「昨日お医者さまに墮胎して貰いました」

「昨日墮胎して、今日出て來たの。無理をしちや牀に悪いよ。二三日は静養するのが普通なのに……その氣持は分る。然し、ストリッブ・シヨウは裸で觀衆に見て貰うのが商賣だし、此の間のホテルとは違つて、ほんとうに何も腰に着けない場合もある、よほどの度胸が無いとやれない商賣なんだが、君は、やり通す自信があるんだな？」

「はい。……」

返事はしたつもりだつたが消え入るような小聲だつた。

「はッ、はッ、はッ、一寸自信の無さそうな声だな。まあいい、君も中途半端の氣持で來たんぢやあるまいし、その中、うんと練習を積んで舞台度胸さえ付けければ、牀の魅力は申分なしだから……ぢや、ひとつ大部屋に這入つて稽古を付けて貰おう」

柏木は激勵するような口調で、大部屋のC級の級長、花園マリに引合せてくれた。

「江島ナミ子と申します。どうぞよろしくお願ひ致します」

むせ返えるばかり部屋に充滿した、女の体臭に包れて、ナミ子は花園マリの潑刺とした半裸に、圧倒されながら挨拶をした。

花園マリは親切に指導して十數人のストリッブ・連の稽古場を見せてくれた。

「上達のコツは、技巧より度胸よ。ホラ、こんな調子で……」

マリは見えていてごらんと云う風に、裸女の中に飛び込んで、勇敢に衣裳を脱いで、一枚また一枚。下半身を蔽つた衣裳が投げ落される度毎に、腰の線が次第に秘密の箇所を露わにしてゆく。……あと一枚。ナミ子は顔を蔽いたくなつた。錢湯でさえ隠し場所にしてゐるのを、眼の前に、しかも平然として躍動されると、同じ女性の氣遣かしさで、自分が素裸になつて行くような狼狽を感じた。

### 四 麗月ナミ子の誕生

小諸勝雄への恋の怨みをその儘に、裸体の藝術に注ぎ込んだ忍苦と情熱の數箇月が経つた。江島ナミ子はC級からB級の副級長に昇進して、そのお祝いに柏木支配人は麗月と言ふ藝名を贈つてくれた。

然し、B級では、まだ本格的なステージは踏めないし、収入も衣食費など到底まかないきれない状態だつた。後一息と言う処で、晴れのステージも踏み得ないで、折角の意志を挫かれて、肉体を賣つたり、カフェーやホールに鞍替えする者も有るといふ一番、多岐な過渡期にあつて、彼女は轉職者達には眼も呉れず、ひたすら晴れの舞台を心に描いて、最後の努力を惜しまなかつた。

その甲斐あつて、麗月ナミ子の名が、樂屋雀の噂にのぼるようになった頃、彼女と共に光り始めた同級者三人が、A級待遇の舞台テストを受ける事となつた。トゥ・シ



エーズを脱いで、乳当を取つて、三角形の性隠し一枚。絢羅美やかな装飾金を縫付けた、桃色のスパンコールで、支配人の柏木康輔を始め、試験機定委員の眼の前で、あらゆるポーズで曲線美を発揮し、愈々、最後に問題のスパンコールを脱いで、数秒間眞の素ッ裸を男達の方に見せるのである。ストリップ・ショウ本来の趣意は、実に此の数秒間で、チラツと見せる白い太腿の谷の姿なのだ。その筋の嚴重な取締の眼を掠めて、客席の反響を捲起さんとする、故意にとり落す小器用なストリップバーは、またく中に裸女の女王に祭り上げられる事請合だつた。

つまり、A級待遇の舞台テストとは、謂ふ迄もなく、一糸纏わぬ裸にして、尙より以上の性的魅力を発散して見せる。端的に言ふと性を見世物にして價値の有る女を撰ぶための行事なのである。

ナミ子の試験は、四人目の最後であつた。洋舞踊、ダンス、……跳躍、試験課目は愈々クライマックスに達して、緑色のヴェールを徐々に肩からずらし始め、遂に股間の一部を蔽うスパンコール一つになつた。

彼女の肌に、ほんのりと汗が滲んだ。昇級したい一心より、寧ろ、スパンコールを脱ぎ捨てる努力の辛さだつた。

「麗月君。氣障れしちや駄目だ」

叱咤するように若い監督の声が飛んだ。「そのポーズ。そのポーズの儘で、自然にスパンコールを落して……」

動作をつけられて、彼女は反射的に腰のストラップに手を備わせた。すると、自然な舞踏姿の蔽いが、パタリと木の葉のように舞い落ちて、まばゆいくらいの女体が赤裸々に現れた。

「素晴らしい！」  
柏木支配人は、周囲を顧り見て感動した。顔もいゝが、肉体のステイジ・ヴァリュエーは百パーセント。彼が長らく憧れていた、蠱惑的な姿態の持主は麗月ナミ子以外に無いと思つた。これはうけるぞ！よし、性の女王と銘打つて賣り出そう。柏木は獨りで腹案を練りながら、もう來月のステイジに彼女をデビューさせようと定めた。

## 五 セックスのクイン

間もなくナミ子は、A級に昇級した。収入もどうやら一人前の生活費として、やつて行ける自身が出來たので、落合野の間借りから日本橋の裏筋に移り、便利が良くなつたので、つい交際も遅くなつて居るようになった。

「麗月ちゃん、ご飯たべに行こうぢやないか」と、誘う相手が柏木であれば、彼女は二ッ返事でついて行くのだつた。

難波でふぐちりでご飯を喰べたり、地下鉄で北へのぼして、曾根崎新地のかき鍋で夕飯をすますのだつた。

その夜も丁度、柏木が夕食をご馳走してくれて、八幡町の奥まつた割烹店に這入つた。柏木は晩酌がわりに少し飲むと、すぐに眼のふちに色が出た。ナミ子は、すぐ横に坐つてお銚子の酌をしながら、櫻色に染つてゆく、中年男のほど良い銘酩を、楽しそうに眺め、  
「お酒つて、そんなに美味しいものかしら？ あたしも一寸、飲んでみようかしら……」

……と、冗談半分の口を利いた。

「麗月ちゃんは、まだお酒の味を知らないんだね。飲んでみるかい？」

柏木は眞顔になつて、盃を取り上げたが、

「嘘、ウソよ。そんなもの飲んだら、明日のステイジに立ったりやしないワ」

ナミ子は慌て氣味に拒んだ。

「ステイジと言やあ、麗月ちゃん。その事で今晩は相談したいんだが……」

「何んなこと？」

彼女は急に改つた口調の柏木を見守つた。眼と眼が、ぶつかり合つて、彼女は視線の置場所に困つた。それほど、最近の彼に接した時の自分の不安定な感情を知つた。彼に夜の街で奇しくも逢つた経緯から、次



玲子



てはならないドル箱スターだ。然し……僕は、僕個人の希望として、これ以上、君の軀を男の前に曝らしたくはないんだ。ナミ子さん……」

語尾に強く意中を含めて、靜かに、しかもしつかりと握り締める、柏木の声は銘酊めいとうから醒めたひときがあつた。

「……僕は適当な時期を見て、打明けようと思つていたのだが、それさえも、もう我慢出来なくなつた。ナミ子さんは迷惑かも知れないが、最近、はつきりと貴女を愛していると感じたのです」

彼女は、お銚子を膝の上に握つた儘、ふたゝび顔が上げられなかつた。いつかは言われると待侘びて居た言葉だつたが、柏木に握られた片手のあたゝかさが、彼女を処女のように、ぎこちなくした。

ナミ子は男の次の態度を予感して、ソツとお銚子を卓上に置き、次第に力が加わつて行く、彼の胸許に差かしく崩れた。その軀を、いたわるように引寄せた、男の熱い唇が、下から振りあおぐ女のルージュへ、ゆつくりと迫つて重ねられた。

乱れたルージエを氣にしながら、ナミ子はお内儀の如才のない見送りを、歸れるようにして店を出た。

戦災で焼野原となつた、八幡町の一帯は、流石、繁華街の復興の先驅さきがけとは謂れてゐたが、それでも、まだ所々に街の灯の絶切れた、残骸をその儘の場所もあつた。

ナミ子は、四辺が暗くなると、本能的に柏木の手をさがして、飄をびつたりと寄せてきた。彼女を愛しているがために、他の男の眼に肌を見せたくない、彼の一途な心

根が嬉しかつた。然し、新世界のA劇場では、東京から一流のスト、リッパを招き、既に南大阪の人氣をさらつてゐる現狀なのに、折角、ナミ子がデヴューして、D劇場のドル箱になろうとしてゐる矢先、支配人の立場の彼の口から、利害を無視した慾<sup>しょうよう</sup>の腹は解しかねた。

「樂屋の噂では、A劇場に東京から近く大  
 挙ニユー・フエスが来ると言つていたが、  
 そりでなくても七尾美喜子一人の人氣で、  
 すつかり新世界に客足を吸集された観はあ  
 るのだが、僕は最初、君にD劇場の面子に  
 かけてもと計画したのが失敗だつた。愛情  
 とステージの問題は又別だからね」

「………」  
セツクス・クイン  
「性の女王として賣り出そうとした、僕は  
乃伊乃取のミイラになつてしまひそうだ。  
その点、七尾美喜子は、演出家兼プロデュ  
サーに出世した小諸勝雄と言う、敏腕な愛  
人を掴んでゐる」

「えッ。小諸勝雄つて？」  
忘れていた胸の苦傷に触られて、彼女は  
若しや？ と訊き返えた。柏木が小諸と  
の間柄を知る筈もないが、A劇場に居る以  
上、同性の男とも思われなかつた。

「柏木先生、それほんとですか？」

「小諸君の事？　ほんとだとも。火の無い所に煙は立たぬと言うぢやないか。劇場が閉場たら夫婦氣取りだそりだ……然し、麗月ちゃんはどうして小諸君の事を？」

そんなに関心を持つのか？　と言わぬばかりの眼差しを避けて、

「……何んでもないの。一寸聞いた名前だ  
もんだから」微笑を苦しく誤魔化して遁げ  
た。

「先生。あたしお願いがありますの……」



突然ナミ子は眞劍に言つた。

柁木は異様な彼女の亢奮した声に、気お  
 された思いで無言で瞞めた。

「……え？」 柏木とナミ子は、瞬間、互

六裸の復讐

に溶け込めない氣持で立止つた。

ストリップ・ショウの決定版・性の女王  
は踊る！——道頓堀の雑沓の眼を奪う、思



いつた絵看板は、新世界のA劇場に對抗して、開場前、もう入場券は買切れる活況を呈していた。

場内は定員席にも観衆が溢れ、立錐の余地さえ無い薄暗い客席は、舞台の照明の反射を浴びて、無数の顔が浮上つていた。

強烈なライトが、五色のフィルターを通して、スペインコル一枚のナミ子の全身を油絵の如く照射した。ステージは、既に最高潮にあつて、前線慰問の洋舞踊家が、將軍の密室で全裸にされる、実に、きわどい寸前の姿だつた。

## 或る貞女

### 心で愛する女

### マヤ路磯

# 肉体で愛する女

律子の夫は、ド・ファン型の、極めて女出いりが多いので、彼女はいつも嫉妬の炎をもちしつづけていた。

肉体的に何も無いと云い張れば、案外ケロリとして赦せるらしいのである。

ユリにはそれが不思議だ、そんなものよりも心こそ怖るべきだと思ふのだけれど。ユリには、夫も子もあり、平和な生活を過ごしてきた。然し、長い年月、心から尊敬し、愛している一人があつた。そして、ひそかに、自分の心だけで愛してようと努力した。それは、ひどく微温的で、古風な愛し方のように思えたけれど、人妻であり、人の夫である以上、互に越えてはならぬ垣もあり、それを護る事は二人の純情を清め、より高いものに引上げてくれるように信じていたからである。

だから、彼女はよい母であり、よい妻であるようにみえた。すくなくとも夫はそう信じ切つていた。何故なら、晝も夜も、それはすっかり彼に委かし切つた彼女の生活を知っているからである。

將軍に扮した軍服の男が、にた／＼笑ながら、潮時良しとばかり、出て行く高級副官に何事か、眼で合図する。それを監視して一層恐怖に駆られる洋舞踊家が、さも観念したかの仕草で、命令通りの、素ッ裸になろうとして、腰のものに手を掛ける。その間一髪！パラリと、スペインコルが落ちるのと同時に、ライトが女の部分を照して、パツと、ステージも闇となつた。

「露月ノ」

「大統領ッ……」さまざまの声、劇場内を圧して轟いた。

時間にして凡そ五秒間。ほとんど瞬きする程の短かいステイジだつたが、インチキの無い女の軀を、瞬間にしても見せた度胸は、たいしたもののである。

柏木が幕合から太い溜息を洩したのを、ナミ子は、知つて知らぬ振りをして、素ッ裸の軀を急いで、ナイト・ガウンを纏つた。

「先生……」

小声で彼の許へ走つた。

肉体を観客に曝したくないと言つた、彼の眼の前で、皮肉にも、それ以上の羞恥をチラツと露わにした、ナミ子の胸は張り裂

けるばかりだつた。柏木が好きなだけに、哀しかつたけれども、一方、胸の中の何処かには、七尾美喜子に叩き付けてやつた、人氣の挑戦の優越感が燃えさかつていた。

七尾美喜子の名声を一蹴する事は、とりもなおさず、小諸勝雄への恋の復讐なのである。その悲願は、今、やつと達せられた思ひであつた。が、柏木の周囲に人氣が無くなる、ナミ子の双眸は泪に曇つて、轟と彼に取組つた。互に言ひ言葉は無かつた。然し、柏木もナミ子も満足な強い抱擁にした。

――終――



「信んじている者を騙すのは」と易い事です」

そんな逢引きの映画のセリフのように彼女が極めて自然な時間に自然な用事を口実に家を出た。そして恋人との楽しい時間を持つた音楽会にも行けば、劇や映画、時には山や海へも行つた。そしてい

つもなか／＼別れ難くて、いつまでも歩きとほした。或時は三越から心齋橋まで、来てしまつた事もある。話しは盡きないようであり黙つていても、それだけで充分楽しい。時には、せつなく彼の劇しい血潮の音をじかに聞き、悩ましい嘆息に、何が罪惡なのか茲まで

きてと自分で自分を誘惑したいような氣持になる事もあつた。それでもいつもその抱擁から抜けて歸つてきた。それ以上何となく進展したくないと思ふ。尊敬する彼を夫と同じような姿せいにしておくのは思つただけでも滑けいな氣がした。それはいつのまにか親友律子の感化を受けてしまつたのかも知れない。

心でいくら思つていても、そして誰をも傷めないですむなら、赦されそうに――そうして逢つてきた日の彼女は、何か邪しい息吹をかけたように目立つて活々として、何もかもがひどく美しくみえた。

だから、そんな日に限つて、夫は彼女を愛撫した。彼女はそこに何か偽りのようなものを感じるけれど、愛人に果さなかつたものを夫に向つて、――その追想に酔い乍らあゝそれは誰も知らない彼女ひとりの秘密であつた、永遠の――



小説談珍

耳掃除異聞

吉垣根  
画箕田京太郎



年若い床屋の小僧に耳掃除を依頼する商賣  
女らしき濃艶な年増。休みの日彼は、女の家  
を訪ねた。彼女は果して彼に何を望むのであ  
ろうか？

強い。

女は玄人とも素人ともつかない  
花街に近いので、大方そんなところ  
にいる女かとも新之助には思え  
るが、あるいは案外堅気の商家の  
お内儀さんであるかも知れない。  
ただ、もし堅気のお内儀さんだと  
すると、恐ろしく奇麗である一方  
中々隅に置けないところがある。  
この女性の心中には、容易に指摘  
できる淫奔性が住むと見て差支え  
ない。

たいてい三時すぎに、もう他所  
行きには使えない帯を締めて湯道  
具ののぞいているアルミ製のピナ  
馬穴を抱え、新之助の働いている  
店の前を「毒湯」の方へ通う。子  
供を連れてくるのを見たことがない。

五日に一度位に、行きがけか帰りがけ  
に寄つて、顔をあたらせる。行きがけに混  
んでいると、帰りにするのである。

どういうところにいる女であるかは親方  
に分つていゝのだから、この女のこと  
で特別親方に聞きだすことは思ひもよらない  
番の巡り合せで、五十七の親方が剃刀を  
持つことがあつても、女は金を拂うときな  
どの新之助の一寸した交渉を、無爲に見送

つていないようだ。ほの暖い感情を、新之  
助の手許にあずけたまゝ帰つていく。  
年はいくつぐらいだろう？ 二十三にな  
る新之助には、女が二十七八にも見えるし  
三十三にも見える。もしこの女に亭主と  
いうものがあるなら、新之助は一度お目  
にかゝりたいと思ふのだつた。

「あたしの産毛濃いか知ら？」

「さあ」

「とつても濃い人があるわね？」

「いますね」

店に相客がないので、女は口数が多いと  
見える。その上に、新之助が余り喋りすぎ  
ないので、かえつて物が言い易いのだらう  
「どうして耳そろうじしないんですしやう？」

「しますよ」

「しないわ、ほかの人も言つてゐるわ。どの  
散髪屋さんも、してくれないッて」

「ああ、申の方ですか」

「そうよ、どこだと思つて？」

「外だと思ひました」

「まあ——。その外も剃つてくれないこと  
があるわ」

「外は剃りますが」

「手を抜く店があるんですッて。嫌ね、あ  
たし、耳剃つて貰うのいちばん好き」

「そうですか」

1

「エリ足、余り剃り込まないようにね」

「はあ」

それが済んでガタンと、ハンドルを半回  
轉させて上体を寝かせるとき、何気なく目  
をはしらせた鏡の中で、女とピッタリ視線  
が会つた。瞬間、新之助は、まごついた。  
顔が赤くなつてくる。

女はまじまじ、自分を見つめていたのだ  
ハツと目を逸らせたあとから、それが手に





「ちやうと、女の貝殻のような耳たぶをつまんでいるところであつた。」  
 「その、シヤリシヤリと毛の切れる感觸、何ともいえないの。」  
 「音がきこえるでしょう？」  
 「そう、それよ。——なぜ中の方もしてくれないんでしょうね？」  
 「規則なんです。」  
 「散髪屋さんの？」  
 「ええ。」  
 「手を抜くためね、早く客をさばこうツてんですか？」  
 「そうじゃないんです。止められているんです。」  
 「へー、そんな規則があつて？」  
 「衛生上の見地から、府令で禁じられてるんです。耳毛、鼻毛は、ある方がいゝらしいですね。」  
 「残念ね。鼻毛はともかく、耳の穴の産毛なんて、なぜ入用なんでしょう。アカは、自分でほじくり出せるけど、剃刀は使えないわ。」

「第一、あの細身の道具がないわ」「自分では無理ですね」「あなたの、あの道具ないか知ら？」  
 「親方のがあります」  
 「内緒で、ね、してくれない？規則なら、こゝでなくていいのよ。月曜お休みでしよう？休みの日、いつでもいいわ。お話ししてよ」  
 「恥なんか要らないです」「じゃ、きつとよ。期待してるわ」  
 かえりがけに、もう一度思いを込めた眼差しで、帰つていった。

も小さい。  
 公休日で、親方はお内儀さんと子供を連れて、家庭劇を観にいった後である。若し新之助が映画にでも出ていくとなると、施錠と火の元に注意して行くようにいゝつかつてある。  
 ハナ剃りを砥ぎ上げ、ほかに耳カキ、耳タワシ、ピンセット、穴拂いの五つ道具を手拭に巻きつけて、服のポケットに収め煙草を一本くわえて女に教わつた道順を草履ばきで出かけていった。  
 午後四時の日差しが、舗装路に撒かれた水を干しつゝある。両側はみんな丸笠の門燈を吊り、木造りが新しく、小綺麗以上に門口が数寄に凝つてある。それが一軒々々、植木の恰好とともに、別々の工夫に成る型の違いである。  
 そんな通りの、教えられた目安を曲る路地の奥まつた一軒に、「工藤」と姓だけしるした新しい門標が目についた。こゝだと思ふ一方、妙に胸の高鳴るものがあり、

止めて引返そうかという氣後れもする。足音を聞きつけたのだから、中の方で小犬が啼いている。ベルを押すと、意外にも女が直き直きに出てきて、笑つて梶子を明けてくれる。  
 「さあどうぞ、すぐ分つて？」  
 「はあ、全然迷いません」  
 「ホ、でも御迷惑だつたでしょう、折角のお休みに」  
 「どうせ今日は留守番なのです、親方は那加座です」  
 「そう——、うちもねえやが里の用事で帰つたの」  
 二三歩の間融だけ植込みになつていて、すぐ靴脱石である。女は新之助の草履を、下駄箱の中へ片付け、尾を振つているチンコロの頭を叩いた。  
 「お二階へ上つて頂きましようか」  
 新之助はキヨロキヨロとして、それから黒光りに磨きのかゝつた階段を上つていった。

ガラス障子で、採光の申し分のない部屋に、絨氈を敷いてテーブルと椅子が置いてある。女はそこへコーヒーを持ってきて、それからケーキと果物を出し、きようはゆつくりして下さつていゝんでしよう、と仕事はこれからだのに、もう終つてしまつたような歡待ぶりである。  
 それから、何が好きだ、芝居は観るか、野球ならこんど一緒にオスタジウムへ、両リーグの対抗試合を観に連れていつて貰おうか知ら、——両リーグは試合やるんでしよう、お国はどちらだ、兄弟は何人あるか？ など、話しかけてきて、一向に今日出掛けてきた用向きにかゝらせようとしな



そのうちに、時計を見て、あゝもう五時半ね、そろ／＼暗くなるわ、立上つて電燈をひねる。点かない。パチンと、もう一度音を鳴らして、切れたらしいわ、じゃ、いつそこちへ来て頂こうか知ら、と廊下へ出て、疊の間の襖を明け、寢台の置いてある三疊で、床の間から遠い棚まで取つてある部屋へ案内した。真中に火鉢が置いてあり、火が入っている。いかにも奥まつた隠し部屋という感じがする。へいぜい、女がこの部屋を使つていて、枕スタンドの付いているベットの、ひとり寝をしているとは思えない。

新之助は、平氣な顔でいられない。「ねえ」と女は手を取り、「まだ帰つちや駄目よ」と言い置いて出ていった。

下で、犬がキャンと啼いたように思つた女はなかなかやつてこない。どういうつもりなんだろ？——あるいは、自分のウナなどところを、女は楽しむつもりか？

そんならそれでいい、自分も人並みに、欲望の兆しを持たぬでもない。氣後れし、もじもじとはするが、打明けると、これは自分の本心には遠い。年上の女の暴力を、期待するところがあるのである。正直に言えば、その思いたるや、まことに切なるものがあるのである。

平生使つていふように見えなくとも、掃除はちやんと行届いている。掛図を眺め、ベットの上的睡やかな夜具に目が走り、一人で想像する思は怪しい。腕時計はもう六時だ。

足音がして、どうもお待たせしました、

と他所<sup>よそこ</sup>行きの言葉で女は入つてきた。

火鉢に向ひ合つと、ブソと化粧の匂いがする。「では——」と女が云つた。

「そろそろやつて頂こうか知ら」

「はあ」やはりやるのか、と新之助は思つた。

「そのまえに、あなたあたしとの約束出来て？」

「無言劇できて？ 絶対黙つていふのよ、あなたは。あたしは声を出すけど、——それは一寸不謹慎と思える位い、何や彼や喋るかも知れないけど、あなたはそれに相槌を打つては駄目。分つて？」

「分りました」新之助が喋つては、氣分がこわれるとでもいうのであろうか。

「光線<sup>くわんせん</sup>の工合、どう？ スタンドを引く？」

「いいです」

彼は立つてコードを降した。女は鏡台の覆いを捲り上げて、自分の姿が見えるようにした。新之助は、手拭に巻きつけたものを解いた。女は、二つに疊んだチリ紙を帯の間から取出し、火鉢に凭りかゝつて耳を差出した。

新之助を見て、片目をつむる思い入れをした。約束を守れというのか、手際よくやれというのか、それとも、もう何か情緒のたくらみをやつていふのであろうか。

最初にハナ剃りを執り、光に遠く耳殻を剃にかゝつた。こんなのは、石鹼をつけるまでもない。

女のたつてのお望みである。外側を剃りやわらかい女の耳を裏返して、溝筋になつていふ隠れ場所まで、それこそ産毛一本

も剃り洩らすまいと、たんねんに、入念に息がず、慌てず、精魂こめて砥ぎ上げた剃刀をつかうのは、いつもの職人仕事とは違い、何か藝術の仕事に打ち込んでいふような錯覚すら覚える。女の肌へ鉛筆を執つたという歌麿のその時の心境も、大方こんなものではなかつたらうか。

いよいよ外側が済んで、穴の中のそうじにかゝる。女はうつとり目をつむつていふ「あー」とはじめて女は声を洩らした。それは聞き様によつては、大變惱ましげにきこえる。

「あなた——」それはまるで亭主かまぶを呼んでいるようである。

「そそうつと、ゆつくり奥へ入れて頂戴ね」

はあ、ともう少しで、思はず声が出るところであつた。

「そうつと」

新之助は心のうちで、ハイと云つた。

「いい、いい氣もち」

ミミクソ掘りが済んで、先にまるい綿毛のついた穴拂いを、ゆつくり回しながら鼓膜の手前まで入れ、またそろそろと回しながら引抜いてくる。

「あなた上手だわ。早く終つちや駄目よ」

はあ、と彼は声帯を使わずに云つた。

しばらくして、女は声を出すのである。

「そこをもう少し奥の方へ——」

そうしてたもとから蜜柑を取出し、素早くむいて、チイッと一袋吸つた。





新之助は仰せつかつた通りに、穴拂いを耳の中に止めて、腕を添え持っていた。

「もういいわ、」

それからもう一つの片耳を指し、

「ねえ、もうしばらくしてから、して頂戴ね」

と云うのであつた。二人はうつとりと息を呑んでいた。

犬がキャン、と啼いたように思つた。間違ひなかつた。キャン、キャンと誰かに撲られてゐるようなあんばいである。女は片手で新之助を制し、思案顔をしたが、そのまま降りていかなかつた。

「さあ」と女は云つた。「じゃ、こちらの方お願いするわ、もう、それほど丁寧でなくつても結構よ」

新之助は、大して丁寧にしなくていいと女が云うのは、次に新之助との別な時間を目論んでいるのかも知れないと思つた。女が自分の手を握れば、勇を鼓して、肩を抱いてやろうと思案した。

しかし、女は、それ以上の積極さを、示してこなかつた。夕飯を奢られ、金一封の御礼を、嫌だというのに押しつけられたがベッドに抱き寝してくれる大いなる期待は、あてが外れた。彼は割切れぬ不可解さで、なまめく花街通りを帰つていつた。彼には、女の心が測りかねた。

3  
工藤美代は、首尾よく旦那と縁が切れたので、やれやれと喜んだ。旦那は土建屋で美代が当新地に出ているとき仲を取持つも

のがあつて聞かれたが、ボーと二十万三万の金は右から左へ呉れるけれども、気性といふ品格といふ、美代の我慢出来るものではなかつた。旦那は置手紙を残して、帰つていつたのである。その絶縁状は、美代の鶴首待望するものであつた。旦那の筆蹟は万年筆で、社名のはいつた便箋に次のようにしたゝめてある。インクはちやんとつゞいてゐるが、字が恐しく下手くそで我流につづけてあるので、判読せねばならぬふしが少くない。

おまいに負けた。じよう談からコマが出たとはこの事かも知らんが、イヤハヤえげつないねえ、

なんぼわしが、おまいに好きな男があつて、そいつとチムクリあつてるところわしに見せつけてくれたら、無條件でわしが手を引く云うたとて、あないなとこ、聞かせんでもえゝやないか、

きこえたぞ、おまいの、悩ましのイキづかい、わいがまねして聞かしてやりたいのぞいても見えなんだのが、誠に残念、無念、

わいも男だ、これでもスイも甘いも知つとるつもりじゃ、いまゝでのお金とこの家と、それから自由をお前に上げる、あんまり発展しすぎて、早よ老けんようにな、これがわいの最後の忠告や、阿々翌る日、風呂からの帰りがけに、女はまたやつてきた。おや？と新之助はいぶかつた。

素速く女は片目をつむり、いまゝでにな



「あなた、じいつとこうしていて頂戴ね」  
新之助は仰せつかつた通りに、穴拂いを耳の中に止めて腕を添え持っていた。

い秋波を送る。——昨日に今日ではないか耳の産毛がもう伸びたとでもいうのか。

女は散髪椅子に凭りかかり、鏡の中の自分を写している。剃刀を低いで近づく新之助に、女のエリ足は濡れている。

「剃り込まないようね」

「はあ」

「それから耳そうじして下さらない？」

「さあ」

親方は手空きで、老眼鏡をずらし、キセル片手に新聞を読んでいる。声は届かないらしい。

「規則なら、内緒で。ね。うちへ来て下さ

いよ、今晚」  
「そうですね」

「もうお礼しないわ、その代り、道具持つて来なくともいいの」

「それじゃお伺いしましょうか」

と押しつよく云つてみて、耳たぶに血が

昇つてくるのを、我ながら意識した。

鏡を見るまでもない、いけないと思えば

思うほど、朱が顔に差してくるのである。

それにしても、と新之助は思つた。——

耳そうじに自分を呼んで、女はつぎにどこ

を掃除させようというのか知らん？（了）



# 女の如く



玲子画

小福が太平建設産業会社の社長大川鉄吉に囲われたのは今年の正月であつた。

建設産業会社などというところ、一流会社のように聞えるが、前身は飛鷹組といった土産業であり、ひいては社長といつても、その親方の成上りである。

小福は梅田・OS劇場裏の呑み屋「耕本」で働いていたが、ある日、女将から大川の妾話を持ち出された時、どうせ、もう綺麗な身体でなし一度は朝寝、朝酒のせいたくも味わつてみたが、二ッ返事で承知したものの、大川とは親娘ほど歳が違ふのが不服だつた。が、察しのいい女将は、小福のその様を見て

しやはるようなことは、あらへん」と、ニヤニヤ笑いながら、小福の肩をポンと、たたいた。しかし、二十七の女盛りの小福には、どうにもあきたらぬ思いであつた。

## 二

だが、結局話がきまると、大川は早速、京阪沿線の香里園に、小じんまりした家を買つてくれた。

そして、毎週土曜日の午後に来て泊り、日曜日の午前中に帰つて行くのが常だつた。氣楽な生活ではあつたが、週一回の大川との交渉では、小福の身体は満足出来なかつた。大川の来ない日は、最初のうちこそ、今日は映画、歌舞伎、明日は競輪と遊び回り、氣をちらしてはいたが、それも三月も経つと飽きてしまつて、氣も浮き浮きする春となつたこのごろ、毎日々々が退屈で、欲情する身体を持てあますのだった。

すると、浮氣の虫がいつかジと頭をもたげ出して来た。困われの身の浮氣が、もしバレれば鉄匠深い大川のこことだから刃傷沙汰になる危険性はあつたが、それだけ一層スリ

ルが感じられ、魅力があつた。小福は「耕本」にいたころの馴染客を、あれこれと浮氣相手に物色してみたが、興味のわく男は見つからなかつた。と、ふと、千林町の花屋「花幸」の店主の話を思い出した。

それは今朝のことである。一輪挿しをカーネーションにしようか、スイトピーにしようかと迷つていたとき、顔馴染みの店主が、ニコニコ愛想笑いをうかべながら

「奥さん、最近生花熱が中々旺んですが、お稽古なさいませんか、尤も奥さんなんか、ご素養があまりでしようが」と、すすめた。

「そうね、考えておくわ」別に生花を習う氣もないので、そ

うあいまいに答えておいたが「生花師匠との浮氣」なんて、一寸、ロマチックで、大川には生花を習つてゐるといへば、おおつびらで、まさか男の師匠とまでは氣がつくまい。これは妙案だと思つた。

小福は翌日、早速千林町の花幸へ出掛けていつた。

# 香具師艶はなし

## 獣の眼 (一)

テキヤの任侠心なんて現代ではいさゝかも見られない。衣食足つた大親分ならいざ知らず、中小都会のテキヤは今生活に必死である。他人を蹴おとしてでも自分が食わねばならぬ狂乱さ

## 獣の眼 (二)

感覚を感じて跳ね起きようとしたが動けなかつた。消灯されてあつたが亭主でない事はわかる。女房はこの場合大声を立てる事は非常にまづい結果になると考えた。と云う話がある。女房のとつた行動はフランスの諺話なら女の機智とか何とかになるかも知れんが、日本的に考えると不快である。否、それよりも無鉄砲なテキヤの獸心を憎まねばならぬまい。

だ。それにアブレゲールのグレン隊のカツヤクがテキヤを一層みぢめにした。

手相見のオヤヂは神社の裏門にアミを張つていた。丁度ヒルスギであまり閑散なので帰り仕度していると、ひよつこりと鴨がきた。十七八の肉付のよいオヤヂ／＼した娘。オヤヂは帰宅するのだから家で見てあげると近くの陋宅へ連れ込んだ。

或る木賃ホテルでテキヤの一團が泊つた時、部屋が一杯となり、とう／＼兄貴様の人余儀なく宿の夫婦達の寢室へ割込む事となつた。夫婦は赤ん坊をまん中に川の字に就寝し、テキヤは亭主の横に寝た。

夜半に女房は肉体に異常な



# 処女は童



「古流になさいますか、それとも新しい流儀に」  
「お流儀はなんでもいいわきびしく教えていただける男の先生をお願いしたいの」  
そういつてから、心の中を見透れやしないかと、一寸、氣まりが悪かった。  
「男の先生だと、内田先生がいいですね。お歳は若い、それだけに花格がフレッシュで、つまり新挿花とか、新感覺派とかいうあれです。若い人達に、一番人氣のある先生です」  
「じゃ、その先生にお頼みしておきますわ。家は香里園ですが、いつ来ていただけるかしら」  
「香里園なら、日曜日になつてゐるんですが」  
日曜日は大川がいるから、工合がわるかつた。

「日曜日は困つたわね」  
「もう先生の出稽古日は、ずつと詰つていきますので……」  
「じゃ、仕方がないわ、午前中は都合が悪いから、午後にお願ひしたいわ」  
「承知致しました。そう先生にお伝えしておきます」

家に歸つて来た小福は、まだ見ぬ内田とかいふ師匠のことを、あれこれ想像しながら、これからの情事の手段を考えるのだつた。どうせ、男の生花師匠といえ、色のなま白い優男と相場はきまつてゐる。それなら、うんと、オモチャにしてやうと、殘虐な色情に快感と興奮を覚えるのであつた。

## 三

日曜日——初めての稽古日である大川は例のように、十時頃歸つて行つたあと、小福は饒湯へ出掛けて行つた。時間が早いので浴客は少く、小福は伸び伸びと浴槽の中で肢体を浮かして見た。むつちりと色情を帯びた肉体が、バラ色に染まり、我ながら、ほれぼれする見事さである。どんな男をもフラフラにし、泣かさ

ずにはおかない身体である。化粧をすまし、着物を着替えていると、一時が鳴つた。もう内田の来る時分と思つと、娘の導引のようにそわそわしている自分に氣付き、だらしないと叱つて見た。その時、  
「今日は」  
玄関の格子戸が開いた。小福がゆつくりと、とり澄して出て見ると、ウィステッドの紺の背廣に、赤いネクタイを締め、長髪をオールバックにした色の浅黒い屈強な青年が立つていた。一見してスポーツマンか、画家といったタイプである。内田師匠ではないらしい。では、誰だろうと、いぶかしく思つていると、  
「私、插花の内田ですが」  
と、挨拶されて、小福は  
「まあ、内田先生なんですか、すっかり、お見外れ致しまして……」  
あわてて詫びながら座敷へ通した白足袋に羽織、袴、役者のような優男の見当がはずれ、小福は全くドギマギあわててしまつた。座敷で面と向かい合ひ、改めて内田を観察した。濃く秀でた眉、高い鼻筋、子供のうちに澄んだ目、固く結んだ唇、頑丈な身体付、小福が想像していた内田とは、似ても似つかぬ知的な近代青年である。これではそう容易に馴れそうもなく、手強い感じがした。  
その日、内田は花材を用いず、生花の起源や変遷、插花の基礎組織といったものを、持つて来た花譜でわかり易く説明すると、これから、まだ五、六軒稽古に行かねばならない

た。  
「必ずあります。さッ見せて御覽なさい」  
オヤヂは命令的に娘に肌をぬがせて乳房をなでたりつかんだりした。  
「おう！ 幸ぢや。喜びなされ呪のホクロは見当らぬ。娘さん。あんたは幸せな結婚をしますぞ」  
娘はそう云われてホツとする所を、オヤヂの手は遠慮なく娘の帯をときにかゝつた。  
「お腹を拜見する。幸せな結婚も赤ちやんの出来不出来によろからのう……」  
娘は催眠術にかゝつたよう



## 獸の眼 (三)

ナゴコマジとは女を物にする方法と云う事だ。相棒と語らつて、一人が寂しい所を通行中の女房らしい女の前からサイフをひろいあげる。  
「オカミサン。あなたも見ましたね。仕方ありません。おや！ 二千円入つてゐる。これを半分わけしましょう……」  
流石女、慾に釣られて心ヲクワク……そこへ相棒が現われる。  
「おやッ、これは私のサイフだ。何故あんた達が持つてゐるんだ？ 何？ 拾つた？ 拾つた



からと「まあ、お茶でも」とひき止める小福の手を振り切つて、そそくさと帰つて行つた。あまりのアツけなさに、内田を送り出した小福は茫然としていた。小福の艶姿に対し、いささかの感動も現わさず、その女色に眉一つ動かさなかつた今日の内田の態度に小福は自負心を傷つけられた思いがし、今に悲鳴をあげさずにはおくれものかと氣負ひ立つた。

#### 四

二、三日して、千林町へ買物に行つたついでに花幸へ寄つてみた。相変らず店主が愛想をいいながら出てきた。

「奥さん、内田先生はいい方でしょう。近代的な、いや味の無い。とても人氣がいいんですよ」

「そうかしら」  
小福は自分を無視したような、先日の内田の態度にまだ怒りが消えず店主が内田をほめちぎるので少々腹がたつた。

「先生は学校時代はラグビーの選手でしてね。運動が過ぎて身体をこわされ、この道に入られたんですが、今じゃ流行ッ見ですよ。それに行儀がいいですからね。男の先生つてものは、よくお弟子さんと問題が起ります。一派を編むまでは、結婚もしないという熱心さですよ」

「じゃ、先生はまだ独身なの」  
「ええ、母御さんと二人きりですよ」

内田が童貞青年だと知ると、小福の色情は愈々高められ、ぶるんと思わず身体がふるえた。

花幸の店主がいつたように、内田の堅さには、一寸、手が出せなかつた。

ある稽古日——花材は鉄砲百合とカーネーションの投入であつた。内田は花譜をひろげると、天には一番しつかりした花を、長さは、角度はこれ位と図と実物を説明しながら小学生に教えるような丁寧さだつたが、座っている二人の間は常に一定の間隔が保たれていた。小福はツツ眞面目な内田をからかつてみたくなり、又、挑発の第一歩として、ジと居住いを崩し内田の方へにじり寄つた。一回生け終ると花形をこわしこんどは小福に、ひとりで生け替へさした。主位の百合を生け、客位の最後の人のカーネーションを持つた手を、小福はわざと躊躇させた。

「天と地の後から右前角へ挿せばいいのです」

内田がその箇所を指さした

「先生、枝に支えて、挿しにくいんです」  
と、ぐつと内田に寄りかかり、

「先生、もつと親切に、手をとつて教えて頂戴よ」

内田の手をとると、自分の手を上から握らせた

「甘つたれの生徒さんには困るな」  
内田は仕方がないといった風に、無造作に小福の手を花ごと握ると、挿し口へ持つて行き、挿し終ると、

恐いもののように、パツとその手を放した。その青年らしい羞恥から、小福は内田に與えた衝動を知り、心の中で、ほくそ笑んだ。急いではいけない。愉しみはゆるゆる味うものである。

大川は小福から、生花の稽古のこゝとを聞いても、それはいい趣味だとはめ、それ以上は何もきこうとしなかつた。

三月経ち、もの惱しい緑の季節となつたが、期待していた情事は、それ以上発展しなかつた。いかに挑発し、隙を與えても、内田はそれに乗つて來なかつた。徹底したその堅僧ぶりに、さすがの小福もタジタジといつた形だつた。しかし、こうなれば意地にも、わが女肉の軍門に降し、その童貞をものにしなければ、おさまらなかつた。

と、ある日曜日朝、花幸の小僧さんが、花を届けに來て

「奥さん、今日は先生の都合で、お稽古夜になりますから」  
と言傳けてくれた。

今宵こそ絶好のチャンスのように思われた。夜が内田の堅い心をくずしてくれるだろう。

その夜、小福は夜の化粧も濃く内田を待った。

八時頃、やつて來た内田は、稽古が夜になつたことを詫言ると、いつものように稽古をすすめた。やがて稽古も終ろうとするころ、ガラガラと玄関の格子戸の開く音がした。はて、誰だろう。今頃、訪ねて來る人

のなら何故警察へ届けるとか中に所番地を書いた私の名刺が入つてゐる。何故持つてきてくれようとしな。今きけば二人で半分わけしようなんてけしからん事を云つてたぢやないか。まアこつちへきなさい……」

てんで三人は木賃ホテルの奥まつた室へ納まる。サイフを拾つた男は小用だとか何とか云つて逃げてしまふ。後には女。亭主に云うとか、警察へ突き出すとか脅迫して暴力的に貞操をスポイルしてしまふ。狙われる女は世帯盛りの女房が多い。

此れとよく似た手で、バクチ好きの女を陥し込む方法もあるが、十月号にデンスケに身をかけた女の記事もあつたから割愛する。

最後に——兄貴達が新宿へ着く。女中に早くも美しい娘を見つけると名をきく。

酒の廻つたところで「文子さん」と呼ぶ文子は兄貴連中からキレイくとチャホヤされてるので氣げんよく二階の室へくる。

「文子さん。すまないが、フツンしいてくれないか……」  
文子の及び腰を押さへつけ

て厭も應もない。娘はふいをつかれて咽喉がひりついて声さへ出ない。「おい。おい。ハオリでもかけてくれ……」  
「OK」  
その早い事、神技と云つていい。一番乗りから何番乗り迄行われるか、考えるだけでもいやだ。——

## 犬二題

### ほり込む

犬がボツ／＼流行しだしたいつたいに高級犬となるとブルジョア趣味で、元のロビンズの親方の田村駒なんぞ犬のために一邸宅を建てたくらい当町でもNO.1のブルデョア丁方のセバードは時價五十万円とかの話だ。所がこんな話があるのだから油断できない。愛犬家の自戒心のために発表しよう。話は昭和初年頃と思つて頂きたい、軍犬セバード大流行時代で、犬屋は盛んに産をなしたものだ。Aさんはジョーと云う関西でも一流の若社を持つていた。Bケネルから求めたものでAさんは種牡としてだいぶん儲けた。



は、小福が首をかしげながら出て見ると、意外！朝帰った大川が再びやつて来たのであつた。

「あんた、今頃、どないしやはりましたん」

「うん、夜行で東京へ行くんやが、まだ時間があるよつてん、一寸、寄つてみたんや」

と、大川はもう靴の紐をといていた。

「あんた、わて、ひとりでお花の稽古してたんで、座敷ゴミやよつてに片付けて来まつさ、待つてておくなはれな」

小福は座敷へ取つて返すと

「先生、大変、すみませんが、一寸ここへ」

と押入を開けると、訳がわからずボカンとしている内田を押込んでしまった。とたん大川が入つて来た。「小福、大分、花らしゆうなつて来たがな」

「そうだつた、うれし」

小福は氣付かれては大変と、わざとはしやいで、大川の機嫌をとつた。押入れに入れられた内田は、それと察し身動きも出来ず、息を呑んでいた。小福が困い女であることは、とつくに氣付いていたし、小福の意中も、木石でないかぎり、よくわかっていた。ほんとうのことを云えば小福の媚態に幾度か崩れようとした内田だったが、宣貞青年の潔癖性と強い理性が、今日まで、彼を守つて来たのであつた。

ちよつぱり締め忘れた襦の間に

雀の啼き聲に眼をさました小福は、まだぐつすり眠っている内田の顔をのぞきこんだ。



ら大川の姿が見えた。頭髮の生え上つた六十がらみの小柄な爺だが、テラテラと脂肪光りのする顔は、いかにも好色爺まる出しだつた。

「小福、こんど東京へ行くと、工事の都合で一ヶ月ばかり帰えられへんかもわかれへんの、名残りを惜しみ来たんや、アハハハ……」

「そんなら、あちらの部屋へ……」  
「いいや、そうしてる間がない」  
「あれ、まあ」  
突如、襦の隙間から覗いていた内田の視界一杯に、赤い色があざやかにパツと散つた。

—おわり—

が、どう云う魔が射したのか、多くの犬ファン並に別な犬が欲しくなつてきた。そこでBケンネルを通じてジョーを賣りに出した。二三の客をBケンネルの主人が連れてきたが、Aさんも相当慾張つていたので話は不調で、Aさんも少しデリ／＼しておつた。それが突然ジョーの変死となつたのである。

「ウフフフ……そうでつか。誰かほり込みよつたんと違いまつか？ウフフフ……そうでつかまア一べんよせてもらいまつさ」

これは我輩が傍で聞いていたBケンネル店主の、Aさんへの電話應對の一節だ。

ほり込むと云うのは肉片にヒソをまぶして犬を暗殺する事だ。犬屋同志、愛犬家同志でもザラにやつてる。種牡を持つた者同志の嫉妬から、競争觀念からなどが原因で、多く出入の犬屋の若い者にたのみこんでこれをやる。犬屋自身も次の犬を賣らんかなのためにはこの便利な方法を用いるのが常識？となつてゐる。ジョーの急死は勿論怪しい

○ B店主の「ウフフフ……」そんなでつか……」も氣味がわるい

我輩もその頃一頭の名犬を持つていた。ドイツの警察犬ヒツセンの直系児で、頭の牙えたセバードだ。襲撃の際噛んでくる箇所は跳躍して肩から腕である。こいつは警察大学校でウンと仕込んであるし、命令は全部ドイツ語だ。跳びあがつて噛みついてくるなんて、まるで狼だが、これでいいのだ。足などへヨロ／＼噛みにくるなんてきたない話だ。この犬の名をエンカーと云つて我輩の自慢だつたのだが競馬の資金に困つて遂に賣りに出した。名種牡ジョーの死より二三年前の話だ。Bケンネル主は客を連れてきたが、どうもエンカーが凄いいし、あまり我輩に手馴れ切つてる様子もみて二の足をふんだ。所が突然エンカーが死んだ変死である。我輩はヤラレタナと思つたが仕方がない。その後、名種牡ジョーの変死に偶然Bケンネルに居合わして、B店主の「ウフフフ……」の何とも云えない厭な響のこもつた声をきいた。

(おわり)



偵探小説

# 鬼人殺の眼片

登賀志

東二



## 一、三人殺し

上田刑事は、この事件を思い出すたびに人間の奇しき運命を思わないわけにはいかなかった。その夜、彼は奇怪な夢を見た。くらやみで、強盗犯人と格闘しているのだ。あわや短刀で胸元をブスリとやられようとするそのとき、バタバタと足音がした。「應援がきてくれたッ、よしッ」力をこめ、兇賊を蹴上げようともがいたときである。

ドン／＼と烈しく何やら叩く音。

ハッとして首をもたげると

「上田さん、今晚は」

誰かが呼んでいる。さては夢か、とむつくり起き上ると、戸が開いて、顔を出したのは、大津署の当番巡査であつた。

「さては大事件だな？」

大感にピンときた。

「滋賀里村に強盗殺人事件がありました。すぐ来て頂きたいので——」

偶然に夢は現実であつた。時計をみると午前二時だ。上田刑事は素早く身仕度をして署に駆けつけた。

物々しい緊張裡に田中署長、村井捜査主任、それから刑事二人と共に彼は、時を移さず自動車で現場に飛んでいった。

「この家だな」

大きな敷が深夜の中空に聳え、ざわめいている。つい手前の一軒家、田圃に鳴いている蛙の声も呪わしげに聞こえる。

派出所の巡査が待ちかねて案内すると、中から、物凄く呻き声と、血生臭い匂いがぷうんと鼻をつく。上田刑事は、思わず顔をそむけた。土間から座敷の奥まで一面の鮮血、障子や襖

五十年配の父親と、それから、二十四五の姉娘と二十ぐらゐの妹娘の三人がやられている。父親は身に数箇所を兇器で突刺され呻き苦しんでいる。姉娘は背中から乳房に達する重傷、妹娘だけがうまく逃げのびて、腕を少し斬られただけだつた。犯人については、誰も一向に見当がつかない。妹娘が震えながら「いきなり暗がりですれ違ったので、さっぱり何やらわかりませんわ」というだけである。

間もなく判検事がやつてくる。刑事課長警部、老練な木村刑事部長まで乗りこんでくる。一同念入りに現場調査の上、一先づ大津署の捜査本部へ引揚げて、場首捜査会議を開いた。問題は、強盗を目的とする殺人か痴情によるものかである。

翌朝入ったニュースによると、事件のその夜、同じ村内のお寺と、現場から三町離れたある農家に泥棒が入つて、衣類や現金を盗んだというのである。そこで強盗説が有力になつたが、一方には、農家育ちには珍らしい美人の姉妹をめぐつて、痴情関係が全然ないともいふきれぬという捜査方針もあつた。

## 二、丹下左膳

さて遺留品としては、現場に丸福と染め抜いた汚ならしい手拭と履き古した下駄が一足、それに小さな捻子廻が一つ落ちていた。手拭係、下駄係、捻子廻係と、それぞれ刑事が分組して各方面の捜査を開始した。捻子廻は、あまりに小さいので、時計か眼鏡屋の修理用と見込み、縣下の時計屋、眼鏡屋、手拭については福と名のつく家を



片つばしから調べたがどうも分らない。二三日たつても更によい聞きこみがない。

上田刑事は、金子廻の調査を命ぜられたので、附近の時計屋、眼鏡屋、なんでも修理という、終戦後雨後の筈のように出来た家々を調べるために一日を費し、翌日から大津市内を当つたが、第一、マツチの軸ぐらゐの捻子廻なので道具箱の隅つこに幾つもあり数も判らないという家が多いので只、職人のひとり／＼について当るだけで証拠品としての価値はないも同然だつた。三日間も足を棒のようにして探し廻つたが一向端緒がつかめない。

検事も刑事課長も署長も刑事も、何か娘との関係ではないかと思つて、入れ代り立ち代り妹娘を呼び出して追求したが、一向男があつたような様子がない。姉娘の素行を調べてみても品行は悪くないと証明された。

「もう、こうなりや仕方がない。どうあつても妹娘に食ひ下るばかりだぞ」

上田刑事は娘宛の手紙を念入りに調べた今までできた手紙を全部出させてみた。古い手紙まで丹念にみていく内に、妹娘にあてた三枚の手紙に目を止めた。差出人は同じ村の青年達からであつた。

「これは、どういふ知合ひの人か？」

妹娘の種子はちよつと羞かみをみせたが存外落つた様子ですら／＼答えた。

「その人は、二年ばかりまえの春に、この裏山に炭焼人夫として来た人達です。仕事

合間に一二度お茶を飲みに来たこともありますが、ただそれだけで一人も恨みをうけるような人はございません」

「いま何をしている人だね」

「よく知りませんが、矢つぱり炭焼か何かやつてゐるんでしよう。その手紙だけで後は消息がありません」

手紙の内容は、種子がいつたように、御馳走になつた礼状で、便箋一枚に簡単に書いてあるだけである。

さてはこれも駄目かと思つたが、待てよと彼は考えた。

「よし、ぶつつかつてみよう。どんなひつかかりがあるか分らんぞ」

一旦捜査本部へ帰つて身仕度をして、弁当持参で、ひとり裏山さして上つていつた山地は、現場からなお一里ばかりの山奥である。道はだん／＼峻しくなつて谷のせせらぎが脚下の樹立の奥から聞こえる。近くから驚きの声が――

「これが探偵でなかつたらなあ」

周囲の和やかな景色をみて彼は幾度も苦笑しながら曲りくねつた細道を歩いていつた。

間もなく、三人のうちの一人を訪ねたがさつぱり手懸が得られず、止むなく、なお半里ほどある奥地で炭焼をやつてゐる傳次という男を訪ねた。それがまた大変な路もない山中で、どこに炭焼小屋があるんだらうと煙を探し／＼登つたが、人つ子ひとり出金うわけでなし、薪を分け、密林をく

ぐり、野良犬のようにうろ／＼したあげくやつとみつけた一筋の白い煙。

喘ぎ／＼辿りつくと、それは意外にも人運いだつた。

「その男なら、もう十町も上ですよ」

また息せき切つて登る。木の根につまづき、へと／＼になりながら探してあてた。太田文夫という男は、いかにも朴訥らしい青年で、すら／＼と心置きなく答えてくれる「そうです。思い出しました。三人の外にもう一人、丹下左膳がおりましたわい」

「丹下左膳？」

上田刑事は思わず笑い出した。

### 三、時計修理工

「四人のうちでは一番年が若かつたが、妙な奴でしてな、ろく／＼口もきかず、いつもむつ／＼してました。名前ですか、たしか大西留造とかいいましたよ――親も兄弟もなく、土方をやつたり、炭焼をやつたりしてましたがね」

「それで、娘と懇意だつたのか？」

「いいえ、懇意どころか口もろくにきいたことがありませんよ。それにどうしたのか一年ばかりまえ京都へ出て行つたまゝ、丸つきり音沙汰なしです」

「ふうむ――」

「で、この男は、なにか手仕事、時計の修理というようなものがでる男か？」

「あ、いつか、私が時計を落して壊したところがありました、直してやるといつて二

三日で持つてきてくれましたが立派に直つてコチコチ動いてゐるから驚いて聞きますと、奴さん、丹下左膳みたい片眼を細めてにや／＼していましたが、多分霜枯れ時分に時計の修理でもやつて内職してゐるらしいですね」

しめたッ！

上田刑事は飛び上らんばかりに喜んだ。しかし、帰道で、とつくり考えてみると、丹下左膳といわれるような醜怪な顔をしていて、わざ／＼娘を殺しにくるほどの深い関係があるのかと、また、あの家の近くまで時たまやつてきただけで、娘と話した事もないというし、これや考え違ひぢやないか？そう思つたが、時計の修理と捻子廻、それだけが妙にピンときて、片眼の左顔面が陰にこびりついてゐるなかつた。「よしッ、京都だ、足が折れるまで京都市を探すんだ」

上田刑事はつぶやきながら夢中になつて山を駆け降りた。驚きの声も流れの音も耳に入るところではなかつた。

さて、その翌朝、彼は京津電車の一番で京都に向つた。京都といつても時計屋だけで何軒あるか。殊になんでも修理、ライターの修理屋で街頭に立つてゐるものだけでも聞き込みに当れば半日じやすまない。しかし彼は強い自信があつた。幸い相手は片眼なのだ。片眼の時計修理をやる男。そう限ると至極簡単に解決しそうな氣がしてゐない。

その日の晝過ぎであつた。

千本丸太町へなぞいつたのか分らないが幸運というものはそんなものである。

上田刑事は、交差点から四五間いつたところの小さな時計商へ這入つていつた。

平和に明け暮れる山村に突如として巻き起つた殺人事件。

妙齡の娘が、しどけない寝巻姿のまゝで紅に染つて倒れていた。

痴情か、怨恨か？……怪奇探偵實話、片眼の殺人鬼。



朝から十三軒目の家であつた。

「警察の者ですが、お宅へ大西留造という片眼のつぶれた男が来たことはありませんか？」

主人は、客に腕時計を並べて何か話していたが、急に丁寧な言葉で椅子をすゝめ、

「さあ——片眼のつぶれた——」

首を傾けたが、ふと手を叩き

「あ、そうだ、片眼の男が、こゝから一町ほど南へ行つた所に小倉つて修繕の専門屋があります、たしかいましたよ、いつてごらんさい」

「そうですか、有難う」

彼は弾かれたように表へ飛び出した。

#### 四、犯人浮かび上る

教えられた小倉修理店へ行くと

「こういう者ですが」

と名刺を出したが、二階にいるらしい主人がなか／＼降りてこない

「待たせるなあ」

上田刑事はぢり／＼しながら、ふと、ゴタ／＼した仕事場をみると、小道具類の一杯詰つた箱の傍に汚れた手拭が抛つてある

「あッ！」

瞬間、彼はのけぞり、おもわず吸い寄せられたように手を伸して手拭を掴んだ。

丸の中に福と染め抜いてある。

「これだッ、これだ、丸福」

全身の血が湧きたつようだった。悦びを抑えて素知らぬ顔で待つてみると、やがて四十ぐらいのでつぶりの蒼い顔の主人が降りてきた。

「何か御用ですか」

「じつは大西警察署からきましたが、お宅に大西留造という職人がいる筈と思います

が、ちよつと呼んで貰えまいか」

主人は、当惑そうな顔をしたが

「あの片眼ですか？」

「はあ、丹下左膳なんていわれている男」

主人が笑つた。彼も笑つた。感激と狂奔の爆発を感じて笑い出したのだ。

「あれはつい二週間ほど前、どこかへ逃げ

ていつてしまいました、何でもやる男でしたから、また炭焼でもやつてらんぢやありませんか」

「すると、この、手拭の丸福印は？」

上田刑事は手拭を指し示した。

「この手拭ですか、これは福井つていう神戸に呉服屋を開いております親戚から貰つたんですが、大西にも一本やりましたからそれを持つて下駄ばきで出かけた筈ですが——」

しめたッ！。彼の足はもう宙を浮くよう

だった。犯人は大西留造と断定がついた。

彼はその足で大津署へ帰えり、委細を語つた上、直ちに手配されるよう捜査本部に報告した。

#### 五、片眼だッ觀念しろッ

捜査本部は果然色めき立つた。

その夜の十時過ぎ、滋賀里村の近くに片眼の男がうろついていたのを尾行したところ、急に山間に向つて逃走し、行方をくら

ましたという報告があつた。

いままでも何回も山狩りが行われたが、その報告で、その夜遅く、更に物々しい大山狩りが行われた。事件後すでに五日、犯人

が山から時々降りてきて、部落で食物を盗んだり、手を焼いて食つたりした形跡が判明してきた。

署長は、上田刑事の顔をみると、抑えきれぬ喜びに声をはずませていた。

「充分の手配をしたから、君は刑事二三人と共に南滋賀から川傳いに先行してくれ」

上田刑事は、すぐ嚴重な身仕度をして、同僚の刑事と三人、南滋賀から谷川傳いにぐん／＼登つていつた。時に深夜十二時。

数十名の検察隊は十間置き位の縦隊を作つて別な方面から、署長の一隊はまた別の方面から夫々蟻一匹洩らさぬような陣立でひた押しに押していく。凄愴極まりない大山狩だ。

空は漆黒、星一つみえず、どうやら雨でも落ちて来そうな重苦しい空模様、

「山中越えで京都へ抜けてしまつたか？」

「大丈夫ですよ、丹下左膳はお蔭に惚れぬいてますからね、速くゆく筈はない」

上田刑事は、そんな冗談を交しながら深夜の山道を歩いた。笑いもおよそ空洞なものだった。それほど彼は眞剣な氣持で周囲を睨め廻し、コトリと微かに木の葉が落ちた音にも全身の神経を硬張らしていたのだ

どうしても今夜の内に挙げてしまわねば出てこい、大西！

彼は心の中でこう叫び続けていた。

もう二時頃だろうか？

懐中電燈をつけることが出来ないの

計もみられない。

と、左手は懸着たる密林、右手は切り立つた断崖、前方に、白い道がボーッと見える。

早や山中越えのハイキングコースに差しかつたのだ。もう半時間もすれば、署長の一隊と落ち合うようになっていく。

南無參！そう思つた時。

ほの白い道路の上を、さつと横切つた黒い影。犬にしては大き過ぎる。

パツと懐中電燈を放つた。

「あッ！」

黒い影は正しく人間だった。兎のように道をそれて木立の中へ飛びこんだ。

「それッ！」

たしかに風呂敷包みを背負つた男の姿だ

上田刑事始め二人の刑事はバラバラと駆け出し、いきなり大声で

「待てえッ！」

叫んで、三方から、深い藪の中に飛びこんでうろ／＼している男に向つて突進していつた。

懐中電燈の光の中に男の顔がはつきり現れた。

「あッ！片眼だッ！大西ッ觀念しろッ！」

上田刑事は、胸まである藪の中で、男にのしかかり、がつきと右手を掴み、懐中を

探ると呑んでいた白箱の短刀。風呂敷包みは最家で盗んだ食料や衣類、殺人犯にも似合ず、震え震えながら

「——お、おそれ入りました！」

へな／＼と藪の中へしやがみこんでしまつた。

#### 六、運命の別れ目

二年前の春、大西留造は滋賀里村へきたとき、妹娘種子の美しさに、思わずフツ

ツとしてしまつた、炭焼きに行く前と帰り途に通るだけで、たまに、仲間のひとり

彼女の親父を知つてゐる加減で、お茶をよ

ばれるぐらいたつたが、にやりとしてみられると、娘もにっこり笑つた。

「俺に氣があるな？」

勝手にそりきめて想いを募らせた。

いちど、柱時計を、その場で直してやつた。親父を始め、種子など。



「まあ上手ねえ、えらいわ」  
しきりに賞めそやす。茶をついでくれるとき、ちよつと手が触れると、恥かしそうに笑つて立去る。  
「よし、もつと仕事に精を出そう、金さえ貯めて、立派な風采をしてやつてくれればきつと一緒にしてくれるに違ひねえ」  
彼は一心なつて働いた。炭焼きと土方仕事、その間には、死んだお袋の知り合いの京都千本丸太町近くの小倉修理店の職人に住みこみ、子供の頃からよくきていつの間

にか覚えてしまつた時計の修理に精を出し二年間に貯めた金が七万四余り。思えば悲しい努力だつたのだ。  
さて、金は出来たが、娘の本心を聞いてみたくなつた。そうなる自分の顔が益々氣になる。丹下左膳といわれていることを知つてゐるから今までもどれだけ氣になつたか分らない。しかし心だ、男は顔より心が第一だ、よし、この想いを打ち開けて頼みこめば、まんざら嫌ひでもなさそうな素振りだつたし……。

彼は思い出の滋賀里村へ出かけていつた彼は頼みかむりをして夜陰に乗じ、娘の家に忍び込んだ。  
覗いてみると娘の種子がひとりで別間に寝ている。  
彼は胸をはづませながら這い寄つていつた。そこが運命の別れ目だつた。  
一人寝の娘は種子でなく姉嬢だつたのだ六月に早や敷が出ていたので蚊帳の中にいたのも悪かつたが、情慾に目のくらんだ彼にも罪はあつた。そんな大事な区別がつか

の音が聞こえる。  
「泥棒だか知らねえが、今度きやがつたら鉄砲をぶつ放してやる。たしか片目の炭焼き男だろうな」  
「ええ、間違ひないわ、嫌な奴」  
そこへ妹嬢の種子が現れた。しどけない寝巻姿だ。留造は胸をあえがせてごくりと唾を飲んだ。  
「まあ、あの丹下左膳が？ ホホホ、あきれた助平ね、あんな顔で一人前の男だと思つてゐるのかしら、あたしんとこへきたら短刀があるから、もう片方の眼玉もくり抜いてやるわ」  
二年間惚れぬき、食うものもろくに食べずに金を溜め、今日、結婚の約束でもした意氣込みでやつてきた相手の娘の言葉なのである。  
妹嬢の種子だけを目当てに、生きてきた過去二ケ年の自分が我れながら哀れに思えて、涙がとめどもなく流れた。  
生一本なだけに、こうなれば、もう前後の見さかしくもなかつた。  
可愛いさ余つて憎さ百倍、家の中の氣配に聞き耳を立ててゐると、自分を哀れむ心が次第に、限らない相手に対する憎惡に變つて行つた。  
留造はかあつとした。全身の血が逆流して煮えくりかえつた。  
「よし！ 娘を刺し殺して死んでやろう」  
悪鬼となつた片眼の留造は、いきなり躍りこんでいつて、あの兇行を演じたのであつた。



彼は、寝てゐる娘の傍へ、そおつともぐりこんで、いきなり抱き締めようとした。  
「ああッ！ 泥棒ッ！」  
けたたましく呼んで娘が飛び起きた。  
彼は慌てて飛び出した。  
こんな管ぢやなかつたが——と俣みながら雨戸にじいつと耳を当てた。父と娘

（完）



# 早春恋心恋々二頭

新月弦馬

純情の巻

## 憧れた裸像



小さな欠伸をして腕を延すと、世界美術史の分厚い本を閉じた忠雄は、緊張がゆるんでぶるゝツと標えた。離れ家のアトリエの夜更け、洛北であるだけに三月とは暦の上の話で、何処からともなく吹込む隙間風が、火鉢一ツ抱えた脊中へ浸み込む。

忠雄は、昨日観てきた倉敷の大原美術館の、名画の中でも特にルノアールの「泉による女」とゴッダンの「タヒチ島にて」や、ロートレックの傑作と称される、「婦人の肖像」の素晴らしかった印象がまだ生々しく臉の裏に灼きついていた。

来年は美術学校を卒業するが、父の横内雄峰の日本画を継がずに前衛美術を目指して勉強中の若者である。父に劣らぬ名を轟かさんものと張切っている。

忠雄は一つの願いを胸に抱いて

機会を待った。欧米の名画に負けぬ立派な裸像が描きたいのだ。カンバスに向うと頭の中の女神の影が薄れていく。矢張りモデルが欲しい。汚れなき聖処女——そうひと口に良く云うものの裸体となりモデルとなつて呉れる乙女が果して何処に居るだろうか。傑作には必ず素晴らしいモデルが必要なのだ。

古風な京の町に育ち、傳統を命とする父親の薫育を受け乍ら、新しい画を生み出そうとする努力は只ならぬ苦心と障礙を伴つた。複雑で繊細な色彩と筆使いをもつて日本画の大家たる父親に対し、幻想的な超現実派を狙う忠雄とのギャップが、今では忠雄を離れ家に孤立させた恰好となつていた。

忠雄な寢支度をしながら、もう一度風呂で暖くもりたいと考えた十一時に近いので多少ぬるいのは

覚悟をして、渡り廊下傳いに湯殿にくると、目に痛い程の冴えた月光が、硝子越しに更衣室へ流れ込んでいた。一度湯殿のスイッチに手を延したが、月光を浴びての入浴も、親爺ぢやないが又風流だとそのまゝ浴室へ這入つた。

もうもうと濃い湯気が立竪めていた。暫く忠雄は何も見ることが出来なかつた。外部の早春の冷寒に較べると何という天国であろう。やがて浴槽の前に屈んで、鉢に湯をかけようとした瞬間、アッ、忠雄は短い驚愕の声を上げ、鉢が硬直してしまつた。

甕ろな白い霧が湯気に包まれた浴槽の中に見える。そつと眼を近づけた忠雄は、湯の中に美しい肉体が斜に泛んでいるのを見た。

縞を織りなす月の光が、立昇る水蒸氣と競なして、妖しい影をその白い裸像の上に躍らせている。僅かに湯から覗いた肩先と、タイルの縁の上にのせられた腕の皓さよ。忠雄は恐る恐る顔を突出したあどけない寝顔である。すらすらとした肩とマツ毛の黒さ、恰で乳房から離れた赤子のような可愛い、

唇の形、それが忠雄には、熱い口吻の途中で、そつと自分が女から唇を離した……そんな妄想が頭の中に渦巻いた。思わずその唇に引寄せられそうになつてハツとなつた。

その娘は、こゝ一週間は前から、行儀見習という古めかしい京都の習慣で、女中同様の仕事をやらされてゐる。父、雄峰の門人平田峯舟の娘、壽美子に違ひなかつた。晝間の疲勞が湯の中で出たのであろう。豈かだがすんなりした感じの脚を、心地良さを湯の中にぐんと延し、むつちりとした双丘を突出するような姿勢で、湯槽の中に仮睡の夢を結んでゐるのだ。

忠雄は目前のあまりにも麗わしく清らかな乙女の裸像に、茫然として固唾を呑んだ。女の裸体ならモデルの体を見飽きる位眺めている。だが、壽美子の裸体には輝きにも似た、清純で神聖なものが発散されている。

(これだ。求めていた聖処女の裸像——)  
忠雄は湯氣の中で臆を握えた儘



# 恋の熱の爛



暫くの間じつと動かなかつた。鳥肌立つ寒さのことゝも忘れて、喰入るような眼付きだつた。

ゆるい呼吸の毎に柔らかな湯に浸つた半分を赤く染めた双丘が、さらさらと音を立てて、宛ら夢の岸辺のように微かな波をたせている。銀色に、又金色に輝めくそのさざ波の美しくさよ。黒髪から肩へ肩から腰へ……光線の加減で水魚の鱗を想わせる香味がかつた脚の色が、ゆらめく湯の中で、流れ込む月光の反射光が多角的に交錯し、薄紅色になり灰白く見え、轉々と変色して忠雄を恍惚とさせる。二十を出た位であらうか、新鮮な、そして神秘的な女体である。

と、その静寂を突如忠雄は破つて了つたのだ。クシヤミが二度続けたまに、出たのだ。失敗つたと口を押えたが間に合はぬ。

夢をうちやぶられた乙女は、氣だるそうに瞳を見開いた。やゝ暫くの間壽美子は判断がつかなくなつたらしかつたが、次の瞬間、声にならぬ悲鳴を上げ、俄かに膝を丸く縮めると急いで湯から飛出そうとした。だが、どうしたことか、脚を這らせてバチャンと湯の中に轉びそるゝ姿勢になつた。

「ア、危ない！」忠雄の腕が壽美子の胸を支えていなかったら、彼女はきつと浴槽のタイルで、額か顔を打つていたに違いない。非常に危ない一瞬だつた。忠雄が壽美子の腕を掴んで起そうとするとどうした訳か彼女の膝は、ずるずると浴槽へ沈みそうになつた。周章てたのは忠雄で、掴んだ掌に力を入れ乍ら、自分も浴槽へ飛込むと、夢中で壽美子の膝を抱き上

げていた。壽美子は思いがけぬ男性の出現に、驚倒して氣を失つたのだ。

更衣室に壽美子を抱いて出た忠雄は、彼女の濡れた膝の上から、手早く着物を着せかけて、窓際のソファの上に横たえた。

又してもクシヤミが出た。慌てゝ湯へ飛込んだものの、矢張り壽美子のことが心配で暖る処の騒ぎではない。父か母でも起きてくれれば万事休すである。全く氣が氣ぢやない。

パジャマの紐を結ぶのももどかしく、忠雄は壽美子を再び抱き起した。

古風な黒髪が濡れて一層黒々と重く忠雄の腕へ垂れている。可愛い、小鼻から微かに甘い息が流れてつた女の体温が着物の上からでも感じられた。

「キミ。おい、すみちゃん、おい」

耳元で呼んでみたが手應も反應もない。生きていることは確かだが、次第に忠雄は恐怖に襲われてきた。もし此の儘彼女に昇天されたなら耐らないぞと、忠雄は額に汗を泛かべ乍ら狼狽した。

「オイ、おい、おい」声もつい大

きく高くなる。腕に力がいいる胸が乱れる。氣が焦る。忠雄はベソを強いた顔で、激しく壽美子の膝を揺すり乍ら、やけくその力で抱緊めた。

「あゝ……」忠雄の蒼ざめた頬へ、柔らかな壽美子の吐息が流れだ。甘い匂いだ。

「すみちゃん、おい、判るか、僕だ——」

忠雄は、ヤツと臨終に間に合つた時のような言葉を叫んで了つた彼女の膝が除々に動きだした。

「しつかりしろ——」もう一度力一杯抱締めると、「うゝゝゝ」壽美子がゆるく顔を上げ忠雄を見た二、三度瞬いた。

酔つたようにトロツとしていた彼女の眼が、とたんにギラリと光る。ピクツと忠雄の腕の中で、彼女の五体が強烈に顫えた。手が無

意識に着物の裾へ走つた。自分がどんな位置にあるのかまだ判然としていないらしい。足が空を蹴つた。忠雄もどうして良いのか解らずに間ごつて了つた。

「イヤあ……」間違つて冬を越して了つた蚊のように細く弱い声を壽美子は咽喉の奥から絞り出した決して悲鳴ではなかつた。顔一面に乙女の羞いの色が溢れる。

「離して……厭あ……」その甘い声は待ち兼ねていた忠雄に吸込まれて了う。貧弱な形ばかりの抵抗は示されたが、やがて延びていた足先がだらんと空間に垂れ、彼女の膝は忠雄の腕の中でわくわくと揺れていた。

翌日、壽美子は忠雄の顔を見たと逃げ出した。忠雄の頭の中には浴室で見た彼女の、神聖な裸像のことで一杯だつた。もう一度会つ





# 純情の恋



て話したい恋文まがいの手紙を彼女に渡した。両親の監視が厳しいのでそうするより方法がなかった。

して二人きりの機会が巡つてこないのだ。ついに忠雄は仮病を使つて、やつと壽美子を呼びよせた。母親と父親が交代で離れ屋へ見舞にくる。その僅かの隙を窺つて忠雄は、彼女にモデルになつて呉れと哀願した。

「裸に？まあ、いやですわ、羞かしい——」

まつ親になつて床の傍へ上半身を彼女が伏せた。「頼む、ねえ、すみ子ちゃん」「いや、いや」絡んでつれて、忠雄は矢張り若かつた。藝術よりも素晴らしいものを忠雄はその時知つた。

「頼む。あの浴槽の時のポーズを僕の爲に與えて呉れ。頼む。壽美子——」だが、鉢を許したのにも拘らず、何故か壽美子は忠雄の前では、絶体に肌膚を脱ごうとはしなかつた。おがむよ。

「拜んでるんだ。あの神聖な、聖処女の裸像が描きたくて、もう僕は氣が狂いそうなんだ」限りなき藝術への切望も遂に聞入れられなかつた。

忠雄は意を決して壽美子と結婚した。案外両親が反対しなかつたのは幸いだつたが、二人きりになつても、どうしたと云うのか壽美子は裸になることを拒み続けた。再び早春が来た。彼女は藝術品のよきな女の兒を生んだ。産後の床を離れた数日後、アトリニで忠雄が、スケッチ、ブックを整理しへている処へ、彼女が何時にない

硬い表情で這入つてくると。

「もつと早くモデルになりたかつたのですけど、妾、実は羞かしいのと、もう一つ訳がありましたのそれで、あのう——」そう云い乍ら、用意していたらしく、ペラリと着物を脱ぎ捨てた。

忠雄は、パイプを口から離すと苦々しい声で云つた。

「僕の要求していたのは聖処女の裸像なんだぞ。馬鹿ッ、こんな鉢の何処に藝術性があると云うんだ

僕は、あの神聖な」

すると彼女一層消え入りたいた風情で、靜かに良人へ背を向け乍ら「たつて、妾……こんな醜い痣があつたんです。もしも貴方に捨てられては……と妾」

忠雄が、どんな大きな酷い痣かと、彼女の背を注視すると、臀部の上の処に、インクが浸み込んだような、薄い小さな痣をやつと発見した。彼女の掌がその上を被つた。

「あ……」ポタリと口からパイプがこぼれ落ち、忠雄は開いた口が閉がらない。

「僕は裏側まで描けないんだ。バカ、ばかッ——あ、もう僕の僅れの裸像は消えた」

その時、壽美子が身を屈めるとクシヤミを二ツ續けてした。

(了)

## 爛熟の戀

## 清算の

## 夜

うんざりした。どんな女でも結局の処はこうなんだ。死ぬという事に決まるとくどい口説と泪が続く——愚痴と追憶とが絡み合つて、

泣き止まない。泣き止まない。巧くいつたぞと佐川は心の中で舌を出す。やつとのことに珠江が思い諦め、よろめく足で立上ると便所へ行つた。さあ今の間に仕事をしなけりや駄目だ。

青酸加里の入れ場所に困るんだあいつは敏感だから氣付かれてはおしまいである。可成り酔つ拂つたとは云え酒の中では駄目、味の変わり方が酷い。愚図ついている場合ぢやない。咽喉が渇く。茶瓶を引寄せて一杯呑む。何て酷く

てにがい茶なんだろう。そうだ。あいつは滅法濃い茶が好きだ。

火鉢から鉄瓶を外すと、茶瓶の中に一滴みの茶を投じて湯をさし足す。流石に指先がぶるゝつと慄える。罪の意識か——裏喰えだ。

珠江の足音が廊下にした時、佐川は蒼白い顔へホッと安堵の色を浮べていた。

「もつと飲めよ、これが最後の酒だぜ」

珠江の顔も蒼白い。常の彼女ならとつくに頼くなつてゐる筈なんだが。

妊娠した未亡人……ありふれた話題かもしれないわ。でも、当人にとつては大変なの。貴方は隠せ

と簡単に云うけど、妾の軀では下手をすると命が危ないつて……

医者だとその時も貴方は嘔つたね煮きらない態度は貴方の方なのよ妾も娘ぢやないから、今更ら結婚してよなんて古くさい泣きごとは云わないわ。でも、貴方にも責任を持つて貰う心算よ。ふ……ご迷惑そうなのをお願……後悔して

るんでしよう。妾のような女にかわりあつたつてことを——笑つてないで何とか仰有つて頂戴よ。

どちらが誘惑したとかしないとかそんな野暮は云わないわ。貴方も生活に行詰つてゐるのは知つてゐる。しかし、妾のお訊きたいのは

貴方の誠意の問題ホラ又そのイヤ



# 恋の熟爛



な嘆い方を——  
ねえ、眞剣な話  
なのよ。明日は  
妾の誕生日なの  
——だから、生  
れし日に滅び行  
く生命とか云う  
言葉、妾それを  
実行したい。ロ  
マンチックな乙  
女趣味かも知れ  
ないけれども、  
妾、矢張り死ぬ

より途がないと想うわ。賛成して呉れて？勿論古風かも知れない。でも、心中は近松以前から日本人の愛したものだわ。永遠に繰返される男女の愛情行進曲よ。決心してね。本当よ。嘘ぢやないわね……嬉しいわ。吾が愛は亡びず……ぢや、明日の朝、妾が案内するわ早咲きの山梅の花の下素適な場所を見付けてあるのよ。お薬りは貴方にお任せするわ」

心中決行の前夜——その爲の昂奮が珠江を酔せないらしい。

「もう考えないで飲めよ。今宵限りの二人の生命なんだろう。さあもう一杯」

遠い処を見ている瞳が佐川には不気味なんだ。女つて奴は魔物なんだから、油断は出来ない。しかし、女位單純で真逆な奴もない。惚れたとなると眼も鼻もない。後悔もない。そこがつけめなんだ。神妙に振舞わないと感づかれる。酔わせるに限る。

「もう飲めないわ。酔過ぎるとあとで駄目だから……」女の云う意味が解る。佐川は複雑な苦笑が浮ぶ。

「お前は千姫だ……」佐川は酒を含んで珠江を引寄せると、無理に口移しで飲ませる。駄目……眼で叱り、それでも吸つてる。

「くるしくなつたわ。貴方は平氣なの……口惜しいわ」珠江が酒を含む。佐川は口を固く緊める。呼吸が詰つて珠江が呑み込む。又佐

川が酒を珠江へ——

他愛ない愛戯と見える行動の裏で、冷徹な男の計算が組立てられて行く。

「灼けそうよ、此の胸が……燃えてるよう」

「よし、濃いお茶を呑め、濡いかも知れんがはつきりするよ。さあ——」

用意していた茶碗の茶を、自分で一口飲んでから珠江に渡す。濡いだろう——佐川も顔をしかめ、眉を寄せにがそうに飲む珠江を見る。随分とにがいのね——珠江は二口で飲み干した。佐川は後を奨めない。次からは毒味をすると危険なのだ。

枕元にスタンドを置き、枕を並べている女を横目で見て佐川は便所へ立つた。戻つてくると珠江はすでに横になり、黒いナイロンのハンドバックから何か捜していた風だつたが、佐川に氣付くとパチンと口金を締めた。

「おい、まだ飲む心算かい」佐川は枕から顔を上げて傍に置かれた徳利を眺めて愕く。

「ほい、ほい、きづけぐすり、今夜は覚悟してね」

「覚悟？」どきんとなる。「真逆ッ



ふいふい」女の嬌態にさげなく笑いはしたがふと嫌な感じが残つた。

延びてきた女の白い腕に頸を巻かれ乍ら、女の枕元へ何気なく持ち配んだ、茶瓶をチャッとして横眼で眺めてから目を瞑じた。

空闊二年で三十才の未亡人、珠江の肉体には男を痺れさす魔力が住んでいる。だが、半歳以上も戯れてきた佐川には、いささか食傷氣味だ。とは云え、最後の夜だと思えば末練の残る女である。新しい女は限りなくあるとは云うものの、珠江程の女に再び逢えるかどうか——全裸の膚は何処に触れても火のように燃えている。次の女への構図が佐川の頭の中に描かれた。酒の味だ。生温い酒が佐川の

濡いた咽喉へ流れ込んできた。馬鹿にいゝ思いつきた……佐川はにやりと笑う。澁茶なら笑い処ぢやない。

佐川はたじたじの態で皮肉つた「誰に仕込まれたんだい。さては浮氣したなあ——」びたッと女が息を殺した。

「浮氣したのは貴方だわ。知らないと思つての」意外に冷たい声が應える。

「へん、旨くいつてらあ——」おどけてみたが女は沈黙を守つている。これは事である。

「怒つたのかい？冗談ぢやないか」

「貴方は妾を弄んだんだわ」

「ち、違う」

珠江は床から軀を乗り出した「ご免。悪かつた。謝るよ。ね、俺はお前しか此の世に愛しい女は







なく寝入つてしまつた。

彼は今宵こそ、

天が與えた絶好

の機会とばかり

意を決して彼女

の床中に滑りこ

んだ。やゝあつ

て、何に驚いた

か尼僧はむづく

と起上り、そわ

そわと戸外に走

り去つた。

彼は、(しま

つた、なんてへまをしでか

したんだらう)と、己が不

手際を悔やんだが後の祭り

とも角、彼女の後を追つて

出た。

一方、尼僧は例の持佛堂

で、御本尊の前にかしこま

り、しきりに念佛唱えて鉦

打鳴らしている。男は今や

正休を暴露したので、きつ

と彼女から、罵倒され怨嗟

され、散々に叱責されるだ

らうと、さすがに良心がと

がめてりわの空で見守つて

をあらわすや否や、今度は

彼女の方から、はや息も悩

ましく乱して、彼の胸にす

がりよるのであつた。

夢心地のひとつきが過ぎ

て彼は最前の尼僧の不審な

行動を問ひ訊すと彼女恥ら

い乍ら

### きぬぎぬの騒動

天王寺あたりから京へ上

る法師が、途中で山伏と鑓

物師と道連れになつた。今

津辺で日が暮れ、とある旅

宿に三人は泊ることにした

宿の主人は、以前遊女であ

つたとか言う、垢抜けのし

た大年増。さて皆が寝しず

まつた夜更け、山伏はそつ

と床をぬけだし、総髪を俗

人のもとどりに結い直し、

鑓物師の烏帽子をこつそり

失敬に及んで、おもむろに

女主人の部屋に忍びよつた

低声によぶと、灯を消した

暗がりの内部から、眠たげ

な女の声で「どなたなんで

しよう、もう寝んでいるの

「云い様のないこの楽しさ

を、どうして今まで知らな

かつたんでしよ之から不

犯の誓いを破らして頂くこ

とを、とりあえず佛様に御

届け申上げたわけで……」

あとは充分聞きとれぬ、消

入る様な声であつた。

「私は今宵御厄介になつ

た鑓物師ですよ、こちらの

台所を見ると、釜は一つだ

け、わき釜がありませんね

定めて御入用のこととお察

します、いかがなもんで

もしよう」

満更でもなさそうな女主

人の様子に、山伏はしてや

つたりと、そのまゝするず

るとすべりこんだのであ

る。

やがて、夜明け近く、女

の寝入っている枕元へ、く

だんの烏帽子をわざと目に

つく様に残したまゝ、自分

の部屋に引上げた。連れの二

人が眼を覺すと、山伏は素

ざしく立去つたのである。

しばらくして、鑓物師が自

分の烏帽子を冠ろうと、置

場所を眺めたが影も形もな

い。はて面妖な、とあたり

を度らず捜すけれど、勿論

出てくる筈もない。そこへ

顔を出したあるじの女、

「約束の釜はどこにある

んですか、早く下さいな」

鑓物師、きよとんととして

そんな約束をした覚えはな

いと云う、彼女一件の烏帽

子をつきつけ、

「空とぼけちや困りますよ

これに見覚えはないと言わ

せませんよ」

鑓物師はただ

困惑するばかり

、女は容赦なく

猶もまくしたて

た。

「何とおつしや

つても駄目です

よ、証拠がある

んですからね。

おまけに年

物師、小躍りせんばかりに

喜び「あゝかたじけなや、

天道神佛もいまだ私をお見

捨あらなさらいことだ、皆

の衆もこれを見て下され」

いきなりパツと前をまく

り上げた。成程ほんの小兒

ほどのが目に入つた。流石

の女主人も、あいた口がふ

さがらないで、しばしあつ

けに取られている。

「さては、てつきりあの山

伏の仕わざだらう」と、か

たわらの法師の言葉に、

あゝ、あの山伏ならやり

かねないと、凄じヒゲ面で

筋骨あくまで逞ましい不敵

な面だましいの件の山伏が

事が今更のように思い出さ

れ、それに途々語つていた

言葉の端々にも思いあたる

ふしぶしもあつて、結局う

まく山伏のペテンにかけら

れたということがわかつた

結局馬鹿を見たのは御兩人

と言ふわけ、ようやく鑓物

師の嫌疑が晴れたのであつ

た。

思いあたるふしぶしもあ

つて結局馬鹿を見たのは御

兩人と云ふわけ、ようやく

鑓物師の嫌疑が晴れたので

あつた。

……」

之を聞くや鑓

物師、きよとんととして

そんな約束をした覚えはな

いと云う、彼女一件の烏帽

子をつきつけ、

「空とぼけちや困りますよ

これに見覚えはないと言わ

せませんよ」

鑓物師はただ

困惑するばかり

、女は容赦なく

猶もまくしたて

た。

「何とおつしや

つても駄目です

よ、証拠がある

んですからね。

おまけに年

寄りのくせ









「よるな肉体を想像しそうであつた。」

「良ちゃん。健忘症でんな。」

「派手な声にはつとわれに返つた。」

「さあ、名乗りをあげまつせ、辰巳村の瀬田和枝よ。」

「女はにつこり笑つた。」

「なにッ和枝さん。」

「そやねん、あたしの正体、もう判らへつた。」

「ほう、あのう……」

矢野は次の言葉が出なかつた、和枝の赤い唇をまじまじみつめてみると、頭のなかをさつと咲子の姿がぬけて行つた。

咲子と和枝、この二人の女は、矢野が辰巳村在住時代、彼の青春を華やかにいりどつた、思い出の女たちである。

「あたし、交りましたやろ。」

「お交りになりましたね、どうしても思い出せませんでした。」

「それでつしやろ、さあ、氏素性が判つたらえ、とこへ案内しまつさ。」

和枝は光のすい残りをぼいっと川面へ捨てた。

どこへ連れていく気なのだらう、そんな不安があつたが、不安よりも、和枝の口から咲子のその後の消息が知りたいという心が強くなつてきた、復讐以来はもとより、抑留中にも忘れたことのない咲子のこと、いまだに探してもとめている激しい追慕の念その望を果すためには、和枝の言葉に従うのが最善の策だらうと思えてきた。

「さあ、行きましよ、とつてもいゝとこなんやわ。」

「どこへでも行きますよ。」

「まあッ、うれしいッ。」

和枝はいきなり矢野の腕をとつた、むつちりとした触感が、矢野の心をたかぶらせていつた。

千鳥橋南詰から西へ、西陽をうけてほこりつぽい道を歩いた、よりそつてきた和枝が

「良ちゃん、あんた、あたしよりほかに知りたいひとがおますやろ。」

と意地悪い底光りのする眼でみつめながら言つた。

「あります、和枝さん、咲子さんのこと知つておられますか。」

「よう知つてま、咲子さん元氣でつせ。」

「どこにおいでですか。」

「それはちよつと言えへん、とにかくあたしとつきあつてくれはつたあとで、言うたげまつさ。」

咲子……矢野にとつては、痛い思い出の女である。

矢野は和枝の言いなりに従つて、正蓮寺川沿いの変な家の二階へあがつた、そこからは硝子戸越しに、明日から勤める北安田組のグレンが見え、矢野は古疵にさわられたやうな、心のうずきを感じた。

小さな、ちやぶだいをはさんで、和枝は幾はいも盃をかたむけた。

「そんなに飲んでもいいんですか。」

矢野はさいせんからはらはらしながら、こんな場所へ、和枝と二人だけで来たことを悔いていた、それに和枝の鮮やかな飲みぶりに不安が頭をもたけ、不快氣に眉を寄せて注意した。

「大丈夫、お金を持っていまつせ、心配せんと飲んどくれやす、惚れた男に五年ぶりに逢うて、四帖半で差向い、和枝はうれしおますのや、幼馴染とつまずく石は憎いながらあつたを向く、つてこと知つてはる、良ちゃん、咲子さんの男やと思つて腹が立つちまつけど、シベリヤから帰らほつて咲子さんに逢いはるまでの良ちゃんをつかんで、あたしは宇頂天や、あんた、あたしの心、判る？」

とろりと酔つた眼に、あやしい媚をうかべてにじりよつてくる。縁結びの地藏堂で逢つたあの夜より、この異常な成長ぶりに、矢野はすつかり度ぎもを抜かれてしまつた。良ちゃん、こゝは連れ込み専門の宿屋でつせ、そうれみとくれ、ちやんと準備してあるんやから……」

和枝はよろよろと立つて、境の襖を開けた、そこには派手な友禪模様のふとんをかけた寢床が、主持ち顔に敷いてあつた。

「良ちゃん、今日は絶対に逃がしまへん、あたし初恋を貫徹しなけりや、承知でけん気性なんや、あんな不具者に負けたら、和枝の面子に關わるねん……良ちゃん、なんて顔をするねん、逢いとうおまんねんやろ……けれどね、あたしは、あんたをわがものにしたいから、あとしのお古を咲子さんに、くれてやるねん。」

和枝はにくにくし氣に言いながら、よろよろともの座へ歸つてきた。

あんな不具者、そう叫ぶ和枝の言葉が、まさまざと矢野の頭のなかに生きてきた、不具者、咲子の不具、それは矢野の過失から産れた悲劇だつた。

## 淫婦

下田田圃二百七十町歩の南端をぐるりと迂回している、加治川の護岸工事に、矢野はトラックを運轉して工事材料を運んで、二年余りもつゞいてゐる大工事なのである。

矢野のきびきびとした動作、明るい性質は、村の娘たちの憧れの的となつていた、所々から持ちこまれる縁談に耳も傾けずに働いた、それには、戦時中という悪條件が矢野の心を結婚へ向けなかつたのだが、一つは、胸のうちでは一人の女性に激しい愛情を感じてゐたのだつた。

それは村の収入役の娘咲子であつた、矢野の境過ではいくら背のびしても手のとどかぬ高嶺の花だつたが、それだけに矢野の恋情はますます濃しくなつてくる。逢つて意志が打明けたいと日夜焦燥したが、その機会はなかなか来なかつた。

夜になれば咲子を求めて、ふらふらと村道をさまよつた。今日も矢野は夕食後、ぶらりと家を出た。

「毎晩、どこへ行くの？」

いぶかる姉の言葉に

「ちよつと散歩に……」

と答えたが、頭のながでは咲子の面影を追いかけていた、外へ出ると金比羅山におぼろ月がかり、なにかねつとりとしたものを感ずる四月の夜氣が、矢野の心をあやしくかきたてた。

どこかのラジオが戦果のニュースを報じていたが、矢野は戦争の進展などには少しの興味もなかつた、咲子に逢いたい、たゞそれだけの一念だつた。

五年前の夜、縁結び地藏の前でなまめかしい紅紐を解いて、強引に言い寄つて来た和枝が今又その熟れた肉体を投げかけて来た。然し良平は、――



「良ちゃん」

呼びとめられてふり返ると、おぼろ月の下に、白い和枝の顔が浮いていた。

矢野はとつさに逃げようと思つたが

「どちらへ」

脂肪の匂をふりまくようにして和枝が近づつてきて、矢野の腕をぐいつととつた。

「どこへつて……」

ごくんと睡をのみおろした、矢野にとつては和枝は苦手なのである、こんな女と二人きりで夜道にたゝずむなど迷惑である。

「言えまへんやろ、ぢやあ、あたしがあてゝみましようか……いやだけれど……」

和枝は皮肉そうな笑を泛べて、矢野の鼻へからみついてきた。

「僕もう帰りますよ」

背を向けると

「待つてよ良ちゃん、そんなに素氣なくせんでえゝやないのん、ちつとはあたしの氣にもなつてよ」

鼻にかゝつた甘え声で矢野によりかゝりながら。

「ちよつとこつちへ来てよう、話があるのんよう」

ぐつとつかんだ腕に力をいれた。

「話つて？」

「とつてもえゝ話……」

和枝の強引さにひきよせられて、もつれるように夜道を歩いた。

「こゝで休んで話をするわ」

そこは、みだらな空氣が流れていそうな縁結び地藏の前であつた、矢野はぎくりとして思わずたがたとあずさりした。

「良ちゃん、逃げんでもえゝのんや……こゝは縁結び地藏よ、わかつてる」

和枝の笑顔が、おぼろ月の下で淫猥の微笑のようにぼつかりと浮かんだ。

この地藏堂の裏は、何十年も前から幾多の男女が恋を語り、また肉体の喜びを味つたという、濃艶な由緒のある場所である、こゝで結ばれた仲は永久に変わらぬ夫婦仲が保持されるという傳説さえあつて、いまだに、ひそかにこゝを利用する者があつた。

和枝が、こんな場所を選んで立ちどまつたのに、矢野は迷惑を通りこして、恐怖さえ感じた。

「早く行きましよう、こんなとこにいて、ひとに怪まれたら大変だから」

矢野はのどがからからにかわいてしまつたように思え、これだけ言うのがようようであつた。

「ひと眼がこわい……良ちゃん逃げる氣……」

からんでいる和枝の手は、拂つても拂つてもからみついてくる、これが二十一才の女とは思えぬ大膽さであつた。

「冗談はよして下さいよ」

「眞剣なんや、あたしの心を察してよ」

「和枝は執拗にからみついた、どうして、いつの間に脱いだか、モンペイは地におちて、なまめかしい緋色のこしのものが、ひらひらと夜風になびいた。」

「ほんとうです、よして下さい」

矢野は思いつき強く和枝の手をふりほどいた。あふりを食つて和枝は地面へ投げ出された。

「わかつたわ、良ちゃんはやつぱり咲子さんが好きなんや、けれど、あたしあきらめへん咲子さんと競争するんや、あんな女に負けるもんか……」

雲間を出た月に照らされた和枝のみだらな姿は、凄艶そのものであつた。矢野は怖

いものを見るように眼をそらしてあわただしく、その場を走り去つた。

## 過失

矢野はうさぎとして愉快かつた、口笛でもふきたいような、うれしさがこみあげてきた、縣道のずうつと前方を行く咲子の後姿が、ハンドルをとる矢野を愉しくさせているのだつた。

辰巳部落の家並へ入る、こゝからは見通しのきかぬ藪陰の曲角へ、咲子の後姿が消えると、矢野はいきなりぐうつとトラツクのスビードを速めた。

藪陰をぐうつと廻つたとき、

「あつ、危い」

飛び出してきた自轉車を避けるために、さつとハンドルを左へきると、そこには折悪しく咲子が立つていた。

「あつッ、しまつた」

矢野は急いでスロットルレバーをひいて急停車したが、咲子の姿はトラツクの陰に消え、矢野の視野のうちになかつた、運轉台から飛び降りると、トラツクの前輪にひつかゝつた、赤い色の着物の柄が、きりきりつと矢野の眼へ突きさゝつた。乱れた裾から現れている白い足に血がにじんでいた

「咲子さんがトラツクに轢かれなかつた」

口々に叫びながら寄つてきた人々に力を借りて、矢野は手早く咲子の赤い腰紐で、ふともゝへ止血の應急処置をした。

「立田町の病院へ行つてますから、咲子さんのお家へ知らせして下さい」

と叫び残して、矢野は失神してぐつたりとなつてゐる咲子を抱きあげ、運轉台へ乗せて赤十字病院へトラツクを走らせた。

手術室へ咲子を運んでから、矢野は廊下の隅で頭をかゝえて坐りこんでしまつた、咲子を傷つけたことはもちろん大きな精神への衝撃だつたが、それに関連して、こゝへ駆けつけてくる咲子の両親たちに、どう言つて詫言ひたらい、か……

だが、その混乱の際に、止血したときの白い太もゝが、ちらりちらりとなやましく頭に泛んできた。

駆けつけた咲子の両親は、矢野の弁解の言葉などには、耳もかきずら狼狽して、手術室へ入つてしまつた。矢野はうちのめされたやうな氣になつて、もとの位置にうづくまつてしまつた。

「良ちゃん」

呼ばれて顔をあげると、和枝がこぼれるやうな笑顔で立つていた。縁結び地藏であんな別れかたをしたのに、そんなことはけろりと忘れてしまつたやうにしやあしやあとしてゐる。

「病院なんかへ、どんなご用？」

そう言いつゝ、矢野へよりそつてしやがみこんだ。

どうしたん良ちゃん、心配そうな顔をして、誰か病氣、と言つても、良ちゃんには元氣な姉さんだゝひとり……」

和枝の饒舌に矢野はますます氣が重くなつてきた

「どうしたの？」

「事故をおこしたのです」

「誰か、ひいたん？」

「うん」

手術室から聞えてくる金属の響に、矢野は心臓へ錐をもみこまれるやうに感じた。

「誰をひいたん？」

「咲子さんです」

「まあ、咲子さん、咲子さんのどこ……」

（48）



「足……」

「足を、それで良ちゃん、そんな深刻な顔をしてんのやね、あたし咲子さんが羨しい……あたしがひいてはしかつた、そうして不具者にしてはしかつた」

「からかわないで下さい、早く帰つて下さい」

「ふうん、たんと心配してあげて下さい、咲子さん、きつとお喜びになるわ」

和枝は、つんと赤い唇をとがらせて、真直な廊下を胸をそらせて悠々として行つてしまつた。

寢台車に乗せられた咲子が青い顔をして出てきた。

「咲子さん、すみません」

矢野は飛びあがるようにして、寢台車へ近づこうとした。

「君、よつちやいかん、早く帰たまえ」  
咲子の父に制せられて、矢野は悲愴な面持で、病室へ運ばれる寢台車を見送つた。

膝下切斷、咲子は重傷だつた、矢野は過失の重責に懊悩の日を送つた、この過失への償い……そうだ、咲子と一生をとともにすることだ。それだけが自分で果せる咲子への唯一の償だと思つた。けれど、一度として病室への見舞も許されない現実面につきあたつて、矢野の苦悩はますます深まるばかりであつた。それでも勇を鼓して、結婚を申込んだが、

「雲助のような仕事をしている男になんか大事な娘はやれぬ」

とにべもなくはねつけられてしまつて、矢野は失意のどん底へつきおとされ、自暴自棄におち、酒にひたる日を送つていた。そんなとき召集をうけ、失態の傷手と失望の苦悩から逃避する機会が訪れてきた。

「よし、戦死してきてやる死ねば、凡てが終りだ」

矢野は心のなかで叫んだ

## 昔の女

正蓮寺川に暮色がひたひたとよせてきた。和枝の手から逃れること、それと同時に咲子の所在を知ることそれが現在の矢野に課せられた重大の用件であつた。露骨に淫猥の乱れを見せる和枝の前に、矢野はちつと考えこんだ。

「なにを考へてはるねん。飲んでおくれやす。酔うた挙句に、浮氣はその日の出来心でねえ……」

とろりとした眼で、和枝は矢野をみつめながら言つた。

「そうだ。思いつきり飲んで酔うてやれ。酔うた元氣で、和枝をつるしあげても咲子の所をつきとめてやる」矢野はとつさにその腹をくづつた。

「ぢやあ、遠慮なくいたゞきますよ」

手酌でくびりぐびりと盃を傾けた。

「良ちゃん、いける口やなさあ飲んで……」

和枝は何うような体をぐんなりと、矢野の膝へ投げ





かけて銚子をとりあげた。

「うれしいわ良ちゃん。あんたに抱いてもろうて、あたし幸福やわ。とうとう咲子さんに勝った。これまで負けてばかりいて口惜しかつたけれど、これで満足やわ。もうあたしのそばを離れんといて」

ぐうつと体を大きくねぢまげて、煽情的な媚態をつくつた。

「あたし、いまの男と別れて、良ちゃんのえゝ奥さんになるねん……村にいた頃は咲子さんに負けてばかりいたけれど、大阪へ来てからは芽が出たんや。二人とも酒場のマダム、立場は同じでも、あたしにや、良ちゃんという立派な旦那さまがでけたし



## 猫奇犯罪

### 新妻の告白

「えゝ、その夜はすつかり疲れきつていました。壁の中から働き通しで、足も何も棒のようになっていました。寝に就

……」

和枝は問はず語りに、自分と咲子の生活の実態を言つた。そんな言葉は矢野の耳になにか泥を吐いたような感じがした。それには咲子がバアのマダムなんかしているという、衝撃が大きな原因となつていた。

自分の膝にしなだれかゝつて、浮氣はそこの日の出来心なんてうそぶいているこの和枝と、五十歩、百歩の生活をしているだろう咲子……矢野は胸に抱いていた純情をふみにじられてしまつたように思い、むかむかと腹が立つてきた。

矢野が自制を捨て、飲む酒は、明日からの仕事も、咲子への思慕も、和枝への警戒

きましたのは十二時半を過ぎていたと思ひます。良人は毎日一日置きに社へ宿直していましたが、良人の不在の日は大抵私一人で休むことにしていました。ですけれど、その夜は余り遅くなつたしそれにあとかたづけが面倒なので二階へお炬燵を入れて、その周囲に輪のようになつて休みました。横になると、直ぐ私はもう何も忘れて寝入つてしまいました。それこそ、とろけてしまつたように眠つたのでございます。とそのうちに私は何んとも言えない恍惚としたものが全身を包んだような氣持になりました。まるで夢の国でも飛び歩いてでもいるかと思われる程でした。

とそれがだん／＼はつきりと私に解つて参りました。それは私共下級給料生活者が、最も楽しいこととしてゐるものでございました。私は良人の腕に抱かれて

心もざらりと忘れさせてしまつた。

「良ちゃん、そんなに飲んでもいいのん。酔つたらつては、あとに残した喜びがとんでしまふわ」

こんどは和枝が肩をひそめて、矢野の顔をのぞきこんだ。

「大丈夫ですよ」

あやしくなつた呂律、それでもなお矢野は盃を離さなかつた。

ぐでんぐでんに酔つて和枝の肩にぶらさがるようにして正蓮寺川沿いの家を出たときには、もう夏の永い日も暮れてしまつてぶざまな恰好で歩いていても世間体をはばかり必要はなかつた。

「和枝さん、や約束ですよ。咲子さんの家へ案内して下さいよ」

和枝と同じように爛れた生活をしているだろう咲子だと思つたが、酒に酔えば酔うでやはり逢いたかつた。

「まだ咲子さんに逢いとうおますの。あたしで、たんのうしたんじやない」

「僕は逢いたいですよ。不具者にしたお詫びだけ言いたいです。それからだつたら和枝さんの指図どおりどこまでへも行きますよ」

矢野は歌々見のように言つた。

「やだけれど、連れて行つたげまつさ」

電車道沿いの舗道を、和枝の肩に助けられて、矢野はよろよろと歩いた。

「こゝへ入りましょ」

「酒場リベラルか……」

矢野は醉眼をあげて赤いネオンをみつめつゝ言つた。

「さあ、はよ……」

矢野は肩でぐいつとドアを押して、和枝と足をもつらせながら、よろよるとなかへ

入つた。

「あらつツ」

と叫んで、和枝がなにかに驚いて逃げよるとするのを、矢野は力強くぐいつと抱きよせ和枝さん、こゝこの場になつて逃げようなんて殺生ですよ。二世を契つた男を見捨てるような薄情なこと……」

呂律のまわらぬ口調とともに、和枝にからみついた。それでも和枝は、その手をはらいのけて、ばつと表へ飛び出してしまつた。

「か、和枝さん……」

よろよると表へ出ようとする肩を、ぐいつとつかれた。

「誰だ。邪魔するなッ」

矢野はうるさそうにその手をはらいのけた。

「おいッ、若いの、ちよつと外まで顔をかしてんか……」

ふり返ると、アロハシャツの男が立つていた。

「なんだい君は……」

「なんでもいゝよ。外へ出ろ……」

どんと肩を突かれて、矢野は廻轉ドアを押して前の舗道へ轉げ出た。

「おいッ若いの、和枝をどうしようとするんだい」

矢野は起きあがりながら

「君は誰だ。なぜ、僕へ対して暴力をふるうんだ」

「わしは和枝の亭主だ……しやれくせえ眞似をしやがるな」

「僕はなにもしないよ。文句を言われるすじはない」

酔うた勢で、矢野はアロハへたち向つた。



観喜でいつぱいになつていました。

たゞもうわけもなく泣いてしまいたい  
ような氣持でございましたと、突然、私  
は私の眼を疑うような事件にぶつかつた  
のでございます。

私の眼の前に、あの憎い男の顔が見え  
るではございませんか。私は夢の中であ  
る憎い男を良人だと思つていたのでござ  
います。

### 傘で撲られた男

雨上りの盛り場の裏通りを彼女は歩い  
ていた。

夜の十時過ぎである。常と運つて人通  
りも少いので、頼りないこと夥しい。し  
かし生活のためには何とも致し方がなか  
つた、毎日正午頃に çık かけて十二時には  
じめて解放されるのである。

彼女は勿論好きで、この職業につ

「言うな。ネタはあがつてゐるんだ。この  
野郎、しやれた眞似をしやがつて……」

いきなりあごへ食つたアッパーカーットに  
矢野はくたくたと舗道にのびてしまつた。

「まあ、あんた、良ちゃんをこんなむごい  
目に逢わさんでもよいのに……」

どこからか和枝が出てきて、とりなし顔  
に言つたが、矢野はもう和枝の方なんか見  
なかつた。

「おいッ、若いのん、これから和枝にちよ  
つかいしてみろ、こんどは命をもらうぜ。

よう覚えてけつけれ……」

と、男は凄味をきかせて言つてから

「和枝、なにをばやつとしてんのや、はよ

いた訳ではない。戦災で一家が離散して  
以來、生きる方便に選んだのであつた。

しかし時によると泣きたいような氣持  
になることもあつた。

彼女の相手とする人達といえは大抵飲  
んだくれか、酔つばらいである。しかも  
低級な趣味の人ばかりである。しかし彼  
女は考えるのであつた。

「あの人達が悪いのではない。戦争だわ  
あの戦争のせいだわ」彼女がこゝ迄考え  
た時のことである。通りがかりに、いき  
なり彼女の手を握つた男があつた。

彼女は突如にはつとした。と同時に持  
つていた傘を振り降していた。

「何をしてんのさ、助平！」

と件の男はオ辞儀一ツして走り去つて  
行つた。四十五六の酔つばらいであつ  
た。

彼女は腹を抱えて笑つた。快活に笑つ  
た。

帰ろう」

と、手のひらを返したような猫撫声を出  
した。男に肩を抱かれて暮れた舗道を去つ  
て行く女の後姿が、闇に消えるまで、矢野  
は舗道にのびたまゝで見送つた。

頭のなかに去來するものは、和枝ととも  
に過した、たゞれた交渉であつた。咲子に

逢いたいために、易々と和枝の口に隔らさ  
れたのが大きな悔となつた。だが、所詮、  
逢つたとて、和枝と同じ生活をしてゐるだ  
らう咲子のことを思うと、もはや、逢いた  
い意志は鈍つてしまつた。

矢野は必らず咲子が待つていてくれると  
いう、思いあまつた甘い観念に苦笑しなが

らゆつくりと起きあがつた。

リベラルから、華やかな曲が流れ出てき  
た。それに追いついてられるように、矢野は  
千鳥橋の方へ足を向けた。

「矢野さん」

ぎくつとして振り返ると、そこには地味  
なドレスを着た咲子が、リベラルのネオン  
を背に立つていた。

「うゝむ」

矢野は唖つて立ちどまつた。あられもな  
い醜態をさらけ出した恥辱の念がぐつとこ  
みあげてきて、咲子とまともから顔を合せ  
ることのできない苦痛を感じ、こ  
のまゝで逃げようと思つた。

「待つて矢野さん」

金具の音が、舗道にかちかちと  
鳴つて追いつけたとき、矢野は、  
はつとして立ちどまつた。

義足の金具の音、詫びなければ  
ならない：そう氣づいて、矢野が  
くるりと向きをかえると、その胸

へ咲子が倒れる様に凭れてきた。

「矢野さん、待つたわ。五年も」

「えゝッ」

と言いつゝ、街燈に照らされて  
いる、咲子の白い顔を、まじまじ  
とみつめた。

「あなたを待つたために、どれほど  
苦勞したか、でも、待つた甲斐が  
あつたわ」

矢野の胸に顔をうづめて、咲子  
は肩をふるわせて嗚咽した。

「しかし、僕は和枝さんと……」

旅館での赤い柄のふとんが、矢  
野の頭へまざまざと懸えつてきた。

「いゝの、悪夢なのよ」

矢野は氣でも狂つたように激しく咲子の  
肩を抱いた。

「咲子さん、あなたを不具者にして、すみ  
ません」

矢野はいたわるように、そつと義足の金  
具を見おろした。

「そんなこと、言つちやいや、さあ、家へ  
帰りましょう。もうどこへも行かずに、家  
にいてゝね」

矢野は咲子の肩を抱いて引き返した。帰  
つて来たリベラルからは、グノーのセレナ  
ードの曲が流れ出ていた。





# 色街のお針子たち

曾根三太郎



鈴木三子

- 一、破れていたズロース……
- 二、ととさん……
- 三、二號さん……
- 四、色街の女たち……
- 五、喪服の寸法……

嘘を言うたかてあかん、昨日買ったばかりのズロースやから見えるわけあらへん……

小柄で色の白い、腰のすんなりした娘で、うつむいていと、細いうなじが……

二十四というのに青白い肌、病身そうな瘦方で、女らしい腰や胸の盛り上りもなく……

あの姐さん綺麗な人やなあ、今日いつたら旦那さんと一緒に……

夜業がすむと、皆よく近所のおでんやへ行つた……

## 一 破れていたズロース

日向でからからに干し上げたせんぶりが、げんのしようこみみたいな、味もそつけもなさそうな女、それが朝子さんの継母だった。黒目がきついやうなつるな様な、一種妖しげな動きと光りを持つてゐる、それは狂信者特有のものだ。その四十過ぎ位の継母は、さつきから得意そうに一人で喋つてゐるのである。

「あの子は馬鹿ですよ本当に、私の言う事を聞いていたら、死なずにいたのにね、神様のお告げで、私の甥と結婚せんと死んでしまふと言つてやつても、あの子は頭から信用しなかつたのだから、——」

店先にいる七人程のお針子達は、嫌な顔を見合せていた。朝子さんの死んだ事を知らせに來ての継母の話が、神がかりなのでケイベツしてゐるのだ。生きていた時の彼女の事が自から皆の頭に浮ぶ。

それは今でも笑の種になつてゐる事だが朝子さんは奥の間で丹前に綿を入れていた洋服を着ていた彼女は膝をひらいた中腰で綿をのばしてゐた。ところがこちらから皆が——見えたある見えたある。

とゲラ／＼笑うのである。毎日仕事に退屈すると、冗談を言いあふ事は珍らしくないので、朝子さんは又始まつた位に思つて「嘘言うたかてあかん、昨日買ったばかりのズロースやから見えるわけあらへん」とすまして、膝を直さずにゐるので又皆



が笑い轉げた。あまり笑い方が眞に迫つて  
いるので、不安になつた朝子さんは、ひよ  
いと自分の前をのぞいてみて、

「うわあ——えらいこつちや」

あわてふためいて、二階へとんで上り、  
暫らく下りてこなかつた。その慌てようが  
又こつちいだと、涙をためて笑う娘もあつ  
た。

こんな事があるから、新しいズロースは  
いても威張つてたらいかと、時々行儀の  
悪い娘をたしなめる例にされていた。

五尺三寸もありそうな大柄で骨太、色黒  
くどんぐり目で、ひつつけ髪にして、都会  
育ちとは思えぬ野暮つたい娘だつた。体が  
弱いから結婚出来ないと言つていたが、外  
見は頑丈そうなので、知らない人は本當に  
出来ないのだが、月のものがおくれがちで  
目まいがする、頭が重いか、慢性的の腹膜  
で腹が張るとか、いつも薬を飲んでいた。  
外見のわりに氣の小さいのも、病弱のせ  
いだつたのか、ある時針をふんで、自分で  
はかなり深く足の裏に刺つたと思つたらし  
い。仰天した彼女は氣もてんとうして、

「釘抜き——早よう——」

と連呼して、皆を慌てさせたが、手であ  
つさりぬけて、血も大して出ず、朝子さん  
の大げさなのに呆れたと、そんな事まで今  
更の様に思い出されるのである。

繼母と氣があわぬので住込みで習いに來  
ていた。

「お母ちゃん、うち兄ちゃんと一しよにな  
るから助けて、死にとうない死にとうない」  
と息を引く前まで泣いていたそうなの、そ

んな事を繼母は、他人の世間話の様に細い  
妖しい目を光らせ乍ら、熱心に言つていた  
が、その話の中心は、自分の信心する神様  
が、如何にあらたかであるか、ということ  
に終始していた。

生前あんなに嫌つていた、繼母の甥と一  
しよになるから助けてくれと、泣いた朝子  
さんの生への執着が悲壯でならなかつた。

## 二、ととさん

梅さんは妙な体質をしていた。

年に二三度顔がはれて、二三日するとす  
うつとひいてしまふのである。はれた時は  
おでこがとび出して福助のような顔になつ  
てしまふ。見た事も聞いた事もない病氣な  
ので皆が氣味悪がり、お医者さんに見ても  
らう事をすすめるのだが、梅さんは頑とし  
て應ぜず、仕事も休まずに通すのである。  
ねる程悪い事はなく、自分でもわけが分ら  
ず、ずつと前からだと慣れつこになつて平  
氣だつた。

小柄で色の白い、腰のすんなりした娘で  
うつむいてみると、細い白いうなぎが、頭  
の重みに垂れているような、なややかな感  
じがする。丸顔で白目がち、富士額がくつ  
きりとして、人形の様に房々とした黒髪が  
手にもちあまる位で、あまり多くて面倒臭  
いと、美しい眉をひそめる事もあつた。

梅さんの生国は四国で父の事をととさん  
といつていた。かかさんがないので、とと  
さんは梅さんを仕込む事が出来ないから、  
小学校を出ると直ぐ父娘は上阪して、彼女

は仕立屋へ住込みに入り、ととさんは天下  
茶屋に下宿した。

子供のあつた延へやつたら子守ばかりささ  
れて可哀相だと子供の無い家を探して入れ  
たのだが、お師匠さんは間もなく結婚して  
年子をもりく生んで忽ち三人の子持にな  
つてしまつたから、女中はいても時々梅さ  
んも子守を手傳わねばならなかつた。

「ととさんは阿波の十郎兵衛、かかさんは  
お弓ともう——し——ま——す」

お茶目な娘が芝居のせりふもどきになら  
かうので、

「これからお父さんというね」  
と言つたが、やつぱりとととさんになつて  
しまつて、お父さんと出てこないところばし  
た。

十七になつたのにまだ女の生理がなく、  
おぼこかつた。時々父さんが來ても何も話  
しかけないが、体中が急にしやんとした様  
に活氣をおびて、嬉しそつた。ととさ  
んは黙つて店先に座つて梅さんの針仕事を  
しているのを暫く見ていて満足そうに帰つ  
て行く。

早よう一人前になつて父さんと一しよに  
住んで針仕事をする——それが梅さんの一  
番楽しみにしている將來の目標であつた。  
「父さんだけでは淋しくて、母さんが恋し  
くなるでしよう？ 死んだの？」

こう人に尋ねられるのが梅さんは一番嫌  
だつた。父さんと母さんとは生き別れであ  
る。恋しがるべき母さんに、彼女は憎しみ  
の感情しかないのである。死別の方がまだ  
なつかしい感情のみ残つていたものを。

彼女がまだ四五才の頃であつたらうか、  
ととさんに負ふふしてもらつて町の芝居を  
見に行つたが、どうしたのかととさんは芝  
居を少し見ただけで家へ歸つた。ところが  
家では、知らない男の人とかかさんが差し  
向いで、お酒を飲み乍らいともむつまじや  
かな有様であつた。ととさんは下駄ぐち家  
へとんで上り、下駄でかかさんの頭をなく  
りつけた。

それから大変な騒ぎになり、家の前には  
村の人が一ぱいたかり、お巡りさんも出て  
來て仲裁に入る始末、その場はともかくす  
んだが、かかさんは梅さんの家から姿を消  
した。刺激が大きかつたからか、その事だ  
けが、幼い頭にはつきり残つた。

大きくなるにつれて、かかさんは隣村の  
男と一緒に暮らしていると、人の噂に聞いた  
けど、逢いたいと思わなかつた。ととさ  
んは後妻を買えば梅さんが可哀相だと、そ  
れからずつと独身を通した。だから梅さん  
はかかさんを憎み、ととさんを愛し、早く  
大きくなつて、伴にして上げたいと、幼い  
頃からそんな事ばかり思いつづけて來た。

病氣をしてねこんだ事はなかつたけれど  
やはりひよわく出來ていたのである。朝  
子さんより三年程遅れて、十九の厄に、も  
う仕事も一人前になつて、父さんと一しよ  
に暮せるのも直ぐだというのに、ろく膜を  
病んで、病院で死んだ。

小さい骨箱を抱えて、お師匠さんに別れ  
を告げに來たととさんは、にこ／＼してい  
たけれど、その裏に秘められた淋しさは、  
恐らく何に例えようもない寂寥としたもの



であつたらう。

「田舎へ帰ります」と顔だけは笑つていた梅さんのいなくなつた大阪に何を楽しみに働いて居られよう。己が故郷に老の孤独を養いに行くのであろう。梅さんを入れた墓に、ととさん案外早く入つてゆくのではなからうか。

瀬戸内海を今治へ向うデッキの上で、果しない空と海の廣さに、人生の涙の味をかみしめていたに違いない。娘の骨箱を抱えて、海へとびこんでしまわなかつたらうか

### 三二一 幸子さん

二十四というのに青白い肌、病身そりな瘦方で、女らしい腰や胸の盛り上りもなく男の様にのつべりしている。やゝ前こごみになつて歩くのも年寄臭く、臉のふちが黒ずんで、大きい黒目、頭の真中に大きな禿があつて、時々髪をすけて見える。かくすのに本人は相当苦勞をしているだらう。禿の大きさは幸子さんの水商賣の過去の長さと比例する。ここの仕立屋では女で煙草を吸う人はない。たつた一人の男である旦那さんだけである。幸子さんはここへ來始めた当時煙草も吸わず神妙であつたが、二三日すると茶の間で煙草を吸つている旦那さんを切なそうに眺めて、――あゝ煙草吸いたいなあ――と獨り言を言つた。隣りに座つていた光子さんが、

「あんた、煙草吸うの？」

「ここの人誰も吸いはらへんから遠慮しているねんけど、人の吸うてるのを見るとたま

らんわ」

と言つていたが、翌日は台所のすまつこで、かくれて煙草を吸つていた。馴れてくると幸子さんは單調な針仕事をし乍ら、隣の光子さんに、

「光子さん、うち子供の時から、えらい苦勞したのやで、うちの身の上聞いて呉れる？」

まだ十八の光子さんには知る由もない社会の事を話して呉れた。

幸子さんは縮緬で有名な長浜の生れで、家が貧乏だつたから、学校の成績はよかつたのに、女学校へ入れてもらえなかつた。勉強好きの彼女はとても悲しかつた。小学校を出ると直ぐ藝者の仕込みに出された。それからが苦しい辛い修業であつた。

雪の降る寒中物干しで三味線や唄のけいこをさされた。抱えのお母はんは

氣短かで手荒い人だつた。彼女が三味線のパチでぶたれた傷跡を光子さんに見せた。光子さんは小説でしかない社会の出来事が珍らしい様な不思議な様な、自分らの知らない經驗をしている幸子さんが、急にずつと目上の存在に見えて來た。

そうしてそこで仕込まれている中に、辛抱強く賢いのお母はんに見込まれて、一人息子の嫁に決められた、その一人息子といふのがひどい肺病でその上頭もあまりよくなかつた、幸子さんはそつとして、夜中

に逃げ出した。

彼女の父母は仲が悪くて喧嘩の絶え間がなく別居生活をしていた。姉二人は仲居をしていた。藝妓屋を逃げ出した彼女は飛田に身を賣つた。その間色々入りくんだ事情があつたと思われるが、倅でなかつた事だけは確かである。目のふちの隅も頭の禿の大きさも過去を聞けば成程と思われる。

然し運のよい事に、勤めに出て間もなく始めての客になつた人から身の上を同情され、身受けされた。今では大阪市内に一軒家を持つて困われ者である。

光子さんが後に彼女の家に遊びにいつて



三太郎

その旦那とかいう人に会つた。相当年配の禿茶びんでじやが芋見たいな顔、話し振りは優しく理解がありそうだが、光子の年頃ではこんな親か祖父みたいなのと一緒にする事なんか氣持が悪く、よい世話女房振りを見せる幸子さんの性格を不思議に思つた。

紙工業の方面で顔が賣れており、大きな工場を持つていて人である事は、後で光子が家出をして幸子さんの二階に世話になる様になつてから分つた。

幸子さんの存在は本妻も認めており、男の來ない日はいつも陰膳を供えていた。い



くら本妻が認めていても二号夫人などはあまり芳しくない存在で、その爲かどうか、「うちには廢物見たいなもんや」と冗談交りに言つた事もある。

## 四 色街の女たち

ここの仕立屋は千日前の裏手坂町の近くにあるので、出入りするお客は玄人筋であつた。お師匠さんもこの町の育ちなので、三味線や踊を知つており、着こなしも意氣めいていた。光子さんが自前藝者のうちへ出来上つた品物を納めて歸つて來ての話が「あの姐さん綺麗な人やなあ、今日いつたら旦那さんと一しよにまだ寢てたらしいねん、浴衣の寝巻のまゝ、右手でかんざし持つて、つぶし島田の根をかき乍ら出て來はつてん。その姿のよかつたこと、うつとり——となつてしもうた、男の人夢中にならはるの無理ないと思うわ。——もう出来ましたの、えらう早うおましたな、おほきにそこへおいといとくなはれ——て甘つたるい声や、あの人顔だけやあらへん、氣もええ人やな」

光子さんはこの藝者の家へ着物を持つて行くのを喜んでゐた。

皆が嫌がるのは坂町の女郎屋へ行く事である。これも光子さんの話であるが、歸つて來てプリ／＼怒つてゐた。

「——今日は——いうて入つたら、二階からお女郎さん下りて來たのに、知らん顔して返事もせえへん、えらうな顔してつんとしてゐるねん。お女郎がどんなにえらいつ

もりやねん、しやくにさわる」

「それはな、うちらこないだあんな事したやろ、その仇討された思うてあきらめとき」

あんな事というのは、夏になると体がだるいので正午に一時間休憩する。その時四五人連れ立つて、道頓堀へ行くつもりで坂町を通つていたら、

「一寸兄さん、遊んでいきなはれ」

若い男が呼ばれてゐた。こちらは娘ばかりの物好きで、晝でもやつてんねんなあ、と四ッ角に立ち止つて、

「あの男の人、入るやろか、入らへんやろか」

と様子を見てゐた。その男の人は迷つてゐたが、おほこい人だつたのだから、返りをうろ／＼眺めて、四五人の娘の好奇な目を見付け、顔を赤らめて、こそ／＼立ち去つたので引つ子のおぼはんは恐い顔してにらまれた。

「わては本綿物より着まへんねん」

といつてよく仕立物を持つてくる藝者上りの二号さん、この近くのおでんやの二階にいる、炊事もした事がない。食事は外で毎日ブラ／＼しいいて、ふだんにも黒紋付の羽織を引つかけてゐる。労働を知らない罰当り女。

或日仕立物をとりに來て、フトコロから財布を出す途端に、いかゞわしい写真を庭におとしてしまつた。プロマイド型のそれにも上むきに、品物を渡しに出ていた春子さんは、何げなく見て、はつとしてしまつた

あわて、女は拾い上げたが、春子さんは一日中胸がどき／＼して、頭がぼろとした。皆がどんな写真やつたと、やいの／＼と尋ねたけれど、一人顔を赤らめて、

「変な写真や、どんなんで、口に出してよる言わん」

と皆の氣をもました。

## 五 喪服の寸法

おかしいのは四國から出て來たとみえさん、台所からとび出して來て、

「ひやあ——たまげた」

「たまげたいうたら何の事」

「たまげたいうたら、たまげた事や」

「なんでたまげたの？」

「猫が不意にとび出して來よつてん」

時々変な言葉を使うので、皆が笑うと、

「大阪の言葉の方が面白いわ、何でもさんつけて、お芋さんやなんて、芋にお、やらさん、やらつけて、人間みたいに、芋は芋でええやんか」

成程そうかも知れない。

このときみえさんが、喪服の寸法を聞きにやらされた。喪服とはどんなものかはつきり知らないときみえさんは、忘れない様に、

モフク、モフク、と口の中で言い乍ら、歩いてゐた。日本一の交叉点で、こゝは危いとこや氣付けなあかと思ひ乍ら、渡つた

處、モフクを忘れてしまつた。聞きに帰ろふかと思つたが、向うへ行く迄には思ひ出すだらうと、考え考え行つたが、とう／＼家の前迄來ても思ひ出せず、何とかなるだ

らうと入つて、「礼服の寸法を聞きに來ました」と言つた。

夜業がすむと、皆よく近所のおでんやへ行つた。このおでんやのおやぢさんが面白い人で、皆に人氣があつた。

「この徳利みてみ」

と徳利を轉がす。

「徳利はころがしたら、ねたま／＼よう起きへん、ここらには贅沢して、ブラ／＼遊んで暮してゐる女が沢山いるけどな、この女らは徳利と一しよや、一生浮ぶ頼あらへん。

それに比べてあんたらは、眞面目に仕事を習つていたら、今にどんな出世でも出来る

体や、こゝらの女見習うたらいかんで、一生懸命働きや」

と身振りおかしく教えてくれて、おでんを負けてくれる。

「おつちやん、そんな人あるよつてもうけるのと違ふ？」

「ほんまにそうや」

と笑いくづれる、氣のよいおやぢさんである。

小さい針仕事をする女達ではあるけれどその一人一人が、種々難多な過去や運命を持つてゐる。この女達に纏われた着物を着る人も、誰も知らない、小説よりも奇な運命をたどつてゐるかも知れない。

(完)





たつた一回のバーゼで十万円  
支拂わされた男の話

# 10万円の 雄竜山神



雄竜山神

千円札一枚で大抵の商賣女なら自由になる御時世に、たつた一回の接吻に拾万円の代償を拂わされたなんて――

「馬鹿々々しくつて話にもならない」と前置きして、暮会所で知り合つた七宝焼販賣会社の社員坂東君が語つた話は――

其の日、僕は下宿に帰るべく電車の停留所まできて、ふつと大変な忘れものをしたことに気がついてどきりとした。

陳列棚に飾つてある高價な七宝焼の花瓶を、金庫にしまい忘れてしまつたのだ。精巧な技術の粹をあつめて特別に培えたその花瓶は、海外からのバイヤーに見せる見本なのだが、時價三万円はきれない高級品だつた。

花瓶にもしものことがあつたら……給仕から叩きあげた十七年の努力がいつべんに吹っ飛んでしまふ……氣が付いてよかつた僕はすぐ会社へ引き返した。

固いことでは定評のある僕が、こんな大きき忘れものをしかつたのにはちよつとした理由があつた。前にも云つた通り給仕から出納係という今日の地位まで昇進して來た僕は、学校出の社員達に較べ給料も安かつたし、万事が地味で風采も甚だあがらなかつたので三十になる今日まで僕を問題にしてくるような女の子には一人も

逢わなかつた。

大体僕は生來の節約家で、コーヒも飲まなければ映画館を覗くこともせず、たゞこつ／＼と貯金をするだけだが唯一無二の楽しみといつたような男なので、若い女から好かれる筈もなかつた。同僚が女を連れてハイキングに出掛けたリ温泉へ泊りがけで行つたりするのを、内心ではたまらなく羨しく思いながら、いつそ女友達なんかいない方が金が貯ると自ら慰めたりしていた。

――そんなわけで、同僚達が借金や税金に苦しめられている最中にも、僕の銀行預金は十萬を少々越している位にまでなつてゐる。

ところが――最近僕の抑えに抑えた青春の血を湧かせるような、僕にとつては驚天動地の大事件が起つてしまつたのだ。

或る土曜日……在庫品の調査に手間取つて夕方やつと仕事から解放され、一風呂浴びようと小使が毎日たてゝくれる会社の浴場に一歩足を入れた途端、僕は思わずその場に立ちすくんでしまつた。

小使夫婦の他は誰一人おるまいと思つたのに、脱衣場の片隅に明らかに若い女のものとされる目の覚めるような紅いスカート、濃い紺のセーターが脱ぎ捨てゝあるではないか。

女には人一倍臆病な僕は、そのまゝ引き返そうと思つたが、汚れ

た体の氣持悪さに（え、まゝよ！）と度胸を決めてガラス戸をあけた。

もう／＼とあがる湯氣の中で「あらッ」と叫んだのは、正しく若い女の声だつた。

「やあ失礼」

照れ臭さを隠しながら湯につかつてじつと見ると、女は先月入社したばかりの庶務課の新藤富子だつた。

「新藤さんかい、悪かつたね」

「びつくりしたわ。あなた坂東さんでしやう。……でもよかつたわ。あなたお一人で……皆さんいらつしやつたらどうしやうかと思つたわ」

口ではそう云いながら案外平氣な顔をしている。

「遅いんだね」

「え、ちよつと……坂東さんこそ遅いわね」

慣れ／＼しい相手の口調に、急に親しみが湧いてきた。

「うん、僕もちよつと……ほんとに君が一人でお風呂に入るのを毎日狙つていたのさ」

「まあ……あきれた目的達成という訳ね」

富子はちよつと睨む眞似をしてみせた。少しすが目なのが、かえつて僕の心をそ／＼とくにおかない魅力があつた。

湯が澄んでいるので、目が慣れてくるとすぐ目の前にある富子の



雪のように白い肩の線は勿論、むつちりした太股の盛りあがり、儼然でも目に入ってくるのだ。僕は思わず「クン」と生唾を呑みこみ、他に誰もいない気安さでまじく胸の隆起を見つめた。

「見ちゃ駄目！」

富子は僕の視線を感じると、くるとすねたように背中をこちらにみせた。湯に濡れた若い女の肌は、玉のようにすべ／＼していて、そつとする程妖しい魅力を感じて……

「まあまだ見ていらつしやるの厭な方」

富子はいきなり立ち上ると、言葉とは反対にゆつくりみせびらかすように僕の視野から消えていった。なだらかに盛りあがった腹部から臀部にかけての雪の塊のようにな美しいきめを見せた肌がいつまでも僕の網膜に灼きついたように離れなかった。

## 二

——それ以来、俄かに新藤富子のことが頭にこびりついて片時も忘れられず寝ても覚めて、彼女の白い肉体が目先にちらついてじつとしていられないような氣持に責められた。几帳面な僕が物忘れしたのも偶然ではないのだ。

裏木戸から会社の建物に入つた時は、もううす暗かつた。自分の部屋の扉をあけた瞬間、陳列棚のあたりに人影を発見してぎよつとした。

「誰？そこにいるのは」

低く叫びながら、右手で廊下にある電燈のスイッチをばちりとひねつた。明るい電燈の光にさつと照らしだされた人影は、まごころともなく新藤富子ではないか。

花瓶を入れた陳列棚のガラス戸が内側から四五寸開けかけてあるのを僕はめざとくみつけた。

富子は不意の闖入者が僕だとわかると、化石のように動かなかつた体を色づぼく／＼ねらせてにつこりと笑つた。僕は引き寄せられるように二、三步近づいていった。

「ごめんなさい。坂東さん」

鼻にかゝつた甘えた声で——流石に消え入るように言ふと、水晶のように美しい／＼な目を惜しげもなくさらけ出して差しうつむいた富子がこの部屋に忍び込んだ目的は、一見して明瞭だつた。

「新藤さん困るね……」

僕は努めて威厳を作りながら、横へ廻つてむさぼる／＼に富子の盛り上つた胸のふくらみを眺めた（この女は、これで俺の自由になる）

弱点を掴んだ絶対の優越感、きよつと胸をしめつけられる／＼な昂奮を感じないではいられなかつた。

「新藤さん心配せんでもいゝよ」

僕はそう云いながらいきなり富子の盛り上つた胸をぎよつと抱きしめた。生れて初めて抱いた軟らかな女の触感！つゝんと氣が遠く

なるように……次の瞬間、僕は富子の豊かな臀部に自分の体を力いっぱい密着させていた。

「なにをするんです！」

富子は叫びながらも激しくもがいた。

——予期しない反抗に、急に力が抜けたように僕は女を離れた。

「ごめんなさいね。又ね……」

富子にはつこりして、落ちついた足取りで廊下を歩いていった。僕は見果てぬ夢を女のまぶ／＼しい触感に追いつながら、放心したようにその場にいつまでも立つていた。

× ×

翌日から僕は、富子と二人きりになる機会をじつと狙つていたが、富子は何故か僕を避ける様子で廊下で逢つても顔をそ向けてつんとしていった。

僕は内心いら／＼しだした。富子が経済的に困つてゐるのなら助けてやつてもいいとさえ考え初めた。助けるどころか、場合によつては虎の子のような貯金通帳をすつかり投げだしても悔いなしとさえ思つた。

或る日、僕は苦肉の策を弄して給仕に呼び出しの手紙を持たせてやつた。

晝休みになると、僕は胸躍らせて倉庫の内側に身を潜ませて富子等待つた。勿

論貯金通帳をふところにして……

仕事の関係で倉庫の鍵が自由になるところから、富子を倉庫の裏側出口におびき出したのだ。

めつたに人の通らない倉庫の裏側に足音が聞え、赤いスカートが戸の隙間からチラするのをみつけると、思わず胸がドキ／＼しだした。

（相手の出方によつては今日こそ……）僕は舌なめづりする思いで「新藤さん！」と小声で呼んだ。

うす暗い倉庫の中へ悪びれずに入つてきた富子は、僕が中から鍵を掛けても別に驚く風はなかつた……もう誰からも邪魔されない……これ以上又とない條件があらうか。

……

「僕……折り入つて話があるんだよ」

いきなり富子の手をぎよつと握りしめた。富子が拒まないのを確かめると、僕は最初の計画通り倉庫の隅の一番暗いところへ連れてゆき、用意しておいた木製の椅子に腰を下すと富子の弾力のある腰に手を廻して膝の上に抱きあげてしまつた。

「まあ」

富子はそう云いながら、僕のすゑがま／＼にさせている。若い女のどつしりした量感が膝を快く、くすぐり、艶々とした髪の毛の匂いがむ／＼とむせる／＼に鼻を刺して、僕はかつと頭へ血ののぼる／＼ような昂奮に全身が慄えた。

「君、お金が欲しかつたんだらう？お金なら心配ないよ。ほら僕はこんなに貯金があるんだからね」うわ／＼と声で云いながら、僕は貯金通帳を掲げてみせ、用意した懐中電燈で文字を照らした。

富子の腕はいつの間にか蛇のように僕の首に巻きつけられていたが通帳に記されてある莫大な金額には些か吃驚した。

吃驚した。……





「まあ阪東さんでお金持ね、あたしすつかり嬉しくなつちやづたわ」

富子は通帳を——もうまるでそれが自分のものでもあるかの様に胸に抱いて、頬をそつと僕のあごにくつつけてきた。

「まあ、くすぐつたいたら」  
富子は含み笑いしながら、わざと大袈裟に身をよじらせた。

### 三

富子を外へ出してやると、僕はもう一度椅子に戻つて「ふーっ」と大きく溜息をついた。

今日こそ、我が生涯最良の日！  
あつ、女つて何て素晴らしい存在であろう。後味を樂しむことも、のゝ三十分余り。漸く腰をあげた……その時はつと氣がついた。

富子にみせた通帳は？……懐中電燈を光らせてあたりを夢中になつて探し廻つたが、紙片一つ見つけることは出来なかつた。

富子が持つていつたに相違ない……。 (まあ、いや、印鑑はちやんと……) チョッキのボケト手をやつた時、僕はガク然とし

ないではいられなかつた。

「なのだ！ 確かに入れておいた筈の印鑑が影も形もないのである。僕は顔面蒼白になつて事務室に引き返し、机の抽斗という抽斗を片つ端から引つ掻き廻したが、遂に発見出来なかつた。」

僕が富子を抱いてうつとりしている間に、あいつ素早くチョッキから印鑑を抜きとつたに相違ない。なんて素早い奴！ 血相交えて富子の部屋に行つてみると、給仕が「頭が痛いつて先程お帰りになりました」と不思議そうな顔をして僕の顔をみつめた——。

「全く馬鹿な話さ、馬鹿々々しくつてお話にならない。十七年汗水流して貯めた貯金を一瞬にして失つてしまつたんだからね。富子はどうしたつて？ 勿論銀行から金を引きだしてそのまゝどろんさ——僕が銀行へ駆けつけた時はもう後の祭だつたよ」

坂東君は吐き捨てるように云つて、黒い顔を一層醜くゆがめた。  
(終り)

昭和三年、政代が結婚した最

初の夏であつた。彼女は妊娠七ヶ月の身重で、初めて知る苦しさであつたが、簡單服をきるとみつともないので、いつも浴衣をきて、サロネブロンをしていたが、もう隠そうとしても、

誰の目にもハッキリしていた。

しかし、隠していることが一つあつた。それは喫煙である。ツワリの最中におぼえた悪習であつたが、夫にも内密ですつていた。今でこそ婦人の喫煙は何でもないが、当時は隠者とか女

## エロめかね

### 好色一代男

「今日は君の大好物へ案内しよう」

「ちよつと待つて呉れ、あいにくと女房を連れてくるんだ」

「奥様と一緒にだつて構わないさ  
天婦羅ぐらい」  
「ちえッ、女じやないのか」

### 虚々実々

「あなた、この前の嫌がついていらつしやつたお見合どうだつたの？」  
「替玉を頼んでおいたわ」

「それで、うまく行つて？」  
「うん、うまく行き過ぎて纏つ

たらしいわ」

「そりやあ、大変じやないの」  
「うん、先方も替玉だつたの」

### 近道

「あなたも長い間、あこがれていらつしやつた洋館のあるお家にお住みになれて、本当に結構ですわね。御主人も御出世遊ばしたわけですわね」

「いゝえ、あの前の主人とは別れましたの」

### 出張

奥様「ねえお前妻が実家へ行つている留守の間に、旦那様の御寢間に入つたことはないだらうね」

女中「えゝ、一度もありませんわだつて、何時も旦那様が妾のお部屋にお見えになりましたも

### 不可抗力

「君、いかに興奮の極に達したとは言いながら、女の舌を噛み切るとは、些か常規を逸しているじやないか」

「いや、実は接吻の最中に噎が出たんです」

### アバンモヤルト

「お目出とう、君の傑作だ入選したんだつてね。それにしても、連続選記録保持者の君が入選するなんて、今年は余ッ程頑張つたと見えるね」

「いや、それが、陳列係の奴が逆さまにかけやがつたんだ」

### これは失禮

夫「おい、うるさくて仕様がな。お隣りに行つて余りラジオをビイビイガーガー言わせない様にして下さいと頼んで来いよ」  
妻「あら、あなた、あれはお隣りの奥様よ」

政代は当時二十四才、女学校

出身で、レッキとしたサラー

マンの奥さんであつた。新婚当

時は日曜毎に、夫と外出してい

たので、近所でも羨望のマトに

なつていたが、お腹が大きくな

つてからは、そおした楽しみが

いつしなくなつていた。また

ツワリを境にして、接吻も忘れ

ていたの、彼女の喫煙が夫に

さえ知れずにいたのである。

ある日曜日のことであつた。

夫の友人が遊びにきて、将棋を

はじめたのである。政代は一人



では退屈なので、そばで二人の勝負を観戦していた。

夫も友人も勝負に夢中で、時々想い出したように、菓子鉢のビスケットをつまんだり、冷たいお茶を飲んだりしていたが、煙草もよくすった。その煙が顔にかかり、匂いが鼻を刺激すると、そばにいる政代は、たまたまなくなってきた。空腹時に馳走を見せつけられたようなもので、とうとう辛抱ができなくなつて、座を起つてしまつた。

そして、便所に入り、用を達しながら、隠れて一服やつたのである。隠れているという意識が、露見を恐れるという心配のために非常に気分を慌てさせ、煙にむせて思わず、ゴホンゴホンと咳をした。そのヒョウッシに、右手の指にはさんでいた煙草を、ウツカリ下へ落してしまつた。ハッとしたトタンに、ボツと下からもの凄いい煙が、噴火のように燃えあがり、顔にドカッと火照りを感じたのである。

あッ!と叫びながら、ビツクリして廊下へとび出し、夢中で手洗鉢の水をあけると、焰は益

々大きく、もの凄いい煙で燃えあがつてきた。これは大變!火事になるかと驚き、夫を呼ぼうとして、出かかつた声を呑み込んだ、こんなトッサの場合にも、人間の自制心の働くことがあるのだ。

政代は毎週蠟の予防のために石油乳剤を撒いていたが、今朝は石油乳剤がなかつたので、石油でもい、だらうと思ひ、二合ばかりあつたのを、全部便所へ撒いたのを、フト思ひ出し、手近にあつた座蒲團で、上から圧えつけるようにして、焰にかぶせると、難なく鎮火したのでホッとした。

しかし、便所に座蒲團が落ちていたので、後から夫にその理由を問われ、秘密にしていた喫煙がバレてしまつた。事情がわかると、夫は面白そうに笑いだし、政代の顔を指さして、眉毛がコゲてるよといつた。

鏡台を覗くと、なるほど少し茶色になり、チヂレて切れてる処もあつた。だが、皮膚に異状のないことは、幸であつた。眉毛の方は眉墨で化粧すれば、わからずにすむから、心配はなかつたのである。

つたのである。  
入浴の時、なんだか、股やお尻が少しヒリヒリするので、誰もいない処で覗こうとしたが、大きな腹がつかえて苦しいので鏡に写してみると、尻から前部へかけて、桃色に薄く腫れあがり、さわるに強い痛みがあつた。そしてここにも少し、茶色に焼き切れた毛があつた。だがこれは眉墨で化粧の必要はなかつたけれどこの日に以來政代はまた新しい秘密ができたのである。  
若い女が、そうした秘密を、一日でも早くなくそうとして、妙なカツコウで鏡を覗き込み、メンソレータムかなんかを、深刻な顔をして塗つてゐる図は、想像するだけでも、実に滑稽な風景である。夫でなくともすべての男性は、こおしたことを知らない方が、幸福ではないかと思ふ。

さて、この時政代のお腹にいた子供がもうお嫁にいく年頃になつていた。光子という十二才の娘である。彼女は人の前でも平気で煙草をすい、酒も少しだが飲むし、風呂にいつても、前を隠そうとはしない。別にパンパンでもダンサーでもな

## 艶笑コント

石田  
芳雄



## 母と娘の秘密

く、ある証券会社の事務員をしていたが、母親の娘時代と違うことは、アプレゲールということである。

アプレゲールには、化粧、服装、言語、行動等に、商賈女と素人娘の区別がなくなつていた。従つて結婚しても、夫や世間、喫煙位で秘密を持つ必要はないし、便所の悲劇も起らないであろう。

しかし、光子にも秘密はあつ

た。それはもう処女でないというのである。避妊薬のお蔭で母と一緒に風呂に入つても、それを氣づかれる心配はなかつたが、流石アプレゲールの彼女も、これだけは両親にも秘密であつた。それは性的関係を恥じるという意味ではなく、相手の男と、父と同年配位の証券会社の社長であり、結婚の相手として考えられないからであつた。

——おわり——

母と娘の二代にわたる女の秘密、それは果して何んであつたろうか?  
女は秘密を持つことに、ほのかな喜びをさえ感ずる。  
……戦前派の母と戦後派の娘の行状記





よしこの男も何かに利  
用出来るだろう。ニツ  
コリ笑うとそのまゝ全  
身の力を抜いた。

を歩いた方が歩きよい  
と言うものだ。  
バタリ、バタリ、  
草履の音だ。つるべ  
落しの秋の日は、さつ  
きまで西の空に眞赤に  
焼けた雲をとばしてい  
たのに、半時の後には  
勘十郎の草履の音を一  
足づつ背後から暗闇の  
中へ押し隠してしま  
う。小鳥の群が、暮れ  
早い秋の日をかこつよ  
うに、ねくら目指して  
飛んで行つた。

画 今 幾久藏  
原 紅太郎

# 狂艶浮寝草紙



勘十郎の草履の音だ  
女から三十間ほど遅れ  
て、いつまでも続いて  
ゆく。だが女は振り向  
きもしない。その上す  
ばらしい迅速だ。  
「いくら何んでも女の  
身だ。まさか夜をのし  
て伏見まで旅を飛ばす  
こともあるまい。さて  
——と、泊りは何処、  
淀の宿か」  
勘十郎、ツルリとア

じられる。

さつきから橋のたもとで、川下からの涼  
風にたぐんでいた筒井勘十郎は、この時  
バタリと一歩ゆるぎ出た。

美しい女は、彼にも矢張り美しかった。

「旅は道連れ世は情か……」上機嫌の鼻唄  
交りの声だ。同じ歩くのなら、美人の後

ゴを撫で下した。淀の宿が近づいたから  
だ。  
「今宵の泊りは、あの女の隣りの室と決め  
たぞ」  
だがしかし、淀の宿へ入ると、前から外

れるものはフンドシと何んとやらで、この  
女、旅籠へ入る代りに宿の四ッ角に客を待

つていた駕籠に入ってしまった。  
「行く先は京の都、一ぱしり飛ばせておく  
れ、その代り駄賃ははづむよ」  
きつぱりした姐御ぶりだ。トンと息杖が  
土に喰ると、駕籠は一さんに走り出した。

勘十郎ともあるものが、完全にノック・ア  
ウトされた形だ。

手早やく暗の中で裾を端折つたかと思う  
と無反りの一刀をグイッとこねり廻して、  
駕籠にくつついて走り出した。

「この女、ただの鼠じやないぞ、その鼠で  
ないところが、ますく拙者の氣に入つた  
ぞ」

だんく辛くなつて来た。息がハッハッ  
と烈しく胸をしめつける。

「ハッハ、この拙者をなめるなんて、ハッ  
ハ、だから一層氣に入つた訳だが、ハッハ  
フウ／＼」

ハッハがフウ／＼に変わつて来た。夜の冷  
氣にしつとりと露を含んで、道の両側にす  
だく虫の声は土をしめらす。道はいつしか  
伏見へ通じる淀川沿いの藪にかゝつてい  
た。

如何に勘十郎、腕が強いといつても、足  
は別物だ。駕籠かきの足が何処迄行つても  
同じ步調なのに反して、彼の足はだんだん  
のろくなつてくる。これではいけない、と  
勘十郎は思つた。今の中になんとかしなけ  
れば——。

「オーイ、待つた、待つた、その駕籠待つ  
た」

苦しまぎれの叫び声だ。

「お願いでござる。ひと休み致そうではご  
ざらぬか」



急ぎ足に駕籠のそばまで行つた勘十郎は、せわしい息の間からようやくこれだけ言つた。

「駕籠の中から甚だ失礼でございますが」女の声だ、リンと張りがあつて、美しい声だ。

「一寸旅を急ぎますもの、ご用ならばお早く願ひたいと存じます」

「ご、ご用と言ひのは」暗とはいへ、その美しく張つた瞳でジツと見すえられた彼は、こゝで、グツとつまつてしまつた。

「そ、その、ご用と言ひのは……」自分の用事に一々この字をつけている。女は、勘十郎の氣持を見抜いたように笑つた。

「オホ、……、まあ、面白いお武家様でいらつしやいますこと。では、お先へ失礼させていただきます」

動き出そうとする駕籠に、彼は取り乱してすがりついた。日頃の彼に似合はしからぬ光景である。

「お、お願いでございます」

女の目が烈しくわななめ、險を持つた。「お武家様、さつきも申し上げました様に先を急ぐものでございます。それに夜の道で、お武家様とお話致しますことは、私余り好みませぬ故——」

これは又、露骨に嫌われたものだ、こゝに至つて初めて勘十郎は、生來の図々しさと落ち着きを取り戻した。ニタリと笑つて一歩ゆるぎ出た。アゴを前に突き出して三度振つた。

「駕籠屋、ご苦勞だつた。急いで帰れ、サ賃銀は拙者がつかわす」

ツカ／＼と駕籠のそばへ寄つたかと思ふと下サリ、駕籠を横に倒してしまつた。ウ

ンと駕籠を持ち上げると、二間ばかり向うへ投げ出した。女だけが道の上に残された訳である。女は石のように黙つていた。チ

ヤリンと錢の音がした。

「サア、早く拾つて帰れ、何をグズ／＼致しておる。早く行け、行かぬか」

こゝなれば勘十郎の一人舞台である。ソロ／＼と腰の一刀に手が伸びていた。暗の中にキラリ、刀身が光つた時には、駕籠屋は三十間も向うを走つていた。

彼はソロ／＼と女の方へ近づいていつた

「どうしたのでござる。どこか急所でもお打ちめされたか。サ、お起き召され、拙者起して進ぜよう」

女の肩と腰に手をかけると、ヨイショツととばかり起そうとした途端、キラリと懐剣が閃めいた。

「オット危い、危いでございます」

その辺に油断のあるような勘十郎ではない。巧みにかわした両手をバラリと掀げると、胸を斜めに構えてヅル／＼と迫つてゆく。

女の蹴出しが暗にもなまめかしくこぼれて、ツツ——と下つて行つた。

「お止し召され、危のうござるよ」

彼はニヤリと笑うと、忽ち飛び込んで女の腕を掴まえた。瞬間ボタリと懐剣は落ちた。柔かい女の肌から傳わるほんのりした温もりは勘十郎を有頂天にしてしまつた

「お止しめされ、危のうござる。」

女の一人旅は危のうござる。拙者の京の都までお送り申そう。拙者の腕は筋力入りでござるよ、まだ誰

にも負けた事はござらぬ、だが、拙者、お身には負け申した。ゾッコン負け申したでござるよ」

「オホ、……、」

急に女は笑い出した。可笑しくてたまらないように、身体をよじらして笑い出した勘十郎は急に黙つてしまつた。びつくりしたのである。鳩が豆鉄砲をくつて、クシヤミしたような顔をして彼は言つた。

「何が可笑しいのでござる。何が可笑しいのでござる」

「お前さんの言つてゐる事を聞いてると、可笑しくて交チクリンで」女は急に言葉までゾンザイになつていつた。「此れが笑わす

におられるか」

「面白い、氣に入つた。何んでお前は早くそこまで底を割らなかつたのだ。私、一寸急ぎ旅の者でございます故——なゝんて、嫌に氣どりやがつて、まあ、よい／＼、何事もゆるす、何しろ拙者はお前が好きなのでござるよ」

「だつて今夜の中に京の都へ入らなければならぬことだけは本當なんだよ、おじさん」

「おじさんは止してくれ、拙者の姓名は簡井勘十郎、一寸いゝ名前だ」

「アレ、自分で賞めてゐる」

「ところでお前の名は？」





「君香」

「ソレ者上りだな」

「いかにも」

「よからう、ところで拙者はお前に貸しがある」

「さつきのカゴ賃かい」

「ちがう。お前の身体に貸しがあるのだ」

「エッ」

瞬間、君香の顔色はサッと青ざめた。野獸のように熱っぽくおそいかゝる彼の腕をくぐり抜けると

「まあ、一寸、一寸だけ待つて」

「待つてない。待つ必要を認めんぞ」

暗闇の中で、二つの身体がもつれ合つて倒れた。風が一しきり簾をざわめかせると十三夜の月がホソノリと浮かび上つた。君香はこの男に身体をまかせてもよいと考えた。瞬間、脇坂道之助の笑いを浮かべた顔が彼女の瞳の底を通り過ぎた。「かまわぬ、く、そんな事は何んでもないことだ。」と言つてゐるように思われた。

「よし、この男も何かに利用出来るだろう」

### 三

京は五條宮小路の自宅で、君香は暮れゆく秋の空を眺めていた。京に帰つてから十日目、旅の疲れも今は充分に癒えていた。だが心にかゝることは脇坂道之助の消息である。彼女はこの十日間、道之助からの便りばかり待ちつゞけていた。

「ほんとに道之助さまは、どうなさつたのだらう。もしかしたら佐幕党の爲に、御難儀でもなさつてゐるのではあるまいか」

辛氣を晴らすために、手馴れた三味線を出して、久しぶりに好きな大津絵も弾いてみた。しかし何をしたところで、所詮好きな人と会わない限り、この悩みが晴れる道理はなかつた。

君香はもと先斗町で藝者をしてゐた女だつたが、それがふとした事から脇坂道之助と割ない仲になつてしまつた。三度が四度四度が五度と、逢瀬が重なるに連れて、君香の恋心はますます増して行つた。

「あゝ嫌だ。いくら主義の爲とはいへ貞操まで敵に賣つて、生活を立てゝ行かねばならないとは……」

事実何度考えても、それは口惜しいことだつた。君香は今、九條家の家臣、飯能大八郎の困り者であつた。

「お前が本当に拙者を愛してゐるのなら、飯能大八郎に落籍されて妾になれ、そうして彼等が策謀してゐることを拙者に告げて貰いたい。正しく生きると言うことの前に貞操が何の役に立とう」

泣き崩れてゐる君香の前に、ガンとして力強く主張した道之助――

それから君香の生活は、好きな人にも月に何度しか会えない境遇だつた。しかしその爲に勤王党の活躍は、いつも佐幕党の裏をかくて、すべてのことを着々と遂行して行つた。飯能大八郎は、表面こそ九條家の家臣だつたが、その頃名負うての利者で、幕府の隠密の総元締を司つてゐた。君香は敏捷に彼等隠密の生活を、その黒幕を、その策謀を、大膽に細密に調べあげて、脇坂道之助に報告した。

君香が一辺の無辺者筒井勘十郎に、安々と身を任せたまふのも、こんな訳からであつた。

あの夜勘十郎を連れ立つて京へ着いた君香は、一日自宅に泊らせて、すぐ近所へ家を持たせたのだつた。

金のために、嫌いな飯能に身を任せなければならなかつたのさ」

「お前にも似合わないぞ、何を考へてゐるのだ」

「それでも今迄連れそつてきたお前の旦那様だ。さすがに涙がこぼれやしないかい」

羽二重黒紋付着ながしで、肩に手拭をぶら下げてゐる筒井勘十郎の御來宅だ。

「だからさ、私は何もお前さんに飯能を殺せとは言わないよ。私は今のまゝで辛抱するよ。だけどお前さんが、一人の女に二人の男がいては悪いというからさ」

「アラ、また來たの」

君香は急に蓮ッ葉になつて、足を左によじつた横坐り――眞赤に燃える長襦袢が、勘十郎の目を先づ奪う。

「これは拙者恐れ入つた。ひいふーみーよ……と、まだ十日しかたゝぬ間に、また他に情夫でも出來たのかい」

勘十郎、すつかり考え込んでしまつた。その時玄關の格子がガラ／＼と開いて、飯能大八郎の声が元氣よく響いてきた。

「そうじゃないんだよ、馬鹿ね、お前さんは。丁度今日あたり飯能が来る頃だよ。あいつとてもジンスケだから、お前さんを見た、らそれこそ刀位抜きかねないんだよ。だから、今日は今すぐ帰りなよ」

「ハイ」と君香は答へた。そして勘十郎の背中を急いで叩いた。

「すると、この勘十郎がお前の本当の色男か」

「飯能だよ。今日のところはとに角逃げておくれ」

「もちろんそうだよ、お前さん」

勘十郎はあわてゝ跳ね起ると、ボンと庭へ飛び下りた。裏戸を開けて外へ飛び出した。飛び出すとすぐ裏戸の節穴から中を一

「もちろんそうだよ、お前さん」

生懸命のぞいてゐる。

君香は身体をもじつてニッコリ笑つて見せた。勘十郎ここにおいて顔をツルリと撫でた。

「飯能つてどんなやつだらう、ドレ／＼拙者の恋仇を拜んでおこう」

「じゃ拙者は決心した。一人の女に男が二人いる。これは明らかによくない傾向だ。拙者飯能を叩き斬つてしまおう」

だが。しかし、勘十郎の目はだん／＼烈しく燃え出した。しまいはウン／＼とうなり出した。

### 四

「まあ、來る早々からそんなこといけませんなわ」



それから二時間ばかり後の事だつた。三人の武士が節穴からのぞいている勘十郎の尻を一つ叩いて声をかけた。

「いや、その何ものぞいている訳でもござらぬが」

「心細いお方じや、飯能大八郎はいるでござろうな」

「いるようござる」

「いや、それでは失礼申す」

三人の武士は、瞬間一寸顔を見合せてうなづき合うと、スタ／＼と向うへ歩き去つた。

「へんなやつらだ」勘十郎自分のへんなことは棚に上げて、三人の武士を罵りながらまた節穴へ食つゝいた。自分の恋する女が他の男とたわむれている有様を、今自分が見ているのである。再び昂奮が勘十郎の胸先きにこみ上ると、キリ／＼と齒を鳴らしてうなり初めた。

「やつてしまおう」裏戸に手をかけた。しづかに開いて、尻つぶり腰に抜き足さし足——一足だけこつそりと入れた。その時である。

「今度はお入り召さるのか」

ひつくりした勘十郎、ギョツとして後をふり向くと、さつきの三人武士が笑いがから突つ立っていた。

「ウーム、貴様たちは一体何者だ」

とう／＼指撥王を破裂させて勘十郎は言

つた。低くはあるが力強い声だ。

「名無しの権兵衛と申すものでござる。し

てお身は泥濘殿でござるか」

鋭い落ちついた言葉だ。

「そ、そんな者ではないわい。糞ツたれめ飯能大八郎に恨らみを持つ者だ。貴様たちも情を知る武士なら、グズ／＼言わずに見

のがしたらどうだ」

「殺しにお入りなさるのか」

「もちろんだ」

「それは面白い、拙者たち、お手傳い申そうか」

「エッ？」

「お手傳い申そうよ」

勘十郎、すつかりドギモを抜かれてしまつた。——世の中には変なやつがいるものだ、人殺しをそゝのかすやつがいる。

仕方なく勘十郎は、グーツと胸をそらせて深呼吸をしたかと思ふと、猛然として庭の中へ躍り込んだ。

「ヤイ、飯能大八郎起きろ」

ガラリと障子を開けた。

「何者だ、おのれは？」そばにあつた一刀を掴んだかと思ふと、パツと立ち上つた飯能大八郎、勘十郎とカチリと刀身を合せた。

「貴様の恋仇、簡井勘十郎様だ、今くたばらせてやるぞ」

「それはこつちの言う事だ、覚悟せい」

君香は二人の間をくぐり抜けて庭に飛び出した。そこには三人の武士が立っていた。

「おい、あなた脇坂様」君香は走り寄つて三人の中の一人の武士にすがりついた。君香か、今夜こそお前を迎えに来たぞ、



安心せい」

それツと言う声と共に、他の二人は座敷の中へ飛び込んだ。その時、座敷の中で誰か斬られたらしい叫び声が出た。バタリ、バタリと倒れる音がした。それつきりで、あたりはもとの静寂さに返つてしまつた。

「ワハハハハ、脇坂氏、拙者たちが手をかける迄もなく、二人共相討ちに死んでもうた。これがほんとうの天誅でござるよ」

五

十一月二十四日の朝まだき、四條河原の中央に、一本の竹先へ生首が置かれて置くるぐると、左の言葉が書かれてあつた。

飯能大八郎事、幕府の手先として奸曲をたくらむを以つて、こゝに天誅を加う。  
勤王天誅組  
× × ×  
京は街はづれのあるさゝやかな住居に、手に一升徳利をさげた武士が入つて行つた。と今度は鯛でも入つてゐるのだらう。  
——大きな竹の皮包みをさげた武士が同じ家にノコ／＼と入つてゆく。  
ツリと晴れた十一月の夜である。星が冷たくまたゝきはじめると、愉快そうな笑声がその家から洩れて来た。  
勤王党士が集つた、さゝやかな酒宴である。それは脇坂道之助と君香の一生をちぎる祝宴でもあつた。  
「私のように汚れ果てたものを」



と君香は言つた。いくら主義のためにし  
た事とは言え、矢張り沢山の男に身を任し  
た。爛れ切つた生活をしていたことが、今  
更に思い出されてとても自分は道之助の妻  
となる資格がないようにも考えられるのだ  
つた。

と一人の武士が言つた。  
「あなたは拙者たちの尊敬おくあたわざる  
お方じや、今は革命の前夜だそんな心細い  
ことを申さずと、これからは臨坂の妻とし  
て、革命進行の爲につくして貰いたい。の  
うそでござろう臨坂、いや今宵の花婿  
殿」

君香はぬすみ見るように、ソツと道之助  
のリンとした横顔を見つめた。  
「君香よ、今日からお前は拙者と一緒に働  
いて貰うことにする。これまでだつて拙者  
の言うことよく守つてくれたお前じや。今  
度快く承知してくれ、たのむ」

知らず／＼の間に目からは涙があふれて  
君香は顔に袖をあてた。泣けて来て  
「仕方がなかつた。  
「どうぞ、私の方からお願ひ致します」  
一生懸命に涙をふいて君香はホンノリと  
口もとに笑いを浮べた。

—終り—



越前<sup>えちぜん</sup>の国から御前相撲に召され  
た佐伯<sup>さうへ</sup>の氏長は京への道を歩いて  
いた。生れてから一度も国を離れ  
たことのなかつた彼には昨夜柳ヶ  
瀬の宿に着いて以来全く物珍しい  
ものばかりであつた。

北陸の山々にはまだ白いものが  
残つてゐるのに、近江の国はすつ  
かり春になつてゐた。男も女も素  
足に草履をつつけ、子供たちは  
はだしで遊び戯れてゐる。彼らの  
言葉までが、ときどき村へやつて  
くる京商人のそれに似通つてゐる

のも彼の旅心をそそつた。  
余吾の湖を左に見て塩津に入つ  
たとき、琵琶湖のあまりに大きい  
のに「海のような池だ」と驚いた  
のも今朝がただつた。青葉の塊の  
ような竹生島が霞んで見えるのを  
眺めながら晝飯を食つたときは全  
く素晴らしい。それから永原を  
過ぎて海津の町に着くと再び湖が  
眼前に拡がつてゐた。池だと聞い

てゐるのに海のような湖風が吹き  
寄せてくる。その生温い風は全く  
春風であり、彼の背中は汗ばんで  
さえる。

もう申の刻（四時）も大分廻つ  
たにちがいない。既に陽は比良山  
に没してゐる。さつきから彼は、  
今夜はここで泊ろうか、それとも  
次の宿まで行き着こうかと迷いな  
がらとうとう町はづれまで来てし  
まつた。

それにしても次の宿までどれほ  
どあるのかわからない。誰か尋ね  
るべき人はいないものかとあたり  
を見廻してゐると、小川で米を洗  
つてゐる女がいた。彼はその女の  
傍へ寄つて行つたが、しばらく立  
止つて米を洗うのを眺めていた。  
というのはその女があまりにも肥  
えており、ふつくらとした白い腕  
や大根のような足をあらわに見せ  
てゐるのが、普通の女では働き足  
りない大男の彼の心をそそつたか

らである。着物がはちきれそうな  
ほどに大きく丸味を帯びた腰許が  
彼の目を惹きつけた。新芽の若々  
しい柳の枝の風に揺れる下で米を  
洗う女——彼はもうづきづきとし  
てきた。

やがて女は米を洗い終つて立上  
り、彼をちらつと見たまま行き過  
ぎようとした。彼はあわてて  
「もし、次の宿までどれほどあり  
ましようかと」  
尋ねた。女は彼の旅姿を見てか

「京へ上るのかね」  
と聞き返して、彼からは後向き  
になつて西の方を指し何か云おう  
とした。そのとたんである。彼は  
素早く両手を伸ばして女の胸から  
乳房へと手を廻した。茶碗のよう  
な乳房は彼のここ数日抑えられて  
いた情慾をそそり立てた。女はし  
ばらくは抵抗もせずさされるがま  
まにしてゐたが、彼が調子に乗つ  
て弄んでゐるうちに両手を胸へひ

きつけてぐつと力をいれたのであ  
る。はじめは彼も「いい氣になつ  
てやがるな」と氣にもせずいた  
が、いつまで経つても力を抜こう  
としないのみかますます力を加え  
てくる。彼がはさまれた手をはづ  
そうとしても女の腕はびくともせ  
ず、その上ふり返つて彼の頬に笑  
いかけるのである。その凄じいこと

——彼はもうふるえてきた。そし  
て許してくれ、わしが悪かつた」  
と頼むよりほかなかつた。女は  
腕をはづして  
「それにしてもどうしてあのような  
ことするのです」  
笑いながら云うのである。彼は  
もう生きた心地もなく  
「わしは越前から京の御前相撲に  
召されて上るものだが、そなたは  
どの方とは知らずに消え入るば  
かりに云うと、女はくすくす笑つ  
て  
「あぶない／＼。あなたも悪いと

いうほどではありませんけれど、  
その力では京へ上るのは危いでし  
よう。日に余裕があるのなら少し  
留つて稽古なさつてはいかが？」  
と云う。彼も、京見物のつもり  
で二十日ばかりも早く出て來たの  
であるし、とも角不思議な女の力  
に全く參つてしまつたので云われ  
るままに留まることにした。

女の名はお金といつたが、金女  
は翌日から猛烈な稽古を要求した  
朝は早くから起されて水汲み、飯  
焚きなどを云いつけられ朝飯が済  
めば裏庭に下りて息つく間もない  
稽古を晝まで続けねばならなかつ  
た。晝飯が済んだ後は半刻ばかり  
の休憩があつたけれど、それが済  
めば再び烈しい稽古が夕食まで続  
いた。  
金女の肉体は全く疲れることを  
知らなかつた。赤い帯だけをつけ  
た豊満な肉体にびつたりと組み  
ついて、大きな乳房に我が胸を押



# 尾崎文甫



昔の中には此んな  
強い女がいるとは知らなんだ

しつづけるときは、彼は放そうとも  
しなかつた。  
両手をしつかりと女の餅のよう  
な後腰に廻して身体を押しつけた  
ところが、女がひと度身体を横に  
振ると、彼は苦もなく土の上に轉

がつていた。再び起上つて我身を  
女に押しつけた次の瞬間には、餅  
かに轉つていた。なにくそ——と  
思つて何度ぶつかつていつても轉  
がされるばかりであり、男がくだ  
くだになつて立上る力も失せてし

まつているのに、金女はそれを引  
張り起しては挑んで來た。  
起されては投げられ、投げられ  
ては引起されているうちに彼の意  
識は朦朧として來たけれど、それ  
でもまだ容赦しなかつた。大きな

岩のような脂肪の塊がいつまで経  
つても彼の前に立ちふさがつてい  
た。彼が押しのけようとすればす  
るほどより大きな力をもつて大地  
に居坐つていたのである。後で分  
つたことであるが、彼女は秋の宮  
相撲には赤い褌をつけ、大の男た  
ちに難つて取組み、毎年きまつた  
ように勝残るのだそうである。村  
中の若者が打倒金女を目指してい  
るのだが、散々な目に會うだけだ  
というとも角彼ほどの男がいくら  
ぶつかつても無であつた。

やつと終つたときには男はもう  
何をする力も失せていた、彼はた  
だ上り樞に腰轉んできびきびと夕  
食の準備をしている金女の巨体を  
見つめていた。そして

「世の中にこんな強い女がいる  
とは知らなかつた」  
と彼はそつとつぶやいた。

やれやれと思ひながら思ひぎり  
へつた腹の中へ夕飯をかき込んで  
いるとき、近くの百姓がやつて來  
た。

「お金さん、田水の話だがね——  
今年は一割毎に交替してみんなの  
田へ送りてえと思ふんぢやがない  
かな」

金女の意見を伺ひに來たわけで  
ある。その云い方がひどく丁寧な  
ので変だと思つて百姓が歸つて  
からそのわけを尋ねると、金女が  
笑つて

「去年のことだが——」

と話し出したところによると、  
或年に村の百姓たちが相談して金  
女の田へ通ずる水路には水を送ら  
ないことに決めたそうである。そ  
こで金女は夜にまぎれて出かけて  
行つて自分の水路をふさいでいる  
大石を取除けて、あべこべに村人  
たちの水路を堰きとめてやつたの  
であるが、翌朝それを見た村人た  
ちがびつくりして、十人がかりで  
やつとその石を上げたそうである  
が、それからというものには金女を  
恐れて村のことは何でも一應相談  
に來るようになったそうである。

「今年ももうすぐ田植だ何とか  
言つてくると思つていただよ」  
彼女が笑うのを彼は目を丸くし  
て聞いていた。

その夜のことである。彼は晝間  
殆んど休むことなくぶつかつてい  
つた女の豐満な肉体の眩惑に堪え  
かねて、そつと女の部屋に侵入し  
その横にすべり込んだ。あられも  
なく女が熟睡していた。とたんに  
女は両股にくつと力をいれて男の  
腰をしめつけたのである。そして  
につこりと笑つて、  
「はづせるものならはすしてみ  
い」

というのである。彼はただもう  
くだくだと絶え入つて呼吸ばかり  
するのみであつたそして心秘かに  
「世の中にこんな強い女がいると  
は知らなんだ」  
と繰り返した。七百年前の話で  
ある。(完)



ネオ  
アフ  
レ  
ギ  
ール  
レ  
ティ  
び  
こ  
う  
超戦後派お嬢さんを尾行する

椿  
沖  
研二  
(絵)



酒と女とネオン  
に交錯する都會の  
裏街には、獵奇と  
スリルが息づいて  
いる。特種探訪を  
志した記者は果し  
て何を見たか？

一日百数十万の乗客を吞吐する、北大阪の玄関口、大  
阪駅、阪急界隈の影しい人波の中から、特に典型的なる  
超戦後派お嬢さんを物色し、一夜ヴェールの彼方の行状  
記をものしようと云うのだから、さしづめパーマネント  
心臓に尚、強心剤の五本は注射しておかないと、とても  
筆者の大役？は覺付かないというところ。  
時間は正に六時三十分。空にはダイヤを鏤めた星座が  
輝やき、舗道はネオンとフィルム織りなせる恋に息ず  
く密林である。

ラブソディは唄い、媚態は調歩し、人待顔の影の森  
めきも、詩的情緒な一齣であらう。

梅田、娛樂街から新道にかけて、渦潮のように囁  
き流れる。シングルとカッブルをチラツと見送つて、ピ  
ースの三本目に火を点ける頃には、正直なところ、ぼつ  
と失望が影をもたけて、福本君の話を鵜呑にした自分  
が、聊か乍ら馬鹿氣で思えた。

「畜生ッ。糞面白くもねえやッ」

残り僅かの煙草を叩きつけて、靴の踵で思いきりキ  
ツと踏みこじつた。

と、その時である。眼の前へ突然大柄なチエツクのス  
カーツが歩み寄つて来て、

「あら、椿さんぢやございません？お久しぶりね」

「アルトがかつた甘ツたるい声に一寸面喰つて「やあ？

……」とは云つたものの、咄嗟には相手が思い出せない  
思案をして首をかしげていると、

「お忘れになつて？ホラ、いつかの晩、酔いどれに摺つ  
て困っている、……時ホ、ホ、此処まで云つたら、もう

お分りになるでしょ？」

そう云われると、ほのぼのとして蘇つてくるものがある。  
一箇月程前、確か一人の女性を酔漢から救つた事が  
あつた。

「ちやア、貴女はあの時の。……」

「えい、その節は大変お世話をかけまして、お蔭様でや



ツと終電にも間に合いましたし、本当に何と云つてお礼を申上げてよいやら」

「いや、どうも。……」

「あたしはあれ以来、随分貴男をお探してましたのよ。そして、やツと貴男のお名前を奇譚クラブの誌上で拜見しましたワ。小説をお書きになつていらっしゃるでしょ？」

「え？よくそれが分りましたねえ」

「あら、だつて十二時五十分の麗人リすつかり讀んだのですもの。困りますワ。無断でモデルにお使いになつたりしちゃ、それに、あたしがとつても美人で、徹底的な魅力の女になつていてでしょ？まるで正反對ですワ。ホ、ホ、」

彼女はシヨルダーバックの肩を顫わせて美しい笑顔を手の甲で塞いだ。

正反對だなんて私に云わせれば謙遜である。あの夜は、私も実はアルコールが入つていたし、それの場合が場合だけに、矢庭に懷に飛び込んで来た、窮鳥の顔を確かめる暇もなかつたのだが、今、斯うして相對している印象は、仲々どうして、大したものである。

上眼ずかいの女の眸が、ネオンの反射でキラ／＼光つて見える。仄かな香水の匂いもある。ドレッシイな髪形に、ヘヤーオイルの艶の無いのが、多少野性的な感じがするが、色も白く、器量もはるかに水準を超えている。

「美人だなア。……」

と、感心する尻から、あの夜の飄氣な記憶だけで十二時五十分の麗人に仕上げた事に、今更のよう快哉を叫んだ。と同時に

に、今夜は大変な事になりそうだと。とはやくも身勝手な筋書をつくつて、私は胸を躍かせた。

「そこ迄一緒にいかが？とつても美味しいおコーヒを飲ませるところがあるんのですよ」

彼女はそう云うと、もう、クルリと体をひるがえして、スポーティなハイヒールの聲音をひびかせた。

「よしッ。今晚は先ず彼女の素性を洗つてやる。たとえ、戦後派令嬢でなくたってキツトそれに近い收穫はあるノ」

咄嗟に愉快な好奇心に駆られると、フト口笛でも吹きたくなつて、恋人のように肩を並べて歩きだした。

驕で、高級酒場が軒を並べる、曾根崎新地の小路に這入つた。

青いネオンで「スヴェニール」その横文字の入口の前で、彼女は一寸立止つて、「ね。おコーヒは止めましょお酒の方がいいでしょ？」

笑つて、グツと薄明るい客間のドアを押した。途端に、煙草とウキスキの濃んだ空氣が、ムウツとして鼻をつく。その零團氣に似つかはしい静かなチゴイネルワイゼンが流れてくる。

女給がハイボールとあしらい物を運んで来た。

「本当のことを云うと、あたしお酒が欲しかつたの。フ、フ、驚いて？」

「え？」虚を衝かれて一寸しどろもどろになつた酒を呑むという以上、たゞの令嬢でもあるまいが、それにしても彼女の正体は

？が、その追及の全裕も與えないで、

「椿さん。今晚は貴男に素晴らしい特種を提供したいと思つていますのよ。それが貴男に對する何よりのご恩返しぢやないかしら？」

「特種？……実は僕も今晚それを探しに出て来たところなんです」

「まア。それじゃ願つたり叶つたりと云うところね。ホ、ホ、さアウンと空けて下さいな」

「ありがとう。然し僕はあんまりゆけないんです。それに今晚は……」

「あう、いゝじやありませんか。あたしと初めてのお近かすきのしるしなんですものそれともお相手があたしぢやご迷惑？」

「とんでもない。……」

狼狽えて注がれるまゝに彼女の好意に甘えては居たが、氣になるのは今の特種と彼女の素性である。その中に醉が廻つて彼女の態度もはぐれて来ると、軽い調子になつて行つた。

「ところで今の特種つてのは、一体何んなのです」

「氣になるのね。ぢや貴男だけよ。あのね？小指を出してごらんさいな」

「え？……」

私は兎に角指を差出して見た。それに眞白い小指をからませて、ギョツと力を入れた。眸が異様に光つている。微笑の消えた顔だつた。

「げんまんよ。……ダアレニモイワナイヤクソクデキル？」

りと大きく頷きかえした。

—

「スヴェニール」で最後の乾杯をして、戦後派令嬢と手を振つて別れると、言われた通り、又、梅田まで引返して、目的のプロマイド屋の店頭に見られた。

「三船敏郎の女裝は有りますか？」

勿論三船の女裝のプロマイドなんて有る訳がない。合言葉なのである。

「御紹介状は？お持ちなんでしょうね」

猜疑を含んだ四辺りを憚る店主の掌へ素早く小型の名刺を渡した。すると、それに引換で一枚のチケットを握らせて呉れた

万事彼女が言つた通りである。

若い店員に案内をされて、再び街路へ飛出した。阪急の難路を縫い地下街に降りて小さなおしるこ屋の前で、

「此処ですよ」と囁いたが、私はそれでも腑に落ちない。

「君、此処はたゞぢいしるなやこ屋のか？」

「そうです。然し、今にたゞではなくつて来ますよ」意味ありげにニヤ／＼薄笑いを浮かべ、更に、

「途中で咎められた時は、必ずこのチケットを見せて下さい。これを失つたら、もう駄目ですよ」



るからに可憐な令嬢風の女性達が、何処へ行くのか飛出して来た。

「よし、この後を尾行するんだな？」

三、四間離れて彼女達の背後から、素知らぬ顔で尾行して行く。

路上に出た。電車道を横切つて、商店街も通り過ぎた。そして騒がしい梅田界隈を離れようとした所の、薄暗い倉庫の前で、急に四辺に注意をばらうと、そつと倉庫番に声をかけた。

猫のように蹲つていた年寄の倉庫番が、やつこらさと腰を上げると、今迄腰掛けにして大きな荷物を、四方に轉ろがして大きな床板を上に掲げた。

「オヤ？……」

眞ッ暗い穴倉ばかりだと思つていたのに彼女達が次から次へと降りて行く地下にはチヤンと燈りが点いている。然も、かすかな人声も洩れてくるのだ。虎穴に入らずんば虎兇を得ずとは正にこの事であろう。

私は勇気百倍して、倉庫番にチケットを見せるや否や、後遅れじと階段を降りて行つた。

地下室独特のしめつぽい臭氣に鼻を撫でられ乍ら、階段を降り詰めて行くと、四辺の造作がすつかり變つてくる。まるで密林の中の宝庫を探索するような、何とも云えないスリルを感じる。と、果して私の期待は裏切られなかつた。

奥は完全なダンスホールが設備されて、既に数十人の若い男女が、ゆるやかなワルの旋律で踊っている。小さいながら酒場を兼ねた喫茶室も有れば、長椅子を並べた

應接室も有る。それが煌々と晝尚明るい電飾に映えて、時々急に薄暗く点滅し、いやが上にも戯奇趣味を煽るのだ。私はあまりの別天地に暫く氣を呑まれた恰好で、ボーイの挨拶も分らなかつた。應接室に通されて先づクラブの規定表を見せてもらう。

**A 級オールナイト 三千円**  
**B 級ラツキートナイト 千五百円**  
**C 級ショートタイム 五百円**

つまり、A 級は文字通り翌朝迄で、特別室で思ひ存分青春を食つた挙句、互に意氣投合すれば、相手のお嬢さんと神だけか知らぬ寢室に這入る事が出来るのだ。

B 級は特別室の非公開遊戯に接觸出来て、唯寢室の恩恵が無いだけ、C 級はダンスと、せいぜい接吻の程度といったところ。結局、チケットの有効範囲は此処へ這入る迄の事であつて、これから先は全部規定料金表に基づいて男も女も金を拂ねばならぬのである。

それにしても、オールナイトに限り女性だけが千円安い。但し雪に付て訊いてみると、

「お嬢さん方には肉体的な負担がありますからねえ」

と、野暮なことを訊きなさんなと云うような顔をした。オールナイトは寢室で一夜を明かすので、若し万が一、女の体に異状が出来た場合は、物かに処置をするだけの費用を料金の中に計算してあるのだと説明した。

その点此のナイトクラブの方針が、飽迄享樂本位に出来ていて、遊廓や一般貸座敷の營利主義とは異なり、然も、接客婦のうちに後で心配のいる体とは違ふ。素人娘の醜態がある訳なのだ。

「何級になさいますか？」

ボーイは直立不動の姿勢で訊く。私はそつとポケットの札束に触れてみた。大丈夫金はある。然し、大枚三千円投げ出して、果して特種が拾えるであらうか？……ええ、まゝよ。乗掛つた舟だノ

「よしッ。A 級でゆこう」

傲然と云い放つて、私は長椅子へふんぞりかえつた。

### 三

此処で一寸、特別室に就いて触れて置こう。

特別室は何処のナイトクラブにも有る祕密遊戯場なのであるが、經營の重点は先ず一番に此の室に置かれ、新機軸をあみ出した、色々工夫された桃色装置と奇抜な趣向とでアツと皆を驚かせ、会員の官能を桃源境に誘ひ込もうとするのが狙いなのである。

従つて、いつたん室に踏込んだが最後、いつ如何なる機軸が襲来するとも計り知れないのである。經營者側も、敢えて此の陶醉を貪らんとする男女の体面を考慮して、仮面又は種々人相を變貌する仮装衣裳を貸與するのが常套手段なのである。

此処もご多聞に洩れず、その種の趣向が

取入れられている。私はボーイの案内で脱衣室に這入ると、パツと照明が暗くなつて、裸体の上から、スッポリと異様な薄絹の服を着せられて、コップに一杯妙な液体を呑まされた。

これが十分後には全身の毛細管にまで循環して、完全に理性をマヒさせ、妖しく情慾を掻きたてる特種神酒充奮劑なのである。「どうぞ、ごゆつくりと。……」

うや／＼しくボーイは頭を下げて、特別室のドアを開いた。二、三步中に這入つて行つた。

多勢の男女の氣配は感じられるが、天井に小さな螢のような灯が点いているだけでほとんど暗闇と変りはない。それに、歩けば人に突当りそうに迂闊に行動も出来得ない。

思ひ聞もなく、はや、ドンと誰かつかつた。柔かい感觸は異性を直感させた。

「あら、失礼。……」顔も姿も見えない相手は、闇の中で小さく叫んだ。

「いや。こちらこそ」

「——お独りですか？」

「ええ、何しろこんなに暗くつて、誰が誰だか分らないんですよ」

「ホ、ホ、。ではご迷惑でなかつたら。お願いできません？あたくしと。……」

若々しい声は頬のすぐ傍にあつた。瞬間知つてゐる女なら抱き締めた衝動に馳られて、いきなり黙つて肩に手をかけた。ピツタリと女の体が寄添つて来た。

闇の中ではこうして幾組かの男女があるらしく、窈やかな嬌声が妙に煽情的でもある



つた。廳で、天井の螢の光が、ポツリ／＼と星が増えて行くように、漸次に数を加えてきた。ヤツと互の顔が分る明るさになつた皆、仮面をつけている。

その時四隅から青色のネオンが、サアツと一齊にフロアを照らした。

「あ、これは？……」

私はあまりの光景に反射的に四辺を眺めた。

と、間髪も入れず、待期の姿勢の舞台から、突如バソドオールの快速調が拍車をかけて鳴り渡つた。そこ、から悲鳴とも嬌声ともつかない声が、ドツと湧上つた。

薄絹かと思つていた男の服は、皆、寒冷紗で作られていて、ほとんどが露わなのだ。いや、それ以上に驚いた事は女性側の服装である。ウエストからヒップにかけて、しなやかに流れる体の線は勿論のこと、胸にはお椀を伏せたような乳房が見え、鬚をつくつた太腿がその儘透いて、セロファン製のドレスの下に喘いでいるのだ。

寒冷紗の服とセロファンのドレス。……曲がタンゴからトロットに変つた。パートナ―もその度毎に互を撰んで旋律に合せる。一人でも数多く踊つて、意中の相手を探し出さぬと、もう寢室に引上げる時間はいくらない。

私も五、六人の体を抱いて踊つた。そして七人目の令嬢が「お願いします」と澄んだ声で白い腕を絡ませてきた。ダンスは上手く、所謂ネバリの有る微妙な踊り方で、それに豊かなボリユウムの有る重量感には不思議な悩しさゝえある。

「ウム。この女はいゝ。……」

「フと初恋の少年のように熱い血が馳廻つた。時間ギリ／＼一杯のとき、上づゝた声で彼女の耳許に囁いた。女の口辺に許容の意味の笑みが浮んだ。そして、

「……いけない方。……」

と、小さな声で形ばかりの反撥を示したが、私の手を振りきる勇氣はなかつたようだ。

「ね、ダアレニモイワナイヤクソクデキル？」

何処かで聞いたような言葉だと思つた。俄かに心臓が高鳴つてきた。次の瞬間、バリと仮面を取つた女の顔を見て、息が止るほど驚いた。

「あ、君は。……」

「ホホホホ。いかが？あたしの差しあげた特種？お氣にいらまして椿さん」

「いつたいこれア、何うした訳なんです？」

「フフフフ貴男も小説家らしくもない事をお訊ねになるのね。ホウ胸のところがらんなさいな、何か附いてるでし

「え？」云われて何氣なく胸許を見ると、いつの間につけられたのか、小さな銀色のバッチが光っている。つまり彼女は先廻りして、既にボーイを買収して置いたのだと云う。

「椿さん。貴男はご自分でお作りになつた小説の筋書をよもやお忘れにはならないでしやうね？」十二時五十分の麗人では最後に貴男が愛慾の虜になる場面がチャンと有るではありませんか？」

「……」

「あたしは小説のヒロインとして登場しただけ貴男はそれをお書きになつた、作者としての責任を果すまでのことですワ。いゝえ、あたしは何んな事があるかと、必ず十二時五十分の麗人主題に基づいて行動

しますワ。お覚悟はいゝでしやう？」

#### 四

新納美佐子はその夜処女であると囁いたが私は、彼女が処女であらうとある





まいと意には介しなかつた尤も、セロフアン紙に覆われて、陳列されていた純潔？だから始めから賣物には間違ひなかつたのだらうが。

然し、何はさておき私が驚き且つ慙然となつた事は翌朝彼女の床が藻抜けの敷になつていたこと、私に宛てた書置である。

無断で失礼だとは思いますが、十二時五十分の麗人々のモデル代として、原稿料の半額頂戴いたしました。どうぞ悪しからず。慈々御健筆のほど祈ります。

## 純潔だけでは戀は出来ないという話

### 處女と獸慾

藤本千恵子

初めのうちは、なんでもなかつたが、度重なるにつれて、漸くに山岡と一緒にならなければ、なんとなく物足りないような氣持で、家へ帰つても落ちつかないようになつた。

そういう氣持が、いつたい何を意味しているか、考えてみては好子は自ら頬が紅らむものを覺えた。

しかし、山岡の方では格別、深い考へもなく、獨身男の氣安さから、家まで京阪電車の中を、好子と話し合ふことが、退屈を紛らすに都合がいくらいに考へていたのである。だから、彼は虚心で、よく話すのである。

「あなたと一緒に居らないと、なんだか仕舞して来た仕事があるような氣がして、じつとしていられないのですよ、妙なものですね」

「なんだか、あたしも、そう思われますの

よ」

「そりいつて好子はハツと口をツグんだ。意識しないまでも、これでは、互いに戀を告白しているみたいだ、と感じたからである。」

彼女は大阪貿易商會のタイピストであつた。入つて三日目に、山岡が入社してきつた。彼は大學を出たばかりの純情な青年らしく、快活な、明るい性質をもつていた。二人が、互いに好意を持ち合つたというわけは、同じ方向に家があるというのが最大の原因だつた。

「やあ、また一緒にになりましたね、ハハハまるで約束でもしたようだ」

山岡は、氣まぐれ惡そうにいつたりしたものである。それが、三月もすると、知らず識らずのうちに、いつか戀の道を歩き始めていたのである。

「あら、またご一緒ね……あたし、嬉しい

相手は役者が一枚うわてだつた。念のため服を調べて見ると、案の定相当額の百円札が消えていた。

その報復手段でもあるまいが、私は再び筆を執つて奇譚クラブに暴露してやつた。

わ」

好子も、こんなことがいえるようになった。だが、山岡が、自分に好意を持つていてくれるのか、まだ全然しなかつたので、彼女は、ひとり、心のうちに思い悩んでいた。

それは、晝から雨が降り出した、ある日の帰り途のことであつた。

山岡は、用心深く洋傘を持つていたので好子は彼の傘に入れて貰つて、停留場から家までの道を、仲良く歩いていった。

明るい街筋をそれて、大きな屋敷の練塀と、片側が畑になつてゐる細い道までくると、二人で握り合つてゐた相合傘の柄が何かに突き當つて強いショックを受けた。

「やあ、木の枝に當つたんだ」

そりいつて、傘を持ち直そうとした山岡の手が、好子の指先を握りしめてしまつた。

猫の子一匹通らぬ暗い場所なので、好子はハツと全身が熱くなつた。

二人は、いい合はしたように、びつたり身を寄せて立止つてゐた。激しい動搖が手にとるやうに聞こえた。

「好子さん」

山岡のかすれた声が、熱っぽく耳たぶを撫でた。好子は固くなつて、山岡の次の言葉を待った。

「僕は——あなたを、愛しています」

彼女の行狀記を暴いて、その原稿料で一杯呑んだら何んなに痛快であらう。……が、案外新納美佐子は、ニタ／＼と北叟笑んで「戦後派お嬢さんを尾行する」を讀んでいるかもしれない。

(終)

羞みながら、どもりどもりいう山岡の言葉は、まるで魔力をもつてゐるやうに、好子の全身を蘇々とほてらした。

「——あたしも、あなたを——愛してしました——」

消え入るやうな声でいうと、好子は、恥かしさと、嬉しさに、身もそそろになり、立つてゐるのさえせい一杯のやうなもろさで、山岡の胸にもたれかかつてあえいだ。荒々しい息吹きが迫つてきて、あッという間に、好子の唇は、山岡の唇で塞がれた。好子は、顫えながら、齒をカチカチいわせて山岡の接吻に應じた。

それから、二人の戀は、最も幸福な道を辿つて、清らかに、夢のように続いた。

しかし、幸福というものは、いつも不幸の前兆だつた。

山岡は、ふとした風邪がもとで、急性肺炎をやり、二週間ばかりして、ぽつくり死んでしまつた。まるで鹽のやうだつた。

「あの人が——あの人が——」

好子は、どうしても信ぜられなかつた。命を的に恋してゐた山岡なのである。彼女は、ただ茫然として、涙に暮れるのみであつた。

剃髪して尼にでもなろうかしらと思つたが、それもできず、いつか、彼との戀愛が社内已知れ渡つて、目引き袖引き、皆の目がからかつてゐるやうに思われて、好子は



遂にいたたまれず、社をよしてしまつた。  
しかし、その翌日から、どうしてその日の糧を得るかに思いあまつた彼女は、遂に社交喫茶「春の海」に勤めることにした。

蒼ざめた頬に紅をさし、強いて笑顔をにつくり、酔つぱらつた客達を相手にしはじめた彼女は、もとより柄に合はなかつた。いつも、隅つこの椅子に、しよんぼり腰を下ろして、きやツ／＼戯れている客達と女給達の淫らな恰好を、ぼんやり眺めていることが多かつた。

ある晩のことだつた。  
ふらつと、ひとりの客が扉を排して這入つてきた。

好子は、あッと呼んだ。思わず椅子から起ち上がった。

夢ではないかしらと思われる程よく似ている。山岡とそつくりの顔立ちと姿をもつた客であつた。

好子は、あまりの嬉しさに、飛ぶようにその傍へ走り寄つて、  
「いらつしやいませ、どうぞ、こちらへ」  
意外な程、浮き浮きした元氣さで招じた。

向き合つて、つくづく見ていると、不思議なこともあるもの、その客は顔ばかりではない、声や言葉の訛りまで、山岡の面影をもっているのである。

「あなた、山岡さんという、大阪貿易商會に勤めていた方が存じありませんか？」

好子は、弾んだ調子で訊くと、

「山岡？——知らないね、君の恋人？はつはつは——」

客は靜かに笑つた。笑い方まで山岡に似ているのだ。

「ぢや、お名前を覚えてちようだい、あたしヨシ子つていうの、どうぞよろしゅう」  
「ヨシ子さんか、いい名だ、僕は、早田というんだ」

それから、早田は、よく通つてきた。

好子は、まるで山岡を迎えるようにして早田を待つた。死んだ山岡に捧げた戀心をそのまゝ、ひそかに、早田という男に捧げているのだつた。

ある雨の夜だつた。

閉店近くに、早田がひよつこり現れた。

「あら、もうしまいかけていますのよ」

「いいよ、いいよ、ぢや、君の下宿まで送つてあげよう」

早田は、氣輕にそういつて、大急ぎで出てくる好子を、表で待つていてくれた。

好子は、差しかけてくれた、早田の洋傘にふと、初めて山岡と接吻した雨の夜が思い出された。あのときと同じような眞つ暗な道を歩いていると、いつの間にか、傘をさせかけてくれる早田が山岡のように感じられてならなかつた。

「どうぞ、およろしかつたら、お茶でも召上つて下さいませ」

好子が、いそ／＼していうと、早田は、快よく頷いて、彼女の部屋へ入つてきた。

好子は、とつておきのケーキと、コーヒーを出して、早田と向き合つて坐つた。

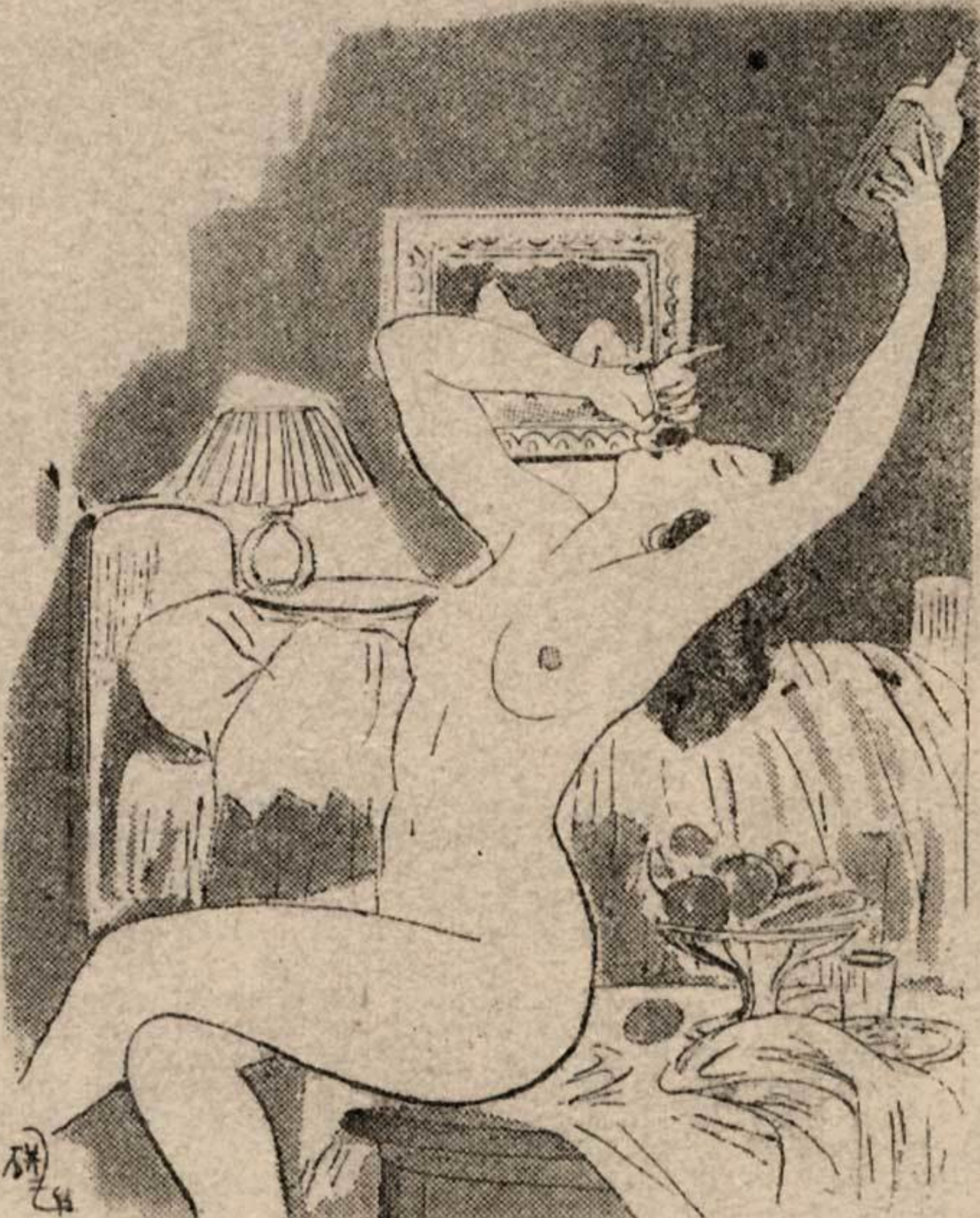
「どうぞ、召上つて下さいませ」

好子は、ケーキをすすめた。すると、早田の手が、差し出した好子の手首を素早く握り締めた。

「アッ！」

と叫んで、手をひこうとすると、早田は半身を浮かせ、人が違つたように、眼をギ

死んだ山岡に捧げた戀心をそのまま、ひそかに早田という男に捧げているのだつた。



ラギラさせて迫つてきた。

「いけません、結婚するまでは——」

「フン、令嬢みたいなこといつてやがる！たかが女給ぢやないか！」

こういうことにかけては、絶対に自信があるらしく、早田は、悠々と好子の手をとつて引き寄せ、ムムをいわせず抱きすくめてしまつた。悲鳴を上げようとすると、もう口を塞がれているし、腰をひねつて逃れようとすると、そのまえに、しつかり胸を締めつけてしまふし、好子は、ただもう驚

に狙われた小雀のように、早田の自由に身を委せねばならなかつた。

「惚れた男のことでも思つて、じつとしていろ、なにも恐いの、苦しいのというわけぢやないんだからな」

好子は、男の執拗な抱擁の中で、山岡の幻影を追つた。そして、こんな事を思つた。

男は浅ましい。清らかな愛を捧げていた山岡さんも、生きていたら、きつと、このような事をするに決つてゐる——終——



金子忠



人里離れた山番小屋を訪れた病いの老僧の語る因念ばなし  
山番とその娘は、その告白を何んと聞いたか？

草色で既に死相が現われてい

何もない山番小屋で仁作は施す

術もなかつたが、それでも出来

るだけのことをしなければなら

ないと、久代に薬草を煎じさせ

て僧の紫色の薄い唇を濡した。

久代は氣味悪そうに死に瀕した

老僧を見つめていた。因念を踐

して死ぬ人は何となく人をひき

つけるものである。仁作もこの

僧がしきりに何か言いたがつて

いるのに氣付いて、その耳元で

「何なりと言ひ残すことはない

か」

老僧とは――。

高潔で、清静で、枯淡なもの

と聞いていたが、之はまたどう

したものであろう、と。

老僧は、いや自分は幻覺して

いるのだ、と言うように久代か

ら仁作へ眼を移した。彼は、

「私の懺悔話を聞いて下され、

私はどうやら死ぬらしいぢや」

と、言つて深い溜息をついた

仁作はランプの芯を揺さたて、

部屋を暖たまらせるために、久

代に爐火をおこさせた。それで

一間きりの山番小屋は幾分明る

のを捉えて廣場へ連れて行き、

深く穴を掘つて生き乍らに埋め

その上に杭を打つぢや。そし

て、今でもその廣場には幾本も

の杭が立つておる。古い杭は腐

れて雨や風に倒れる。すると罪

障は消滅するのだと言ひ傳えら

れておるのぢや。

わしはやがて一人前の若衆に

なつて若くて美しい村の娘を

娶つた。わしの口から言うのも

何ぢやが、全く美しい娘ぢや

つた。豊かな胸をした健康で無

邪氣な、ちようどそこにおられ

ることもないのであるが、

仁作もあまりいい氣持はし

なかつた。戸外は森として

松籟の音がしきりとしてい

た。

仁作は土間へ降りて、山

番の老人らしい重味のある

声で、「どなたぢや」と、

耳を澄ました。戸を叩く音

が止んで、苦しそうな咳ま

ぢりの弱々しい声が、意味は聞

きとれないがどうやら病人であ

るらしい。仁作は戸を開けた。

と、枯木のように老いた旅僧が

月光と共に土間にばつたりと落

ちた。

仁作は旅僧を抱えあげて、自

分と久代の寝ていたふとんの上

に僧を横たわらせた。僧の顔は

草色で既に死相が現われてい

何もない山番小屋で仁作は施す

術もなかつたが、それでも出来

るだけのことをしなければなら

ないと、久代に薬草を煎じさせ

て僧の紫色の薄い唇を濡した。

久代は氣味悪そうに死に瀕した

老僧を見つめていた。因念を踐

して死ぬ人は何となく人をひき

つた。豊かな胸をした健康で無

邪氣な、ちようどそこにおられ

る娘さんのようにな。わしは妻

を愛した。妻のためなら命も惜

しくはないと思つた。ところが

間もなく妻と村の若衆とが不義

をしていと言ひ噂がたつた。

わしは否定した。妻を信じた。

村の掟を知つてゐる男や妻が、

姦通は重い罪で、現場を見付か

れば杭打ちにされることを充分

に知つてゐたからぢや。しかも

妻はわしの子を姪つてゐる。わ

しは噂を笑つた。

山番の仁作は、雨戸を叩く音  
で眼を覺した。  
久代は前から起きていたらし  
く、恐怖の色を浮べて仁作の腕  
をしつかりと握つていた。山番  
小屋で盗まれる物とてなく、獸  
の出ることも稀れで、何も恐れ



る夜わしは川へ水を見に行つた  
水番小屋でわしは親戚へ使いに  
行つた筈の妻を見た。若い男と  
戯れていた。わしは怒りに目が  
くらんで男にとびかゝつた。妻  
はわしの前に身を投げかけ、男  
は川に飛び込んで逃げた。手離  
せば妻も川に入る氣配にわしは  
益々怒り狂つて村人を呼んだ。

わしは妻の髪を掴んで、素裸  
のまゝの妻を廣場へ引摺つて行  
つた。妻は哀願し、泣き叫び、  
宥しを乞うた。が、わしの耳は  
その時つんぽになつておつた。  
村人は穴を掘つた。

わしは、藻掻き逆う妻を穴に  
押込んで土をかけた。土の下か  
ら泣き叫ぶ妻の音が耳にあるよ  
うぢや。しかしその時はわしは  
めくらんで耳も聞えなんだ。わ  
しは怒りに任せて杭を打つた。

わしはその夜は興奮して睡れ  
ずに、東の空の白らむ頃、妻を  
杭打つた場所へ行つてみた。杭  
は倒れ、穴は掘返えされ、血が

川辺へまでしたたつておつた。  
川は血に染んでおる。わしの血  
は凍つた。わしはまざまざと、  
腦を割られた泥まみれの素裸な

妻が道つている姿をそこに見た  
杭打ちに無反省でおつたわしは  
この時慄然として寺へ走つた。

わしが坊主になると、村の衆  
は笑つた。お前の女房は盗み出  
されたのだ。お前はめくらんで  
しつかりと頭の上に杭をたてな  
かつたので、しのびかえつてき  
た男は、杭の下で呻声を聞いて  
掘り返えし、犬を殺して血を垂  
した。その証拠には首のない犬  
の死骸が川に浮いた。

わしは村人の言葉に耳をふさ  
いだ。何にせよ人を殺すのはよ  
くない。と、しかし、わしは次  
第に理性を失つてゆき、煩悩に  
追われ、若しも生きてゐるかも  
しれない妻と相手の男を捜し出



そう  
と思う

ようにな  
つた。が、

表面は悟りす  
まして諸國行脚

をはじめた。修業

のためではない。妻

と男を捜すためだ。わ

しは、血まみれた素裸の

妻が、男と淫樂にふけて

いる幻覺に悩まされつづけて  
全国を歩き廻つた。わしはいつ

か、その村にしみついた傳統的  
な觀念にとらわれて、妻と男を  
捜し出したら、どこでもかまわ  
ずその場で素裸にして穴に埋め  
その上に杭を打とう。と、心に  
誓い、やがてその觀念を盲執し  
たじや。

しかし、わしの執念も遂にか  
なえられずに病んで、今こゝで  
死ななければならぬ。一念は  
天にもとどくと言われたが嘘ぢ  
や。邪惡は遂にかくなる果とな  
る。今に及んで、さもししい心を  
振り切つて死にたいと思つたが  
とうとうだめであつた。笑つて  
下され。せめて妻が死んだと

言うことが確かに解  
れば、わしは安  
らかに死ねる  
だろうに……



### 三

仁作と久代は眞青になつてこ  
の瀕死の老僧の奇怪な話を聞いて

ていたが老僧の最後の言葉が終  
ると仁作は干した茸のような僧  
の耳に口をつけて大声で言つた  
「御坊、安心して成佛しなされ  
そなたの妻はとうの昔死にまし  
たぢや」

「なぜぢや」  
老僧の声は意外に強く、眼は  
燃えた。仁作は木の皮のような  
皮膚の下に憐憫の色をただよわ  
せ、しかし、いよいよ落付いて  
「この娘は御坊そなたの娘。そ  
して、わしの可愛い娘ぢやか  
ら」

老僧は、がばとはね起き、恐  
ろしい形相で仁作へ両手を突出  
し、風が吹くようににぜいぜい咽  
喉を鳴らして、  
「わしは、死ねない」  
と、どつと倒れた。骨ばかり

の僧はこと切れた。  
仁作は、慣れた手付きで小さな  
土饅頭の傍に深く細い穴を掘つ  
た。久代は泣声をあげながら老  
僧の死骸を穴の中へ抱え入れて  
土を落した。

仁作は久代の願いで杭を打つ  
ことを思い止どめた。

### 四

その夜のことであつた。  
仁作は娘の久代を前にして独  
り言のように語り出した。

二十四年前の事であつた。  
俺は水番小屋の奥で恋人と会  
つていた。俺はその女を何者にも  
替えがたく愛していた。人妻  
と密通することについての、き  
びしい村の掟もよく知つていた  
然し俺の情熱の前には、何の  
妨げにもならなかつた。俺はそ  
の女となら何時死んでもいいと  
思つていた。

が、本当に不覺だつた。突然  
躍り込んでなぐりつけて來た男  
に、俺は無我夢中で川に飛び込  
んでいた。可哀そうに、残され  
た女は、村人達の手によつて、  
穴埋めにされ杭を打たれた。

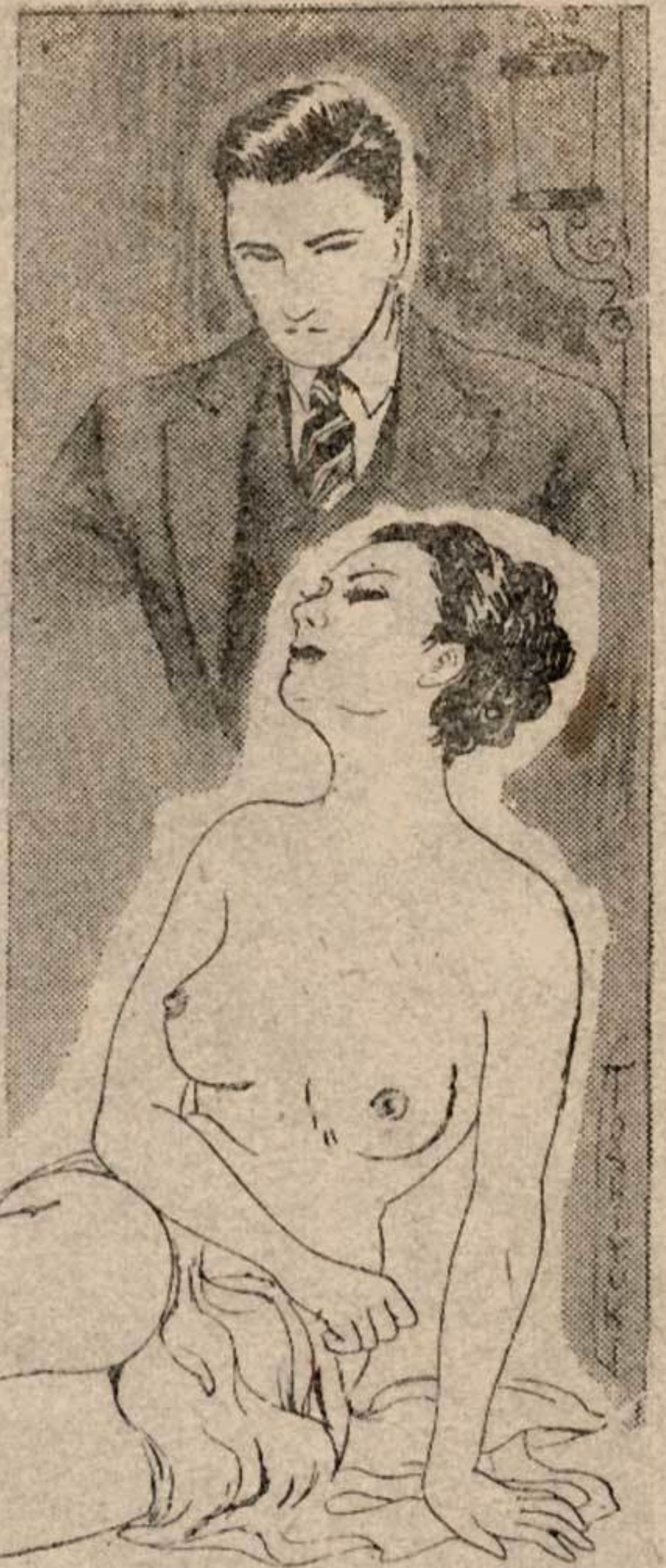
俺はその夜、女の埋められた  
場所へ行つて見た。生々しい土  
の盛り上つた個所に太い杭が三  
本ムザンに打たれてあつた。

俺は、指から血が流れるのも  
かまわず土をかき分けて、女を  
救ひ出した。全裸にされた恋人  
は、夜目にも眞白い身体から血  
をにじませて、じつと眼をつむ  
つていた。

女の胎の中には、俺の子供が  
宿つていたのだ。俺は全裸の女  
を抱えて逃げた。然し、子供を  
産んだ女は、産後の肥立ちが悪  
く、それに、杭打ちの無理がた  
ゝつたのか十日ばかりで死んで  
しまつた。

外では木枯しが吹き荒んでい  
た。





## 愛情の門

ジエームス・楨  
須磨利之画

亡夫の遺して呉れた物からぬ財産を享有して今年十二歳と十歳になる何方も女の子と共に充ちたりた何不自由なく暮して来た美絵子は遊んでいるのも能のない話だと氣づいて、何か自分でやれそうな店を開きたいと考えていた。

終戦後何かと訪れてよい話相手になつて呉れている亡夫の部下だつた元海軍大尉の笹本の奨めもあつたりして渡りに舟と笹本の肝入りで戎橋に賣物の店舗もうまく手に入れた呉れ、ヒマワリ洋装店を開業することが出来た。

笹本は縦横関係に詳しく何も彼も彼の企圖通りに運んでいった。出すまでは案じていた色んなことも総て滞りなく店も繁昌して、此の頃では優秀なデザイナーの三人も

雇入れる成功だつた。顧客からの評判もよく、サービスにも細心の周到さで、殊に美貌の美絵子を慕つてファンと言つては可笑しいけれど、若い娘達の間で非常な人氣があつた。常に愛嬌を溢れるように振舞いて人を外らさぬ應對は水際だつて微笑しいものがあつた。そんなだつたから客から客へ傳つて一度来た客はもう常客に決つてしまふという風だつた。

開業一周年の記念賣出しも昨日で終り思いがけない賣上は連日店を賑した。

少時顔みせなかつた笹本が会社の帰りでですよと言つてヒョッコリ店に立寄つた。色んな話の末、もう街はとつぷりと暮れて、美絵子は笹本への感謝の心や、一年の祝いと喜びを含めて彼を誘い夕食を共に

にして、久振りといつてよかつたダンスを愉しんでホールを出た。「奥様、もう多ですね。夜も更けると寒いです」

ぽつんと言つて笹本は身を顫わした。

「そうね、踊っている間は暑いと思つてましたのに、じゃ笹本さんお酒でも召上る？」

「御迷惑でなければ自分もそう思つていました」

お伴してよ、何処か此の辺で御存知のところあつて」

「いゝえ知りません」

「あら、丁度其処にあるようじゃありません、入りましょう」

美絵子も寒さに震われて笹本に寄り添つた。

「スラつしやいませ。——あら、美絵子さんじゃありません」

「まあ、雪枝さん、珍らしいわね。驚いたわ、もう何年になるか知ら」

「そうね、六、七年にもなるんじゃないか知ら、ほうれ、貴女が疎開されるつて言うんで梅田でお逢ひしたきりですもの」

「そうだつたわね」

「今は何方ら」

「同じところよ、戸屋にいるわ。お蔭様で

爆撃は免れたのよ」

「そう、よかつたわね。私なんか惨々よ、家は焼かれるし、夫は戦死でしよう」

「そう、言えば私の夫だつて終戦の一週間に死にやつたのよ。もう少しのところで

でところで、皮肉なもんね。ああ、そう／＼私、此処からだとはんの御近所よ、ヒマワリ洋装店を開いてんのよ。一度入らしたつて」

「え、ありがと——ちつとも私知らなかつたわ、燈台下暗しつて言うのね、ホホホ……」

……でも評判およろしくつて御繁昌ね、結構ですわ。私もお店の人のお噂聞いてて一度御拜顔に浴さなくつちやと思つてたのよ。でも何かと女一人でしよう忙しくつて御免なさい」

「まあ、御拜顔なんて、からかつてんのね意地悪」

「あら、ほんとよ。貴女つてこと知つてたら御手傳にも伺つてましたのに残念ね」

「御言葉だけで嬉しいわ」

美絵子は余り自分たちばかりで話しているのも笹本に悪いと氣がついて彼の方にチラリと美しい瞳を向けて、

「みんなこの方の御指図よ、御紹介するわ笹本充雄さん、元海軍大尉で亡夫の御友達だつた人。今は五織維の専務取締役をしてられるの、そしてヒマワリ洋装店の支配人……」

……つてのは嘘で私の顧問になつて頂いている大切な人よ。まだ御独身で芳紀正に三十五歳の新鋭実業家、何う？素晴らしいでしょう。好いお嬢さん御世話して上げて下さらない」

「まあ。——私雪枝ですの何卒宜しく、美絵子さんとはクラスメイトで大の仲好しだつたんですのよ。その内好い奥様御世話させて頂きますわ。ホホホ……」

美絵子もつられて笑つた。笹本はこうし



て涯しもない会話を聞き乍ら始終微笑を二人の顔に相互に交し乍らウイスキーのグラスを重ねていた。

「いやあ、何うも……宜しくお願いいたします」

笹本は、もう顔を眞紅にして、はにかみ乍ら頭を掻いていた。

「美絵子さん、これからちよいと御邪魔させて頂いてよ」

「え、どうぞ。たくさん御馳走しましょうね」

「じゃ、今夜は私の方で、御招待申上げるわ」

「え、たくさんして頂戴。美味しいものばかりよ、でなくちや笹本さん召上らなくつてよ。それにサービスも満点じゃなければ駄目よ。ウフフ……」

「ハイ、ハイかしこまりました」

それから美絵子と雪枝の往來が激しくなつた。二人が逢うのは芦屋の美絵子の邸だつたり、宝塚の雪枝のアパートだつたりした。

かうして繁く通ひ合つて二人の話の落ちてゆく先は、お互いに秘し隠していても生理の話だつた。性慾的な切実な要求を何うして処理しているかということであつた。これは世の多くの未亡人達に共通する大きな悩みであつた。

自漬か・密通か・金で買える男と戯れるか、それ共死んだ身になつて諦めるかの道しかない。

空闊。——それは寂寥・悲愁として砂を噛むに等しかつた。

「生理日が過ぎて二三日頃になると、とてもたまらないのよ。男だつたらと幾度思つたか知れないわ。店に来る客とじゃ厭だしそんなスキャンダルでもたてて御覽なさい、もうお店なんかペシヤンコでしょう……」

雪枝も同じように悩んでいる。

不思議にも美絵子は、自分の直ぐ眼の前にいる笹本を考えることがなかつた。

「何か好い方法つて無いものでしょうかね今更、お妾つてことはないでしょう。そんな必要ないんですもの、お金が欲しいと思つた昔のことも、今じゃ不自由しなくつて済むようになるよ、お金ばかりで女は幸福になれないつて、しみじみと考えたりしてんのよ」

「ほんとね、女の幸福つて、やつぱり腹方なしでは幸福になれないものなのね」

美絵子もやるせなく溜息をついていた。

お金がなくて生きてゆかなければ、お妾にでもなつて日毎の慾情もひらけてゆく道はある。美絵子も雪枝も同じようにこの事ばかりは何うしようもなかつた。だからと言つて役者を買うなんてことも出来そうになかつた。

或る日、美絵子が店に出ようとする所へニコ／＼し乍ら雪枝が訪ねて來た。

應接間に通るが早い、

「ねえ美絵子さん、昨夜ね、素晴らしい話を聞いたのよ。東京じゃ末亡人クラブだの、メリーウイドウグループつてのがあるんですつて」

「それ、何ういうことなの」

「それはね、私たちのようなクラブの未亡人が集つて遊ぶのよ。先づ、お互いに氣心も、信用も、そしてお金に不自由しない者に限るのよ。そうした人達は必ず一人か、二人の男性をそのクラブに紹介するの。麻雀もよし、ダンスもよし、お酒に酔つて歌うもよし、そして其の後は好きになつたもの同志で愉しみ合う……何う？」

「よく、私には判らないんだけど」

「やつてゐる間には判つてくるものよ。周囲の刺戟も手傳つて呆んやりしてられなくなるわよ。その男性も、信用でき、氣心もよく判つてゐるセントルマンに限り、紹介した者が責任を持つ、これは絶対よ、絶対素晴らしいことよ。やつてゐる間にはきつと格好もつくし、東京じゃあちらこちらに出来てゐるんですつて。これなら、理想的で、私達の悩みの種であるセックスの処理も至極簡単よ。意氣投合すれば結婚したつて好いじゃないの」

「そうねそう言えばそうね」

「そうね／＼つて感心してる場合じゃないわよ。ね、やつてみましょうよ」

「随分早急なのね」

「善は急げつてことがあるわ」

「まあ、チャツカリね」

「そうよ、女学生時代にはチャツカリ屋さんの女王様だつたじゃないの」

（次頁下段へ）

美絵子はそんな道もあつたのかと、雪枝の顔をじつと凝視める瞳が燃えるように輝いていつた。

「私、同志を集めて、來月早々発表式を準備をするわよ。心当りもあるんだから」

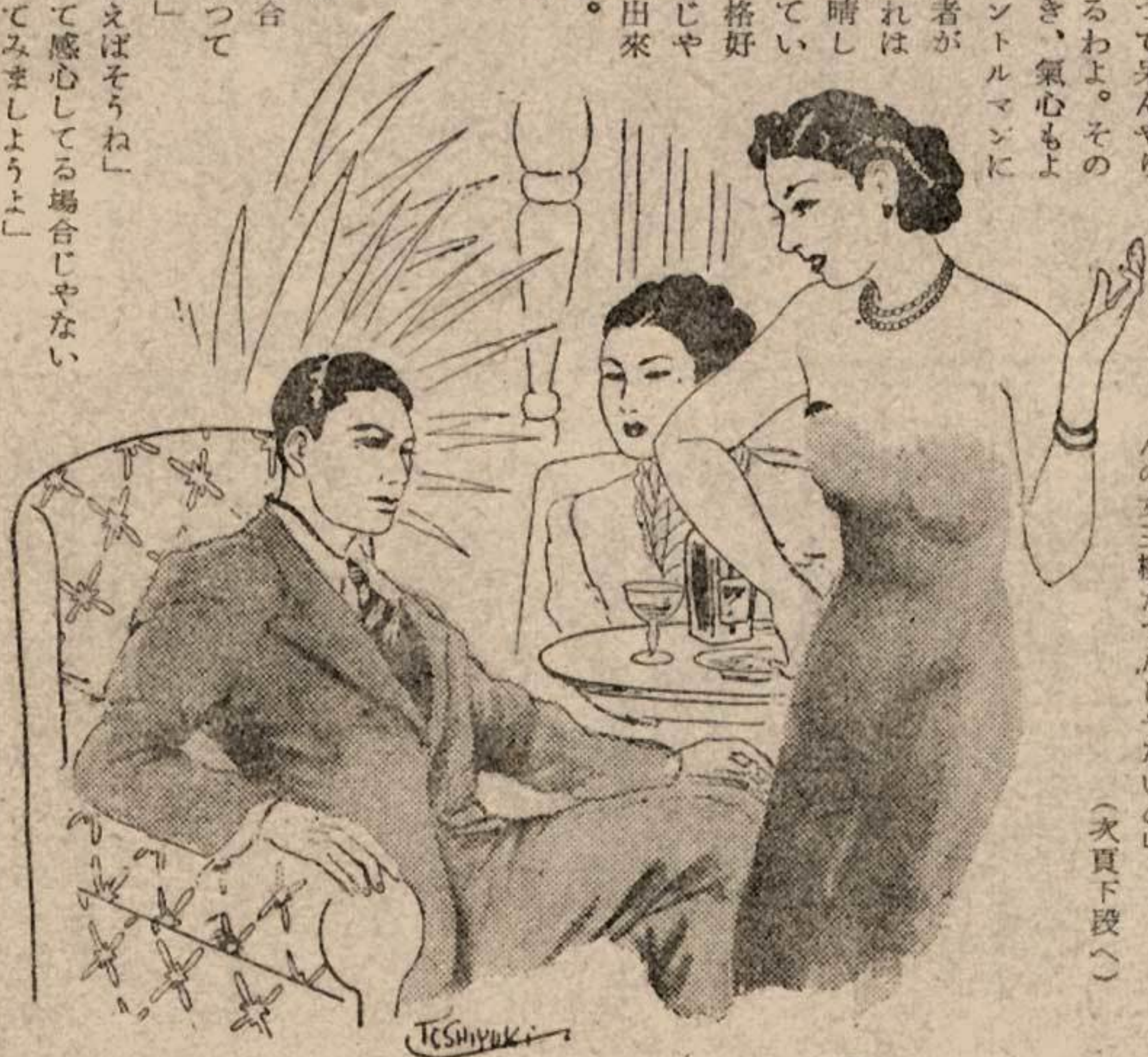
「随分早急なのね」

「善は急げつてことがあるわ」

「まあ、チャツカリね」

「そうよ、女学生時代にはチャツカリ屋さんの女王様だつたじゃないの」

（次頁下段へ）





# 枕と毛布を持つてゆく女

隅 田 菊 夫

彼の借りたバラックは、盛り場の間近かにありながら、水道もなければ、便所もなかつた。便所も水道も半丁程はなれた公衆便所を利用するのであつた。

彼、早川平助は、寒い晩や、風雨の晩にはそこ迄行くのが臆却なので、幾度かバラックの節穴から放尿したか知れなかつた。

彼が月三百円の家賃でこの僻地のバラックの三疊間に引越して来た時、「これから、どんなに困つても、何処へも勤めずに創作するのだ」

こう彼は自分を鞭撻した。

彼の部屋と公衆便所との間にかなりの空地がある。空地には焼けた煉瓦や、トタンや細切が散在していた。空地の向うは、狭い路地になつて、ヨセ屋等のゴミくしたコイルタールを塗つた黒いトタン張りの小屋が並んでいた。

彼は毎日、十時頃に起きて、顔も洗わずに、近くの簡易食堂に飛び込んで、粘汁かホルモン煮を喰つた。

食堂から帰つて来ると、机に向つて創作の構図に耽るのだつたが、しかしいくら考えても好い考案が浮んで来ないことが多かつた。

そんな時「俺には創作の才能がないのだ」こう彼は独り言を云つて、果然と空地を通る人を眺めるのが癖であつた。

この空地は近道になつていたので、いっしょに真中に道がついて、頼りなしにいろ／＼な人が通るので、この頃、彼は空地を通る女の人に眼を注ぐようになった。バアの女給、麻雀屋のサービスマ・ガール、下駄をはいた女学生、三十五六の水商賣の女等の白い素足の踵や爪先に興味を持つようになつた。

彼はもう三十六にもなるが、まだかつて恋らしい恋もしたことはなかつた。彼は若い女と清いロマンスをしてみたいと思つていた。

或る麗かな日だつた。

彼の部屋の持主である串カツの屋台店を出しているおかみさんと、裏側に最近バラックを建てた日雇人夫の娘が、空地で洗濯をしながら話合つてゐるのを、彼は寢床の中で聞いた。

「あなたの所にいる人は何にしている人ですか？」

「何んでも物を書く人だそうです」

「いつも朝寝坊ね」

「毎晩休むのが遅いからでしょう」

「あ、そうですか」

平助は、その娘を知つてゐた。度のきつい近眼鏡をかけた色の浅黒い背の低い女である。着物の柄なんか何処となく田舎臭いところがあつた。言葉のアクセントは彼の国に似てゐた。

彼は早速揚子をくわえて戸外へ出た。初春の陽がふるえてゐた。最初に彼はおかみさんに「お早よう」と声をかけた。「まア、今、早川さんの噂をしてゐたのですよ」

「そうかね」こう言つてから彼は娘に

「あなたは高知縣の方でしょう？ どうもアクセントが……」

「そうじゃありませんわ、皆がそう言いますが、私は岡山縣ですよ」

「そうですか、でも、随分アクセントが僕の国と似ていますね。さつきからあなたの言葉を聞いて僕の国の方でないかしらと思つたのです」

「あら、そう」こう言つた後で、彼女は

「あなた小説を書いてゐるんだつてね、好いのがありましたら見せて下さいね」

こりや面白くなつて来たぞ、こう來なぐちやいけないのだ、彼は微笑んだ。

「大したものはありませんが、見せまし

でも、腰方を紹介するなんて私困るわ。心当りつて無いんですもの」

「あら厭だ、笹本さんつて人あるじゃないの。笹本さんみたいな人が本当は理想的人物なのよ。獨身でハンサムで素晴らしい人だわ」

「えい？ 笹本さん。——」

「そうよ、笹本さんよ、そう／＼笹本さん獨身つて言つてたわね。美絵子さん」

「え、そうよ」

「私、好きになつてゐるの、ねえ、美絵子さん彼氏ゆづつて下さらない」

「ゆづるつて。——ゆづるもゆづらないも私とはそうした何の關係もないんよ」

「ほんとね。——安心したわ、私はもう笹本さんに決めたことと」

「まあ。——」

「負けた？」

「負けたわ」

「そんな弱氣で何うすんの。ハリキリなさいよ。ね、勇氣を出して——ね、美絵子さん、今晚お店へ入らつしやいよ。好い人みつかるかも知れなくつてよ」

「厭ね、サカリのついた牝犬みたいじゃないの」

「どうせサカリのついた牝犬よ。營養たつぶり。で、ね、美絵子さん約束したわよ。いいことね」

「え」

「じゃ、その後のことはお店で話しましょうね。じゃ私は失礼するわ。ああ、忙しくなつた」

雪枝は自分の言うだけのことを言い終ると、もう用はないとばかりさつさと歸つて行つた。



よう」

彼女は平助の小汚ない三疊の間に腰を下した。彼は新聞や雑誌に発表した小説を、古トラントの中から取り出した。

「私も書くのが好きですよ」

「何にか書いたものがありますか」

「いや、まだ書いたのではありませんが」

「じゃ、これから書きなさい」

その時、洗濯を終ったおかみさんは「早川さん、これから普沼迄行つて参りますから、留守を願いますよ」

おかみさんは串カツの材料の肉を仕入れに行くのであつた。彼はいよく娘と話合ふ機会の長くなつたのを内心喜んだ

そして、一寸でも長く女を引留めておこうと考えた。

「これは雑誌に発表した創作です。これは新聞に書いた小説です」

彼女は驚いた眼つきでそれ等を見ていた。

その時、彼は原稿紙に鉛筆で次のようなことを書いて女に見せた。

「僕は貴女をとうから恋していたのですでも今日迄話す折りがなかつたのです。どうぞこれから僕を愛して下さい」

彼女はそれを読んで微笑んだ。

「私もあなたのような人なら……」

平助は無性に嬉しくなつた。

「それじゃ、誰もいませんからお入りなさいよ。いいでしょう」

その日から二人は楽しい恋仲になつた。彼女は帰り際に、

「今晚、私のところへいらつしやいよ」

と言つて彼の枕と毛布を持つて帰つて行つた。

その晩、彼は彼女の所へ行つた。部屋は四疊半で、彼の三疊よりはいくらか奇麗であつた。彼女の父親は港灣の荷上げで忙しく築港の人夫小屋に寝起きしていたので留守であつた。

二人がびつたりと寄り添うている時、

部屋の戸を叩く女の音がした。

「もしもし、もうお寝みですか」

「一寸、お待ち下さい」

彼女は言つて、平助を離れた。平助はあわてゝ毛布と枕を挿入にかくした。それは自分ながら感心する程、機敏なものであつた。

そして、彼は普通の用事で來ているような態度で、客の入るのを待つていた。

しかし、胸の動悸が激しかつた。

彼女は割合におつとりした態度で客を迎えた。訪ねて來た女は三十前後の背の高い、菊斑面の鼻の低い小汚ない女であつた。

平助は女と擦違ひに「それじゃ、明日又参りましょう」いかにも用事ありげに女の部屋を辭した。

彼は訪ねて來た女が憎くて／＼たまらなかつた。お蔭で彼はその晩、毛布と枕なしで寝なければならなかつた。その晩彼は、な／＼寝付かれなかつた。

明る朝、彼は昨夜訪ねて來た女の素性を訊いた。その女には紐の男があつて、あまりうるさく女につきまといつて來るもので、一晩泊めてくれと言つて逃げて來たのであつた。

平助はその話を聞いて、あんな拙い面の女の所へ執拗に來る男は一体どんな顔をしているだろうと思つた。

× × ×

それから一月ほど経つた、薄物を着る時期になつた。

或日、平助は女の所へ行つて、ふと彼女の乳房を見た。ぶつくり膨らんだ乳頭が葡萄色になつていた。

平助はむつとして女になじつた。女はとう／＼白狀した。女の言葉によれば、麻雀屋に出入する若者と懇ろになつて一年半ばかり同棲の上、三月程前捨てられたというのだつた。

「矢張り俺のような者の処へ飛んで來る者にはロクな者はない」と平助は思つた。

しかし、彼には女と別れる勇氣はなかつた。 — おわり —



「私は何うかしていたのだから」

笹本の逞しい溢れるような肉附は、男性的な性的魅力も充分だつた。

「私は、雪枝さんにあんな風に言つてしまつたけれど、これまで笹本さんの示して呉れた好意は、亡夫の部下だつたということではなしに、好意以上のものと受けとらなければならなかつたのじゃなかつたのか知ら……。笹本さんは口にも、素振りにもそんなことを表わさないが、本当は私というものを愛情でつつんでゐたためて呉れているのかも知れない。今日まで盡して呉れたことは、好意では出來ないことに何故もつと早く氣がつかなかつたのだろう。決して自惚れにやないわ。じや自分は何うなの。

笹本さんを今眼の前に考えた時、厭だとも嫌いだとも言えない。嘘をつくのはやめよう。好き／好き／好きだわ、きつと愛してゆける。よく氣がついたことだわ、彼の人私も私を愛して呉れていたなら済まないことになるところだつた。子供達も笹本さんを親しみ慕つてゐる。彼の人も二人の娘を可愛がつて呉れている。そして私も好き——もこれ以上の條件つてないことなんだわ」

美絵子は慾情の火の燃え盛つてゆくのを覺えた。

「雪枝さんに渡すもんか、私のリーベを。雪枝さんには悪いかも知れないけれど、昔からチャツカリ屋さんだもの、今の内なら悲劇というもんじやないわ」

美絵子は電話室に飛び込むようにして入つた。わくわくと胸が躍つてゐる。K織維を呼出すためにダイヤルをせわしげに廻していた。





### ◎ 慈 善

妻「あなたみたいな食い意地の張った人はあたし知らないわ。何んだって手当り次第、食べて仕舞うんですもの」

夫「でもね。若しそうでなかったら、一体お前の料理なんか、誰が食べて呉れるだろう」



### ◎ 未 確 認

A「本当に御災難ですわね。お宅もこの颪風でさぞ被害をお受けになったでしょう？」

B「いや、それがね。皆目解らないんです。何しろ、まだ水の中にかくれて居りますんで……」

### ◎ それは無理

巡査「あの、戸籍調べですが、御主人



### ◎ 規則違反

公務員「課長さん、村山君が遂々亡くなりましてさうで」  
課長「それは困った。実はまだ前の病氣缺勤の方が上司の決裁になつて居ないんでね」

### ◎ 公 私

友達「君は易者の癖に、自分の災難がどうして解らなかつたんだい？」



### ◎ 定 評

易者「ねえ君、斯うして君と同じ場所と同じ餌で釣つて居るのに、どうして僕だけに魚がかゝらないのだろう？」

友人「君にかゝつたら、命とりだからな」



### ◎ 餘 病

A「小島の奴、当分あの病院を退院出来そうもないぜ」  
B「ほう！そんなに悪いのかい？」



### ◎ 証 據 以 上

警官「あなたは、これだけ証拠が揃つて居ても、御主人の死が自殺でない主張なさるんですか？」  
夫人「だって、主人つたら、とても怠惰で、今まで、何一つとして自分の手でやつたことなんかないんですもの！」



### ◎ 相 對 性 原 理

父親「君は図々しい男だね。一文なしの素寒貧の癖に、よくも俺の娘と結婚したいなんて申込んで来たものだね」  
求婚者「冗談でしょう。僕が金持だつたら、誰があんな娘に……」



## ◎ 人造美人

先生「君はどうして、そう毎朝、遅刻ばかりするの？」

生徒「あの、家には洗面所が一つしかないんです」

先生「一つで沢山じゃないか」

生徒「それが、何時も姉さんが先に占領して仕舞いますので……」



## ◎ 墓穴を堀る

母親「お前とあの男のひとが接吻して居る所を見たと言ふ人があるんだけど……」

娘「あら、そんなこと断然うそだわ。だって、あの時は停電で眞つ暗だったんですもの……」



## ◎ カムフラージュ装

男「お宅のラヂオは大分雑音が激いようですが、お修理いたしましょうか」

主人「いや、どうぞその儘にして置いてください。実は、近々、女房が病院を退院して参りますので……」



## ◎ 無責任ね

男「僕はあなたと結婚できたら、死んでも構いません」

女「あら、莫迦にしているわ。あなた、妾を未亡人にする積り？」

## ◎ 後悔先に立たず

妻「あなた、もう一度、新婚旅行をやつて見たいと思ひにならない？」

夫「冗談じゃない。同じ誤りを二度も繰り返すなんて愚の骨頂さ」

## ◎ 畜生ッ

妻「ねえ、あなた、もう一度、新婚旅行をやつて見たいと思ひにならない」



夫「うん、僕は是非もう一度やつて見たいと思つて居るんだ。それじゃ、お前、別れて呉れるかい？」

## ◎ 先物契約

男「ねえ、君の結婚式には是非僕も招待して呉れ給え」

女「あら、妾、もうすんだのよ」

男「いや、この次の時でも結構です」

## ◎ 複數

男「やあ、久しぶりだね。相変わらず美しいね。時に、一昨日、大阪で君の前の主人に逢つたよ」

女「あらそう！ 背の高い方？ それとも肥つてる方？」



## ◎ スピードアップ

客「おい、大至急飛ばしてくれ。六時の結婚に間に合わない困るんだ」

運轉手「旦那、そりや無理ですよ。どなたの結婚式なんです？」

客「俺のだよ」

運轉手「いつそのこと、ホテルでお待ちになつたらどうです」

男「あの、大分時間が遅れたんですが、この会場の結婚式は、もうすみましてでしょうか？」



## ◎ 代役

男「あの、大分時間が遅れたんですが、この会場の結婚式は、もうすみましてでしょうか？」

案内人「いえ、未だでございますがあなたはどなた様で……？」

男「あの、実は、花婿なんです……」

## ◎ 厭世家出

女A「奥様、どこかに可愛い猫が居たら一匹、世話してくださいませんか？」

女B「あら、お宅には一匹居たじやないの？」

女A「ええ、でも先日鼠取りを買つて来たから、悲観して何処かへ行つて仕舞つたの！」





# 史あい婦媚媚

子貴極京  
子玲君花絵

あたいを女にしてくれたのは



あたいを「女」にして呉れたのは三郎太さんだった——。

白石愛は、轉落のはじめのベ——ヂに茂木三郎太の名をとどめて書いていた。

三郎太と愛とは、その頃思春期にあつたというだけで、恋だの愛のといったものの感情からはほどとおく、ただ好奇のところに犯した純潔の別離を深い考慮もなく失つていた。

その日、サブちゃんの色んな雑誌や本を持つて遊びに來た。あたいは、もう三ヶ月も前に初潮をみていて、既に女としての條件的な変化もあつて性への目覺めにあつた。サブちゃんは黙つて男と女がキスをしている写真を見せた。或いは女の裸体集というグラフも見せた。

「愛ちゃん、キスしよう」

「うん——あたいは唇をサブちゃんの前に突き出した。サブちゃんはあたいを抱いて唇を合して來た。『とうとう』……あたいはサブちゃんとこんなになつてしまつた。

「結婚して呉れるわね」

「……もう結婚してるじゃないか」

「？——」あたいはサブちゃんの言葉がよく判らなかつた。それからサブちゃんとあたいの結婚ごつこは続いた。

そんなことをし合つて二ヶ月も経つてサブちゃんはあたいと遊ばなくなつてしまつた。サブちゃんは日雇人夫の子だつたけれど、学校ではいつも優等生であつた。新制中学を卒業すると金屬工場の給仕になつたあたいは何処へも行かずに家にいた。

その後サブちゃんが來なくなつてから、あたいはサブちゃんのことを思い出すたびに淋しくなつて夜一人でねていられないくらいになつた。あたいはもう生娘じゃなくなつた。性への目覺めが執拗にあたいの性情を刺戟する。それは淋しさにながつて郷愁めいたものに落ち込んでいつた。たまらない異性への憧憬があたいをじつと暗いじめじめした家の中にそつとして置いて呉れなかつた。あたいは性慾の鬼となつて家を出た。父はまだ帰つていながつたが、あたいは天王寺公園の中を歩いてゐた。新世紀辺りの空が夜の燈りを映して明るい花が咲いているように燃えていた。

「キミ、キミ遊ばないか」三十歳を過ぎたばかりの会社員風の男が声をかけた。

「いいわ」あたいは、ぼつんと一言、突嗟に答えていた。二人はホテルに入つた。

「キミはまだ日が浅いね。シヨバイ(初賣)だろう」あたいは頷いて笑つてみせた。

男はホテルを出ると、あたいの手に何か掴ませたかと思うと、もう口笛を鳴らしながら、公園の中に姿を消して行つた。

街燈の灯りの下で、あたいは手の中を開いてみた。百円札が五枚小さくたたんであつた。

あたいは、こんなにして金が貰える事を



初めて知った。それから急にお腹が空いたように思つたので公園の道を横ぎつて歩いた。

「ねえさん、来ないか」あたいの後から声をかける者があつた。あたいは黙つて知らん風を装つて歩いた。すると、バツツ、バツツとゴム草履の音をさせて駆けて来た男は、

「ね、五百円で好いだろ」男は矢庭にそう言つたかと思つと、あたいを抱きしめた。

「はいよ、約束だ。五百円取つときな」半被を着た職人風の男はバツタ、バタと駅の方へ走るように歩いて行つた。

あたいは街に出て、とんかつと御飯と大きな大福餅を二つ食べて家に帰つた。

「何処を今頃ほつき歩いて来たんだ。馬鹿ッ野郎、しよりのねえ女つちよだ。早く寝な」父つあんは、そう言つたきり薄團をかぶつて今夜も又ドロクをあほつて来たのであろう熱柿臭い息をしながら、もう他愛もなく軒を叩いて寢込んでしまつた。二十燭光の電燈は薄暗く、一枚、二枚とお金を数えた。まだ七百九十円もあつた。あたいは寢巻に着換えると床に入つた。

あたいの母ちやんは居ない。若い燕と逃げつたんだと父つあんが言つていた。あたいは今でも母ちやんを好きとも嫌いとも思つていない。若い燕つて何んなもんだろ。初めは判らなかつたけれど、後になつて岩吉つあんが若い燕だと知つた。岩吉つあんはガス会社の集金人で、よく晝間母ちやんとひそひそ話をしてたことがあつた。「愛子や、岩吉つあんが、お錢をあげるつ

て、映画でも見にいつたら何う」母ちやんはそう言つて百円札を呉れたことがあつた。あたいは喜々として新世界の朝日劇場へ行つた。ある時は「愛ちやん、好い子だから遊びに行つてよ。これ上げよう」岩吉つあんは、あたいの手に百円札三枚も呉れた。

「愛ちやん」

「何に、母ちやん……」

「何んでも無いんだよ。もたにお金つかうんじゃないよ」

「うん」

「母ちやん、好いじゃないか。なあ、愛ちやん活動でも見に行つて来なよ」

「うん、岩吉小父さんありがと。母ちやん行つてくるよ」

あたいは、岩吉つあんの来た時は、いつもこうして家に居無いくことにした。きまつて呉れるお小使いが、大人の世界の鼻薬にうまうまとはまりこんで、母ちやんや岩吉つあんはあたいの邪魔者が居なくなつてよろこんでるんだと後でうすうすわかつて来た。母ちやんと岩吉あんが抱き合つて唇を吸い合つていたのを障子の破れ穴から覗いて見たことがあつた。

「あつ汚つたらしい」と、あたいは思つて外に出た。

開場したばかりの朝日劇場は客もまばらだつた。

舞台には親娘の乞食が公園の道に座つていた。男の親は盲であつた。一人の通行人が娘に金を恵ぐんで行つた。

娘「お父さん入れて頂いたわよ」

「親」ありがとございます」

又、一人の主婦さん風の通行人がお金を娘に渡した。

娘「お父さん、入れて頂いたわよ」

親「ありがとございます」

其処へアロハシャツの兄ちやんといった風の男が出て来て娘の耳に何かを囁いた。

娘とその男は、大きな樹の蔭にかくれてしまつた。すると木の蔭から男のツボンやパンツが飛び出した。最後に娘のものが放り出された。

あたいはこんな

ことにも慾情をそ

そられるようにし

て劇場を出た。あ

たいの足は逸散に

家の方に向つてい

た。家では、きつ

と——何かを期待

するよう飛んで

帰つた。そつと音

のしないように静

かに戸を開けて入

つた。奥の部屋の

障子の破れから内

を覗いてみたが、

よりに座り込んだ。それから、あたいの母ちやんは家に居無くなつた。

「父つあん、母ちやんは岩吉つあんと何処かい」と行つたんだろ」

「馬鹿野郎ッ。子供の知つたことじゃねえよろし、見つけたら眞二つだ」父つあんは

カンカンに怒つて、あたいはカストリを買

いにやらされた。それから二、三日仕事に

も行かず朝から酒ばかり飲んでいた。





「おい、愛よ。お前父あつんの氣持が判るか」

「うん、判るよ。母やんも岩吉つあんも悪いよオ。母ちやんは父つあんの妻なんだろだのに岩吉つあんは母ちやんにキスしてたよ、ね、父つあん。岩吉つあんは母ちやんが好きだつたんだね」

「うん、母ちやんの若い燕だつたよオ」

それから、父つあんは毎日のように仕事に出て行つた。あたいは、これで父つあんのいない時間のできたことを喜んでいた。日曜日の公園にあたいは姿をみせた。ブラブラと歩きながら、遊びそうな男を探して歩いた。やがて——晝間は駄目だと判つた。

家に帰つて鏡湯に行き、クリームと白粉を藥局で買つた。鏡台の引出しに母ちやんの残していつた口紅があつた。あたいはきれいに御化粧して、もう黄昏れた公園を歩いた。

「おい、ねえちやん、幾らでいいんだい」  
学生風の男が呼んだ。

「八百円よ」

「高エなあ」

「だつて、あたひ、まだ処女みたいなものだもの」

「処女か」

「みたいなもんよ」

「何んでエい、みたいなもんか。まあ、いだら八百円やるよ」

「先に貰いとくわ」

「へん、チャッカリしてやがんの——」

「おい、君なんて名前だい」

「あたひ、白石愛つて言うの。あんたは」  
「俺がエンコの六つてエんだ。覚えときな又好いこともあるからな」

エンコの六は器用に投げキッスをして明るい新世界の方へ歩いて行つた。

あたひも、その後をつゞくように歩いていった。

その晩、あたひは三人の男をお客としたもう十一時も過ぎてホテルを出ると街はひっそり閑として人通もまばらだつた。くたくたに疲れきつて家に戻つた。父つあんはあたひの歸つたのも知らないで高い軒を歩いて眠つていた。あたひは音のしないように寢床にもぐり込んだ。

明け方近かつた。まだうす暗い晩秋の六時頃だつた。あたひはサブちやんの泣いてゐる顔で夢から醒めた。サブちやんは黙つたまゝ泣いてゐる顔は寂しく歪んでいたようだつた。

「サブちやん」小さく呼んでみた。一度サブちやんに逢いたいと思つた。

父つあんを送り出すと、あたひは晝迄ぐつすりと寢込んだ。鏡湯に行つてかえつて來るとサブちやんから葉書が來ていた。

——愛ちやん、元氣ですか。僕は一度逢いたひと思つて二、三度家に訪ねたのだけれど留守だつた。僕は明日早く東京に行くことになつた。何れ東京に着いたら住所を知らします。元氣で暮して下さい。さようなら

茂木三郎太

あたひはきゅつと唇を噛んだ。寂しさ、悲しさが、いつべんにこみあげて來た。あ

たいだつて逢いたかつた。ポロポロと大きな涙が頬を流れた。あたひはがっかりとなつた。もうサブちやんが大阪に居なくなつた。何んのために東京へなんか行つてしまつたんだらうか。もう今頃、何の辺を汽車は走つてゐるのだらうか。あたひはたまらなくなつて大きな声を張りあげて泣いてしまつた。

「サブちやんよオ……なぜ、あたひを残して行つたのよオ。ああ、あたひは淋しい。あたひは悲しいよオ、サブちやん……サブちやんよオ……」

あたひは壁の上にくつ伏して涙の枯れるまで泣いてやろうと思つた。

今迄、それほどに思つていなかつたサブちやんのこと、東京と大阪に離れ住んでゐることに心の空虚のできたことを見出した。あたひと、サブちやんの間には決して恋愛めいた感情はなかつた。あの日からあたひは女になり、あのことに耐えられない慾情の捕虜になつていたあたひは、一つしかないサブちやんの存在をはつきりと知つた。

一ヶ月、二ヶ月と経つたがサブちやんからは何の便りもなかつた。

「東京へ行つて、きつと、あたひより好い人と……」そう考えを巡らしてゆくと、あたひは、もう、じつとしてこの大阪に居るのが辛くなつて來た。

「東京へ行こう」

「サブちやんを渡し出して二人は夫婦になろう」

こう、思いつめると、あたひはじつとし

ていられなくなつた。

「父つあんには黙つて行こう。その方がきつとお互いに幸福になれる」

母ちやんが岩吉つあんと墮落ちしてから大工の頭領から後妻の話があつた時、

「俺ら、もう女房なんて柄でねえです。女房に逃げられた男つて、馬鹿みたいなもんで。あ。それに愛の奴を継母と置くことは可哀相でできねエような氣もします。頭領後妻の話は水に流して貰いてエんでございます」

そんな、やさしい父つあんを置き去りにしてゆくのは辛い。だけど、あたひは、それよりもつとサブちやんと逢われないことが辛い。あたひはとうとう東京へ行く決心をした。

父つあん、あたひが居ると、父つあんは後妻が貰えない。父つあんが、あたひのこと思つて呉れること、よく判つて涙が出る程嬉しいんだけど、まだ父つあんは若い。どうか、好いお嫁さんを貰つて幸福になつて下さい。あたひは、もうこんな大きくなくなつたもの、何んとか働いて自分で食つてゆくから心配せんようにして下さい。それから警察なんかへ届かないで、あたしを棄さないで下さい。あたひは生きてゆく。父つあんこれは少いけれど置いてゆきます。あんまり酒をたくさん飲まないようにして丈夫でいて下さい。あたひもきつと三、四年したら大阪へ歸つて來ますから。父つあんのこと何時も



悪つて暮してゆきます。では、さようなら  
愛より

あたいは、或る日置手紙と三千円のお金を茶餉<sup>ちやう</sup>の上にのせて大阪を発つた。父つあんには本当に悪いことだと、よく判つていながら、あたいの心は東京の空に飛んでいた。

あたいは、誰一人として知つてゐるものもない東京に着いた。

朝霧の深い日であつた。

あたいの東京の第一歩は、二尺先も見えない霧の中に立つていた。

「サブちゃん」

「サブちゃん」

と、呼んでみた。

一年すぎ、二年すぎてもサブちゃんには逢われない。

「おい、あの時の君じゃなかつた」

銀座の尾張町の角に立つていた時、こつ言つて、あたいの正面に立つた男、それは天王寺公園で一度客にした覚えのある左の目の下に小豆ほどのほくろのある、エンコの六だつて言つた男が、もう好い青年になつて紺のフラーノのダブルもよく似合うあの時の男であつた。

エンコの六に逢うまでの二年で、ラクテッ(有楽町)では好い姐さんになつていた。

「茂木三郎太」。

「うん、何処かで訊いたような名前だよ」

エンコの六、その時は、写真報道社のキ

ヤメラマン服部淳一は、あたいに新らしい希望をもたせて呉れた。

「ねえ、思い出して。——お願い、探し出して呉れたら、出来るだけの御礼するわ」

「うん、きつと覚えがあるんだよ。だが、今どうしても思ひ出せない。よく、覚え出したら知らしてあげるよ」

「え、ありがと、是非お願するわ」

あたいは服部淳一にアドレスを渡した。その服部のために、あたいの東京へ出て来たことに、大きな希望がふくらんだ。だが——これから書こうとする悲劇を神ならぬあたいの知りようもなかつた。

遂に探し求めた。

その時——。

れいこ

茂木三郎太と、

あたいは何んな邂逅をしたか。

皆さん。少時く

あたいを休息さして——。

あたいは、そう

言つて臨終の枕辺

に寄り添つてくれ

る友達に水を飲ま

して呉れと言つた

外は牡丹雪が、

綿をちぎつたよう

に降つていた。

キヨも、春美も

早苗も、リリーも

花枝も居る。

「もう、すぐ連れ

て来るわよ」

キヨが慰めるように言つて呉れる。

でも、あたいは、もう、このまゝ、あの人と逢わずに死んでも心残りが無い。

「何をそんなに弱いことを言うのさ。姐さん」

やさしい花枝が泣いている。

リリーも早苗もすすり泣いて呉れている

あたいは唯、父つあんが何うしているかと気がかりであつた。暢氣な父つあんのこ

とだ、今頃は、好い人を貰つて子供の一人

も出来ているだろうか。

あたいは、

「じゃ、東京へ来てからのお話するわね」

皆んなは頷いている。

もうクリスマスに近い病院のベッドに、

あたいの女の一生を終ろうとする、静かな

落着いた、病氣でいることが嘘みたいと思

われてならなかつた。

(長篇の一部)

## 「前篇」

あたいを女に

して呉れたのは

(了)

## 次号予告

媚娼婦あい史

「續篇」

あたいは東京へ出てきた。

御期待を乞う。



角、金  
桂、桂  
十五手詰  
發表  
三月号



風流太郎

◎用心第一

「奥様、御買物でしたの？あら、それ、野球のバットじやございません？ お宅の旦那様、野球をおやりになりますの？」  
「いゝえ、これ、妾が使いますのよ」

◎五十年の不作

妻「あなたなんか、新婚当時のことは、もう忘れて仕舞つたんでしよう？」  
天「冗談じやない、毎日後悔して居るよ」

◎やぶへび

妻「あなた、昨夜は何処へお泊りになつたの？」  
夫「うん、酔拂つて木村の家に厄介になつちやつてね」  
妻「あら変ね。先刻、木村さんの奥様が昨夜は木村がお宅に御厄介になりました……と御礼に見えたわよ」

◎予備隊

男「ね、僕と結婚して呉れませんか？」  
女「あら、妾、もう結婚しちゃつたのよ」  
男「じゃ、この次の時で結構です」

◎交替

君「何処かへ旅行でもするのかい？」  
「うん、新婚旅行さ」  
「それにしても奥様の姿が見当らんじやないか？」  
「近頃とても物騒でね、家を空ける訳に行かないんで、一人宛交替に行くんだよ」

◎喪酒

「莫迦にいゝ御機嫌だね、大分、廻つて居るらしいね」  
「うん、友達達の告別式の帰りだね」  
「そいつはちよつと不謹慎じやないか？」  
「いや、飲んだのは黒ビールだ」

◎相手が悪い

君「奥様の姿が見えない様だ」

「うん、機嫌を悪くして実家に帰つちやつたよ」  
「どうしたんだい？」  
「キツスをしたんでね」  
「うん、相手が女中なんだ」

◎闘争心理

社長「君達の要求は全部承知しましょう。他にも、もつと要求なり希望なりがあれば遠慮なく申し出して下さい。何でも考慮しましょう」  
労組員「冗談じやない、これじゃ争議にならないじやないか？」

◎迷薬

客「君の店で買った避妊薬は、あつちや駄目だ。避妊どころか、双生児が産まれちやつたよ」  
薬局の主人「それは変ですわ。あなた、夜、御用の前に二錠お飲みになりましたでしような」  
客「いや、一錠だ」  
薬局の主人「それだからです。双生児の避妊には二錠のまねば駄目です」

◎実存主義

「この裸像、仲々素晴らしいね、断然これを買うことにしよう、冗談じやないぜ。君みたいな素寒貧にこの大作が手に負えるものか？」  
「いや、買うのはモデルの方さ」

◎試験結婚

男「流石に君の結婚式だけあつて男の招待客が随分多いね」  
女「あれ、みんな予備隊なのよ」

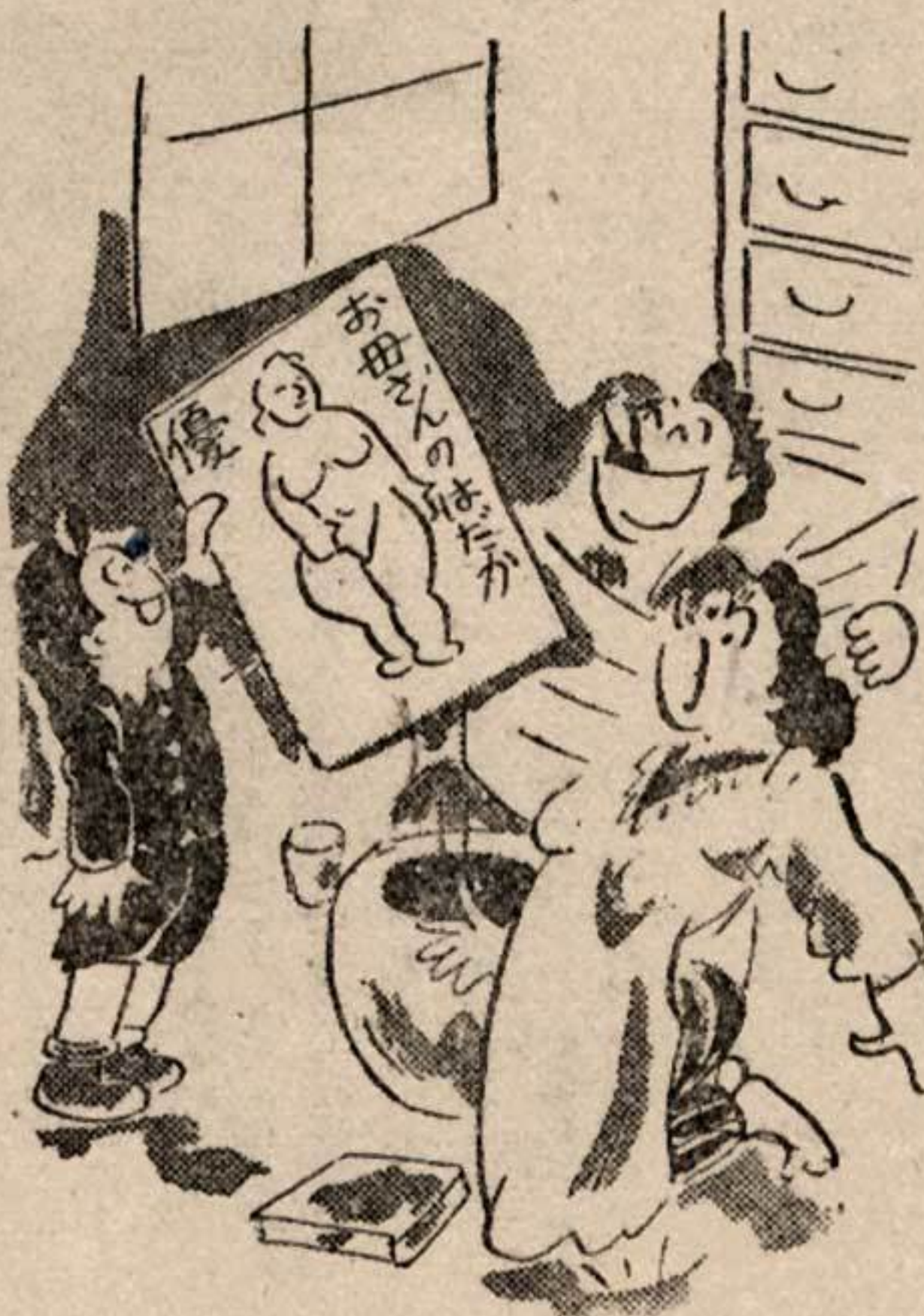
◎實証

君「何だつて、自殺なんて莫迦な真似をする氣になつたんだい？」

優を貰つたわけ

山 彫 三

子供「はじめて図画で優をもらつたヨ」  
母親「なにを描いたの？アラツマア」



「うん、女房の奴、何時も口癖のやうに、あなたみたいな意地者待せめて何か一つ位、自分の手でやつて見ろと言やがるもんだから」

◎現実主義

「あら奥様、どなたかお待ちになつて居らつしやるの？」  
「ええ」  
「ああ、今日は月給日でしたわね御主人を御待ちになつて居らつしやるのね」  
「いゝえ」  
「え？じゃ、どなたを？」  
「月給を！」

◎倦怠期

女中「旦那様、大変でございます昨夜泥棒が押入りまして奥様の着物や洋服をすつかり持つて

◎順番

夫「行つて仕舞いました。チエツ、女房も一緒に持つて行けば好かつたのに！」  
女「あなた、私の結婚式に列席して呉れる？」  
男「冗談じやない、君の結婚式に招待されるの、これで三度目だぜ」  
女「いゝじやないの、この次はあなたと結婚するから」

◎さては？

君「どうして、あんなに三度の飯よりも好きだつた魚釣りを、近頃ぶつくり止めて仕舞つたんだい？」  
「うん、魚の値段があがつちやつたんでね」

キダンギャク  
トビックス

◎あふれ娘行状記

母親「お前つたら、お母さんが見て居ないと思つて、他所の男と二度も接吻するなんて……」  
娘「違ふわ。あの男、私の唇を盗んだので返して貰つたのよ」  
母親「でも、二度目は随分長かつたじやないの？」  
娘「利息をつけて貰つたのよ」



# 水門 妖魂記



津美村 玄峰 画

一

新居浜市の東、多喜浜村の海上二軒にある大島は、遠く後宇多帝の昔から、「御領目録」に新居大島とあるとおり古くから皇室領であつた。

紺の玉を溶したまゝの脾色にかすむ周りは七軒、戸数二五八のまことに平和な漁村であつた。背面には標高百四十七米の山が墨

絵のような寂かな姿を、瀬戸内海にうつしてゐた。

対岸に面した港から出るボツ／＼船が幽かな水脈を残して、多喜浜通いの若者達が日に幾度か二軒の海上を往復するのであつた。

こうした物静かな漁村の、その水門のほとり、それでも、どうやら形ばかりの陋屋に親子三人が、船頭たち相手の駄菓子を並

べて、行くさ帰るさの人々に淡い印象をのこしてゐる。

きみは美しい娘だつた。いつの間にかこの島の若い傳説の姫君となりおおせていた先づ島の小学校の名簿から拾い上げる。齊藤きみは年老つた父親庄助と鼻先が地面にすれる程腰の曲つた母親とを守つて、この島の入口の水門に住んでいた。働き者だつた二人の兄は、とりの昔に戦争にとられ

た。きみがこんな奇麗になつたのは、つい二年程前からだつた。きみが十三四の時分は色も黒く肌も粗く、毛も赤つ茶けていて薄汚ない田舎娘だつた。

——が二年前の秋から冬にかけて、急に鼠蹊部が痲痺を起して劇しく苦悶したことがあつた。多喜浜に薬草園を持つてゐる近

二

大島の夜は耳の底が固つてしまふほど静かであつた。わづかに波の音が夜風にさざ波を立てる外、水門に泊つた船のギリ／＼軌む帆柱の音、位のものだつた。そつした静かな夜毎、きみは多くの漁師や逞ましい船頭達のいゝ玩弄物になつてゐた。

たまゝ帰つて来なかつた。向う岸の多喜浜や楠崎へ通う村人のために駄菓子を賣つていたが、此の頃ではうどんやそば等も店先で食べさせることにしていた。きみの仕事は極めて簡単なことで、年老つた父親が奥で作つたうどんの鉢を、土間の板敷に腰かけた客へ運ぶだけのことであつた。里櫻の螢のように、うすら桃色の顔に濡れて、つぶらな瞳、十二分の媚と魅力を持つていたきみは、島の若者や、出入りの船の男共の心を奪わずにはいゝなかつた。此の美しい娘は十六になつた。彼女が後に聞かず語りに話した処によると、もうその時分すでに異性なしでは、一日もじつとしておれなかつたと。



藤という老人がそれを聞いて色々な事を調合して與えたが、一向效かなかつた。

そのまゝ冬を越して春になると、ケロリと憑き物が落ちたように癒つてしまつた。不思議なことがあるもので、この病氣が治ると共に日に増してきみの容貌は神秘めいた美しさが加つて行つた。まるで人間が變つた様に、どんよりとしていた眼は澄んでパツチリと輝き肌は一度むいたように色白で理も細かに、頭髮は背丈に程延びつやつやと光沢を加えて來た。

さあ、此れが大へんな評判。いつの間にかきみと呼ぶよりも大島小町の方が通りよくなつた。水門の渡船場を過ぎる人々はいづれもきみの美しい姿を永く印象してゐられなかつた。

よく一緒に來いと誘う者もいた。大阪へ行つて贅沢に暮そうと言ひ寄る請負師風の旅人もあつた。船頭漁師や村の男共の間には、この頃急に血腫い双傷沙汰がめつきり多くなつて來た。

きみはそうかといつて自分の氣にいらない男には絶対に身体をゆるさなかつた。たつた一目見て言ひ寄る他村の漁師でも、氣にあれば、いつもする様に先づ低い声で、「イエス」の意味を通じる。

忽ち契約が出來上る。そしてその日の宵から鷄鳴を告げる頃迄次から次へと素晴らしい遊戯で、岸近い洲の岸に眠る海鳥の夢を破り通す。

しかし、きみは何故かしらこの土地が好きであつた。この美しい小さな島のたゞづまいが好きだつた。いや一切のこのあるが

まゝの状態に無上の愛着を持つていた。若い頃から働くことより知らぬ朴訥な父親、藍玉を溶かしたような海の色、その廣さ朝もやに浮かむ黒色、唐猫鼻、その媚びる様にさえ見えてやさしい動き……。それだけのために、どんな嬉しい誘いさえ退けて永久にこゝを離れまいと考えていた。海面はいつも蜃氣楼の様にさまざまな色を湛えて太陽の光線や、潮流の關係や、群れ住んでゐる魚類のために、しじゅう水の色が變化した。

### 三

しかし、幸福はさういつ迄もつゞかなかつた。

父親の庄助と母親が殆んど同時に、奇病に罹つた。

二人が二人共、身体中、ねとくとした脂汗で発赤を呈した。それが今度は鼻孔を鋭く刺戟する腐敗臭が漂つてきて、皮膚一面じくじくとアンズ色に光つた膿泡が生じ指を触れると、よく熟れた桃の皮を剥くようにツルリとわけもなく皮がぶり落ちる。

眼は二人共光沢を失ひ、睫毛は悉く脱落し、一定の所だけを薄く見つめたまゝ動かず、遂には両眼ともに眼窩から全くとび出してしまつた。二人共一日と輪廓は人間ばなれしていつた。耳が欠け落ち、両頬はダラリと瘦せ、犬の乳房のように垂れ下りハダキは白っぽく柵欄の様に弾ぜ返り屏の間に屍臭を吐き出すのだつた。

二人共ひどく声が嘎れてしまつた。それよりも発音するのに大事な舌がいうことを

きなくなつて來た。

両親共相次いで死んでしまつた。

山の墓地に葬られた。この奇病についてはいきみ以外誰一人知らなかつた。あまり突然のことに村の人達は驚き訝かり、美しい一人ぼつちのきみの爲に心から悲しんでくれた。葬儀万端も、とりわけ若い男共の手によつて立派に済ましてもらつた。

さあ、もうこれからは、いよく誰憚る必要もない自由の境涯に自分を見出した彼女である。

店の土間は急に賑やかになつて朝つばらから酒を呑む村人たちの姿が多くなつた。婀娜な彼女のすなりとした姿を見るために用もないのに毎日のようにのぞきに來る連中もあつた。

一日に少くとも三十人は違つた男に接する事が出来る、身も心も消え入るような快楽はいきみの姿の美しさを少しもスポイルしない所か、かえつて、ますます濃刺たる生氣と、ぞつとする標な肉体美を加えて行つた。

しかし、もう一ヶ月、二月と経つうちに百人を超える夥しい数の若者が、完全にきみの病氣を引き受けてしまつたわけだ

### 四

さて或る日の事だつた。

水門の石垣の上に、赤トンボがすい／＼と飛び交つてゐる深い秋の日の夕方であつた。

多喜浜掃りの屈強な若者たちであらう、数人のジャンパー男が、三々五々に防波堤

づたいに、こつちの方へやつて來るのが見えた。

と、この時、入江の向う堤に一人の男が現れて、何かしきりに叫んでゐるらしく、片手には、夕陽の反射でキラ／＼光る短刀のようなものをふりまわして、地固蹴踏んでゐるのが見えた。

こちらの堤では、きみがニコ／＼笑い乍ら、何かその男に擲や談を言つてゐるらしくおいでおいでをしたり、妙な手まねを見せたりしてゐる。

やがて何事が起つたのかと、物好きなジャンパーの若者たちは、「炭坑節」を大声で唄いながら足を振り腰を使つて、タッタタッタと、この一風交つた水門の入口へやつて來た。

「アー、兄さん方、早く來てごらんさ。いよ。向う岸に現れましたは、大頭で獅子顔のつる／＼男。出來の悪い西瓜の中味そつくり白つちやけた膨れ男でございますよ。あいつはね、可哀そうな奴なんです。化物が人間を女房にして生れたのがこいつなんですつてさ……」

向う堤の犠牲者は、きみを呪い呪つて、その夜のうちに瀕死体となつて、唐猫鼻に近い海面に浮んでゐた。

### 五

いくら、我々の大切なきみちゃんでも、自然と歳月から庇つてやるわけにもいかな

い。若さと美しさを一日でも長く保たそうとするのは、紀元前から持ち越した女性苦だ



ろう。きみは焦った。あせればあせるだけ水鏡に映る彼女の眉毛や顔の毛髪はさつと脱けた。春から夏にかけて加速度的にそれが進んだ。

美しかった肌にはぽつんぽつんと氣がかりな瘡蓋が殖えて来た。舌の先に苔が生え変形し、唾言を囁やこもにも、我乍ら唇の外へ出すわけにもゆかなくなつた。

水門の店はどうにか開いていたが、客は昨年の三分の一、五分の一にもなくなつてしまつた。あんなに迄島人の失恋と初恋と享樂との対象だつたきみは、今ではこの狭い平和な島にあつて唯一の恐怖の対象となつてしまつて、近寄ろうとする者すらない

銅褐色に交つて斑紋と氣味悪い光沢を帯びたその顔や手を、きみは狂おしい迄の努力をして、鉛ばかりでつくつたような、ドランですつかり塗りつぶした。

けれどもそれが太陽の下では、一向効果を持たず却つて妖怪じみた感じを興えた。きみはもうたゞ一刻も早く陽が沈んで、あたりが眞闇になつて呉れるばかりが待ち遠しかつた。

あらゆる意味で「闇の女」となつた。

## 六

きみには淋しい日ばかり続いた。昔。――

――といつても、ほんの一年前には、まだこんな恐ろしい潰瘍や水泡なども來なかつた。この病氣特有の、短命乍ら奇しき迄の美しい膚をしていた。今では一本も残つていない腋毛も、その頃では濡れ色に輝き盡感で満ちていた。

余りにも現実ばなれした様な幸福だつたほんのり白かつた此の頸、さては小さなお腕を伏せた此の乳房を、旅人や村の若者達には、あゝ……その幾夜さかけて、どんなに狂はしく弄んだ事か！

或る時は咽喉の底が破れたかとさえ思われる不思議な声を上げ乍ら、いろ／＼あくどい快樂に遊び呆けた事であろう！きみは我を忘れて、もう誰も決して待つていくれぬ藪がけさして、まつしぐらに走り出した事もあつた。

誰も待つていては呉れない。誰も彼も有毒な空氣のように遠くの方からすら彼女を避ける。

今迄の彼女の指は細く美しかつた。ふりの旅人ですら、何がなし触らずにすまぬ衝動を持つた。今の彼女の指は、手は、拳闘グローブよりも醜怪で、雲母の様な悪臭を放つ。日は経ち月は過ぎる、が、きみの情熱は衰えなかつた。夜など殊に淋しさが堪えられなくなつた。船から板子をはずして來て月の高い、澄明な海辺の夜が白らむ迄ひし／＼と抱きかゝえて頼りしした。

夜の明けきらぬ薄闇を滾々とひた押しに湧き出る情熱の捌け場に悩んで、遠くから聞いていると雉が鳴く様なきれ／＼の叫声を上げて、堤に沿つた草叢を撈るように走りまわつた。

誰も愛撫しては呉れない、人間も自然も公平な筈の太陽でさえ、たとえきみが腰みはだけた背をあらわに、海辺の砂浜の上で陽に曝そうとしても、心地よくほてりは感じさせてはくれないのだ。そんな時、遠く

の方から悪童たちが石くれや木切れをきみめがけて投げつけるのだつた。出入の船でさえもきみの店の前に船や鰐が触れぬようによけた。

ある日の夕暮時だつた。

陽がよりやく落ちようとする頃、きみは誰かがしきりと自分の名を呼んでいる声を耳にした。耳をすまして聞いていると、たしかに、それは、もう死んでしまつた父親の声だつた。母親の声だつた、二人が声を合せて、遠くから、しきりと呼んでいる様に思えてならなかつた。

肉がくづれた二人の頭……重そうにそれをもたげ、力なく樟木の様に萎縮した手を以て彼女をさしまねく有様が、ありありと見えたはつとして眼をさました。あたりは寂莫とした砂浜だつた。

きみは誰からも捨てられた淋しい宵を、ついうと／＼と寝入つていた。総身には、しとど流れる盗汗が傳つていた。砂は彼女の体のまゝで汗で濡れくろづんでいた。

## 七

その夕方、急に風がはげしく天は鈍暗の雲に蔽われ、激浪は勢凄く渦を巻きはじめた。

少しばかりの雨も加つて刻一刻ひどくなつた。きみは小屋の中でじつとふるえていた。

すると、この嵐の中をきみの小屋の入口の戸を叩く人の氣配がした。

「こんなにひどい嵐の中を誰が來る人のあるものか……」

きみは空耳だと思つた。そして、ぽんやりと、將來に望みのない自分をいとしむ様に板扉に映える自分の影をみつめていた。

トントントントン……扉を叩く音が暴風雨の騒音の中で、はげしくした。

きみはわけもなくゾツとして冷水を浴びた様に慄えた。

「ア……妾……もう死ぬんじやないかしら……」

ふいとこんな考えが通り魔のようにつきた。けれども、じつとしていられたなかつた。開けようという、はつきりした意志もなく、樞を握つた。そして内部からそ／＼と押して外を覗いた。

「どなたです？」

「すみませんが、……一寸休ませて貰えませんかでしょう？」

若々しい男の声。見ればうら若い美しい男だつた。輕装の旅装束に一段と引立つて見える秀麗な若者だつた。

去年迄の妾だつたら……と此の瞬間きみはぞつとして淋しくなつてしまつた。

「妾の顔が怖くないの？……」と訊いてみた。それ程男は彼女の眞近かに立つた「さあ、妾のこの化物のような顔を見てびつくりして唾でも吐いて出ていつて頂戴」

きみの心はもう決して容易に和まぬひねくれ者になつていた。誰がそうさせたのか自分にもわからなかつた。

美しい若者は涼しい眼に微笑を浮かべて始終ニコ／＼していた、敵意も憎悪もなか



つた。

「すみませんね、あなたお一人なんですか？どなたか男の方はおいでにならないんですか？……そうですか、……それじゃ、こんなひどい嵐ですし、……無理な御願いも出来ませんでしたね」

若者は心からわだかまりのない態度で、さも氣の毒そうにいう。

「あ……妾、こんな身体にならない時分あの、……楽しかった日のついでにいた頃いつも、男の人は妾に、こういう風な口の

き、方をしたものだわ……」

きみはただそれだけのことで恍惚としてしまふのだつた。

八

きみは立ち上つて扉を閉めた。外はヒューヒューと空は横なぐりの雨と風の暴威に鞭打たれ、はげしい音を上げていた。

「あ……この短かい二人つぎりの夜……あ、それに、この男は何という優しい方だろう……何という愛らしい美しい男だろう

う」

きみは次第に感激の絶頂に達して行つた美しい旅人は静かにきみのあとからついて入つてきた。彼女は若者の顔を眞向に見る勇氣がない。

幸い陽はまだ此の恐ろしい暴風の渦の中ですつかり沈みきらなかつた。鼠色の薄明りは、壁や窓のすき間から、あたりのへし曲げられた引き揺られたような土間の上に投げかけていた。

きみは黙つて、

座を示した。男は濡れた上衣を脱ぐとガバツときみの感覚を失つた手を満身の力をこめて握りしめた。

きみはこの時、何に驚いてか、見る／＼顔色を変えた。

「そうだ、この幸福をこのまゝ放してしまふ位なら、このまゝ海へ身を投げてしまふ方がどんなにましだろう……」

きみはアツ！と叫んだ。

突然、きみの体は男の強い、妾に似合わない過剰な両腕に、しつか

りと抱きしめられた。

「夢だわ、！おしまいの夢だわ！」きみはうづいて泣き出した。

きみ割れたその唇は燃える様な接吻の雨にふるえていた。

二人とも、激しい抱擁のまゝ、折り重つて倒れた。

風雨は次第に勢を増して、板戸を叩いていた。

× × ×

嵐はすつかり風いだ。

船を見廻る漁師や、多喜浜通いの村人たちが、陽が高くなつても閉じたまゝのきみの小屋の前を通りながら、部屋の中から只ならぬ呻めき音がするのを発見した。

最初不思議に思つて、ボンボン船の油差し弓吉が表の戸を押しあけたのは、朝の早い漁師が、晝飯を食べ出した頃であつた板壁のすき間から晝の陽ざしが縞目のように洩れて、土間を通つた板の間の奥では、端麗な顔立ちの屈強な若い男が、毒でも飲まされたのか、口から血泡沫を吹きながら虚空を掴んでこと切れていた。

傍らには、覺悟の自殺を物語るように、両膝をしごきで結んだきみがもう知覚が失せてしつかりしない指に、瀬戸のコップを握つたまゝ、横倒しになつていた。

もう昔の倅すら見ることの出来ないきみが、その短かい青春の命を自ら絶つたのはうなづけることであつたが、その相手の男は、ついぞ見かけた事のない顔であつた。

かりそめの浮氣心が、この旅の男の命を失わしめたものであるとしたら嵐の夜も又罪なものである。

—おわり—



— いったい私はあなたをどう  
お呼びすればよいのでしょうか、

# 愛山久

木村あきら(絵)



## 情の暮る日

ある人妻を  
めくる手紙

これほど切なく想いつめていた  
と一人のあなたに対して、奥さま  
など、他人行儀のしらじらしさを  
たもつことはもう我慢できません

マダムと呼ばばなにかしら軽薄で  
す、あなたの御主人の姓で、道川  
さんと呼ばば、あなたと別の人の  
ような気がします。やつぱり、  
淑子さんと呼ばせてください。

淑子さん、お風邪の方はどうな  
のですかもとく、あまり丈夫でな  
いあなたが、急性肺炎でも起して  
いらつしやるのではないかと案じ  
られてなりません。いつでしたか  
しら、氷雨のふる二月の夜ふけ、  
御主人を迎えに、洋傘とレインシ  
ューズを持って、駅の出口の欄  
に凭れていらつしやるあなたにお  
逢いしたことがありましたね。駅  
のうす暗い灯のせいだったためか  
あなたの美しい顔が妙にやつれて  
青ざめ、白いマスクをしていな  
が、いくたびか激しく咳きこんで  
いらつしやいました。ちようど  
あれから三ヶ月たつていましたが  
あなたと真正面から顔を合すと、  
急に胸が波だち、言葉にならない  
言葉をいらだちながら、だまつて  
目尻をかわしただけでした。あの  
ときもしも、あなたの待つていら  
つしやつた道川さんがもう五分お  
そく帰つて来られたらあなたと私  
の運命は全くちがつて行つたでし  
ょうに。

「やあ、待たせたね、ごくろう」  
がつしりした頑丈な体格に、ゆ  
つたりした、多オーバー、堂々とし  
た紳士であるあなたの御主人の温  
ましい腕に、軽く抱きすくめられ  
た小柄なあなたは、まるで親鳥の

翼にかくされる雛鳥のようにいじ  
らしく見えました。やがて一本の  
洋傘をひろげて、仲よさそうに帰  
つてゆくお二人の後姿を呆然と見  
送りながら、私は外套のポケット  
に両手をつ、こんだま、化石の  
ように氷雨のふりしきる闇の中に  
だまつて立ちすくんでいました  
髪を傳つて雨のしずくがとめどな  
く顔から首筋へした、つてきまし  
た。

あのとき、もし誰か私の顔を  
のぞいたら恐怖したでしょう。談  
話と憤怒と絶望のために、私の眼  
はぎら／＼と燐のように燃えてい  
たにちがひありません。

淑子さん、たつた一回肉体を  
與えただけで煙のように遠ざかつ  
て行つた女性に対して男性がどん  
なに焰のような愛慾にのたうつも  
のか、ご存じでしょうか。その苦  
しみに堪えぬこうとすれば気が狂  
つてしまいます。そんな残酷な仕  
打ちをなさつたあなたに告げたい  
たつた一言さえも、再会した駅で  
は洩らすチャンスは失つてしまつ  
たのです。

私はぬかるみの暗い郊外の野道  
を、だれも待つていない、一点の  
火気もない下宿へずぶぬれである  
いて帰りました。まだ一軒だけち  
らちらと灯を洩らしていた八百屋  
へ立ちよると、一盛三十円の蜜柑  
を買い、下宿までの五丁の野を、  
皮ごと噛じりながらよろめきある  
きました。

淑子さん、年上の人妻に恋す  
る若者の悲しみを判つていただけ  
るでしょう。あれは忘れもしま  
せんが、昨年のクリスマス・イブ  
のことでした。K先生を中心と  
する私たちの短歌会をひらき、忘  
年会の意味も兼ねて、すこしばか  
りの洋酒を乾しましたが、十人ば  
かりの夫人や令嬢の中で、あなた  
が一番弱かつたようでした。帰り  
道が同じだからと、みんなに別れ  
て、あなたと二人きりになつたこ  
とが、あやまちのきつかけになり  
ました。屏を求めたのが、あなた  
からでも私からでもなく、そして  
亦、焼跡のさむさむしたバラック  
旅館の部屋へ辿りついたので、い  
ま思えば、会で飲んだ甘いベルモ  
ットやリキエールのせいだったか  
らかも知れません。あなたは童女  
のように吸り泣いたあげく、私の  
眼をのそきこんでさ、やきました  
「赤ちやんができていいの、  
だから」

あなたはなにか形のないものに  
憑かれたようにあえぎました。私  
はその時もう童貞ではありません  
でした。はずかしい商賈の女たち  
の技巧に充ちた肌も、もういくた  
びか経験していました。しかし  
「本当の女の神秘」に触れたのは  
あなたが始めてだったのです。  
私はあなたの涙でぬれて塩っぱ  
い唇の味を私は生涯忘れられない  
でしょう。その夜を境にして、私  
は親しい短歌の友達としてのあな



たを失ない、そのかわりに、体温と体臭をもつなま／＼しい異性としてのあなたを得たのです。

淑子さん、あなたはなぜ私に逢つてくださらないのですしょうか。お電話をしてもきまつてお留守、手紙をさしあげても御返事は一度もいたゞけません。私は昨夜、とら／＼あなたのお宅へまいりました。月のいゝ夜でした。

「淑子さん、淑子さん……」

私は胸の中であなたの名を呼びつゞけながら、お宅のまわりをぐる／＼限りなく歩きまわつていました。そのくせ、怖しくて呼鈴が押せませんでした。しんと静まつたあなたのお宅の中で、あなたが御主人に抱かれて寝ていらつしやることを想像すると一度知つたあなたの体のあらゆる秘密がまざ／＼と蘇つてきて、どうにもたまらない絶望といらだちに頭がくるいそうになりました。

人妻を恋することは、たとえ法律にはふれないとしても、倫理の上から断じて許されるべきでないことはよく判つています。けれども、私の情熱はもうそんな人間のこしらえた倫理なんか束縛されません。私にはあなたが必要なのです、あなたがなければ生きてゆけないのです。道川さんにも会わせてください、御主人が私をどんなに罵倒されようと、打撃されようと、私はあなたともう一度逢いたいのです。

……それとも、あなたは私との交渉を、酒の酔にまぎらせた單なる浮気の火遊びだつたとおつしやるのでしょうか。それならそれでもかまいません、私のあなたへの慕情は微動もいたしません。私は道川さんのような社会的地位も財産も名譽もなんにも持ちませんがあなたと結婚すればきつと働きます。どんな激しい、どんなに下劣な重労働でも笑つてやりとげる健康な青春の肉体だけを持つています。あなたはこれすらも、五才年下の若者の夢かとお笑いになるのでしょうか。

淑子さん、私の淑子さん、逢つてください、おねがいです、たつたもう一度でよいのですから――。

(一九五一年二月八日) 芳夫

## 二

お手紙いただきました。こゝはあなたと私が住んでいた神戸の街からはずつと離れた南伊予の漁村でございます。あなたが私の宅の扉の際にお挟みになつておかれたこの分厚いお手紙を、夫は封を切らずに、もつと丈夫な封筒に納めて、はるばるとこの療養先へ送つてくれました。

芳夫さま、おどろかれるかも知れませんが、すべてを夫に告白してしまつたのでございます。いまはあたに肌を許しましたことに何の悲しみもございません、どんなに不倫不貞の女と指さされようと

も、もう私はあまんじてその批難の鞭を受けましよう。……と申しますのは、夫にもあなたにもそれからすべての人々にも別離しなければならぬ日が、しづかにしかし確実に近づいて参りますから、前々から異状は感じて居りました

が、あなたに抱かれたあのクリスマス・イブの後、私は激しい咯血をいたしました。もう一度お逢いたくとも、ほんとうはずつと絶對安靜の病床についていたゝめに御不淨へ通うのさえ禁じられて居りました。二月に入りまして少し順調になりましたけれども、あの氷雨の夜、女中が帰郷してしましたゝめに、駅まで高熱を忍んで夫を迎えに行つたことが、ふたゝび病狀を悪化させてしまいました。とき折り医師の洩らす口ぶりから察しましたも、氣胸や胸部變形手術の時期はもうすでに過ぎ去り、パストレプトマイシンの注射や、パスの内服で、じりじり燃えつきてゆく生命の灯を、いくぶんかの月日長びかせているのが実情でございます。

芳夫さま、人妻の恋は生命をかけたものでございます、決してかりそめの浮気や火あそびではございませぬ。もしも、あなたが五つ年上の女であつても、喜んで結婚しようと思心からおつしやるのであり、又私の身体があなたの愛にお答えできるものであれば、なにを否みましよう。ほんとうは私もどんなにあなたをお慕



ほんとうは私もどんなにあなたをお慕いしているかわかりませぬ。

夫のことを告白いたします。けれども、仮りに何々科学試験所長として、すこしばかりは世の人たちに知られている夫の肉体の秘密のことでございますから、神の御名にかけて、絶對他にお洩らし下さいませぬよう、くれぐれもおね



がい致しておきます。正式にまだ離婚はしてありませんけれど、実は私たちは夫婦のまじわりを断たれているのでございます。夫はレントゲンを扱う職業におりましたために、身体にその影響を受け、ある種のひどい機能障害にかゝつております。私が女性として夫を迎えたのは結婚後半年あまりで、その後今日までの三年私たちは同じ床に就きながら、全く交りのない兄妹同様の生活を暮らしてまいりました社会的には有数の科学者で体格もきわめて立派でありながら全く不能の夫は私を愛するゆえにいくたびか自分から離婚を申し出て居りました。

私が成熟した女性の肉体的な

だえを短歌にまぎらせていたのも健康で過まい若いあなたにえられない慕情を捧げて参りましたのも、すべての原因はこゝにございます。尊敬すべき科学者、学識の深い立派な人格者として、私の夫ほどの男性は（なんだか賞めすぎるようでございますけれど）まず世間に少いであろうと感服いたします。：けれども、女の最上の喜びを全く與え得ない夫に対しては妻としてどうして堪え忍び得ましょうか。尊敬と軽蔑、愛と憎しみ全く正反対の両方を、私は夫に対して持ちつゝけて参りましたしかも、レントゲン放射によつて起こされた機能障害に対しては、いま

の医学では全く治療の道がございません。私があなたに肌を許したことを神様はきつとお許し下さいましよ、もしもお許しをいただけずじまいに地獄へ落されましたら、私は喜んで地獄の血の池へ眞逆様に落ちましよう。

この南伊予の海岸はたいへん暖かく二月半ばというのに、もう菜の花が眞盛りで、妻も一尺近く伸びております。私は夫が交渉しておいてくれた百姓家の離れのしづかで明るい部屋に、自分の床を敷き小さな土鍋で自炊しております。土地が水田に適しないのでお米はあまり取れませんが、お魚だけは

を水の泡にいたしましたとしても残りすくない生命の火を傾けつくして喜んでお迎えいたしましょう。それとも、もし私という女を、肉体的目的以上に愛していただけるのでしたら、どうか、このまゝで一日だけでもこの世に長く生きていますために、青い瀬戸内海をへだて、美しい愛のお手紙だけをおめぐみくださいませ。いずれとも、あなたのお心にまかせます。淑子（一九五一年二月二十五日）（完）



## 艶笑コント

### 後家のツマミ喰い

文川 映二

る？」

色氣の去らないおやじたちは、その子

に問うのが常である。

「俵あんでらア」

#### 二

お葉津は、よい女である。若い頃には、村の青年達から、ちやはやされたものだ三十を二つ三つ出た今でも、後家の美しさを保っている。

「正、お前エらアおつかア、なにしてい

お葉津の亭主は、死んだのではない。今は都会へ出ているそうだ。才子と言わ

#### 三

お葉津には、正太郎が一人ツ子である。今年、十三だ。父親に似ていて、なか／＼させている。小学校の女教師に恋文を送ったとかいうので有名だ。

#### 四

「四郎兵衛のおつかアさん、寄つて、話してゆかなエカ」  
お葉津の声だ。お葉津は日向で俵を編んでいる。

れた男で人を喰い倒すことが上手だったとう／＼村の娘と駆け落ちして、再びその姿を現わさなくなつた。

生活に窮したお葉津は、その副業である俵製造に精出さなくてはならなかつた

七十近い父親も、お葉津に劣らず編み棒を動かした。そうした結果、亭主がいた頃より却つて生活が楽になつた。

「正、お前エは、おつかアというだべエや？」

「ばか、そんなことがあるもんかエ」  
「じゃ、女の先生だアな」

顔を赤くして逃げ、振りかえつて長い舌を出すのである。それが面白さに、青年たちは忙しい手をやすめて、からかっている。



「はア。今日は、いゝあんばエだね」

その鐘の隅に、お志乃は腰を落した。色の白い女である。

「しつかり編んだじやなエか」

「だめだよおつかアさん、門前の次郎作が連れてゆかれたつて、ほんとうかな？」

「そらだよ。あんな人がいるから、この村じや油断が出来なエ」

あんな人とは、医師の未亡人のこと。

次郎作が警察にひかれたのである。

「悪い人だアな、あんなことをして、お上から金が貰えるだッベエね？」

どうだかな未亡人は、スベイの任務を果していた。

「ほら、きたよ。医者どんのおかみさん寄つて、話してゆかなエか」

「はい。今日は」

五十ちかい色女は、氣取つてゆき過ぎた。

「色きちがい……」

「ふッふッ……」

「今度の巡査は、やろッこじやなエか」

「そらだな——やつと、二十五六だつペエ。あの人は巡査なら誰でもいゝになるんだベエよ」

二人は、顔を見合せて、苦笑した。

「おつかアさん。お前エんとこ、肥がまるベエな、ちつと、ゆづつてくんないか」

「どうして、たんなエだよ」

四郎兵衛では、小学校の養を一手に貰つていゝので村人から羨まれていた。そうしてお志乃は校長と懇んごろになつて

「おれだ」

「あア、組合長さんだな」

「そらだ。早くあけてくんない」

それと知つたお葉津は、急いで戸を開



いた。

「はて、ゆくベエか」

お志乃は、立ちあがつた。向うから、俵の検査に地引検査員が自轉車で走つてきた。

## 五

トン、トン、トン、——

「今晚——今晚ッ」

その物音に目をさましたお葉津は、しどけなく掻き巻をばおつて、起き上り、手さぐりにマツチをさがして、ランプをと

もした。

「お葉津さん——お葉津さん」

「誰だベエ？」

「泊るかい？」

「きくだけやほだよ」

大空には、星がきらめいていた。

## 六

その翌日はひどい朝霧だつた。

正太郎は、その深いまやの中を学校へ行くため出て行つた。

畫前地引検査員は、部落の会館で寄合があると言つて、晩い朝飯もそこそこに出た。

「正、おめエ家、ゆうベエ、誰サ泊つたベエ」

学校の歸りに、山際の野良で働いていた甚作に言葉をかけられた。

「知らねエ」

「知らんことあるめエ」

甚作は、お葉津が若い頃、通つた青年達の中でも最も熱心な方だつた。もう三十五になつていたが、先年家内をなくしてから、子供もなく、年老つた母親と二人きりで暮らしていた。

今でもお葉津に一番関心を持つてゐる男の中の一人である。なんとかして、もう一度昔のお葉津と旧交をあたゝめたいと思つていたが、此頃では仕事に追われ、そのひまもなかつた。

「俺ら、ゆんべ早ヨ寝たケ、知らねエゆるたら知らねエや」

正太郎は挨拶い道を送つていつた。

——おわり——





# 愛沈木春日雨草紙



## 夢の糸夜

うたゝ寝の 枕にひびくあけの鐘

げに儘ならぬ世の中を

何にたとえむ 飛鳥川……

何れ興ののる儘に誰かゞ舞い始めたのであろう。年忘れの乱痴氣騒ぎで、今の今迄部屋も張り裂けん許りに騒々しかった向うの座敷が、急にシンと静まり返ると、濫い地唄の声だけがしんみりと、庭のひよした

ん池の上を寒風に乗つて流れていった。

先程から黙然と腕を組んだ儘、山鳥新八郎は見じろぎもしなかつた。彼は信ずる事が出来なかつた。——嘘だ、嘘だッ。そんな莫迦な事があるものか——と心の中で叫んでも、今眼前に氣拙く控えている、先輩伊藤丈助の眞剣な顔付を見ては万更の嘘とも思えなかつた——。

今夜加茂川のはとりのこの料亭に、至急要件があるからと、伊藤の使いの者が新八

郎の陋屋を訪ねた時、フト変な予感がせぬでもなかつたが、まさか話がこんな事になろうとは夢にも考えなかつた。

「——嘘、新八郎。何度もくどい様だが、拙者とても退くに退けぬいやな使者として貴公を見込んで頼みに来たのだ。辛いだろ

うが明日の試合——どうか山添に勝を譲つてやつてはくれまいか……頼む」

「しかし……」

「いや分つてゐる。勝負は時の運だと申す

のであろう。それを承知で貴公に頼むのだ

二宮先生御一家の幸福の爲に……」

「では私が勝つては、何か先生の不名誉になるとても仰せられますか？」

新八郎はぐつと唇をかみしめて、楚々たるうちに刃を拂り、匂う許りの美しさに輝く老先生の愛娘、蔭絵の顔を險に思い浮べて見た。

八年間の苦勞の修業が漸く実を結んで、明日は老師二宮宗啓の後継者として、衆から選ばれた彼と山添主水が、乾坤一擲、生命を賭して勝負を決する事になつていた。しかもその勝者が、絶世の美女蔭絵の婿たるべき資格をも有することとなる、謂わば我が生涯の運命を一挙に決する晴の日であつたのである。

衷心新八郎は蔭絵に激しい憧憬を感じていたし、蔭絵も亦新八郎を憎からず思つてゐる。——と彼は信じ切つていただけに、突然丈助から、簾から棒に勝を譲れと云われても、蔭絵の爲にも、断じて退けぬ必死の心構えであつた——。

「折角の御言葉ですが、此の度の試合、私はどうあつても勝は譲れませぬ。第一蔭絵殿に對しても……」

「いや、貴公のその氣持も、よく分つてゐるのだが、実を云うと貴公の明日の相手、山添主水と蔭絵殿は、ずっと以前から、お互に思い思われている仲なのだ」

「えーッ、そ、そんな筈が……」

「ないと思うのも無理はあるまいが、まあこれを見て呉れ——」

と伊藤が懷から取出した数通の手紙、



それはどれも藤絵から主水に宛てて書いた  
恋文に外ならなかつた。

「では山添主水と藤絵殿は……」

「この通りじや。拙者もこれを見た時はが  
つかりしたよ。だから貴公が勝てば、二宮

眞影流の後継者たる許りでなく、藤絵殿の  
婿たることも約されてはいるが、主水に身

も心も許した藤絵殿が果して快よく、承諾  
するかどうかそれで私が……」

「身を引けば、二人の仲もよりよくゆき、万  
事好都合に参ると云われるのですな」

「云い難いがそんな次第だ。わかつてくれ  
るか?——」

「分りました。潔よく身を引きましょう」

蒼白に顔面を硬直させた新八郎は、熱湯  
を呑む思いで、噎れた声で答えた。まさか

と思つていたが、思ひのたけを綴つたこの  
藤絵の艶文を見せられては、最早己れの恋

は諦めねばならない。

「それでは、明日はもう改まつて試合する  
必要もありますまい——」

「いやそれは困るのだ。先生は御息女と主  
水の恋仲を御存じない。山添が剣で勝つた

上、改めて藤絵殿を貰ひ受ける縁仕組まね  
ばならない。心苦しいが、無理としてつての

願ひ。な、主水に花を持たせてやつてく  
れ……」

新八郎は黙々と、冷えた盃を苦々しげに  
呑みほすと、うなだれて声もなくうなづい

た。

今しも昇り初めた、冷々とした十四日の  
月。背に受けて、蒼靄めた新八郎の苦惱の

類には、何とする事も出来ない、血を吐く

思ひの心情が、切々として感られていた。

## 幼な馴染み

——男らしくもない。諦めろ——

自分で自分を叱りつけて、自棄氣味にあ  
ふつた酒が意外に早く廻つて、帰るぞ——

と云つた伊藤丈助の声も夢うつゝのうち、  
ふと夜風が身に沁みて眼を開くと、脇息を

枕に横になつていた。

墨絵の東山を徐々に離れた寒月の彼方に  
夜の雁が三四羽黒く飛んで行つた。氣がつ

くと、朱塗りの行燈が仄かに辺りを照らし  
て花模様友禪の蒲團がふんわりと肩にか

ゝつてゐる。

——思わぬ酒に酔つた……風邪も  
引きかねまいに、不覚なこと——

淋しい苦笑いを浮べて新八郎は、ズキ  
／＼するこめかみを押えて起き上つた。小

蠻の乱れを掻き上げてみると、突然、風に  
次かれた胡蝶の様に、ヒラリと藤紫の裳裾

をひるがえして飛び込んできた女——

「誰だ?——」

新八郎は突如に咎める様に叫んだ。

「お願ひ。……暫く私をかくして下さい。

厭な奴に追われてますの——」

女はおどろくと辺りを見廻して、新八郎  
の果氣にとられた顔を後に、素早く床の間

横の這い棚の下についた戸棚に窮屈そうに  
身を潜めると、

「誰が来てもいないと云つて下さい。お願  
ひします」

そつと片手舞みに新八郎に舞んで、あわ

てて戸を開めた。

遠くからバタ／＼と乱れた足音が聞えて  
くる。ドタバタと部屋々々の障子、襖の立

て閉めの音が間近く迫つて来た。

「来たな——理非は何れにせよ、窮屈な  
に入るのたえ。それに……」

チラリと見た女の顔は藤絵そつくりの顔  
立ちであつた。眼に見えぬ糸に繰られる様

に、新八郎は時が時、折が折だけに奇妙な  
感に打たれた。

庭先の障子がガラリと開く——。

四十がらみの、見るからに憎々しげな鬚  
面男。それが顔を眞赤にほてらせて、傍若

無人にも熱柿臭い息を吐いて、ジカ／＼と  
入つて来た。そ奴はジロ／＼室内を見渡す

と、ピクリと眼が遠い棚の下に止つた。

「おいッ、隠れても駄目だぞ。出て来い  
ッ」

「無礼者——。何だ貴様は?……」

新八郎の一喝に、男は、

「フン、四の五の云わずに女を出して貰お  
う」

「左様な事知るものか——」

「へへ、知らんとは云わさねえ。あの戸棚  
の片隅から覗いている、裳裾はありや一体

何んだ?」

しまつた!と思つたが退くに退かれず

「何——拙者の女を何で貴様に渡す必要が  
ある?——」

「何だと、うぬの女子だと……」

「そうだ。拙者の女、しかも可愛い、女だ  
刃にかけても渡せぬぞ——」

ぐいと刃を引き寄せて、新八郎は脅しに

鯉口をきつた。

一場の騒ぎの後、到底新八郎の敵ではな  
い相手は、足腰をさすり／＼、這う様にし

て逃げ出した。さらりと衣服を改めて、彼  
はおもむろに戸棚へ声を掛けた。

「女——もう出て来いぞ……」

微かに「ハイ」と應えて、女は乱れた鬚  
の毛を撫でつけ乍ら出て来た。落付かぬ氣

持を靜める様に、女はじつとゆら／＼行燈の  
灯を見つめていた。三日月形の眉毛に、長

い睫毛がしばたいて、白い襟筋が仄かに灯  
に影を落して、それが妙に生々しく魅惑的

だつた。雖て女は、新八郎に向つて両手を  
揃えると

「難儀な処を助けて戴きまして、とんだ御  
迷惑をおかけして——」

「いやなに……」と、新八郎は眩しげに眼  
をしばたいた。

「あの男は、執拗く妾につきまとう雨龍組  
のごろつきで、今夜も娘が私を無理矢理

に手籠めにして、もう少しで私……」

女は心持裾の乱れを合せて、神妙にうつ  
むいていた顔をソツと上げた。藤絵に似た

顔立ち——、しかも確かにどこかで見た事  
のある様な顔。だがどうしても思ひ出せぬ

若い女や、こうした紅燈の巷の妓に馴染  
ない新八郎は、懸命に記憶の糸を辿つて、

——見た顔だ。たしかに覚えがある。

——とつぶやきつゝも、どうしても思ひ  
浮んでこなかつた、女も先程から穴のあく

程マジ／＼と新八郎の顔を見つめていたが  
ハツとした様に、

「まあ、若しや貴方様は、山鳥の若様で



は……」

「えッ、そう云うそなたは？」

「お忘れになりましたか。私の母が、若様の乳母となつてお守りしてました頃、幼い私はよく母の許を離れて訪ねては、日の暮れ迄、若様と一緒に夢中で遊び過したことを……私は娘のお勢以でございます」

「あつ、そうか道理で……」

「よく泣かされたものですわ——」

「確か見覚えのある顔立ちと思つていたが髪髥が余り変つていたので、どうしても思い出せなかつた——」

「本當に夢の様にございますわ。でもこうした危急の場でお眼にかゝれるのも、きつと亡くなつた母さんの引合せに違ひありませんわ」

「拙者も交つたよ。父上が一寸の事故で、御役御免になつてからは、あの洛北の屋敷も人手に渡り、拙者は修業の爲この近くで二階借りの独り住居だよ」

「私だつ……て。母の死後は、いつしか流れ流れて来た。今のこの端したくない浮草稼業。お互いにも語る話もございましょう。今宵はゆつくりとお話もして見たうございませす」

新八郎は蔭絵を失つて、急にボツかりうつろになつていた胸の痛手を、優しく沁みじみと埋め合せてくれるお勢以の存在に、再び世の中が明るくなつた様な気がした。

それにしても照君と名乗るお勢以は、余りにも蔭絵と生き写しだった。神の攝理が、新八郎を憐れんでか、蔭絵を失なつたとき同じうして、お勢以を知つたことは傷心を

の新八郎にとつて、何よりの歡びであつた「聴こう。そして拙者もしみじみと幼ない昔をなつかしむ事にしよう。——」

氣を利かした仲居が、炬燵と酒肴を運んで来て去つた。

「ほんに冷えて参りましたこと。御遣入りになつては……」

お勢以は新八郎に炬燵をすゝめ、自分も膝をにじらせて掛蒲團の中へ入つて来た。

何処かで弾く三昧の音が、益々ぬ二人の昔語りを呼び長す様に、きれぐに闇を縫うて聞えてくる。辺りに静寂が立籠め、師走の夜は音もなく更けていつた。

**愛憎の彼方**

奇しき邂逅がアツと云う間に二人を結びつけた。忘我の境地を彷徨し、深い契りの交した長夜も短かく感じて、夜明け雀が軒端の期日に影を落して轉がり始めた頃、新八郎は浅い眠りから醒めた。傍らに安らかに眠るお勢以の整つた横顔が、白くくつきりと浮き上つて、昨夜の狂おしい迄の情熱の余燼をその眼の隈に微かにたゞよわせていた。

僅か一夜で新八郎はすっかり變つて終つた。剣に生きる——。これが二宮眞影流の門を叩いた時から、昨日まで持ち続けていた、変らぬ考えであつた。

どうでもよい——。それが今朝の考えである。無味乾燥、殺伐な道場での明け暮れそれに引きかえ昨夜のあの生々しい、激しい歡び——女を知るところも変わるものか。

しかも、とつくに忘れ果てゝいたお勢以がつゝましくも、何時か逢える日を愉しみに十年の長い歳月を、秘かに思い續けていてくれた。そのお勢以とも昨夜を境にして他人でなくなつた。いつか、この日のあるを小さな胸に秘めて、泥沼稼業にもまれ乍らも、彼女を身を清く持していた。蔭絵に較べて、どれ程優しい心根の持主であつた事だろう。そうだ。何も思ひまい、義理も我儘も捨て、行こう——。俺はお勢以と二人で我が道を往くことにしよう。新八郎は潔く武士道を捨てることに心を決めた。

主水の劍は數年前の如しとの定評があるそれがどうしたとか、日頃の豪劍の研えもなく、ジリ／＼押された新八郎は、果氣なく三四合木刀を合すと、苦もなく主水に頭を下げた。実のない勝負に、門弟達はガツカリし、老師二宮宗啓は、いとも不興げに袴を脱ぎ捨てスーッと奥へ入つた。予定通りの行動をとつた新八郎ではあつたが、事情を知らぬ門弟達の、心ない噂が耳に入ると、流石に不快は隠せなく、もう誰に顔を合すのも厭で、黙々と服裝を整えて足早に庭を出た。その時——

「……」

無言でじつと新八郎を見つめている蔭絵とぼつたり眼が合つた。彼は一瞥の後、その體振り向きもせずスタスタ歩き出した。

「お眼覚めでございますか。あのう、伊藤様の御使いの方がお越しなされました、今日の試合に急いでお出でになられる様とおことづけでございます」

高嶺の花——と、最大の讃辭を惜しまなかつた、蔭絵の楚々たる容姿も、今の新八郎には肉愛を追う、猥らな女にしか映らなかつた。

「よし……分つた」

恋文を綴つては秘かに主水と慾情に耽溺する。その事を思ふだけで新八郎は、蔭絵のなややかな姿に包まれた女体に激しい嫌惡すら感じるのであつた。

お勢以を起すも詮ない事と、そつと彼女の寝顔を覗き込んでから、素早く新八郎は用意を整えた。

——主水が勝つて、癡かしホツとした事でしろう——。そんな皮肉を一言云つてやりたい氣持で、新八郎は門を潜つた。その新八郎の氣持を知るや知らずや、蔭絵はじつといつ迄も去り行く新八郎の後姿を見送つていた。

數刻後——。

山鳥新八郎と山添主水は、一札を交すと殺氣立つて、颯々と立上つていた。二人の腕は略々互角。新八郎の劍は豪放をもつて鳴る——。



勢以の姿を胸に描いて、自然と彼の足は早くなった。

街には初春を迎うべく、もう門松が慌たしくもチラホラと立っていた。

## 恋の奴



年の改まると共に、京の街は生々と蘇がえり、花柳の巷は夜毎鼓歌にさざめいて、照君のお勢以は毎夜多忙を極めた。席の暖まる間もなく、ひいき客やら馴染客が、お勢以の水も滴たる艶姿を慕つて、お座敷が次から次へとかゝつてくる。近頃のお勢以は益々その美しさが映え、しつとり媚を含んだ眼元が悩ましさを加え、見る人をしてその心をとろかさずにはおかなかつた。しかしお勢以は心のありたけを盡して新八郎に仕えた。新八郎の持ち物は、一物たりと雖ども他人の手をわづらわす事なく自分で片をつけ、お座敷から戻つて、眞夜中近く風呂場で洗濯することさえあつた。

それこそ堅氣の女房も及ばぬ盡し方で、惚れた男に盡す女の眞実が、ひしひしとか弱い女の体に溢れる許りであつた。

「今晚はすみませんけど……」と三日に一度は氣の毒げに断わつて、いそ／＼と烏丸の二人の愛の巢へ急ぐのが今日此頃のつねだつた。佗び住居に唯一人ぼつねんと、炬燵を抱いて只管彼女の帰りを待ち佗びる。いとしい新八郎の姿を胸に描く時、お勢以は矢も楯もたまらなくなる。早くこの稼業から足を洗い度いと思ひ乍らもズル／＼ベツタリに勤めているのも、男に業をさした

いばつか

「一日中

嘸かし辛

氣な事で

したでし

よう」

「いや」

「偶に芝

居なり、

寄席など

覗かれて

は……」

「それも

一人じや

つまらぬ

し、噓——

事実、



としゆぎ之

新八郎は夜の耽溺の世界にすべてを忘れて融け込むのが、今の唯一の歡びだつた。肉慾につぐ肉慾——。

「これが昨日までの俺か——。何と変れば変わるもの！……」

時として愕然と己れを顧みることもある。そして一瞬暗い氣持になる。

——女に不甲斐くも愛われて、それでよいものだろうか——

だが今更どうにもならない。お勢以の命を賭けての深情は、蜘蛛の糸の様に、がん

じがために新八郎にからみついて、悦樂の世界に金縛りの様に身動きもさせず、日と共に最早抜き差ししの出来ぬ体に追いやつて行く許りであつた。

——これが俺の定められた一生かも知れない——

新八郎は果敢ない諦めから、爲すが儘、お勢以の痛い許りに身に沁む愛情を受けて仕舞三昧の生活が続いていつた。

愛慾の戯れの一年が夢の様に過ぎて——

再び春を迎えた頃には、いつしか新八郎の姿まで粹に變つて來た。黒二羽重無紋の着流しに雪駄履き、博多献上の白帶しめて細身の一刀落し差しの、月代延ばした伊達な浪人姿は、お勢以ならずとも惚々する男振りで、はしたない浮氣女が指さして振返る程のいゝ男になつていた。

弱い者はかばつてやり、街のだにやらち虫共はビシ／＼小氣味よく締め上げて、山鳥新八郎の往く処、自づと人氣は昂まる許



りで、白壁に誰が書いたか相合傘の、お勢  
以、新八郎の悪戯書きが、心憎いまでにし  
つとりと、こぼれ陽に黒々と浮き上つてい  
た。

## 罪障の女

風は冷たかつたが、祇園の灯は赤くまた  
き、八坂の梅が生娘の乳首を思わせる様  
な蕾を桃色に染めてむつちりとふくらんで  
いた。

爪先上りの坂道を、早春に誘われて、例  
の着流しでブラ／＼上つて来た山鳥新八郎

は、フト異様な女の叫び声を耳にした。

「はてな?——」

立止つて凝つと辺りを窺つて見た。——

氣のせいだったかな?。そう思つて二三歩  
歩き出すと、又してもヒーツと悲鳴が、微

かに杉の木立を通して聞えた。

夜鷹、辻君の類いが、八坂界隈にしきり

に出没する頃合だった。

通行人が、夜鷹にでも、ふざけたのであ

ろう。が、遂に心の惹かれる声だった。思

い切つて新八郎は、声を目指して、足音を

忍ばして近づいた。木の間隠れに見える早  
春の朧月がかすかにあたりを照らして、そ

の月光の下に、新八郎は正しく地獄の光景

を見てギョツとした。二十才そこ／＼の娘

が、着飾つた晴着の、裾もあらわに白脛を

見せて後ろ手に縛られていた。猿ぐつわが  
はめてある——。

その前に白晝の侍が拔身を下げて、娘の

乳房のところを当がい乍ら、陰にこもる声

で何かを訴える様に云つてゐるのが見えた

ひきはだけた着物の襟元から、むつちりし

た乳房がはみ出して、娘は氣が失つた様に

仰向けに倒れていた。思わず飛び出そうと

した新八郎の耳許に、男の声がはつきり聞  
えた途端、パツと彼は釘づけの様に立竦ん

だ「……フツ、それ程山鳥新八郎奴が恋

しいのか——。奴の名をかたつておびきよ

せたら、あわてゝ飛んで来ましたな……」

まぎれもなく山添主水の仮面を脱いだ姿  
だった。

「するとあの娘は蔦繪殿だったのか——」

「そなたを手に入れた一念から、あの

おめでたい伊藤殿を使つての書いた狂言。

わざわざそなたの偽恋文まで作つて、やつ

と新八郎との勝負に勝つ迄事を運んだのに

どうした事か、約束を違えて二宮の頑固爺

奴、なんのかんのと言を左右にして、挙句  
の果が、新八郎を差し出して、今一度試合

をやり直せとぬかす。俺の苦心

も水の泡となつた今、フツ、二

宮眞影流なんて犬に喰われてし

まえた。

そなたもこうなつたら潔くあ

きらめて、二年越しの拙者の思

いを遂げさせてくれ。否と云え

ばこの長船祐定の銘刀が、そな

たの乳をぐざりとやるまでさ、

どうせこうなればやぶれかぶれ

——。ヒヒ、震えているな——」

主水の端麗な顔が蒼味を帯び

て性慾的な激しい興奮を示して

いた。じり／＼近よると、いき

なり蔦繪の裾に手を握めた。赤

いものがチャリと闇にはためい

て、瞬間主水はドタンと尻餅を

ついた必死の蔦繪に蹴られたの

であつた。

「ウツ……畜生どうするか——」





狂人の様に唸ると、ガバと蔭絵に掴みかかり、彼の吐く息がギリ／＼と蔭絵の唇に近づいて行く。蔭絵の必死の肉体が、右に左に避けても、いつしかヒタ／＼と悪魔の手が胸許から下にさがつて行つた。

「おのれ／＼……今でも新八郎がそんなに恋しいのか……。フン新八郎が何だ。山鳥がどうしたと云うのだ。——」

「どうもしない。主水——、貴様それでも人間かッ」

怒髪天を衝いた新八郎は、颯つと月光のこぼれを浴びてスツクと主水の面前に立つた。

「呀ッ／＼」

とうめく様に蔭絵の体から放れた主水は奇蹟を眼の辺りに見た様に愕然とした。

「話は残らず聞いた。主水、貴様と云う男はそんな卑劣な畜生見たいな奴だつたのか——。貴様の奸計とも知らず、俺は老師二宮先生を、そして蔭絵殿を恨んでいた。見ろッこの俺の姿を——。希みを失なつて街から街を放浪する俺の姿を……」

「俺の知つた事か——。来るか？……」

「天人共に許しておけぬ奴。一年前の試合のやり直した。来いッ、眞剣で……」

「こゝでいゝ」

悪鬼の形相凄まじく、主水は蔭絵の体から手を離すと、バツと立上つた。今一息でと云う処で、己れの劣情を殺がれた恨みにいきなり、曳い——と一矢、相對した男と男。音もなく二本の光芒が影を曳いて月光に光つた。喘ぐ激しい呼吸のみが辺りのし

じまを破つて闇にもつれた。

「行くぞ——」

と叫んで新八郎の剣は、キラ／＼と流れて空気をみだした刹那。

「う……う……う……ッ」と主水はよろめいて、バタリと倒れた。新八郎の背打ちがきまつて勝負は決した。

素早く蔭絵の縄をとく。羞恥に女体をくねらせて彼女は顔もあげ得ず、俄破と新八郎の足許に打伏せてむせび泣いた。

「知らなかつた——拙者は知らなかつた。だが、今となつては最早返らぬこと。——」

「いえ……私、私さああの時もつと判つきりしておりましたら——。でも私の口からはどうしても云い出し難くて……」

「何も云わないで下さい。拙者として、どれほどそなたの事を思いつめての事か……」

「新八郎様——」

「蔭絵どのッ……」

押え、押えていた激しい恋情に、二人はバツと抱き合つた。が、その瞬間稲妻の如く新八郎の脳裡をかすめたのはお勢以の事だつた。新八郎の胸の力が鈍くて抜けて行つた。

今更蔭絵に恋して見たとて、所詮還らぬ恋ではないか。諦めよう。何もかも悪い夢だつたとあきらめて、棒に振つた一生を歩むのが俺に定められた運命なのだ。

「もう遅い。先生も御心配なされている事でしょう。兎も角お送りしましょう……」

「でも……」

必死の瞳で蔭絵は凝つたが、心の決した新八郎は心を鬼にして靜かに歩み出した。黒く並んで二つの影に、夫を慕う五位姫

の声であらうか、東山への斜めの空を、一声高く、ひうとよぎつて消えて行つた。

梅は散つた——

やがて櫻も咲くこの暖かさ——。

「てろ／＼又花見ですわね。……」

「そうだ。もう置垣燵も要らぬであらう」

それでも掛布團の中、しつかと指と指を組み合せて、新八郎とお勢以は楽しい夜のひとときを迎えていた。貴方——そろそろ目立つて来たのですもの。私もう御座敷へ出るのよそうかしら……」

「ハハ、その体ではもう客も来まい——」

「まあ、あんなこと。こんな私に誰がしたの——」

「好きで出来たこと。お互様だ——ところで、おぬしも知つているだろう。あゝして毎日の様に伊藤殿が来ては、道場へ帰れ／＼との言葉、俺も辛い。そこで暫くこゝから姿をかくしたいのだが、淋しいだろうが半年許り別れてはくれまいか——」

「ええ。覚悟はしていました。でも主水も逐電し、先生も当にしていられしやる今、貴方が繼がなければ、誰が繼ぐのです」

「いゝ弟子はいくらでもいる——」

「けれど、蔭絵様とかいう方が、今でも貴方のお掃りを……」

「蔭絵どのか——。お主の前で云い難いが俺は眞実あの方が好きだつた。惚れてもいた。二宮一門の後継者となつて、二人で愉しく暮す夢もみた。しかもそれも皆、過ぎ去つた儚ない夢さ。お前には繼ぐ俺の子供が出来る——」

「でもお可哀想ですわ。妾お腹にやゝさえなかつたなら……」

「莫迦なッ。今更何を云い出すのだ。別れられる位なら苦勞はしないよ。今じやお前がこの世の中で一番可愛い人のさ」

握り交して手と手に力が入つて、女の伏せた眼に、キラリと嬉しい涙が一滴光つて「やつぱり行つて上げて下さい。でないとなつた先生も蔭絵様もお氣の毒ですわ。妾は貴方を信じます。ホ、決して誤りたりなどしませんわ。仮りに蔭絵様と一緒にいられても妾——妾は貴方が、私の事を一生思い続けて下さればそれでしあわせですもの。ね——行つて上げて下さい」

「お勢以——」

「ハイ——」

「それでは、かほど迄にこの俺を信じてくれるか——」

「信じますとも。命をかけて惚れぬいた貴方の事ですもの……。信じ切つておりますわ」

「そうか——。それ程迄に云つてくれるのなら、ではほんの暫く、せめて二宮一門を繼ぐに足るべき人材の見つかる日まで行くとしよう。お前は晴れて俺の女房だ。俺は毎日こゝから道場へ通うとしよう——」

久しく忘れていた武士らしい氣持が蘇えつて来て、新八郎は晴れ／＼とした顔付きで、このいとし恋女房お勢以を今更眼のみはる思いで打ち眺めた。

どこからか太棹の音じめが忍びやかに流れ込んで来た。春の宵はほてる様に生暖かい——。

いつしかシト／＼と音もなく春雨が、靜かに、靜かに軒を叩き出した——（了）



# 女に跨がせる男

文と  
画  
土俵四股乎



「我がのぞみ女相撲の土俵の砂」  
これは俳句か川柳かどちらに属するかは知らぬが、我輩獨特の名句であると自惚れている。かつて宮武外骨翁の流れをくむ珍本編集同人が、小宴を開いた席上で、寄せがきの珍画へ書きそえたのがこれである。頃は昭和も生れたばかりの二年の新春だったと記憶する、その二十余年前の紅い夢が今日ここに現実化されたのを見ると、感傷

的な我輩の胸にこみあげてくるものは、あながち溜飲のみならんやである。笑つちやいけない、はや不惑の年ではあるがスコブル純情な壯年なのであるのだ。  
人はいうだろう「君は大正七八年からズーッと研究しているんだから、女相撲にはアキアキしているだろうに」とね、ドッコイそらはまいりませんよ、おの／＼方でも年中米の飯をバクついて御座るが、一向に

が、唯一つ残念至極なことが御座るて、それはヌク／＼と四つに組ませると、アワテ者には男か女か分らなくなる。外人が本場所の大相撲を見て髪と其柔軟な肌色から「女の相撲か？」ときいた話もあるにはあるが、我々の目からすれば日本髷でも結わさない限り、四つ相撲では女の魅力は半減する、それはデカイ臀部が見えるばかりで肝腎のオッパイが背や胸にかくれてしまう

アキ／＼はなさならぬでは御座らぬか？、女相撲はかく申す「土俵四股平」にとつては空気に以上に大切なもので御座る、米には代用食なるものがあるが、女相撲には代用は御座らぬレリスングもボキシングも似て非なるものではある。

からである。したがってオッパイにつづく腹の大浪も臍のうめきも蔭になりがちである。そんな点から数えらる、女性美、否我輩の愛する女斗美の表現される相撲の型は河津掛、手車、腹槽、咽喉輪攻め、上手投下手投、小手投ぐらいで、「投」は美しい瞬間であつて、高速度写真にでも撮影しない限り、其の微妙な動きは眼にうつらない、しかし投がうまくかららないで、互に土俵でせりあう姿勢は実に美しいもので、起腹の上で、四つの乳房が躍動するさまは血わき肉おどる壯観である。

手車は手四つともいつて、別名は「獅子のはがみ」ともいうが、双方の女が大の字に立つて、手張合ひのだから優美でなくて実に勇美である、四つの目がぎら／＼と敢斗精神に燃えるからだ、河津掛は下手にやらかすと、ワザとらしくなつてイヤになるが、うまく掛けて脚をねじつて反りあうところは、双方の前軀が並んではずむのであるから、見ている者がたまらなくなるのも道理である、だから我輩は「河津掛」を女相撲の第一のポーズとして絶讃する。抱上げられた女が、抱上げた女の内股へ、藤ずるのうに足をからませて反りかえる胸に、二つの乳房が天突くのイキミを見せ、腹と腹は腰で食付いて膺の美を競う、首をまかれている女の乱髪は旋律、乳房の谷を流れる汗の白露、腋毛からわく体臭の雲霧だ。  
次ぎに美しいのは腹槽と咽喉輪攻めである、腹槽は吊られた相手がおいかぶさらずに反った場合の胸が特に美しい、又吊つた女の



背面から其背と腰を見るのもすてがたい、  
太小の筋肉がむずがゆくうごめいて、肩と  
腰のバランスに夢中になるのだからすごい  
咽喉輪はのびた片腕の下に、勝った乳  
房が力めば、防く腕の下に負きつた乳房が  
あえいでいる、顔と天秤にかかった黒髪の  
涙が髪をふりまき、四本の脚が膝裏  
に汗をかくてふるえている、だがダメダそ  
れらはすべて中景であつて近景ではない、  
大寫ではないからいまだ、面白くないのだ  
其処で考えたのが「土俵の砂」になるこ  
とである。我輩自身も砂となつて、土俵の  
底にもぐるのが一番手早いと思つた。とは  
いうものの、マサカ蚯蚓じやあるまいし……  
さて工夫創作したのが硝子床である、ビル  
の地下室の天井の一部に應用されている厚  
硝子の床下にもぐる類である。一昔前の話  
だが、故竹内栖鳳画伯が東本願寺の秘門の  
天井に天人飛行の図を描くために、再三苦  
心された結果、モデル女を宙吊りにした  
氣に入らず、遂に硝子板の上に美女を寝腹  
這わして、之を下から仰いだところを写生  
されたとかきいた。ある事情でこの飛天の  
図は完成しなかつたが、飛ぶ姿を写美化す  
ることが如何に困難なものであるかは分る  
さて我輩の企圖であるが、終戦後だとい  
え、厚板ガラスがそう樂々と手に入る筈  
もなく、土俵をそれでつくるとすれば経費  
が大変である、それはいとわねとしても、  
第一ガラスを通して眺めるといふところに  
手袋の手をかくようなはがゆさが生じる、  
体臭とか生氣をキヤツチするには不満足で  
ある、道楽とはいへ女斗美狂もなか／＼苦

勞する次第で、種々工夫してみたがうまく  
いかないであつた。  
大正時代と違つて、この頃は女力士、つ  
まり我々同人語でいへば力女(ちからめ)即  
ち氣取つて呼べば「メトマーズ」だが、こ  
のライオネス(牝獅子)達を求めることはさ  
まで苦勞ではないが、さて我々の理想とす  
る彼女となると容易なことではないのだ、  
それではメトミマニヤ(女斗美愛好者)は如  
何なる女性を以て、その合格者となすかに  
ついて簡単に述べてみよう。

順序として頭のテッペンから足の先まで  
荒彫りに話すと、髪は大書(たぶら)の日本鬚が結え  
る程度の長さで、富士額なら上々、猫額は  
息がつまつて苦しい、洋髪でもいいがオデ  
コは困る色は黒髪に限る、それは禪の黒と  
バランスされて其処に何ともいへぬ調子が  
出るのであつて、色種など感心出来ない。  
顔は丸顔、頤のとがつた三角面はいけない  
襟足や鬘の生障が美しく、ややこわい髪が  
いいと思う。頤は二重で耳は耳朶の福々し  
いもの、首の細いのは駄目、眼は大きくて  
二重瞼の黒目勝、鼻はダンゴも困るがあま  
り高いのやクセのあるのはよくない。現代  
の映画女優から選んでみると「京マチ子」  
あたりが入選となる。

さて肢体についていふと、鎖骨や肋骨の  
目立たない程度の肉付腕や脚の美しいのは  
いいが、腰が目立つのは興がうせる、肉  
付は豊満であつてやや力士型に腹に強さが  
あることが條件となる、その点ストリッ  
プガールのようなのやヌード写真のモデルで  
は駄目なのである、太腰腹までいかに

も、禪を締めた際、其の上に盛り氣味に腹  
がなくては心細くて組ませられない。西洋  
相撲のレスリングの場合は別の感覚で見  
るが、土俵のある相撲では、やはり交際の  
肉体だとののしられても、錦繪の土俵にの  
ぼる梅ヶ谷型が似合なのである、禪そのも  
のが厚地で強いのだから、蒲鉾板のような  
腹じや、腹槽に吊らせても、禪と禪との間  
に風穴があいてお寒いじやないか？次ぎ  
に肌色だが、別にこれという條件はないが  
片方小麦肌、片方餅肌といった対照は理想  
的である。さて女体の珠玉オッパイだが、  
これはヴィナス型で直立した際鼻先より乳  
首の方がやや突出る半球型が最上で、カタ  
イ感じのものよりも歩けばゆれる柔軟性が

よらこぼれる、乳首は大きくなくて脇のあ  
るものがよく、乳房につづく胸郭美として  
郭毛は剃らさぬ方がよい。以上で一通り説  
明はすんだが、さて條件にピッタリ来る女  
性は案外すくないもので、七八分で辛抱す  
るより仕方がない、今日迄我輩が手塩にか  
けた女から指を折つても雲珠京子(21)岸瑠  
美子(23)福田陽子(18)以下九名に過ぎない  
「怪我なさつてもしりませんよ」黒獅子の  
禪をしめながら雲珠京子は足で踏まねを  
した。

「ほんと、片輪になりなかつても、責任な  
しよ、証文かいていただいとさやよかつ  
た」  
と岸瑠美子は笑つた。

## 花 櫓

### 娘力士は唄う

### 加茂三千彦

- (一) 勤<sup>アツ</sup>への要求<sup>ツツ</sup>、闘<sup>ツツ</sup>への謹れ  
客観じや駄目 主観でなくちや  
妾の足で 土俵を踏んで  
妾の 腰で こう投げる
- (二) 裸一貫 乳房がおどりや  
胸の焔は なお燃える  
あふれる精力 不老の肉体  
何か恐れん 不死鳥の
- (三) 聞けや！土俵に四股踏むひびき  
見よや！爪紅 みなぎる闘志  
黒の禪を きりりと締めて  
女同志は こう仕切る
- (四) 四十八手は あやしいけれど  
密切りぐらいじや勝負はつけぬ  
乱れる電髪 火を吐く口紅  
女の相撲は こう行くものよ
- (五) どこを取ろうが どこ引掻こう  
手あたりばつたり 取り次第  
寝業いとわね 女の度胸  
行司なくとも 勝負はつける
- (六) 禪解かりよが 髪摘まりよが  
唇噛んで 泣声のんで  
肌は血潮の にじむまで  
女の相撲は こう取るものよ



京子と瑠美子はそんなことをいいながら四股を踏んだ。ストーブの熱気がムン／＼する十疊の間は、硝子戸のガラスを銀藍色に曇らせて、幾筋かの雪の縞模様をつけている、画室としては狭い方だが、今日は片付けられ何も置かれてない、床の間に葉牡丹が寒菊を抱いてデンと坐っているのが、何となく我輩を諷刺しているように見えた。

土俵の砂になる用意は出来た。虎穴に入らずんば虎児を得ずである、今日の企圖は如そらく最も原始的な誰でもすぐ実行にうつせる手法であつて、そのくせなみ／＼ならぬ技巧と訓練を要するものなのである。

さて我輩は如何なる手法を以て之にのぞんだか、力士に傷害保険がいらないで、見物の我輩に在るといふのだから主客顛倒だ、

前日四五回は舞台稽古をやしたが、最初は女達が足もとの我輩ばかりを氣遣つて踏ぐたびに「先生御免ね」とか、足がひつかかると「あらッどうしましょう」なんていうので、「下を見ちやいけない、僕は疊の模様だ位にね」といいながら、叱るよりに督戦してやつと七八回目から調子が出てきた、が見物人の位置にある我輩の苦勞はなみ／＼でなかつた。よくも阿呆なことを考へついたものだと思つた。苦笑した次第である。ここまで話せば読者諸君も、筆者が如何なるポーズでこの女性美を鑑賞したかを想像されるであらう。先ず我輩は大の字どころか、一本の金縛りの棒のようになつて震ころぶと京子と瑠美子は、我輩の長軀を赤道線とみて南北に仕切つた。それは爪を

といで一個の餌を争う女豹二匹のようにも見えてすさまじい限りである。二人は立上ると其まゝ手四つになつた。眼を轉じ移動に移動をかさねるにつれて、我が網膜に映ずるあやしくもなまめく其新鮮な感覚に、我ながら恍惚たらざるをえなくなつた。膝枕して見上げる女の下腹の美すらたまらないのに、眞下から眺めるその仰望の美のうつくしさ、下から眺めると輕快さは失われるが、其処に重量感が拡大されて、美を以て人を感服せしめるものを感ずる、ストリ

ップショウを食付から見てゐる段じやないすべて横から見た女体の陰影は、光線が屈曲してゐないために強過ぎてピンボケ氣味であるが、二つの肉体が寄つて組合つて其処にかもしだすそれは、明度の低い複雑な陰影の濃淡を生む、乳房一つを取上げて

いつても、ハイライトの部分から隆起の間に生ずる暗い溪谷に至るまで、幾十種の段階に分れる明暗の等差、灰色のたわむれの魅惑だ。ストリップショウなどでは、ジャ

ン／＼とライトをかけるが、そのために折角の陰影が消えて、ただバックに大きな影法師がうつる。勿論その影法師は実物より美しいので、我輩は多大の好感をもつて迎えるが、ライトのかかつた部分は、顔と乳首と腋以外はアクセントのないノッペラボウな肌色一色の切紙細工に化してしまふのは惜しいと思う。

京子と瑠美子は左四つに組んで押合つてゐる、上の移動につれて下の我輩も踏まれないように移動する、これはちよつと考へると出来ない仕事のように思ふ人もあらう

が、實際彼女達の腹の下に入つてみると、彼女達がつきつきに仕掛ける技が其瞬間前に電燈の如くにキャッチ出来るので、それ／＼先手をうつて逃げる、万一危険な時は手でさえぎる、勿論彼女達も我輩を故意に苦しめようとはしないし、愛情につながる師弟の關係があるので、時々茶目つて意地悪い所作もするが、其処は其処である。

見よ、京子の乳房が瑠美子のそれと張合つて汗まみれになつてゐる、油でみがいた鶏卵の肌を思わせる小麦色の腹が、浴場のタイルのように光つてゐる、太腿筋の物凄

い緊張とその反撥力、血の氣が皮下にみなぎつて今にも七色の妖氣を噴出しそうだ。

「よおッ!」「ううッ!」互に精一パイに密合つてジリ／＼と一進一退である、室の溫氣と生体から発する溫氣とがむれてゐる肌と肌の接觸がデリケートな呼吸を見せる脂汗のながれにうぶ毛によるほかしがうつとりさせる。其処に女体仰望の神秘があるのだ。この儘に長身の女をとらなかつたのも、垂直線のもつ崇高美をやわらげて、骨盤のもつ重感による性感と、健康な太腿の上に重圧を加える腹の水平美を、其黒い裾で強化しようとする意圖があるためであつた。

相撲が白熱化するにしたがつて、女特有の体臭が度を増す、土俵を廻れば此方も轉身しなければならぬ、氣をつけて跨いではいくれないが、といつて安心は出来ない、土俵といつても十疊の座敷一パイに、我が女斗美部屋独特の、別仕立の土俵染抜きの毛氈がしいてあるのだが、摩擦抵抗は疊より

多いので、我輩の活動には至極不便であつた。下手投を打合ふたびに、二女の相撲髷が崩れて、ペーマののびきらの断髪が、繩の馬籠にふられる、京子の右足が瑠美子の左足を拘つて後へ高くはね上ると、残つた足二本がケン／＼の形になる。四つの乳房が乳牛の乳房のように重々しくゆれる、官能相撲の極致に達した二人は、我輩を一跨ぎしたとおもえばモンドリ打つてぶつ倒れた。

かくして女相撲に対する仰慕鑑賞は成功した。文筆で表現出来ない大牧場をあげたが、人間の欲望というものは底なし沼のようなもので、一つ成功すれば次ぎに第二の企圖が浮び上る、幸にも戦時中に購入した鉱山用の鉢巻電燈があつたので、早速それ

を取出して第二段階へ突入してみた。

先ず消燈せしめ、自分は前回同様に寝ころび、赤裸々のまゝで相撲をしてみた、僥倖とでもいへばか、鉢巻ランプの電力が低下して光力がにぶい、そのためにヌードに生じる陰影が至極深刻である。我輩の愛しているメトマースに腋毛すら剃るのを禁じてゐるので、全身からうけるナイーヴな感覚は尊い、これ等の僅はすべてブライベートなのであるから、リアリズムに終始してゐる訳だ、女体のレリーフ的な官能美では承知出来ない、其日々に於ける企圖者たる我輩のモチーフによつて動きがなされる。腰の物を失つた京子の手が指が指頭が瑠美子をとらえようと吸盤をおもわせる執念さで攻めたてれば、瑠美子も京子の背にまわした指を断髪へからませた。



「喧嘩になつてもいい？」荒い苦しい呼吸をつめて京子が叫ぶ。

喧嘩にさせて！……と

めないで、とめないでよ。ああた

まらない」

瑠美子がしがみつくと

うに京子の髪を掴んで

ひいた。京子の足が我

輩を跨いで

のしかかっ

ていった。

にぶい肉の

音と脂汗に

ぬれた肌の

もつれるし

めりつぽい

うめき、他に人氣のない丑満時の天井にそ

京子の腕が、  
瑠美子の首に  
蛇の如く捲付い  
たのぞを締める  
女力の殺氣四本  
の足がもつれて  
ドドツと二人は  
組んだまゝぶつ  
倒れた。



れが反射する。ストーブの残火以外に光はない。鉢巻ランプの光芒がヌードのかもしれない創作を追って流れる。

「バツシ！」京子の平手打が瑠美子の臀部で鳴った。

「痛い。畜生！」瑠美子が髪を握っていた

手を落してヤニワに京子の双差しを門に絞った。絞ったものゝ汗にまみれた相手の腕はスグすりぬけた。と見れば京子の手が相手の内股にのびる。瑠美子がそれを拂つて相手の乳房を掴む。二度や三度乳房をねちあつたからといって、其形が崩れる筈もないが、女心の遺瀧無さともいふのか。彼

女達は組ませれば相手に有無を云わせず乳房を攻める。

〃乳房相持ち女の勝負

泣くも泣かすも土俵際〃

誰の作か忘れたが、そんな小唄をきいたことがある。が我輩の方では、宝玉のように大事にしているところを、爪のある指で

ムゴクいたためあうのだから見てハラ／＼する。彼女達としてもモデル職業をかねているとすれば、大切な商賣道具の第一線である。それを百も承知で攻め合うところに女の意氣地がジエーン台風のように猛威をふるうのである。

鉢巻ランプの光芒に瑠美子の二重頤が、吉祥天女のそれのように濃艶にうかぶ。乳房をしめられてやゝ俯向き加減になつた京子の顔に苦悶があり／＼とあらわれる。

「責めの美」の一端が其処に浮出す。一糸まといわぬ下腹の起伏動揺、大腿部の逕撃、「殺す！」京子の狂氣じみた叫びと共に、京子の腕が瑠美子の首に蛇の如く捲付いた咽喉を締める女力の殺氣、四本の足がもつれて、その一本が我輩の腰を蹴つてつまづいた、ドドツと家鳴りをさせて二人は組んだまゝぶつ倒れた。

世の女性ヌードの礼讃者よ、悪いことはいわぬ、女性のヌードと其動的美とがかしだす交響曲を楽しまんとする人士は、是非我輩のように土俵の砂になることだ、女に跨がせる男になることだ。昔から天國の福音はこれを仰慕する者にのみさずかる擬になつていゝと聞くではないか。

(完)

「女千人ズラリと並べ様で角力がとらせたい」

四股平

女斗美(メトミ)に對しお問合せの方は、編集部氣付土俵四股平氏宛へ――



# 小説 変態

## あ い ふ に え 恋 女 慥 の 様

松井 籟子  
絵 美濃村 晃



「あの……ちよつと……」

よびとめられて美也子（みよこ）がふりかえると、肩の線をやわらかく崩して、女の様な立姿の春彦（はるひこ）だった。耳たぽを櫻貝の様に赤くしている二十才の青年は、まだ美少年とよぶのにふさわしかった。

「なあに？」

美也子は相手の顔色にひきずられる様に自分も頬をそめて立ちどまつた。銭湯がえりのぬれ手拭をそつと額にあてたのも、湯上りの上気だけではなさそうだった。

「こんなところで不意によびとめてごめんなさい。一寸おねがいがあつたので……」

春彦は言葉もまるで女の様に、はじらいがちに言う。東京の日本橋から深川にかけて、隅田川にそそぐ堀の様な川が幾すじもある。その橋の上だった。夜氣の中に潮の香のするもの、永代橋から月島へと海が近いせいかもしれない。

「なあに？」

「あの……」

春彦はもじくとふところから手紙らしいものを取り出した。

「何だか知らないけれど、用があるならうちまでいらつ

しやればよかつたのに……」

春彦は小学校の頃の同級生だった。去年の同窓会の余興には、春彦の踊る「浦島」の地の三味線を美也子が弾いた。その稽古に二度三度、春彦が美也子の家へ来たこともあつたのだ。その時の黒紋付の舞姿は今でも美也子の胸の裏に美しく残っている。

「おたくの前まで行つたのですけれど、頂度皆さんお風呂にいらつしやるところで……」

「皆さん？」

と、美也子は聞き返えしながら、兄とよんでいながら血のつながっていない惣吉（そうきち）が、店の若いもの達と出かけて行つたのを思い出した。そういえば男のお湯は女より早いはずなのだが、もう帰つたのかしら、それとも……と、何の氣なしにひよいと黒いえんとつの湯屋のあたりを見かえすと、どやどやと声高に出て来た男達……。

「まずい……」

とつさに美也子ははつとした。

学生よりもアルバイトのやくざが身についている惣吉に、輪をかけたような荒い氣性の店のもの達だった。

「男のくせに、へなへなしてやがつて……」

春彦をよくは言わない彼等だった。「藝者の子」「役者の子」と、小学生の頃から春彦をいじめた悪童は、小猫をいじめるように、いつでもえものをさがしていた。まさか二十をこえた年齢が、露骨にそれと相手にしないまでも、こんな暗い橋の上で美也子をよびとめていることを知つたら、何を言い出すか知れたものではない。それだけでなく春彦の姿を時々家の近くで見かける者があつて、

「あいつ、女みたいなの野郎のくせに美也子さんに惚れてるらしい」

そんな評判も誰いうとなくたつていた。

「ねえ、歩きながらお話しきくわ、お兄さん達が帰つて来たらしいから……」





と、帰つてしまふには間に合わない足音だつた。

「美也ちゃん」

とがめる様な惣吉の声は、他にとりまぐものへの見栄に似たものがあるらしく、常になくきびしかった。

「何してるんだ？」

「べつになんにもしてないわ」

美也子もつい反抗的な声になつた。

「暗い橋の上なんかで立ち話していたら、人が変な目で見てるぢやないか、用があるなら何故うちへ来てもらわない……？」

すると惣吉と並んでいた若いものが、春彦の手に気がついたのか、

「おやすくないな、ラブレターか」

ひやかす様に言つた。

「いゝえ、これは……」

春彦は急いでその手紙をふところに入れて、おびえた様に男達を見廻した。しかし惣吉の目に視線が合うと、あわてて目を伏せてしまった。それはなにか惣吉の視線がまともに見られない様子にみえた。

「何でもないのよ、ねえ、藤野さん」

美也子は春彦を小学校と同じに姓でよんで、  
「変な話していたんぢやないわね、何でもないんだから手紙もつてゐるんならみんなにみせてよ、疑われる様な手紙ぢやないんでしょ？」

わざと明るく言つてみたものの、もしその手紙が恋文めいたものだつたら一寸困ると思つた。けれど今までに二人の間にそんな話のなかつた事だけでも惣吉にわかつてもらえたらそれでもいい、そうも思つた。  
しかしどうしたのか春彦はいきなりふところから手紙

をとり出すと、あつという間に細かく引きさいて、川へ投げすててしまつた。

瞬間惣吉の顔色が変わつた。人の前で春彦になめられたという感じが、惣吉の誇を傷付けたのだ。

「何するんだ！」

惣吉は春彦の手をとつた。

「いつたい、それは疑つてもいいということなのか？」  
春彦はだまつて頭をたれたが、とられた手をふりはなそうともしなかつた。

「美也子は僕の妻になる女だ。はつきり返事してもらわないと僕のメンツがつぶれる。僕にみられては困る手紙だつたのか？」

春彦は伏目がちに惣吉の顔を仰いだ、一瞬燃えるような瞳になつた。しかし又、がくつと首をたれると、一言も弁解しようとしなかつた。

「そんなばかな……。ねえ、藤野さん、何故だまつてゐるの？私達何でもありやしないぢやないの、私達まだ話もしてないのよ、そんな……？」

いきりたつて美也子が言うのに、

「私達が……」

惣吉の目に嫉妬の感情が流れた。

「おい、どうするんだ。男らしく腕にかけて勝負をつけるか？」

春彦はわずかに首を振ると、細い声で言つた。

「ぶつなり、けるなりして下さい。あたしは……」

皆まで言わせず、

「よし、やつてやろう」

惣吉よりも若い者達がたぎり立つた。惣吉は一寸困つたという顔をしたが、

「美也ちゃん、ついておいで」

そう言う、川つぶちを黙々と大川端の方へ歩いて行つた。

春彦と美也子を曲んで他のもの達も黙つて歩いてゆ

あつと春彦が思わず足をちぢめて、  
体をくの字にうねらせたが「誰か足の裏をくすぐつてやれ」ちぢめた足は無理やりにのばされた。



く。磯臭い夜氣だった。

## 二

美也子は惣吉が何をしようとするのか想像がつかなかった。けれど何か恐ろしい事が起りそうな恐怖よりは好奇心の方がさきになつたのも、荒つぽい稼業の家に育つた下町娘だったからかもしれない。

それでも舟宿で惣吉が大型の和船を借りて、それにのれと云われた時、よつぽど大きな声を出しておだやかではない事情を舟宿の主人に告げようかとも思ったが、まさか惣吉が春彦を殺す様な事はないだろうし、変にさわぎ立てて、近くには知れている自分達の家の名に傷をつけるのもためらわれた。このあたりの若いもの達は、多でも運動がわりや、夜づりにボートや和船を借りるの、だまつていねばあやしむ者もなかった。

それに春彦が靜かに惣吉の言うままになつてゐるのも不思議だった。

しかし舟が暗い堀の様な川をぬけて、潮の匂いがだん／＼濃くなつた頃、あたりに舳つてゐる舟の数も減つて三間さきの見通しがきかなくなると、漸く美也子は不安になり出した。

「君には何にもしないからだまつてみて。へんにさわくと舟がひつくりかえるよ」

惣吉は美也子に言つた。

「縛つちやおうか」

ひとりが言うのに、

「ばか、かりにも未來の奥さんに……」

もうひとりがたしなめたが、

「じやあ、こいつだけ縛つてもいいだらう」

返事も待たず、あつという間に、春彦は帶をとかれ、後手に縛りあげられてしまつた。

声をたてて救いをよべはよべないこともないのに、彼は観念したようにおとなしくされるまゝになつてゐた。

「なぐつてやろうか」

惣吉よりも他の者達が面白半分でけしかけるのを、惣吉は苦い顔で、

「まあ、待て」

と、制したが、

「どうにでもして下さい。お兄さんの氣のすむようにしたらいいでしょう」

春彦が思いがけない程の強さで惣吉に向つて言つた。

「される理由があるんだな」

春彦は強くなつた。

「そんな……」

美也子がとめる間もなく、

「よし！」

そういうと惣吉は春彦のわきの下をいきなりつかむようにしてくすぐつた。

「あつ！」

と、春彦が思わず足をちぢめて、体をくの字にうねらせながら、

「誰か足の裏をくすぐつてやれ」

惣吉が他の者に命じたので春彦のちぢめた足は無理やり舟底にのばされた。

惣吉は冗談の様に両手で美也子の目をかくしてそのまゝ抱くように唇を近づけようとした。その髪の毛の油の匂いで彼と知つたのだ。





足の裏のくすぐつたい感じを、胸と腰に力をいれてこ  
らえようとする、そこそこで惣吉の軟弱な指が虫の様に這う。

咽喉をのぼして、

「ああ！」

と、押し殺したように息づけば、その白いのをまたくすぐられる。

春彦はうめいた。体をのぼすことも、ちぢめることも出来ない状態で、六本の男の指が首からのど、わきの下横腹と、だんだんに足の裏にまで下つて体中にまつわるのを、ただ泣くような、笑うような声をわずかに出しながらいめきつづけた。

「君の様な女みたいなのを打つてみたつて仕様がな。

こうするのが一番いいだろう」

胸ははだけ、白い足が紺紺の裾からあらわにみえる。

体中をくすぐられるつらさは、痛さをこらえるより苦しいかもしれない。

美也子は抵抗も出来ずに男達の馴れ馴れしいものになっている。春彦を、ふと抱きしめたい様な激しい感情が湧きおこつた。曾つて知らない血のたざりだつた。

「やめて！、やめて！」

思わず叫びながら、美也子は春彦を急にいとしく思うのだつた。

### 三

床の間の祝物の数が増えて、惣吉と美也子の結婚の日が近づいていた。

あれつきり春彦に会つていない。手紙もこなかつた。

あれだけひどいことをされたら、たとえ体に傷は残らなくても、再び美也子に近づくことは出来ないだらうとは思ひながら、美也子はそれが淋しかった。春彦によびとめられた橋の上で、湯上りの肌をぼんやり風にあてなが

ら、待つともなく彼の姿を思いうかべてみることもあつた。丈も高く、恰幅もある惣吉の男らしい姿がひとには立派だといわれるのに、美也子の目には粗野にうつてそれよりも、春彦の細い肩が恋しく思ひ出されてならぬのだ。人づてに春彦が出ているときいて芝居へも行つてみたが、胸をはづませて春彦の登場を待つ時間にくらべると、舞台を素通りする彼の役は、あまりにあつてなかつた。樂屋へまわつて彼をたずねたいとは思つたが、もし又惣吉に知れた時の事を思うと、美也子はただじつと、春彦への思慕を胸の底に秘めておくより仕方なかつた。

その日も無感動な氣持で親に命ぜられるままに祝物の品目を書きとつていた。筆のさきに心はなく、ぼんやり自分の思ひの中にあつたのか、美也子はうしろから惣吉に目かくじされるまで、その足音に氣がつかなくなつた。

惣吉は冗談の様に両手で美也子の目をかくして、そのまゝ抱くように唇を近づけようとした。その髪の油の匂いで惣吉と知つたのだ。

「いや！」

美也子ははねのけようとした。

「僕だよ。いぢやないか」

惣吉は思わず力をこめて抱きしめた。

「いやッ」

美也子は自分でも驚く程の強い力で、その腕からのがれようとする。

「なぜ？、だつてもう直に君は僕の女房になるんだよ。

キスぐらいしたつていぢやないか」

「だめ！」

はじめは冗談のつもりで、たゞ軽く唇のさきだけでも押しあてようとした惣吉は、意外に激しい抵抗にあつてたじろぐよりは反つて憤りに似た氣持で燃えあがつた。

「美也ちゃん」

するどくきめつけると、

「君は僕と結婚することが厭なのか？」

美也子の手を自分の手の中に握りしめたまま、座り直して惣吉は言つた。

「いやならいやはつきり言つてくれ。僕は恥をかかされてまで結婚しようとは思わない」

「私が兄さんにどんな恥をかかしたの？」

「結婚するときまつている女に、冗談めいた接吻さえいやがられて、男の恥ぢやないといえるのか」

「だつて……」

それは美也子自身にも意外な発見だつたのだ。美也子は心の中で春彦を愛し出していることは自分で承知してはいた。しかし、小さい時から、ゆくゆくは夫婦になるとお互いの子供心にもうすうす知りながら、一緒に育つた惣吉に、たてつてまで春彦を愛し通そうとは思つていなかった。けれど今、惣吉に抱きしめられて思わずふりのけたその激しさは、女の羞恥ではなかつたのだ。

「ごめんなさい」

思わず美也子は言つた。

「ごめんなさいというのは恥をかかしたと思うから言うんだな。僕と結婚する氣はないんだね」

「そんな……」

たたみこまれると美也子は言葉を失う。胸にかたまりの様なものがもやもやして、はつきり表現出来なくなつてしまふのも、惣吉に対する無意識な恐怖心からかもしれないなかつた。

「君は僕がどんなに君を愛しているか知らないんだ。僕が藤野に馬鹿なまねをしたのも、店のものへのメソッダけではない。やつぱり君を愛しているからなんだ。美也ちゃん」

握つていた手をもう一度手許に強く引くと惣吉は、片手を美也子の肩にかけた。

目をつぶつて、熱いその唇を、美也子は自分の唇でう





目九

しい話もしていないのだ。たゞ暗い夜の橋で美也子をよびとめて、手紙の様なものを渡そうとした春彦の瞳の中に、恋を知っている若者の燃える様な輝きがあつたのだし、それ以来、はじめて心の中へしつかり春彦を入れてしまつた美也子なのだから、二人がたとえ語り合わなくても、恋仲であるという誤解は誤解ではないかもしれない。そう美也子は思った。

#### 四

樂屋口で春彦に取次ぐ爲に名を聞かれ、男達の世界に「美也子」と名のるのものはばかれて、「川瀬」と家の名をつけた。

春彦を待ちながらに、そういえば自分は小学校時分から生母の「山木」という姓を名のつていたのだから、春彦に「川瀬」とつけたのは、まるでもう、川瀬惣吉の妻になりましたという暗示めいてとられはしなかつたかと急に心配になり出した。けれど配給ものをとりに行つても、仕立物をたのんでも、その名で通る習慣が「川瀬」と名のれなくなるかもしれない原因を作つた当の相手にまで、うつかりそう言つてしまつたのかと、美也子はひとりで苦笑した。

コンクリートの薄ぐらい廊下の奥から、駆ける様にいそいそと顔をみせた春彦は、黒袴の黄入丈に袴子の帯をしめた町娘の姿で、髪だけはとつていたが、朱で目ばりをいれた目もとに何う様な色氣があつて、小さく画いた唇の紅もつやつやと、薄とき色の花が急にパツと開いたようだった。

「藤野さん」

美也子は顔を上氣させて、人目がなかつたら、そのまゝ春彦の胸に頭をつけてしまいたい様な妖しいおののきを体に感じた。

けようとした。そうしさえすれば惣吉の怒りもとけ、こ

れ以上追求されることもなく、親達のお膳立ての中の静かな幸福はある筈なのだ。通り魔の様に春彦に動いた恋心はいつか消えていくだろう。そう願つた。そう願つたのにもかかわらず、惣吉の唇が近付くと、美也子はもう一度顔をそむけてしまつた。そむけた顔を追つて二度三度、惣吉の唇が美也子の唇を探すうちに、抱かれて腕の中からぬけ出そうと、美也子は強い力で押しかえしてしまつたのだつた。

「もう、いい。わかつた」

惣吉はたぎつた湯がふきこぼれて、ジュウツと火を消してしまつたあとの妙にいいんとした静まりに似た声で言つた。

「藤野をよんでおいで」

「え？」

「藤野と話しをつけよう。今すぐよんでおいで」

「だつて……」

「あくまで僕にさからうのか、何でもいい。よんでこいと言つたらよんで来たらいいぢやないか」

美也子は追い立てられる様に席を立つた。

春彦をよんで来てどうなるのかわからない。けれど、もうこうなつた以上、春彦と一緒に打たれるなら打たれましょう。もし惣吉が此の前の様に春彦にひどいことをするようなら、自分が体でかばつても、春彦を守ろう。

それも思つた。そしてそれよりも、自分が惣吉にとりうたてついてしまつた春彦への愛憎を、せめて春彦の胸の中で泣いて訴えてもみたいと思つた。惣吉は春彦と美也子がすでに恋仲の様に誤解しているが、まだ何の恋ら



けれど春彦は、

「お兄さんは？」

とつさにそう聞いた。うわずつた声だった。

「いゝえ、私、ひとり……」

惣吉にあんな目にあわされた事が、それ程春彦にとつて深く傷つくことだったのかと、誰審なその体に、どんなに苦しかつたらうと、今さら氣の毒でたまらない思いで、

「もういゝの、私、もうかまわないの……」

何をどう話したらいいのか、氣持ばかりさきにたつて

美也子はしどろもどろな言い方になった。

「川瀬つて仰云つたんでしよう？、あたし、お兄さんが……」

春彦の言葉をみなまで云わせず、

「ごめんなさい、そう云い慣れているので……。でも、私、ひとりなの、いろ／＼お話ししたいことがあるの、それに……」

会いたかつたわ、という言葉を、美也子はのみこんで顔を赤くした。

「あゝ、そうなの」

春彦は深い溜息をした。

「あたしは川瀬さんと聞いたので、てつきりお兄さんがいらしたのかと……」

春彦は言葉を途中で切ると、もう一度ふうつと息をして、淋しそうな笑いを口もとにうかべた。

美也子には、川瀬という名にそれ程おびえた春彦が、自分自身への、ほつとした微笑の様に思えた。

そんな彼に、これから家で待つてゐる惣吉の事をどう告げたらいいかと思つたが、だまつてゐるわけにもゆかず、ためらいがちに、

「あのね、私、お兄さんを怒らしてしまつたの、くわしいことは道々お話しするけれど、これからうちまで来て下さらない？、お兄さんがあなたをつれてこいつて云う

の」

「お兄さんがあたしを……？」

春彦の目が瞬間光つたように思われた。朱の目ばりのせいかもしれないが、異様に熱っぽく濡れた様な瞳の色だった。

「ええ、お兄さんが……。お兄さんは私とあなたと何か変な関係があるみたいに思つてゐるんですわ、此の前は他の人への見栄みたいなものがあつて、あんなことになつてしまつただけで、もつとゆつくり話し合つてみたいのぢやないかしら？、それに……。私があなたのこと……」

美也子はふつと言葉を切つたが、思い切つてつゞけた「私があなたのこと好きだということがお兄さんにわかつたので、曖昧なことではなしに、あなたからも何か聞きたいらしいの」

出来ればすがりつく様な瞳で、春彦の瞳に見入りだかつたが、そんな遠まわしな云い方で、自分の愛情を春彦に告げるのが精一杯で、目は自然に彼の胸のあたりより上へあがらなかつた。

しいんと春彦は返事もせずだまつていた。

美也子にはそのまが随分長く感じられた。それは美也子が思う程には長い間ではなかつたのかもしれない。けれど、まるで手ごめに合うようなまねをされた惣吉に会いに行くということは、春彦にも急には返事の出来ないことなのだろうと美也子は思つた。

ややあつて、

「これから一緒にうかがえば、お兄さんがあたしに会うつもりで待つていらつしやるのですね」

春彦が念を押した。

「ええ」

「じゃあ、今すぐ顔をおとして着換えてゆきます」

そう言つて、急に思いつめた調子できつぱり言つた。

「あたしもお兄さんに、いろ／＼聞いていただきたいこ

とがあるのです」

## 五

劇場の樂屋口から少しはなれたところで、美也子は春彦の出てくるのを待つていた。表の明るさに比べてそこは窓から洩れる灯がさすばかりで、わずかに薄明るかつたが、それでも窓に燃える女の美しさは夜目にも目立つのか、樂屋口から出てくる男達がひとりひとり振りかえつてはみていつた。美也子も暗い中で春彦を見落したくないと思つたので、出てくる人にいちいち目をくぼつていたが、だんだんじろろ見られることに耐えられなくなつて来て、少しづつ、少しづつ、停留所の方へ歩きかけた。

時々立ちどまつては、樂屋口から出てくる人に氣をつけて、又少し歩き、又立ちどまつてゐるうちに、停留所まで来てしまつたが、春彦はなか／＼來なかつた。

あの厚くぬつた白粉をおとして、着物を着かえてくるのだから、少しは手間もとれるのかと、待つていた。惣吉に合う前に、せめて二人の間でお互いの心をはつきり語り合つておきたかつたのだ。惣吉が春彦に合つて、どう話しをつけようとするのか、それも心配だつた。ただ美也子の心の中に、やぶれかぶれの妙な張さがわいて、どう惣吉が言い出そうとも、自分の愛情にかけて春彦を守り、春彦の望む様な解決へ導けばいいと美也子は思つた。殺すというなら重ねて二つにされようと、それもいいではないかと、今会つて、目の前にまだありありと残つてゐる春彦の美しい瞳を思いうかべた。

それにしても春彦はおそかつた。

ひよつとして、どこかで見落してさきに家へ行つていたらいけないと、美也子は家へ帰つてみることにした。

結婚したら新夫婦の部屋にする爲に、惣吉の部屋は母家の横から別棟に小さな離れの様になつていた。



美也子はそつと庭先から、家人に知れない様に足音をしのばせて離れに近付いた。どんなこみいった話になるかもしれないと思うと、すっかり話のついてしまふまで家の者には知られたくなかつたのだ。

すると部屋の中から、しのび泣くような声が聞えた。美也子ははつとした。春彦がすでに來ていて、又何か惣吉の爲に泣く様な目に合はされてゐるのかと、急には縁の障子に手がかけられず、中の氣配をうかがつた。

「あたしの氣持も少しは可哀想だと思つて下さい」  
春彦の訴えるような声だつた。

美也子は体中が燃え出したかと思ひ程熱くなつた。けれど春彦はつゞけた。

「あたしはお兄さんにいじめられた時、声も立てず、助けもよばなかつたのは嬉しかつたからなのです。あの晩あたしが美也子さんに渡そうと思つた手紙は、あたしの此の苦しい氣持を書いた手紙だつたのです。あたしは他の人に見られたくなかつたのです。だからこなごなに引きさいてすてました。男のあたしが男のお兄さんを好きだなんて書いた手紙、誰にもみせたかありません。でも本當です。あたしは男に生れたのを呪つてゐます。あたしの心は女なんですもの、何故男の体を持つてゐるの、しやう、でもお兄さんさえあたしを愛して下さつたら、決してお兄さんに男だとは思わせない自信がありますわ。あたし、本當にお兄さんが好きなんですもの。踊りのおけいこにおうかゞいしても、同じおうちに兄さんのいらつしやるのがとても嬉しかつた。あたしの初恋は、それなのに美也子さんのことなんか……。あたしは美也子さんが憎らしい。だつてお兄さんがあたしにほつきり仰云つたでしやう、美也子は僕の女だつて……。あたしあれきいた時、美也子さんを殺してやりたい程憎らしかつた。美也子さんなんてどこがいいの？、あたしほどお兄さんのことを愛してゐる人はどこにもいやしません。今日だつて、川瀬つて聞いて、あたし、お兄さんが來て

下さつたのかと、とび立つ思いで出て行つたのに。あたし、わざと娘のまんまの恰好で出て行つたんです。あたしは男ぢやないの、女よ、白粉をぬつて、鏡の中の顔がだんだんに女になつてゆくのが死ぬ程嬉しい。それなのに、何故体だけ男なんでしょう。小さい時から女のように育てられて、自分でも女だとはかり思つてゐたのに……。ねえ、いつたいたいどうしたらいいんです？、あたしがこんなにお兄さんをお慕ひしていても、どうにもならないのでしやうか。あたし、今日こそ聞いていただくつもりで來ました。長い間、何とかしてこの氣持をお兄さんにおかつていたゞきたいと思つてゐたのです。随分此の近くをうろろ歩きもしました。あたしの氣持は小学校の頃から一寸も變つてはいないのです、ただお兄さんが御存知なかつたんです。ただあたしの胸の中で、苦しい程に思ひこがれてゐましたのに……。ねえ、なんとか云つて下さいな。ねえ、私が男の体をもつてゐるばかりにお兄さんにはわかつていただけないなんて、あんまりですあんまりです……」

女の様にかきくどく春彦のしのび泣きの声が障子をもれて、美也子の耳にはつきり聞えて來る。美也子は茫然と立ちつくしてゐた。

今迄自分を慕つて居つたとはかり思つてゐた春彦の不思議な告白……

今日迄自分を慕うには、不可解に思われるかす／＼の春彦の行動が、あれこれと思ひ出された。

そのまゝ地面の中へ消えてしまいたい様な無常感と、凶暴に荒れ狂つてみたい様な感情が入りまじつて、たゞ口を半ばあけ、化石の様に動かなかつた。

冬にしてはなま暖かい夜氣の中を、赤い月が昇りかけていた。

(終)

## 踊るパケツ

夢比古

不意を襲われて秋田はたあいなく伸びてしまつた。人さし指一本がのどに巻きつけた日本手拭の間に挟み込まれてあつた。人は死ぬ瞬間にフィルムスの如く既往の人生を見ると云うが、彼も何だかのどを絞められてもがく瞬間に、少年時代の水遊び、中学時代の遠足、軍隊時代の教練などが眼の先にチラ／＼とひらめいたように思ふ。ともかく彼は仮死状態だつた。女房は秋田が丸切り死んだものと思ひ、あわてゝ日本手拭を解き、彼を抱き煩うりして号泣した。秋田はのどがゆるんだのと、女房の泣き声とにいきまを吹き返した。

秋田が二十四才、女房が十八才の時、或る有名な易断師に大枚を拂つて鑑定を乞うた所、実にキタンなき名易断であつた。

失礼だが、あなたと奥さんとは相剋である。一生お互いに苦しまねばなら

ぬあなたも奥さんともに底の濁るパケツである。幾ら働いてもお金は決して貯まらぬ。よしんばお金持であつた所が、次第に減つていくばかりである。どちらかが引緊まればよいのであるが、奥さんは見込なしである。まだしもあなたが大いに自棄されて、自己の漏りをとめ、奥さんの漏りも修繕できるように努力すれば、まづうまくいくと思ふが、それには強い意志と信念を持つてかゝる事である。

——実に名言、金言、哲言であつたのだ。なんの反省もせずウヂヤ／＼青春を過してしまつた秋田は、女房とクサレエン二十年、七人の子を生み四人を死なした。そして年中女房と争ひ財と家を失つた。そして彼は再び起てない死病にかゝつてしまつた。

——おわり——



